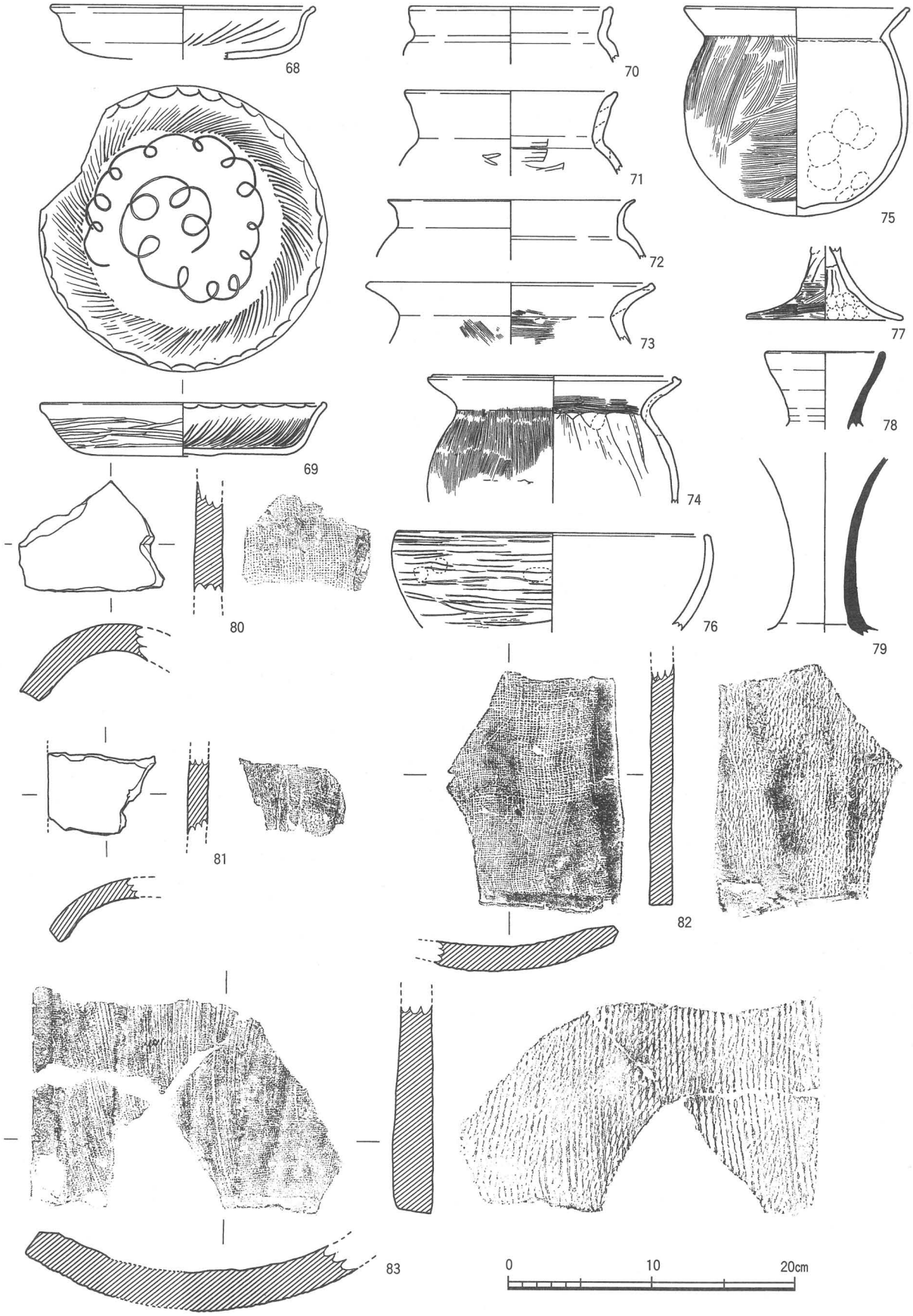
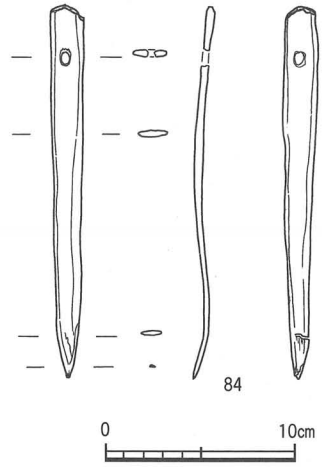


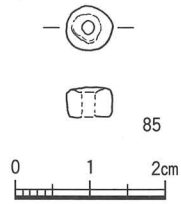
第43図　ＳＥ3003出土遺物実測図－１

は両端から約30cmを鋸で切っており、中央部は手斧・鑿等による両面からの打撃によって切断している。井戸側④～⑥に関しては不明であるが、基底部及び側面に接合箇所は認められない。井戸側③・⑥の枘穴の存在から転用材の可能性があり、この場合船材等が考えられよう。船材転用の井戸枠を有する例は、周辺では南東約500mの太子堂遺跡第１次調査における２例（Ｂ区ＳＥ-201、Ｄ区ＳＥ-202）がある。

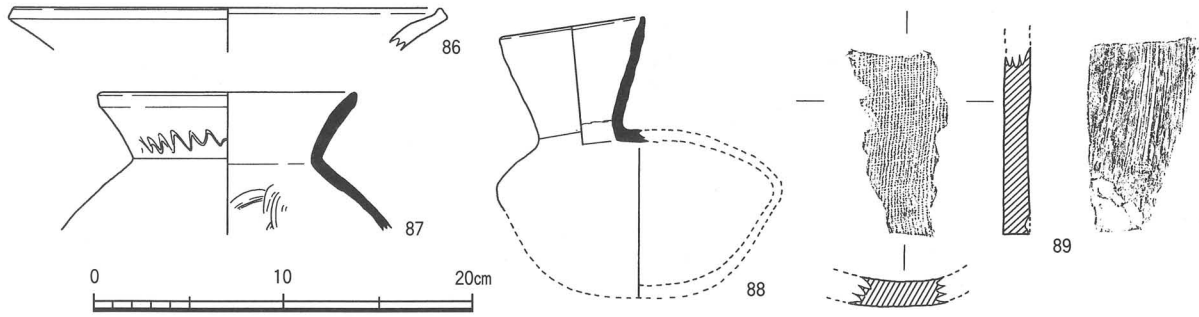
出土遺物は各層から土師器・須恵器・瓦片が多く出土している。主なものとして10層上面からの土師器杯、木材数点、敷石上面からの土師器杯・甕、平瓦、石材、滑石製臼玉１点、敷石内からの木針がある。時期は奈良時代前半に比定される。22点（68～89）を図化した。そのうち68～85は井戸側内、86～89は掘方埋土から出土したものである。68・69は土師器杯Ａで68がｂ手法、69がa1手法調整である。69は口縁部の一部を欠く以外は完存しており、口径19.6cm、器高3.8cmを測る。内面の暗文は68が斜放射、69が見込みから体部にかけて螺旋、斜放射、連弧を施文している。69は淡灰褐色の色調で、実体鏡で角閃石が確認できるため河内産の可能性が高い。土師器甕Ａは６点（70～75）を図化した。74・75以外は口縁部の小片である。74は外反気味に屈曲する口縁部を有するもので、端部は内傾して外面に凹線が巡る。体部外面のハケメ調整は細密である。体部内面のヘラケズリは深く、下方から上方に行われている。69と同様、河内産である。75は球形の体部に「く」の字に屈曲する口縁部が付く中形の土師器甕である。ほぼ完形で、口径15.7cm、器高14.7cmを測る。体部外面はハケメ調整、底部内面から体部下半には指頭圧痕が認められ、その表面に繊維の痕跡があるため、指圧成形時に布が使用されたことが想定される。76は土師器鉢で、鉄鉢形を呈する鉢Ａと推定される。復元口径21.9cmを測る。77は土師器高杯Ｂの柱状部である。柱状部外面には、粘土紐のつなぎ部分が未調整のため右上がりの沈線状に残る。78は須恵器の短頸壺ないしは平瓶の口頸部と推定される。79は須恵器長頸壺で壺Ｋに分類される。80～83は屋瓦である。80・81は丸瓦の小片で、凹面は布目、凸面は丁寧なナデが施されている。82は平瓦の小片で、凹面はやや粗い布目、凸面は縦位の縄目タタキを施す。83はやや厚みのある平瓦で、凹面は模骨痕とやや粗い布目、凸面はやや単位の大きい縄目タタキを施す。84は木針である。上部に楕円形の穿孔（長径８㎜、短径５㎜）を有し、下方の先端を尖らせている。長さ19.6cm、最大幅1.8cm、厚さ0.3～0.4cmを測



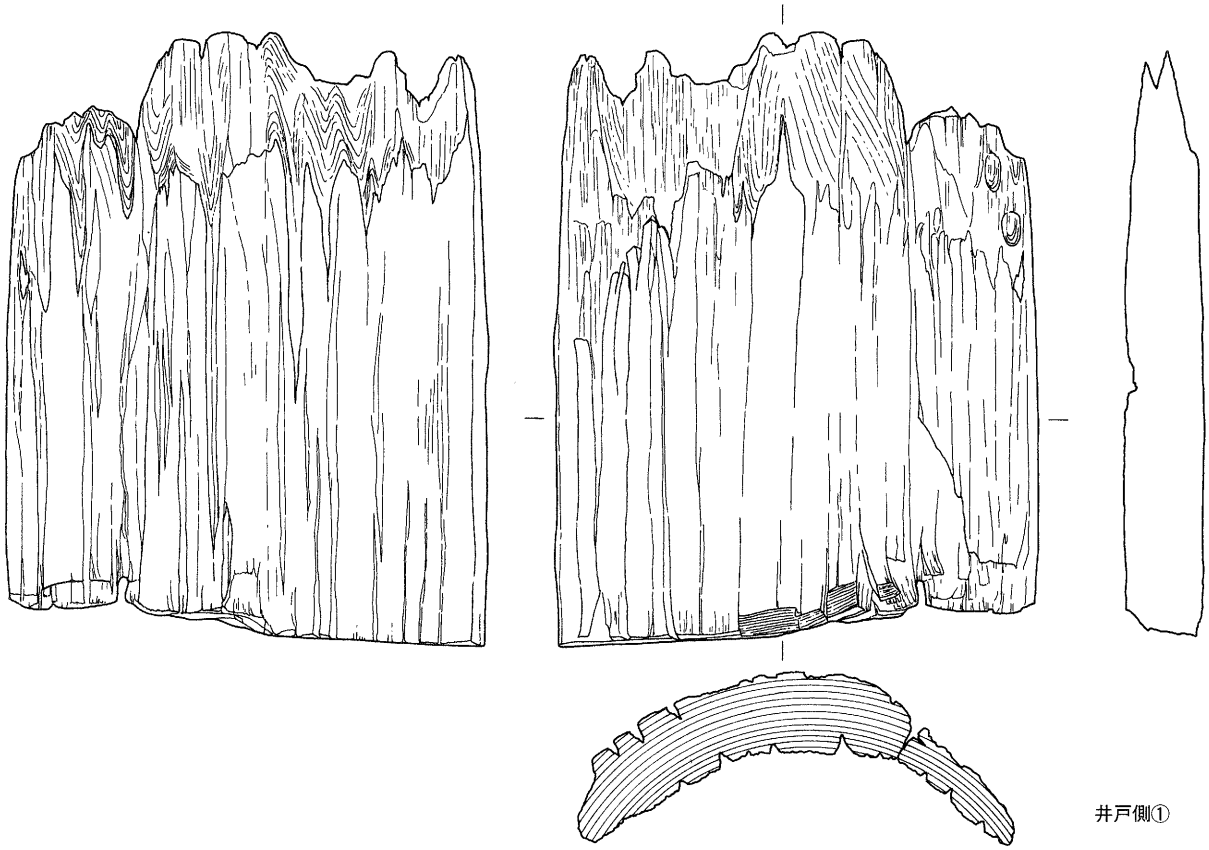
第44図　ＳＥ3003出土遺物実測図－２

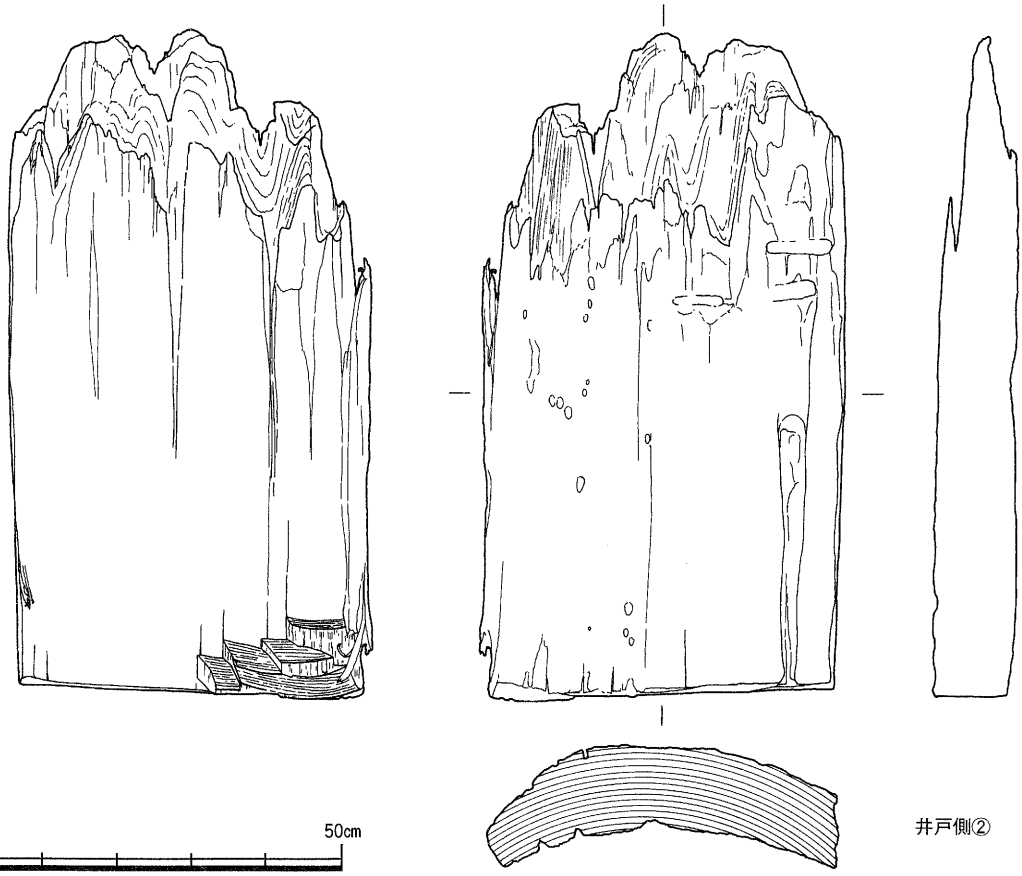


第45図　ＳＥ3003出土遺物実測図－３



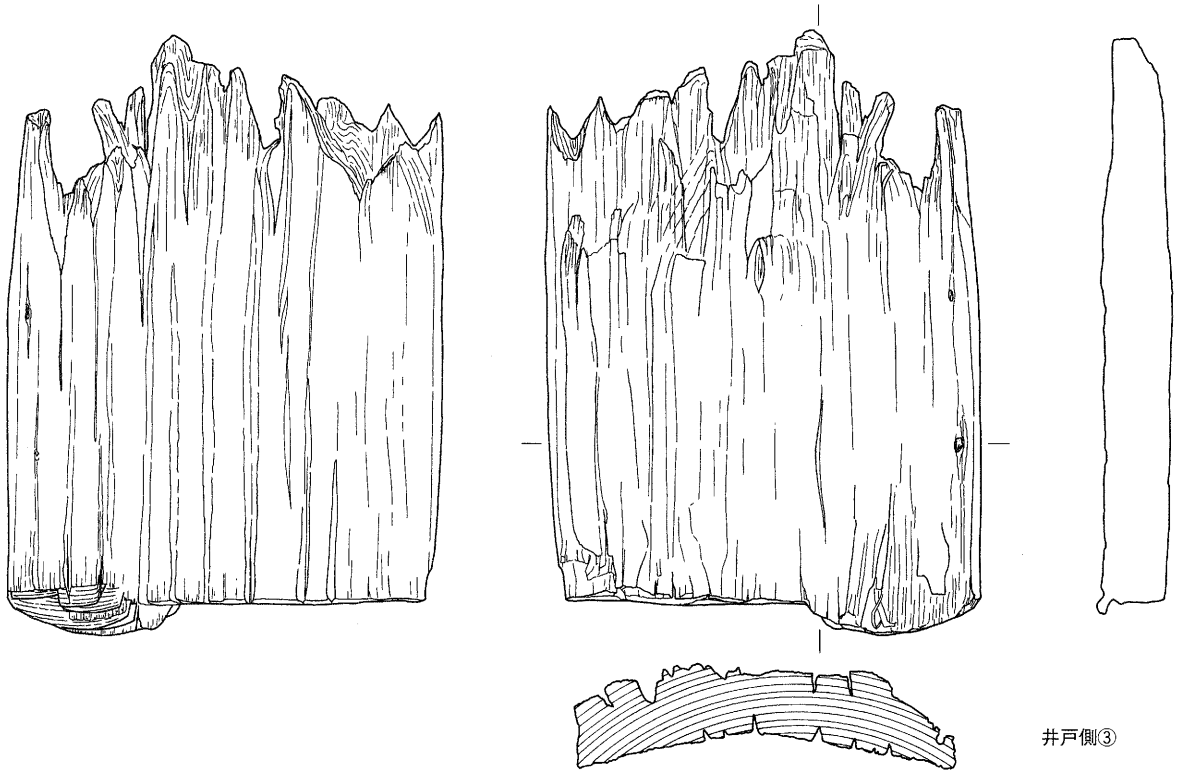
第46図　ＳＥ3003出土遺物実測図－４

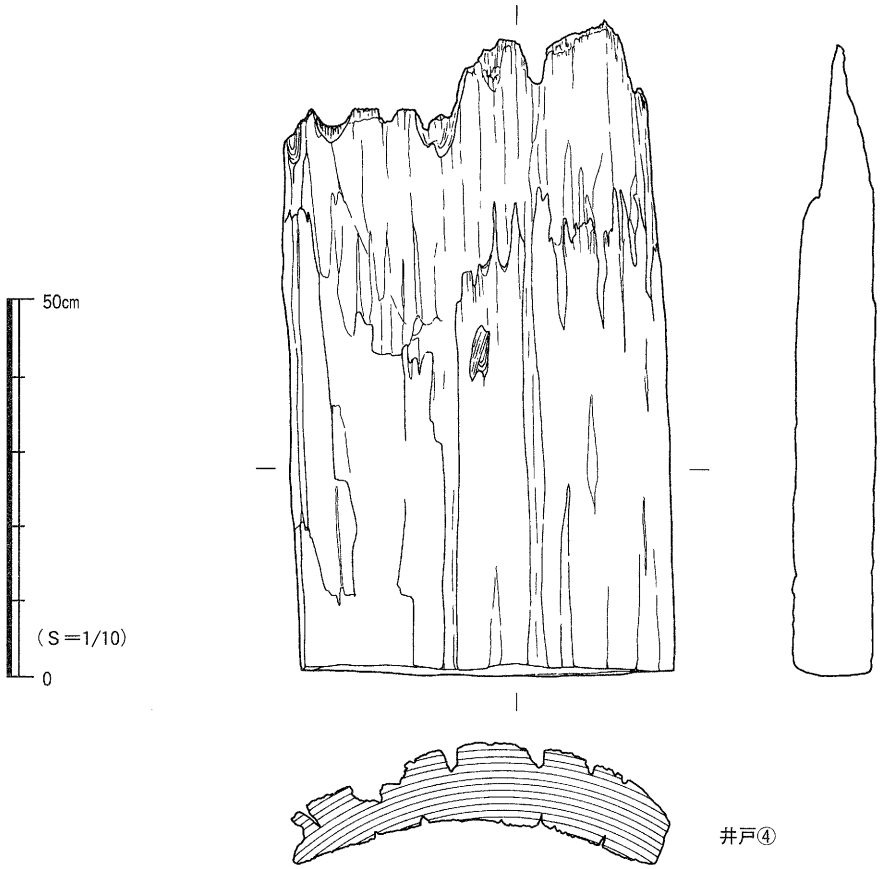




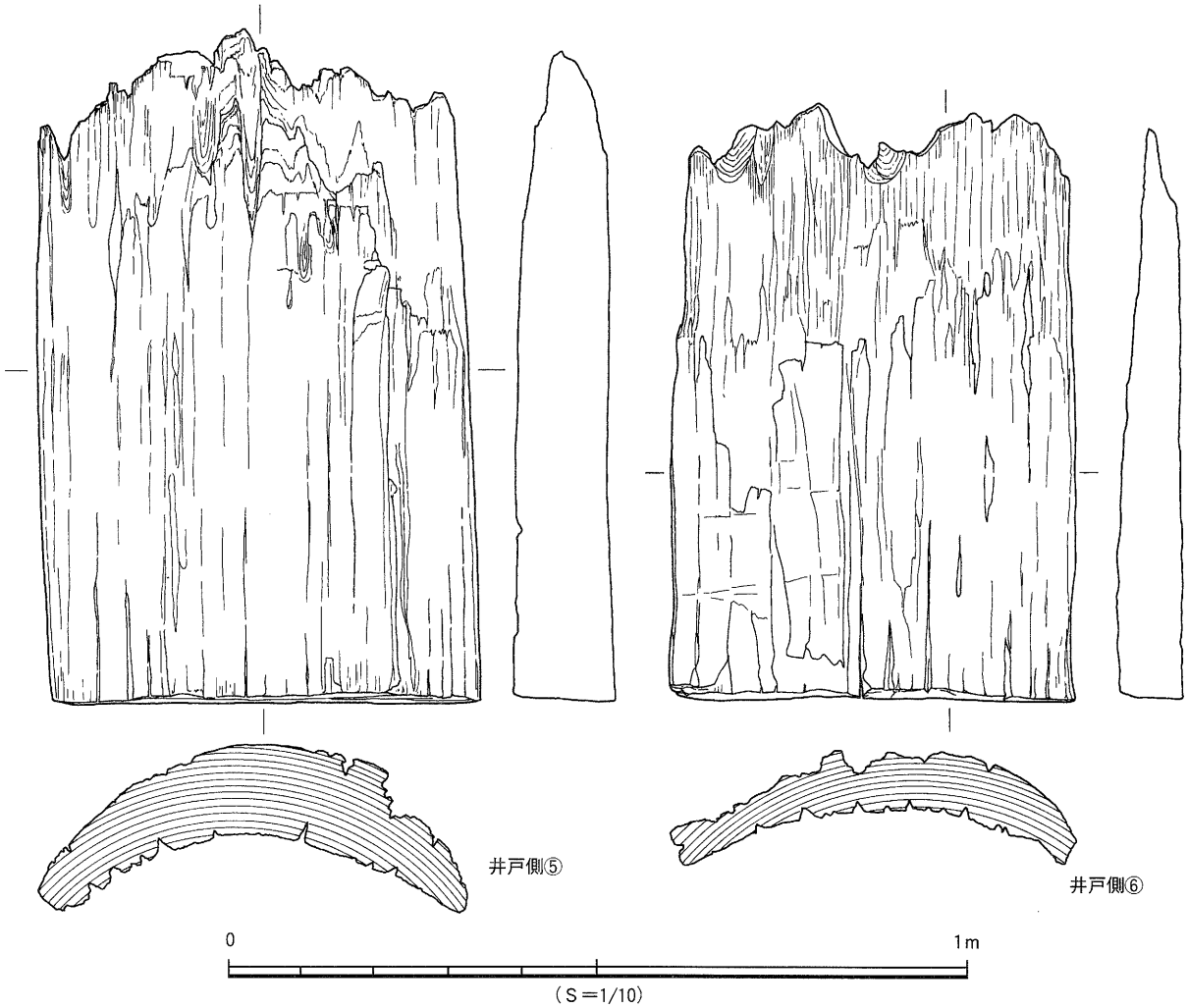
0　50cm
（S＝1/10）

第47図　ＳＥ3003井戸側実測図ー１





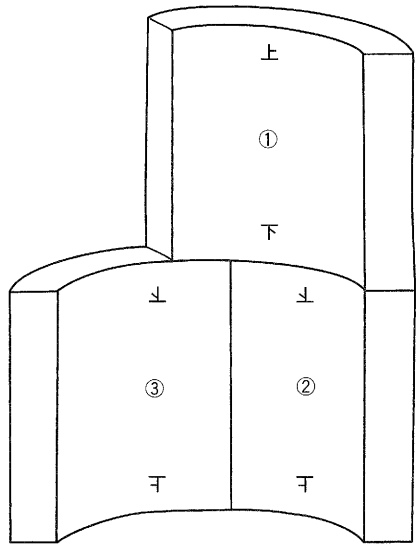
第48図　ＳＥ3003井戸側実測図－２



第49図　ＳＥ3003井戸側実測図－３

る。完存しているが、先端付近で折れ曲がっている。85は滑石製の臼玉である。幅６㎜、高さ４㎜、孔径1.5㎜を測る。古墳時代後期のもので混入品である。86は土師器甕の口縁部の小片で、口縁端部は上方に肥厚し内傾する端面を形成する。87は「く」の字に屈曲する口縁部を持つ須恵器甕の小片である。口頸部下半にヘラ描きによる波状文が施文されている。88は須恵器平瓶の小片である。口頸部内外面および体部上半にかけて緑灰色の釉が降着している。７世紀後半の所産か。89は平瓦の小片である。凹面は布目、凸面は縦方向の板ナデ調整が行なわれている。

以上の出土遺物から勘案して井戸の廃絶時期は奈良時代前半が推定される。



第50図　ＳＥ3003井戸側木取り模式図

土坑（ＳＫ）

ＳＫ3001

１調査区北西部のⅦ－19－３Ｃ・Ｄ地区で検出した。西部は一部ＳＥ3001に切られるが、検出状況から東西に長い楕円形を呈するものと思われる。規模は、検出部分で東西幅3.1m、南北幅2.7m、深さ0.3m前後を測る。埋土は褐灰色中粒砂～粗粒砂の単一層である。遺物は出土していない。

ＳＫ3002

１調査区中央部のⅦ－19－４・５Ｅ地区で検出した。不定形を呈するもので東西幅0.7m、南北幅0.9m、深さ0.07mを測る。埋土は暗灰黄色シルトの単一層である。遺物は、土師器甕と須恵器の小片２点が出土したが、時期は不明である。

ＳＫ3003

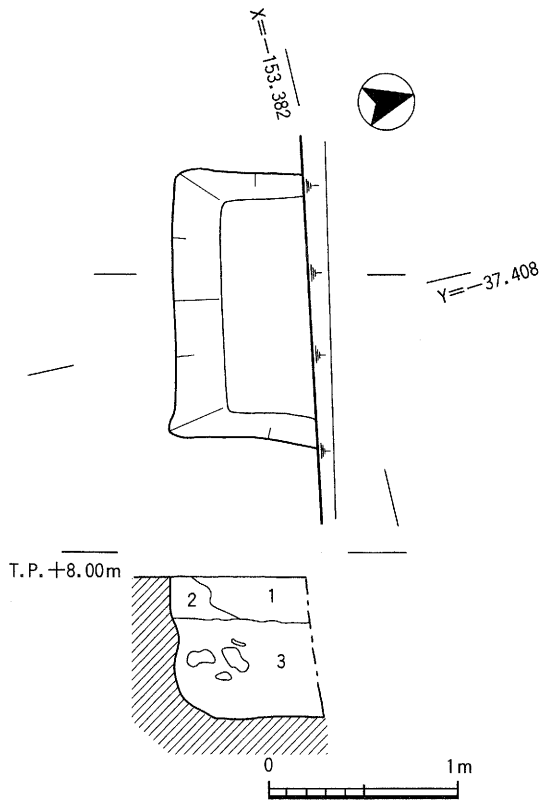
１調査区中央部のⅦ－19－４Ｆ地区で検出した。楕円形を呈するもので長径0.55m、短径0.45m、深さ0.3mを測る。埋土は黒褐色砂礫混シルトの単一層である。遺物は土師器片２点が出土したが時期を明確にし得たものはない。

ＳＫ3004（第51図、図版二〇）

４調査区北東部のⅧ－16－９Ｊ地区で検出した。北部は側溝掘削時に削平してしまったが、調査区北壁までは及んでおらず、平面形はほぼ長方形を呈するものと思われる。検出部分で東西幅1.4m、南北幅0.7m、深さ約0.75mを測る。断面形状は方形に近く、埋土はブロックを含む３層で、一気に埋められた様相である。時期不明の土師器片が１点出土している。

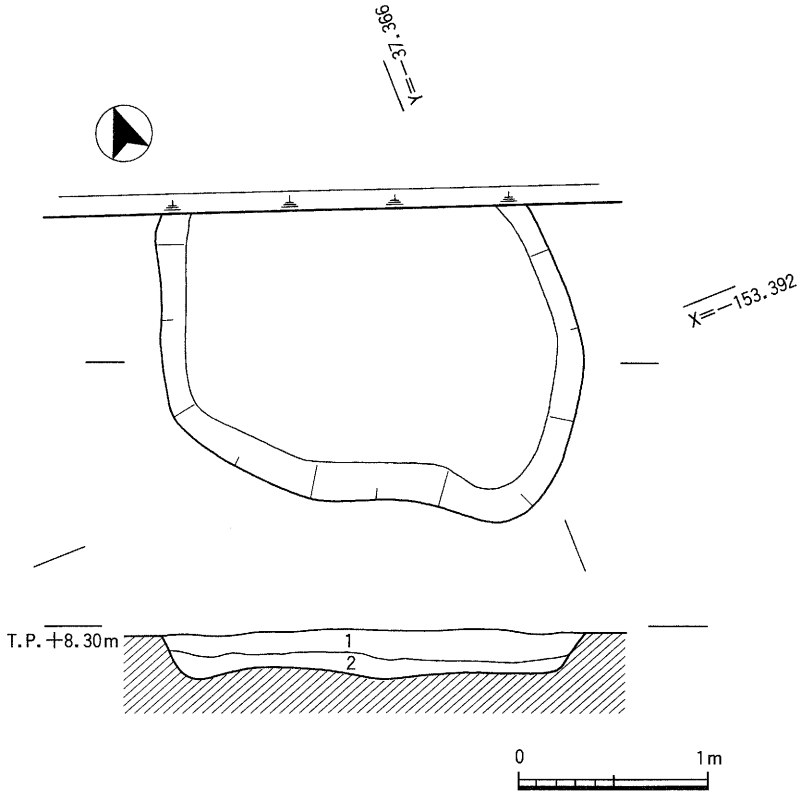
ＳＫ3005～ＳＫ3019（第53図、図版一五・六三）

４調査区中央部に散在するが、ＳＫ3011～ＳＫ3019はＳＤ3053の西岸に位置している。２～４個がまとまった状況の部分もあり、ＳＫ3006・ＳＫ3007、ＳＫ3009・ＳＫ3010、ＳＫ3012～ＳＫ3014、ＳＫ3015～ＳＫ



1　5Y6/1灰色シルト～粗粒砂混粘土質シルト
2　7.5Y6/1灰色粘土混シルト
3　5Y6/2灰オリーブ色粘土ブロック混粘土質シルト

第51図　ＳＫ3004平断面図



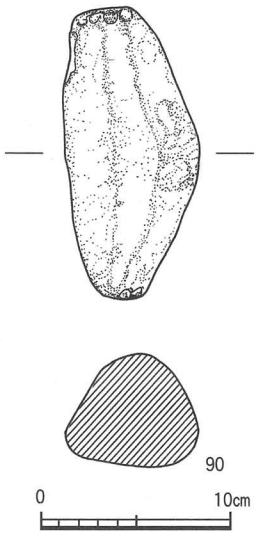
1　5Y6/1灰色細粒砂混粘土質シルト（炭含む）
2　10YR5/1褐灰色細粒砂混粘土質シルト（炭含む）

第52図　ＳＫ3020平断面図

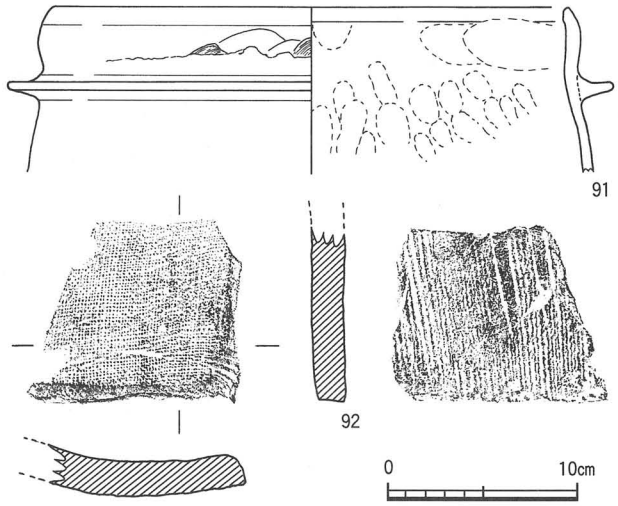
3018が近接している。ＳＫ3013・ＳＫ3014は東西に連結する状況で検出した。平面形はおおむね円形を呈し、規模は径0.6m、深さ0.2～0.3m程度である。埋土は灰色～黄灰色～褐灰色の粘土質シルトを基調とする。出土遺物には少量の土師器、須恵器片があり、ＳＫ3008からは６世紀代の須恵器１点と叩き石（90）が出土している。90は楕円状の形状を呈する叩き石で、両端面に敲打痕が認められる。和泉砂岩製である。

ＳＫ3020（第52・54図、図版一五・六三）

４調査区北東部のⅧ－17－10Ｄ地区で検出した。北部は削平を受けている。検出部分で東西幅2.2m、南北幅1.7m、深さ0.26mを測る。埋土は上層が5Y6/1灰色、下層が10YR5/1褐灰色の細粒砂混粘土質シルトで、全体にマンガン斑・鉄分・少量の炭を含んでいる。古墳時代中期～平安時代の土師器、須恵器、屋瓦の小片が極少量出土している。２点（91・92）を図化した。91は水平方向に貼り付けられた短い鍔を有する土師器土釜である。鍔部から口縁部が内湾気味に伸びるもので、端部は内傾する面を有する。全体に作りは雑で、口縁部の一部は波状を呈する。河内産である。92は平瓦の小片である。凹面に残された布目痕は上面のほか、側面におよんでいる。凸面には縦位の縄目タタキが施されている。凹面全体に煤の付着が認められ、二次的に使用されていたことが推定される。91については河内地域では類例が少ないもので、時期等は明確でない。



第53図　ＳＫ3008出土遺物実測図



第54図　ＳＫ3020出土遺物実測図

溝（ＳＤ）

ＳＤ3001～ＳＤ3049

１調査区の西部を中心として総数49条を検出した。そのうち、南西部で検出されたＳＤ3022～ＳＤ3040については、南－北に伸びる小溝群が密集する形を呈していた。これらの溝は検出状況から、第１・２面と同様、生産域に関連するものと推定される。規模は検出長0.3～14.8m、幅0.1～1.5m、深さ0.01～0.26mを測る。

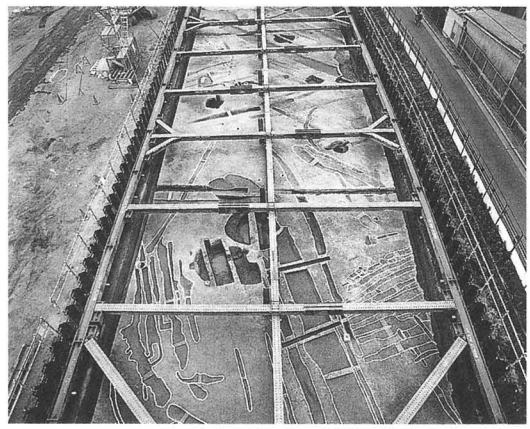


写真33　１調査区西部溝群検出状況（西から）

第30表　1調査区　ＳＤ3001～ＳＤ3049法量表（単位ｍ）

遺構番号	地　区	全長（検出長）	幅（最大）	深さ	埋　土	出土遺物
ＳＤ3001	Ⅶ－19－2·3B·C	2.30	0.20	0.12	7.5YR4/2灰褐色粘土質シルト	土師器、須恵器
ＳＤ3002	Ⅶ－19－3B	1.00	0.10	0.03	7.5YR4/4褐色粘土質シルト	
ＳＤ3003	〃	0.60	0.10	0.20	〃	
ＳＤ3004	〃	1.90	0.50	0.06	7.5YR4/2灰褐色粘土質シルト	土師器、須恵器
ＳＤ3005	Ⅶ－19－3C	0.90	0.20	0.04	7.5YR4/4褐色粘土質シルト	
ＳＤ3006	〃	8.00	0.60	0.20	〃	
ＳＤ3007	〃	6.30	0.50	0.03	7.5YR4/2灰褐色粘土質シルト	土師器Ⅲ、須恵器、平瓦
ＳＤ3008	〃	4.50	0.40	0.10	〃	土師器
ＳＤ3009	〃	7.70	0.60	0.10	〃	土師器
ＳＤ3010	〃	0.90	0.10	0.03	〃	
ＳＤ3011	〃	3.10	0.30	0.04	〃	
ＳＤ3012	〃	4.70	0.60	0.06	〃	土師器
ＳＤ3013	Ⅶ－19－3B·C	0.90	0.40	0.07	7.5YR4/4褐色粘土質シルト	
ＳＤ3014	Ⅶ－19－3C	2.00	0.40	0.07	7.5YR4/2灰褐色粘土質シルト	土師器
ＳＤ3015	Ⅶ－19－3B·C	2.70	0.20	0.05	〃	土師器
ＳＤ3016	〃	4.30	0.30	0.05	7.5YR4/2灰褐色粘土質シルト	土師器
ＳＤ3017	〃	8.80	0.60	0.08	10YR6/6明黄褐色粘土質シルト	土師器、須恵器
ＳＤ3018	Ⅶ－19－3·4B·C	11.00	1.50	0.23	10YR6/1褐灰色砂礫混シルト	土師器
ＳＤ3019	〃	5.90	0.20	0.04	10YR5/3にぶい黄褐色砂礫混シルト	
ＳＤ3020	Ⅶ－19－4B～D	14.80	0.60	0.26	〃	土師器、須恵器
ＳＤ3021	Ⅶ－19－4B	1.90	0.20	0.10	〃	土師器
ＳＤ3022	〃	1.30	0.15	0.01	10YR6/1褐灰色砂礫混粘土質シルト	
ＳＤ3023	〃	3.05	0.40	0.09	〃	
ＳＤ3024	〃	3.70	0.40	0.06	〃	
ＳＤ3025	Ⅶ－19－4B·C	4.00	0.35	0.02	〃	
ＳＤ3026	Ⅶ－19－4C	4.10	0.45	0.04	〃	
ＳＤ3027	〃	4.10	0.40	0.03	〃	
ＳＤ3028	〃	4.40	0.30	0.02	〃	
ＳＤ3029	〃	4.10	0.30	0.03	〃	
ＳＤ3030	〃	4.50	0.35	0.04	〃	
ＳＤ3031	〃	1.70	0.25	0.03	〃	
ＳＤ3032	Ⅶ－19－4B	1.20	0.15	0.03	〃	
ＳＤ3033	〃	1.70	0.20	0.03	〃	
ＳＤ3034	〃	1.40	0.10	0.03	〃	
ＳＤ3035	Ⅶ－19－4C	0.30	0.20	0.03	〃	
ＳＤ3036	〃	0.40	0.20	0.02	〃	
ＳＤ3037	〃	0.60	0.20	0.03	〃	
ＳＤ3038	〃	0.60	0.30	0.02	〃	
ＳＤ3039	〃	0.40	0.10	0.02	〃	
ＳＤ3040	〃	1.30	0.10	0.04	10YR5/3にぶい黄褐色砂礫混シルト	
ＳＤ3041	〃	2.90	0.60	0.03	7.5YR6/6橙色粘土質砂礫混シルト	土師器
ＳＤ3042	Ⅶ－19－3C·D	10.40	0.50	0.12	10YR3/1黒褐色細粒砂	土師器甕、須恵器
ＳＤ3043	Ⅶ－19－3D	5.10	0.70	0.15	10YR4/4褐色シルト	
ＳＤ3044	Ⅶ－19－4C·D	5.40	0.90	0.10	7.5YR6/6橙色粘土質砂礫混シルト	土師器、土錘
ＳＤ3045	〃	4.30	0.40	0.08	〃	土師器、須恵器
ＳＤ3046	Ⅶ－19－4D	5.40	0.70	0.12	7.5YR6/6橙色粘土質砂礫混シルト	土師器、須恵器
ＳＤ3047	Ⅶ－19－3E	0.90	0.40	0.05	10YR5/3にぶい黄褐色砂礫混シルト	
ＳＤ3048	Ⅶ－19－3·4E	3.70	0.50	0.10	10YR3/3暗褐色シルト	土師器、須恵器
ＳＤ3049	Ⅶ－19－4E	1.20	0.50	0.20	〃	土師器

埋土は褐灰色系の粘土質シルトの単一層で砂礫を少量含む。遺物は土師器・須恵器・瓦の破片が少量出土した。ＳＤ3001～ＳＤ3021・ＳＤ3041～3049についても、主に東－西に伸びるもので、

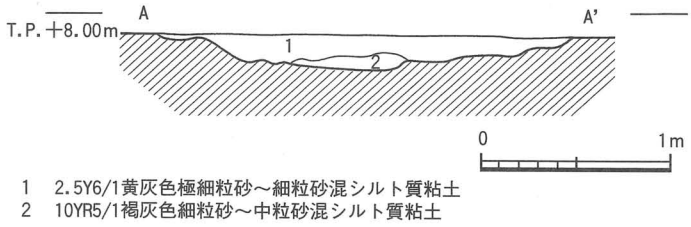
生産域に関するものであろう。なお、ＳＤ3001～ＳＤ3049の法量等の詳細は、第30表に示した。

ＳＤ3050

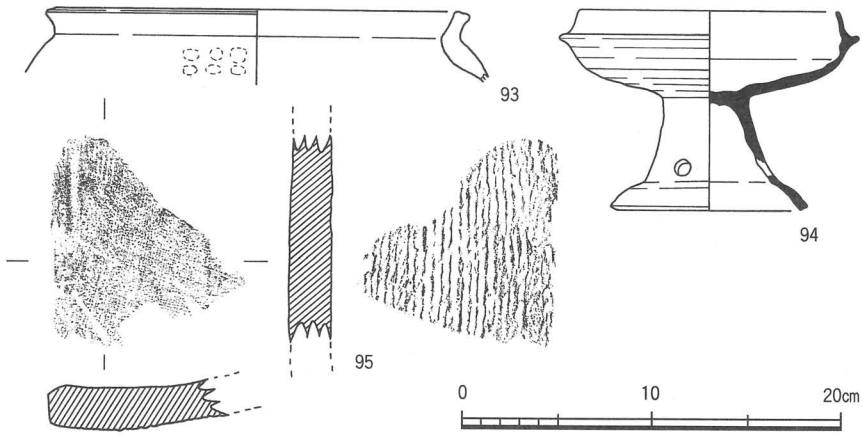
３調査区北東部のⅧ－16－８Ｆ地区で検出した。北西－南東に伸びるもので、北部は調査区外に至る。検出長6.1m、幅0.5～0.8m、深さ0.25mを測る。断面はほぼ逆台形を呈し、埋土は上から10YR6/1褐灰色粘土質シルト（鉄分少量含む）、2.5Y6/2灰黄色粘土質シルト（斑鉄多く含む）、10YR5/1褐灰色粘土質シルト（炭少量・斑鉄多量・マンガン斑含む）である。時期不明の土師器片が出土している。

ＳＤ3051（第55・56図、図版二一・六六）

４調査区の中北部のⅧ－16－９Ｊ地区で検出した。北東－南西に伸びる溝で、西端はＳＤ3052に合流している。検出長4.5m、幅2.2m、深さ0.2mを測る。断面は皿形を呈し、埋土は極細粒砂～中粒砂混シルト質粘土の２層から成る。古墳時代中期～後期の土師器、須恵器と平安時代前期の黒色土器、屋瓦の小片が少量出土している。３点（93～95）を図化した。93は土師器甕の小片である。小さく「く」の字状に屈曲する口縁部で、端面は外傾して広い面を有する。体部上半の破面付近から急激に器幅を減じている。平安時代前半の所産と考えられる。94は須恵器有蓋高杯である。口径13.8cm、器高10.5cm、裾部径10.5cmを測る。スカシ孔は３個である。６世紀前半に比定される。95は平瓦片で、凹面は模骨痕と布目、凸面には縦位の縄目叩きが施されている。最も新しい遺物からみて遺構の廃絶時期は平安時代前期が推定される。



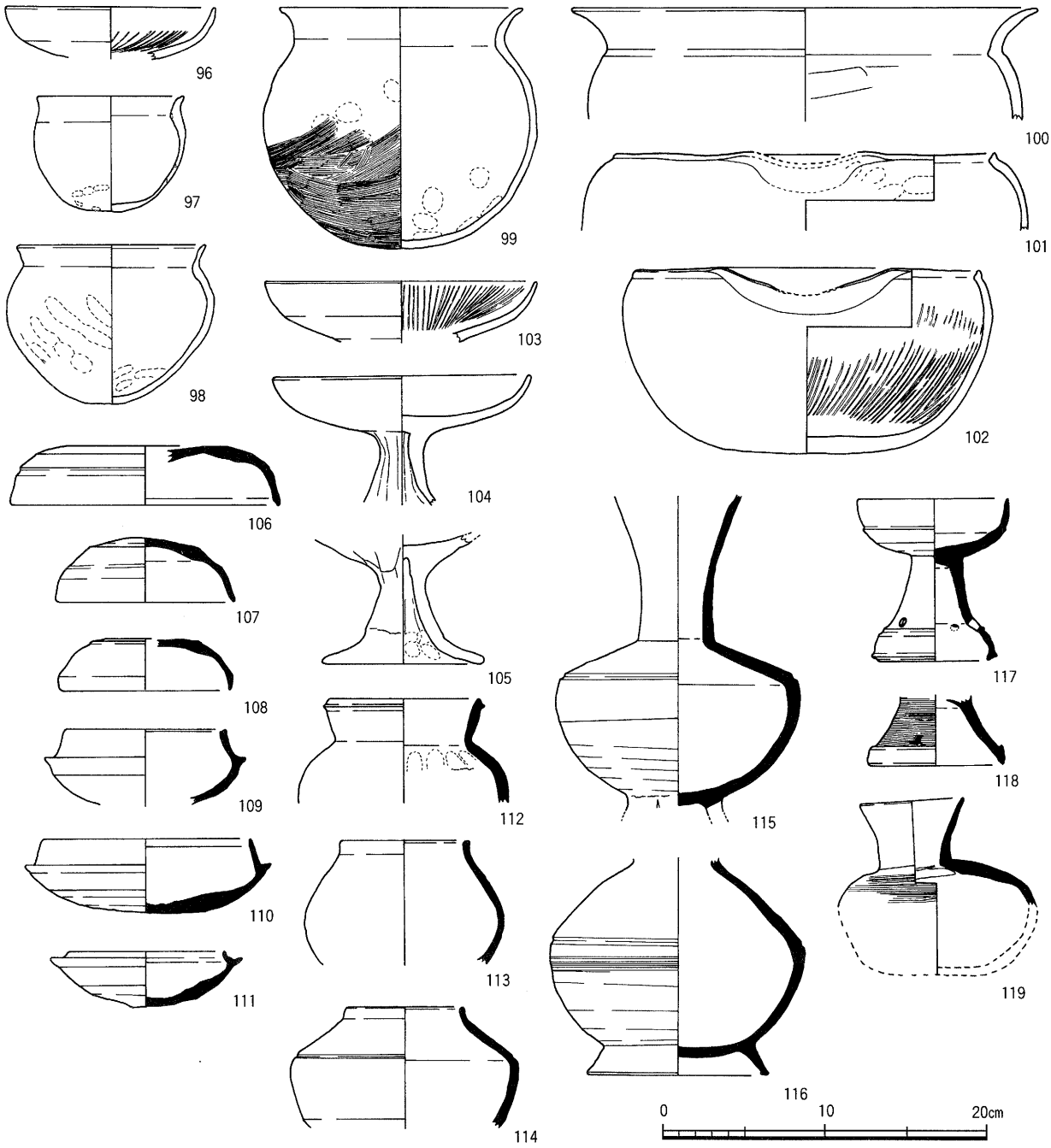
第55図　ＳＤ3051断面図



第56図　ＳＤ3051出土遺物実測図

ＳＤ3052（第57図、図版二一・六六～六八）

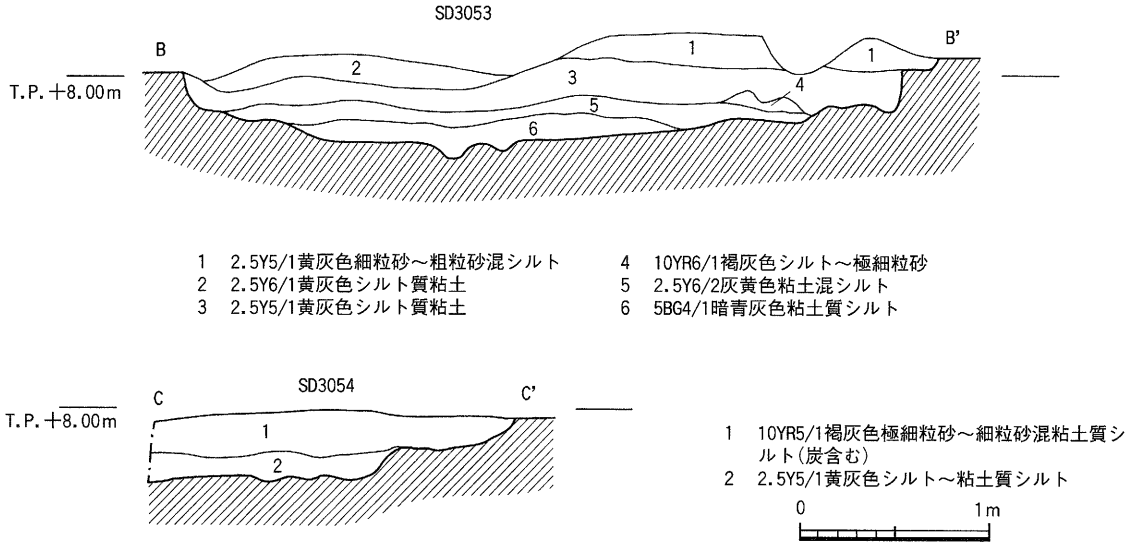
４調査区中部以西で検出した。ＮＲ3003の北側に並行し北西－南東に直線的に伸びる溝である。西部でＮＲ3003と合流しているが、堆積状況からみて当溝が切られている。規模は検出長約44.0m、幅約2.6m、深さ0.5～0.7mを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は2.5Y5/1黄灰色～N5/0灰色粘土を基調とし、一部細粒砂～粗粒砂を多く含む層がみられる。古墳時代中期～奈良時代の土器類、屋瓦等がコンテナ箱に２箱程度出土している。24点（96～119）を図化した。96は土師器杯Ｃで復元口径13.0cmを測る。調整はａ0手法である。内面に放射状暗文が施文されている。河内産である。97～100は土師器甕Ａである。97・98が小形、99が中形、100は大形に分類される。法量は97が口径9.2cm、器高7.1cm、98が口径11.7cm、器高9.8cm、99が口径15.0cm、器高14.9cm、



第57図　ＳＤ3052出土遺物実測図

100が口径28.8cmを測る。101・102は片口を有する土師器鉢Ｄである。体部は内湾し、端部は内傾する面を有する。102の体部内面には、放射状暗文が施文されている。２点共に赤橙色の色調で、胎土は水簸された精良なものが使用されている。８世紀初頭に比定される。103～105は土師器高杯Ｂである。共に浅い杯部を有するもので、法量は103が口径16.9cm。104が口径15.9cm、杯部高3.5cm。105が裾部径10.0cmを測る。103の杯部内面には放射状暗文が認められる。104の杯部内面は風化が著しく調整等は明瞭でない。７世紀中葉から８世紀初頭に比定される。106～108は須恵器杯蓋である。106が６世紀中葉。107・108が７世紀前半に比定される。107は焼成が不良で、灰白色の色調を呈する。108の天井部には火襷が認められる。109～111は須恵器杯身である。109

がＴＫ23型式（５世紀後半）、110がＴＫ10型式（６世紀中葉）、111がＴＫ209型式（７世紀前半）に比定される。112は須恵器の小形短頸壺である。復元口径9.3cmを測る。球形の体部から口縁部が斜上方へ伸びるもので、口縁端部は外傾する面を持つ。口縁部内外面および体部外面に緑灰色の自然釉が降着している。５世紀後半に比定される。113・114は須恵器有蓋短頸壺である。体部の形状は球体の113と稜角に従って凹線が巡る114がある。114が７世紀初頭、113が７世紀前半の所産と推定される。115・116は須恵器台付長頸壺である。体部の形状は算盤玉形の115と無花果形の116がある。共に体部と底部の境として稜角を有する位置に凹線が巡っている。７世紀中葉に比定される。117は須恵器の小形高杯である。口縁部および裾部の一部を欠く以外は完存している。杯部口径9.4cm、器高10.0cm、裾部径7.8cmを測る。杯部は椀形で、外面体部中位に沈線が巡る。脚部は裾部付近で内湾するもので、端部は外傾する面を持つ。スカシ孔は３個である。118は短脚１段スカシの須恵器高杯である。脚部外面にはカキメ調整が行なわれている。ＴＫ47

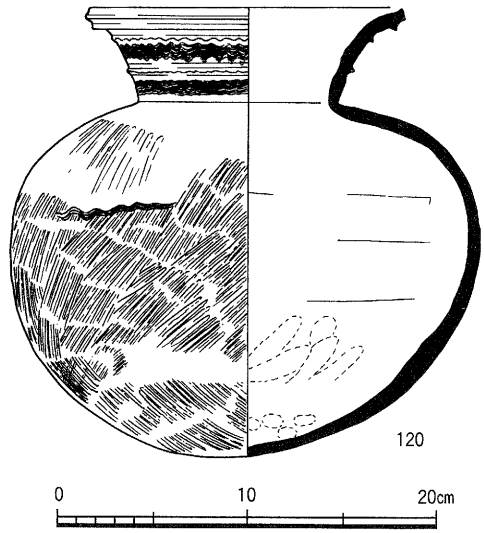


第58図　ＳＤ3053、ＳＤ3054断面図

型式（５世紀末）に比定される。119は須恵器平瓶である。体部外面はカキメ調整が行なわれている。７世紀中葉～後半に比定される。出土遺物は溝という性格上時期幅が認められるが、最も新しい遺物からみて８世紀初頭頃迄はその機能を果たしていたものと推定される。

ＳＤ3053（第58・59図、図版二二・六八）

４調査区東部のⅧ－17－９・10Ｃ・Ｄ地区で検出した。北西－南東に伸びる溝で、東部でＳＤ3054と合流する。検出長18.0m、幅約2.4～3.7m、深さ約0.4mを測り、底は北西部ほど浅くなっている。断面は逆台形を呈し、埋土は６層から成る。古墳時代中期に比定される須恵器壺１点（120）が出土している。120は細片化した破片が大半であるが、全体の８割程度に復元が可能である。口径16.7cm、器高23.6cm、体部最大径24.9cmを測る。口頸

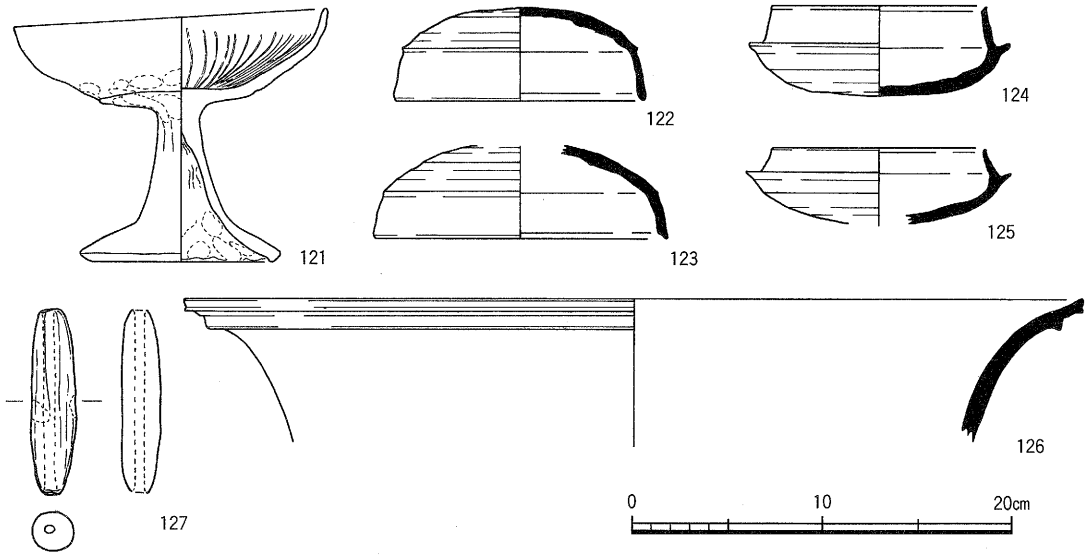


第59図　ＳＤ3053出土遺物実測図

部外面には、２条の凸帯間に細かい波長の波状文が施文されている。体部外面中位から下位にかけてタタキ調整が行なわれている他、体部中位の一部分にのみ波状文が施文されている。焼成が不良のためか、器壁の中央部を境に表裏に二分される破片が大半を占めた。ＴＫ216型式（５世紀前半）か。

ＳＤ3054（第58図・第60図、図版二二・六八）

４調査区東部のⅧ－17－10Ｃ・Ｄ地区で検出した。東西に伸びる溝で、東部でＳＤ3053と合流する。規模は全長約21.0m、幅1.4m～4.2m、深さ0.35mを測り、底は西部ほど浅くなって消滅している。断面逆台形を呈し、埋土は２層から成る。古墳時代中期～飛鳥時代中葉の土器類が少量出土している。７点（121～127）を図化した。121は土師器高杯である。ほぼ完形に近い。口径16.6cm、器高13.2cm、脚部径9.7cmを測る。杯部内面に放射状暗文が施文されている。７世紀中葉の所産である。122・123は須恵器杯蓋である。122がＴＫ23型式（５世紀後半）、123がＭＴ15型式（６世紀前半）に比定される。124・125は須恵器杯身である。124がＴＫ208型式（５世紀中葉）、125がＴＫ10型式（６世紀中葉）に比定される。126は大形の須恵器甕である。復元口径47.7cmを測る。口縁部のやや下に断面三角形の凸帯が付く。口頸部外面全体に黒灰色を呈する釉が塗布されている。ＴＫ85型式（５世紀前半）に比定される。127は管状土錘である。ほぼ完形品で、長さ9.8cm、最大径2.3cmを測る。時期幅のある遺物を含むが、121からみて７世紀中葉迄は機能を果たしたものと考えられる。



第60図　ＳＤ3054出土遺物実測図

ＳＤ3055

４調査区南東部のⅧ－17－10Ｄ、Ⅷ－22－１Ｄ・Ｅ地区で検出した。北西－南東に伸びる溝で、ＳＤ3054とＳＤ3056をつなぐ状況である。検出長5.3m、幅0.6m、深さ0.15mを測る。埋土は10YR5/1褐灰色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルトである。遺物は出土していない。

ＳＤ3056

４調査区南東部のⅧ－22－１Ｅ地区で検出した。南－北に伸びる溝で北端はＳＤ3054と合流している。検出長1.4m、幅1.7m、深さ0.1mを測る。断面逆台形を呈し、埋土は10YR5/1褐灰色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルトである。遺物は出土していない。

ＳＤ3057

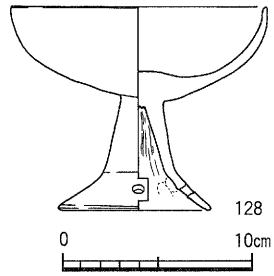
４調査区南東部のⅧ－22－１Ｅ地区で検出した。北西－南東に伸びる溝で、ＳＤ3056に合流する。規模は検出長0.6m、幅0.2m、深さ0.07mを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は10YR5/1褐灰色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルトである。遺物は出土していない。

ＳＤ3058

４調査区の南東部のⅧ－22－１Ｅ地区で検出した。北西－南東に伸びる溝で、ＳＤ3056に合流する。検出長1.5m、幅0.4m、深さ0.15mを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は10YR5/1褐灰色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルトである。遺物は出土していない。

ＳＤ3059（第61図、図版二二・六九）

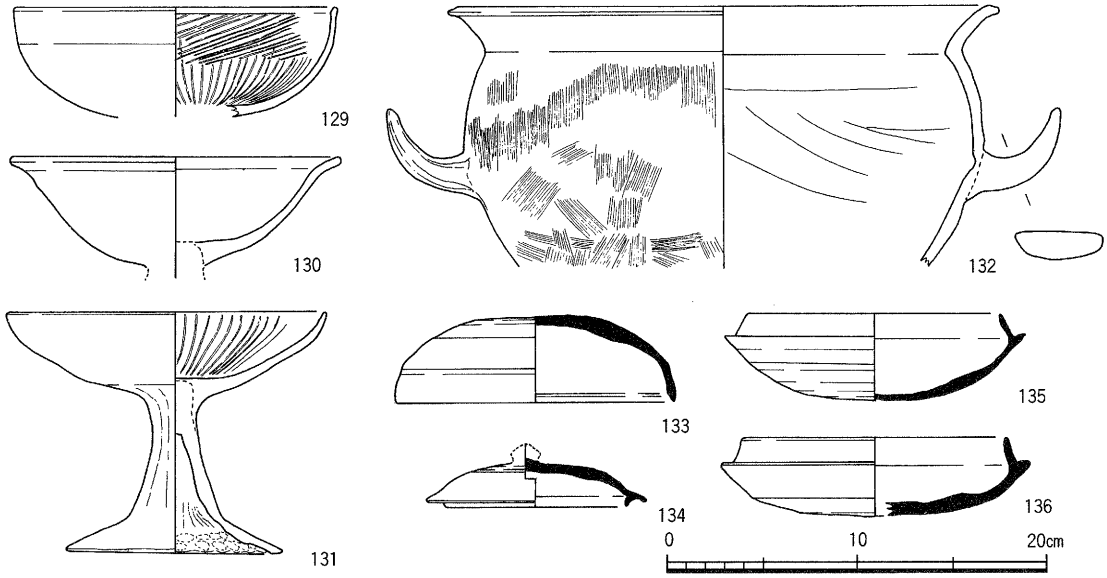
４調査区南東部のⅧ－22－１Ｅ・Ｆ地区で検出した。北西－南東に伸びる溝であり北部でＳＤ3054に合流する。規模は検出長8.1m、幅1.3～3.4m、深さ0.2mを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は10YR5/1褐灰色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルトである。遺物は古墳時代中期に比定される土師器類が極少量出土している。土師器高杯１点（128）を図化した。128は椀形の杯部にやや小振りの脚部が付く。口径13.6cm、裾部径8.0cmを測る。５世紀後半に比定される。



第61図　ＳＤ3059出土遺物実測図

ＳＤ3060（第62図、図版二二・六九）

４調査区東部のⅧ－17－10Ｄ～Ｆ、Ⅷ－22－１Ｆ地区で検出した。北西－南東に伸びる溝で、北肩は第２面ＳＤ2287に削平され、南肩はＳＤ3053・ＳＤ3058と接している。検出長19.8m、幅3.6～6.3m、深さ0.25mを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は2.5Y5/1黄灰色細粒砂～細礫混粘土質シルトで、斑鉄を多く含んでいる。古墳時代後期～飛鳥時代の土器が少量出土している。８点（129～136）を図化した。129は土師器杯Ｃである。復元口径17.1cmを測る。内面は放射状二段暗文が施文されている。外面は風化のため不明である。７世紀中葉に比定される。130は土師器高杯の杯部で口径17.4cmを測る。古墳時代前期末～中期初頭に比定される。131は土師器高杯



第62図　ＳＤ3060出土遺物実測図

Ｂである。口径16.9cm、器高12.7cm、裾部径11.4cmを測る。杯部内面に放射状暗文が施文されている。７世紀中葉に比定される。132は体部中位に扁平な把手が付く土師器鍋である。６世紀中葉の所産か。須恵器杯蓋は２点（133・134）図化した。133はＴＫ15型式（６世紀中葉）である。134は宝珠つまみを有すと思われ、口縁部にかえりが付く。ＴＫ217型式（７世紀中葉）に比定される。135・136は須恵器杯身で、135がほぼ完形、136が1/2程度残存している。135がＴＫ10型式（６世紀中葉）。136がＭＴ85型式（６世紀後半）に比定される。出土遺物には時期幅が認められるが、遺構の帰属時期としては飛鳥時代中葉（７世紀中葉）が想定される。

ＳＤ3061

４調査区西部のⅧ－16－９・10Ｉ・Ｊ地区で検出した。南西－北東に伸びる溝で、ＳＤ3051・ＳＤ3052の埋没後に掘削されている。ＮＲ3001とは切り合い関係はなく、有機的に関連する溝と思われる。規模は検出長9.6m、幅0.7m、深さ0.15mを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は2.5Y6/1黄灰色細粒砂～粗粒砂混シルトである。遺物は出土していない。

ＳＤ3062

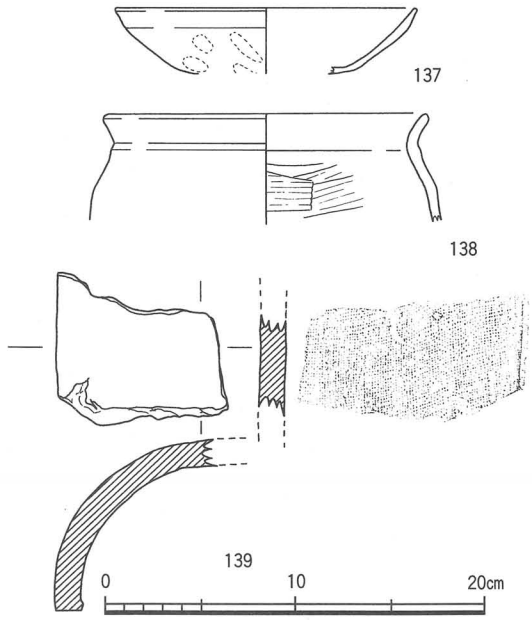
４調査区中央部のⅧ－17－９・10Ａ地区で検出した。北東－南西に伸びる溝で、全長約5.1m、幅0.4m、深さ0.1mを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は5Y5/1灰色細粒砂～細礫混シルト質粘土で鉄分を多く含む。遺物は出土していない。

ＳＤ3063

４調査区中央部のⅧ－17－９・10Ａ地区で検出した。北東－南西に直線的に伸びる溝で、検出長10.6m、幅0.3～0.6m、深さ0.11mを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は2.5Y6/1黄灰色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土で、上部に鉄分を多く、また炭を少量含む。古墳時代後期頃の土器が出土しているが、ＳＤ3052を切ることから時期は奈良時代以降に比定される。

ＳＤ3064（第63図、図版一五・六九）

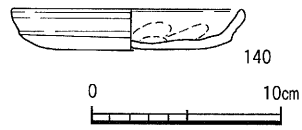
４調査区中央部のⅧ－17－９・10Ｂ・Ｃ地区で検出した。北西－南東に直線的に伸びた後東部で南に屈曲している。検出長21.6m、幅0.5～1.4m、深さ0.2mを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は10YR5/1褐灰色極細粒砂混粘土質シルトで、マンガン斑・斑鉄を多く含む。奈良時代～平安時代の土師器、須恵器、屋瓦の小片が少量出土している。３点（137～139）を図化した。137は土師器杯である。復元口径16.0cm、復元器高3.5cmを測る。９世紀前半の所産か。138は土師器甕の小片である。139は丸瓦の小片である。凹面に布目が残る。出土遺物から平安時代初頭（９世紀前半）の遺構と推定される。



第63図　ＳＤ3064出土遺物実測図

小穴・柱穴（ＳＰ）

ＳＰ3001～ＳＰ3048（第64図、図版一四・一五・二二・七〇）



第64図　ＳＰ3001出土遺物実測図

１調査区・４調査区で検出した。既述のＳＢ3001を構成する柱穴も含め、総数48個を検出した。これらの小穴・柱穴の大半は、１調査区西部のＳＢ3001の周辺および西側に集中している。平面の形状では、円形、楕円形、隅丸方形がある。規模は径0.08～0.5m、深さ0.03～0.41mを測る。ＳＢ3001を構成するＳＰ3028～ＳＰ3033以外では、ＳＰ3012とＳＰ3046の２箇所に柱根があり、柱穴と確認できる。また、１調査区北西部のⅦ－19－３Ｃ区で検出したＳＰ3001からは、完形品に近い土師器皿が１点出土しており、祭祀に関連する土器埋納ピットの可能性がある。ＳＰ3001から出土した土師器小皿１点(140)を図化した。140はほぼ完形の土師器小皿で、口径12.3cm、器高2.2cmを測る。13世紀後半に比定される。以下、各小穴・柱穴の規模等の詳細について、第31表に示す。

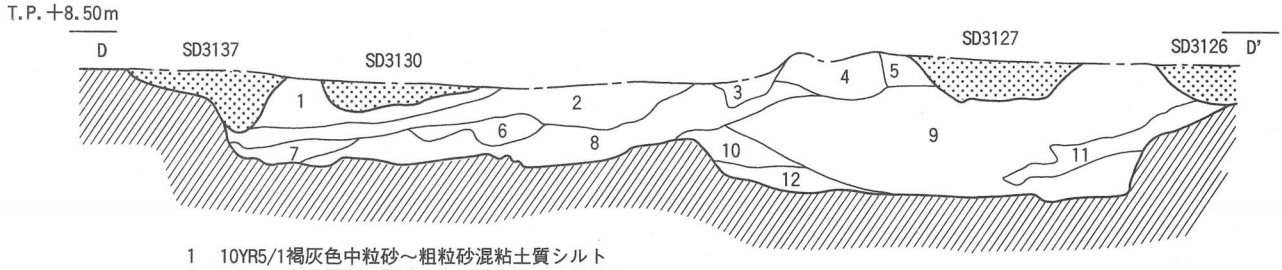
第31表　１・４調査区　ＳＰ3001～ＳＰ3048法量表(単位m)

遺構番号	地　区	平面図	長径	短径	深さ	埋　土	出土遺物
ＳＰ3001	Ⅶ－19－3C	円形	0.30	0.30	0.35	7.5YR3/3暗褐色砂礫混じりシルト	土師器皿
ＳＰ3002	Ⅶ－19－4C	〃	0.26	0.26	0.06	10YR6/1褐灰色砂質シルト	
ＳＰ3003	〃	〃	0.15	0.15	0.13	〃	
ＳＰ3004	〃	〃	0.25	0.25	0.08	〃	
ＳＰ3005	Ⅶ－19－3·4D	〃	0.25	0.25	0.07	2.5Y4/2暗灰色粘土質シルト	土師器
ＳＰ3006	Ⅶ－19－4D	〃	0.20	0.20	0.26	〃	
ＳＰ3007	Ⅶ－19－3D	〃	0.12	0.12	0.12	〃	
ＳＰ3008	〃	〃	0.20	0.20	0.11	〃	
ＳＰ3009	〃	〃	0.23	0.23	0.13	7.5YR3/3暗褐色砂礫混じりシルト	
ＳＰ3010	〃	〃	0.10	0.10	0.03	10YR3/1黒褐色シルト	
ＳＰ3011	〃	〃	0.08	0.08	0.08	10YR6/6明黄褐色粘土質シルト	
ＳＰ3012	Ⅶ－19－4D	〃	0.18	0.18	0.13	〃	柱根有す
ＳＰ3013	〃	楕円形	0.50	0.27	0.06	〃	
ＳＰ3014	Ⅶ－19－3D	円形	0.20	0.20	0.04	〃	
ＳＰ3015	〃	楕円形	0.23	0.10	0.05	〃	
ＳＰ3016	〃	円形	0.30	0.30	0.20	〃	
ＳＰ3017	Ⅶ－19－3E	不明	0.45	0.45	0.12	〃	土師器
ＳＰ3018	〃	〃	0.20	0.20	0.08	〃	
ＳＰ3019	Ⅶ－19－4D	円形	0.14	0.14	0.02	〃	
ＳＰ3020	Ⅶ－19－4D·E	〃	0.28	0.28	0.32	〃	須恵器
ＳＰ3021	Ⅶ－19－4E	〃	0.30	0.30	0.22	〃	土師器、須恵器
ＳＰ3022	〃	〃	0.20	0.20	0.14	〃	土師器
ＳＰ3023	〃	隅丸方形	0.32	0.32	0.13	7.5YR3/3暗褐色砂礫混じりシルト	
ＳＰ3024	〃	円形	0.23	0.23	0.25	2.5Y4/3オリーブ灰色粘土質シルト	土師器
ＳＰ3025	〃	〃	0.36	0.36	0.41	〃	
ＳＰ3026	〃	楕円形	0.37	0.20	0.08	〃	土師器一皿·高杯
ＳＰ3027	〃	〃	0.30	0.22	0.20	〃	
ＳＰ3028	〃	円形	0.20	0.20	0.09	〃	土師器皿
ＳＰ3029	〃	〃	0.23	0.23	0.10	〃	土師器
ＳＰ3030	〃	隅丸方形	0.30	0.30	0.06	〃	須恵器
ＳＰ3031	Ⅶ－19－4F	円形	0.30	0.30	0.23	〃	土師器、須恵器 柱痕有す
ＳＰ3032	〃	〃	0.25	0.25	0.17	〃	土師器
ＳＰ3033	Ⅶ－19－4E	隅丸方形	0.23	0.23	0.16	〃	土師器
ＳＰ3034	〃	楕円形	0.35	0.30	0.25	〃	土師器
ＳＰ3035	〃	円形	0.23	0.23	0.07	〃	土師器
ＳＰ3036	〃	楕円形	0.20	0.13	0.04	7.5YR3/3暗褐色砂礫混じりシルト	
ＳＰ3037	〃	〃	0.20	0.10	0.03	〃	
ＳＰ3038	〃	円形	0.23	0.23	0.07	〃	

遺構番号	地　区	平面図	長径	短径	深さ	埋　土	出土遺物
ＳＰ3039	Ⅶ－19－4E	楕円形	0.25	0.20	0.15	7.5YR3/3暗褐色砂礫混じりシルト	土師器
ＳＰ3040	〃	円形	0.17		0.04	〃	
ＳＰ3041	〃	〃	0.22		0.16	〃	須恵器
ＳＰ3042	Ⅶ－19－4F	〃	0.22		0.22	〃	土師器
ＳＰ3043	〃	〃	0.10		0.19	〃	
ＳＰ3044	〃	〃	0.15		0.07	〃	
ＳＰ3045	Ⅶ－19－4E·F	楕円形	0.30	0.20	0.05	〃	
ＳＰ3046	Ⅶ－19－4E	〃	0.20	0.16	0.18	N3/0暗灰色粘土質シルト	柱根有す
ＳＰ3047	Ⅶ－19－5E	円形	0.20		0.05	2.5Y6/2灰黄色シルト	
ＳＰ3048	Ⅶ－16－9J	円形	0.26	0.20	0.12	5Y5/1灰色シルト質粘土	

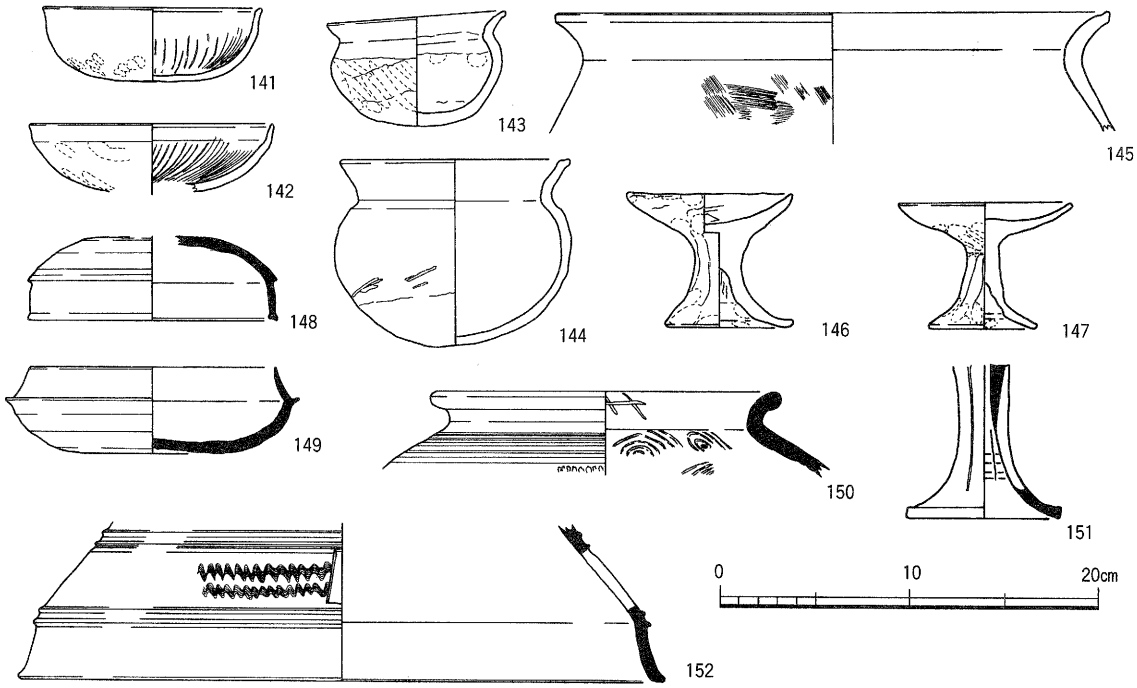
ＮＲ3001（第65・66図、図版一四・七〇・七一）

３調査区東部のⅧ－16－８・９Ｄ～Ｇ地区で検出した。北西－南東に伸びるもので、検出長約32m、幅3.0～5.8m、深さ最大0.8mを測る。埋土は上層が灰褐色系砂礫混シルト（上部にラミナ）、下層が灰色系極細粒砂～極粗粒砂の互層である。西半部の底部には流路に沿った隆起が見られるが、堆積状況から当初の流路はこの北側にあり、南側に拡張していることが分かる。遺物は古墳時代中期～奈良時代末頃までの土器類が出土している。12点（141～152）を図化した。141・142は杯Ｃに分類されるもので、共に体部内面に放射状暗文を施文している。７世紀中葉に比定される。143・144は壺Ｂで共に完形に近い。143は小形品、144は中形品である。143が口径9.4cm、器高6.1cm。144が口径12.1cm、器高9.8cmを測る。共に口縁部内外面をヨコナデする以外は未調整である。144の口縁端部は強いヨコナデにより凹線状に窪んでいる。なお、144の体部上半には退色が著しく不鮮明であるが、一部に墨書が認められることから墨書人面土器であった可能性が高い。145は大形の土師器甕の小片である。復元口径29.1cmを測る。146・147は共に土師器の手づくねの小形高杯である。146は口径8.3cm、器高7.1cm。147は口径9.2cm、器高6.6cmを測る。148は須恵器杯蓋でＴＫ23型式（５世紀後半）、149は須恵器杯身でＴＫ10型式（６世紀中葉）に比定される。150は須恵器広口壺の小片である。口頸部内面にヘラ記号がある。151は細長い筒状の柱状部を持つ小形の須恵器高杯である。脚部は完存している。脚部高8.1cm、裾部径8.2cmを測る。柱状部から裾部にかけてスカシ孔を表現したヘラ先による深い沈線が三方に配されており、一部は内面にまで達している。152は須恵器器台の脚部片である。６世紀前半のものか。出土遺物は時期幅が認



1　10YR5/1褐灰色中粒砂～粗粒砂混粘土質シルト
2　10YR5/2灰黄褐色細粒砂～中粒砂混シルト質粘土
3　2.5Y5/1黄灰色細粒砂混シルト
4　5Y5/1灰色シルト～極細粒砂
5　2.5Y6/1黄灰色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト
6　7.5Y5/1灰色極細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト
7　7.5Y4/1灰色中粒砂混シルト質粘土
8　2.5GY5/1オリーブ灰色シルト～細礫
9　5GY6/1オリーブ灰色シルト～中粒砂の互層
10　5GY4/1暗オリーブ灰色シルト～粘土質シルト
11　2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質粘土
12　N6/0灰色細粒砂～粗粒砂

第65図　ＮＲ3001断面図

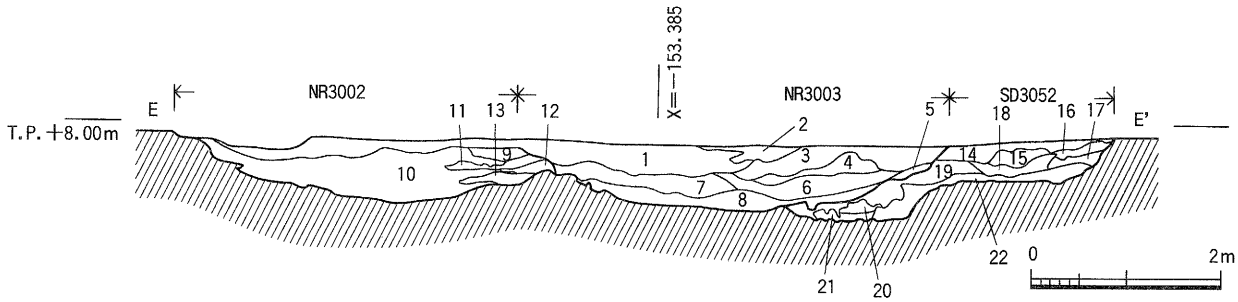


第66図　ＮＲ3001出土遺物実測図

められるが最も新しい遺物からみて、奈良時代後半に廃絶した河川と考えられる。

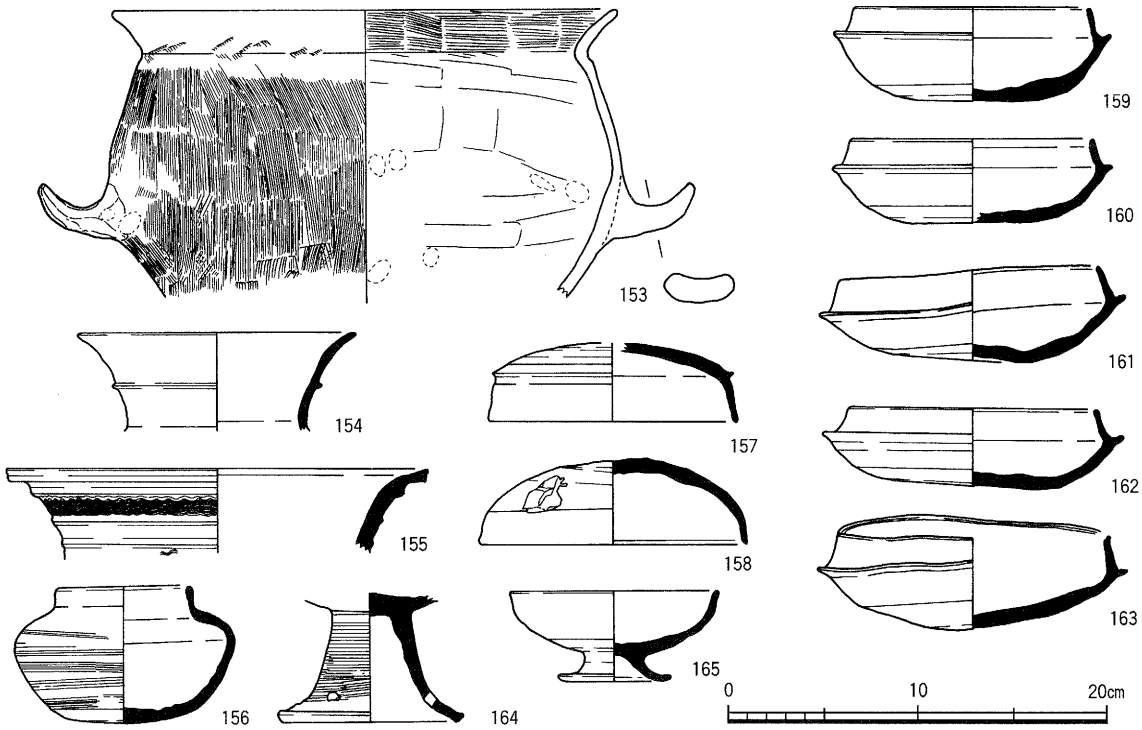
ＮＲ3002（第67～69図、図版二一・七一～七三）

３調査区北東部から４調査区南西部のⅧ－16－８～10Ｆ～Ｉ地区で検出した。北西－南東に伸びるもので、検出長32.0m、幅4.0m、深さ最大0.8mを測る。埋土はシルト～細礫の水成層が堆積している。遺物は古墳時代中期～奈良時代の土師器、須恵器、屋瓦が数多く出土している。13点（153～165）を図化した。153は土師器鍋である。体部中位に扁平な把手が付く。６世紀中葉の所産か。154・155は須恵器壺の口縁部の小片である。154は直口の口縁部を有するもので、頸



1　10YR6/1褐灰色シルト～極細粒砂
2　5Y5/1灰色中粒砂混粘土
3　2.5GY4/1暗オリーブ灰色中粒砂～粗粒砂
4　2.5GY5/1オリーブ灰色シルト～粘土質シルト
5　10Y5/1灰色細粒砂混シルト質粘土
6　7.5Y4/1灰色極細粒砂～粘土（植物遺体多量に含む）
7　10Y4/1灰色シルト～極粗粒砂の互層（植物遺体多量に含む）
8　7.5GY4/1暗緑灰色粘土質シルト混5Y6/2灰オリーブ色シルト～粗粒砂
9　10Y5/1灰色中粒砂～粗粒砂とシルトの互層
10　2.5Y5/1黄灰色極細粒砂～細礫の互層
11　10Y6/1灰色シルト～極細粒砂の互層
12　7.5Y4/1灰色シルト～極細粒砂の互層（植物遺体少量含む）
13　5GY4/1暗オリーブ灰色粘土質シルト
14　10YR6/1褐灰色中～粗粒砂混シルト質粘土
15　10YR5/1褐灰色粗粒砂混粘土
16　10Y6/1灰色粘土ブロック混細～中粒砂
17　10YR5/1褐灰色細粒砂混粘土質シルト
18　2.5Y5/1黄灰色細～粗粒砂混粘土質シルト
19　10G4/1暗緑灰色粗粒砂混粘土質シルト
20　5Y6/2灰オリーブ色シルト～極細粒砂の互層
21　10GY4/1暗緑灰色粘土～シルト互層
22　5Y5/1灰色極粗粒砂～細礫混粘土質シルト

第67図　ＮＲ3002・ＮＲ3003・ＳＤ3052断面図



第68図　ＮＲ3002出土遺物実測図

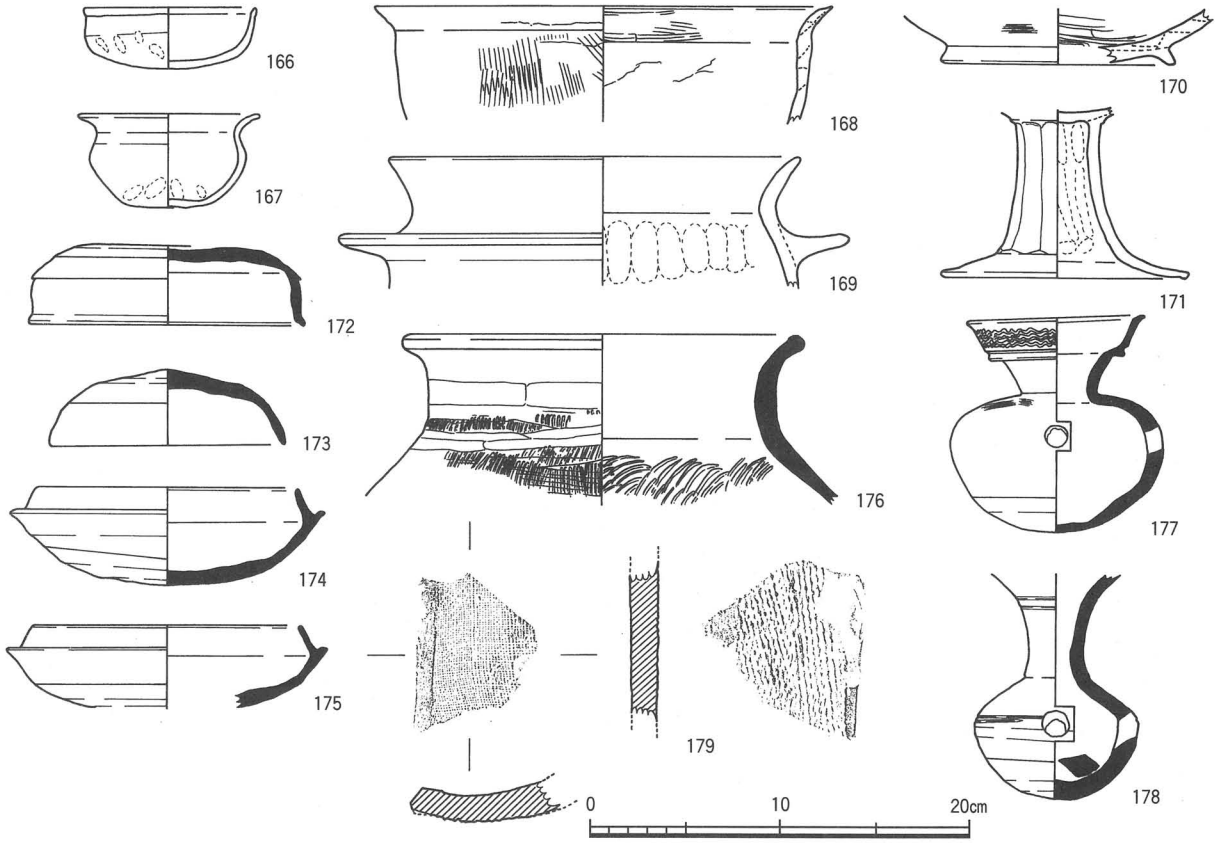
部中位に凸帯１条が巡る。器壁面の色調は赤紫色である。５世紀前半に比定される。155は口縁部外面を３条の凸帯で四分割にするもので、そのうち二段に波状文が施文されている。５世紀中葉に比定される。156は須恵器短頸壺でほぼ完形である。口径7.0cm、器高7.2cm、体部最大径11.7cmを測る。体部外面にカキメ調整が行なわれている。焼成は堅緻で内外面ともに灰かぶりが顕著である。胎土はやや粗く、器面に１～３mm程度の長石を多く含む。157・158は須恵器杯蓋である。158が完形品で、157が1/2程度残存している。158の天井部には、焼成時に付着した須恵器片が認められる。157はＴＫ216型式（５世紀前半）、158はＭＴ85型式（６世紀後半）にあたる。須恵器杯身は５点（159～163）図化した。160以外は完形品である。161・163は焼成時に歪みを生じている。162がＭＴ15型式（６世紀前半）他がＴＫ10型式（６世紀中葉）に比定される。須恵器高杯は２点（164・165）図化した。164の脚部は完存している。脚部外面にカキメ調整が行なわれている。スカシ孔は３個である。165は低脚で「ハ」の字形を呈する脚部に浅い椀形の杯部が付く。焼成は不良で視覚的には瓦質土器風を醸し出している。ＴＫ217型式（７世紀中葉）のものか。出土した遺物のなかで最も新しい遺物からみて、河川廃絶の時期は飛鳥時代中葉（７世紀中葉）が想定される。

ＮＲ3003（第67・69・70図、図版二一・七二～七四）

ＮＲ3002の北側に、中洲状の高まりを隔てて並行しているが、西部では合流して１条になっている。検出長28.0m、幅4.2m、深さ最大0.9mを測る。埋土は１～８層に分層が可能で１～４層が灰色～オリーブ灰色の色調で粘土～粗粒砂の層相である。５～８層は灰色～暗緑灰系の色調で粘土～極細粒砂で全体に植物遺体を含んでいる。遺物は古墳時代中期～奈良時代の土器類、屋瓦が多量に出土しており、木製品では曲物、墨書木簡、他に獣骨数点が出土している。また一辺30～50cmを測る石材が３点出土している。このうちの１点については、西方約500m地点で(財)大

阪府文化財調査研究センターによる(98－１トレンチ)で検出された七ツ門古墳の横穴式石室に使用されていたものと同種の石材（カンラン石安山岩［大阪府柏原市国分市場芝山］）である。遺物は14点(166～179)を図化したが、西端部分のＮＲ3002との合流部分では峻別が困難なため、ＮＲ3002の遺物が混入する可能性がある。166は土師器杯Ｃで口径9.1cm、器高3.1cmを測る。調整はａ0手法である。167は土師器壺Ｂに分類される小形壺である。復元口径9.5cm、器高5.0cmを測る。形態から見てまじないに使用されていた器の可能性がある。168は土師器甕ないしは鉢と推定される。体部外面は縦位のハケ調整が施されている。169は水平に伸びる鍔部から口縁部が外反して伸びる土師器羽釜である。茶褐色の色調で、胎土中に微細な角閃石が多量に含まれている。河内産である。170は「ハ」の字に開く高台を有する土師器で、壺ないしは鉢と推定される。171は断面十角形に面取りした柱状部に、ラッパ状に開く裾部が付く土師器高杯で、平城宮分類の高杯Ａにあたる。帰属時期は平城宮Ⅱである。172・173は須恵器杯蓋である。172の内面は炭化物が全面に付着している。172はＴＫ208型式(５世紀中葉)、173はＴＫ209型式(７世紀前半)に比定される。174・175は須恵器杯身である。174は完形品で口径13.7cm、器高5.2cm、立ち上がり高1.4cm、受部径16.5cmを測る。共にＴＫ10型式(６世紀中葉)に比定される。176は須恵器壺である。復元口径20.5cmを測る。６世紀中葉のものである。177・178は須恵器瓶である。178は円孔を穿った器壁部分が内部に落ち

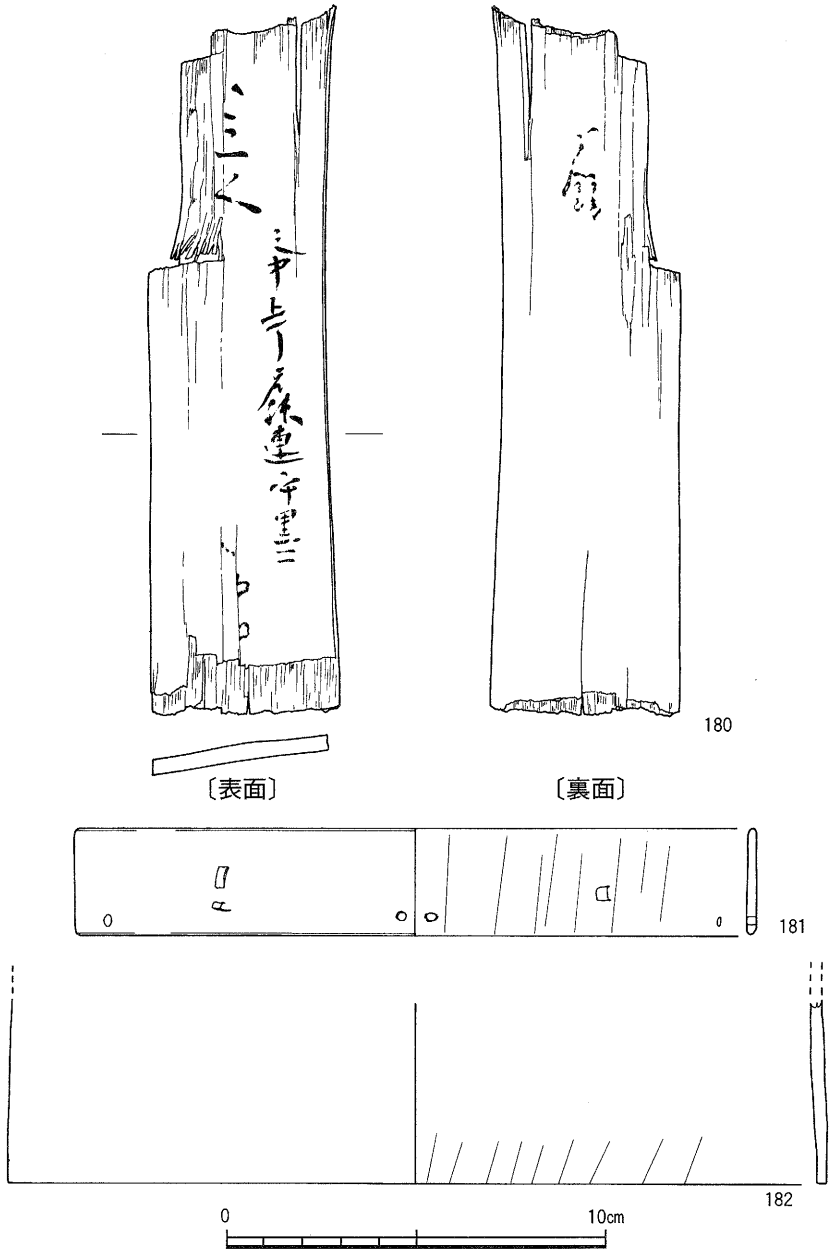
写真34　墨書木簡(180)出土状況(北西から)



第69図　ＮＲ3002、ＮＲ3003出土遺物実測図

込んで鈴状になっている。177がＯＮ46型式（５世紀中葉）、178が７世紀中葉に比定される。179は平瓦の小片である。凹面に布目、凸面に縄目叩きが残る。180は木簡である。木簡に使用された板材は、幅4.6～4.8cm、厚さ0.4cmを測るもので、両端は折り取られており残存長17.6cmを測る。墨書は下記に示したように、表面側に２行、裏面側に１行が記されているが全体に不鮮明で解読が困難な部分が多い。材はヒノキである。

181は曲物容器の破片である。側板復元径17.8cm、側板幅2.8cm、側板厚0.3cmを測る。２孔の結合孔を通して樺皮で留めている。釘孔が認められるが破片のため総数は不明である。縦方向にケビキを入れている。柾目板を使用している。182は曲物容器である。径21.6cm、側板残存幅4.7cmを測る。縦方向にケビキを入れている。柾目板を使用している。



第70図　ＮＲ3003出土遺物実測図

木簡(180)の読み　〔表面右側〕之中上丁□□連 □　　□
　　〔表面左側〕□（合点か） 三人
　　〔裏面〕□□

解読された部分で、三人、この中の上丁（じょうてい）（定番しているもの、出勤しているものの意）の□□の連（むらじ）□□と読めるもので、この読みから解釈される内容としては、役所に地方から出勤している三名を呼びつけた「召文」、あるいは役所に地方から出勤している三名に対し食料などを支給した「伝票」である可能性が考えられる。以上のような内容から、近接位置に役所が存在した可能性を想定することができよう。

第４面（第72・73図）

第４面は第３面以下約0.3m付近に存在する第Ⅴ層上面（T.P.＋7.4～7.9m）で検出した。１調査区から４調査区の全域で検出した。１調査区～３調査区では古墳時代中期前半～後期中葉にかけての居住域に関連した遺構が見られ、４調査区では東端に自然河川が存在するため遺構は希薄である。第４面で検出した遺構としては、井戸２基（ＳＥ4001・ＳＥ4002)、土坑44基（ＳＫ4001～ＳＫ4044)、溝45条（ＳＤ4001～ＳＤ4045)、小穴33個（ＳＰ4001～ＳＰ4033)、自然河川１条（ＮＲ4001）がある。

井戸（ＳＥ）

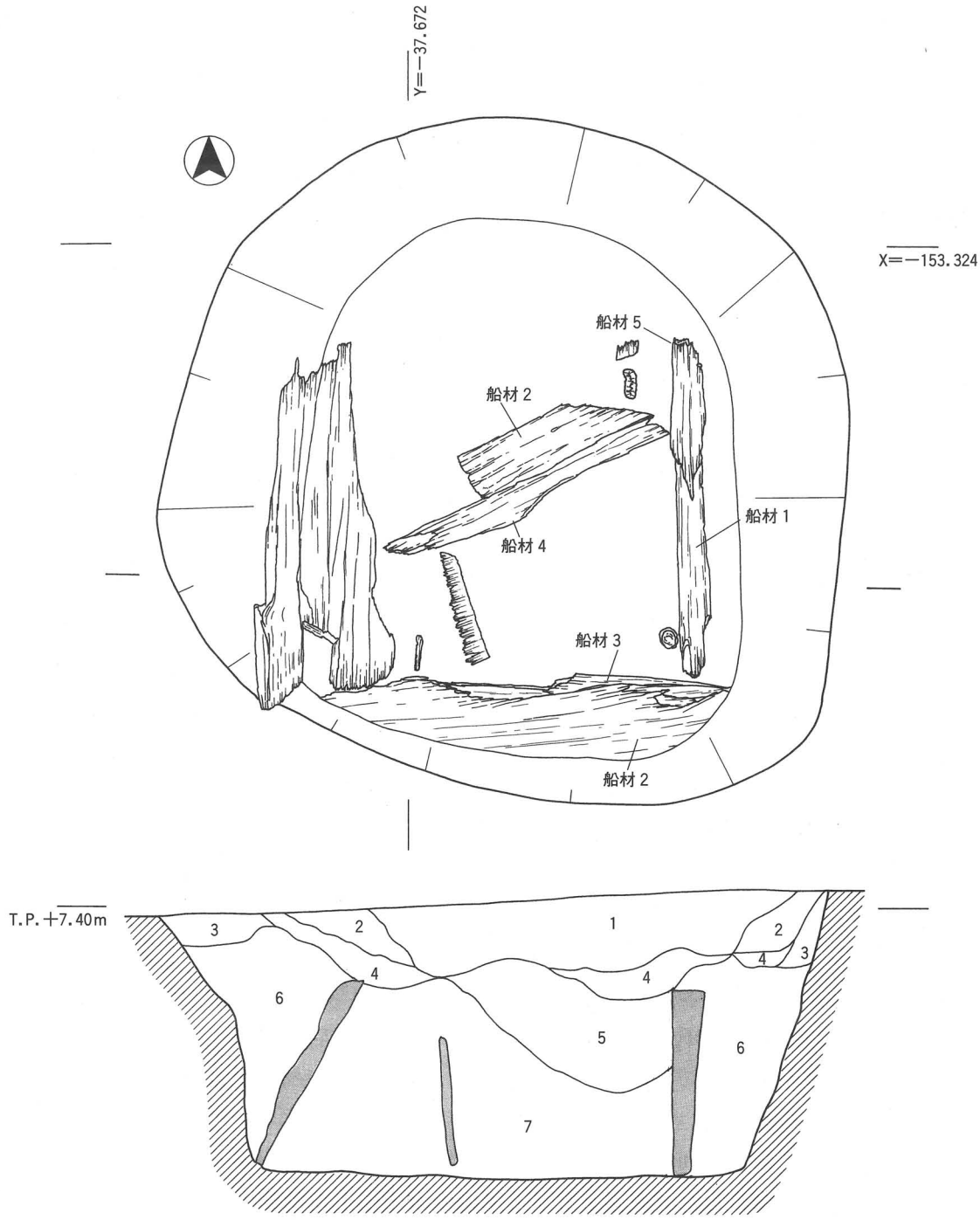
ＳＥ4001（第71・74～77図、図版二七・七五・七六）

１調査区北西部のⅦ－19－３Ｃ・Ｄ地区で検出した。木組の井戸側を有する井戸で、掘方の平面形は不整円形を呈する。規模は、径2.05m、深さ0.85m前後を測る。井戸側は掘方の中央に、長さ1.0m前後、幅0.5m前後、厚さ0.1m前後の船部材転用材を、一辺約1.0mの方形に組み合わせた（横板井籠組型式）もので四隅には井戸側を固定する杭が打設されている。しかし、板材は腐蝕が著しい他、土圧により北側および西側の板材が内側に傾いていた。埋土は７層に分層が可能で、そのうちの５層、７層が井戸側内の埋土である。遺物は井戸側内の５層、７層から、土師器、須恵器の小片が極少量出土している。小片のため時期を明確にし難いが古墳時代中期頃の所産と思われる。

一方、井戸側に使用されていた部材についてはその特徴から準構造船の断材と考えられる。全体に腐食が著しい他、井戸側転用時の再加工の可能性があり不明な点が多い。ここでは、加工部分を残す５点の井戸側を**船材１～５**と呼称して説明を加える。

船材１（第74図）は盾形を呈する縦板部分の船材と推定される。東の井戸側に使用されていたもので、先端部分を北に向け内面が井戸側の内側になるように横位に置かれている。先端部分に行くに従って幅を減じる盾形の形状で、右縁部が欠損している。残存部分で長さ91cm、幅33～46cm、厚さ４～7.5cmを測る。内面はほぼ平坦面を呈しており、左縁部に従って長さ88cm、幅２～４cm、深さ３cm前後の枘溝が切られている。右縁部の枘溝は先端部分から中位の内側部分を残して欠損している。この枘溝については、舷側板および飾板を結合するためのもので、上部に行くに従って角度が内側に入る傾向がある。その他、内面側から穿たれた枘穴が上部では右側に１箇所、中位では溝より内側の対称位置に２箇所と下位では貫通した枘穴が左側に１箇所ある。外面は上端から約10cmが丸太部分を残し未加工で、以下は樹木の辺材部分が斜めに削り取られている。中位から下位の中央部に長さ26cm以上、幅16～18cmを測る突起が削り残されている。突起部分の右側部分が比較的遺存状況が良く年輪や工具痕が明瞭である。樹種はスギである。

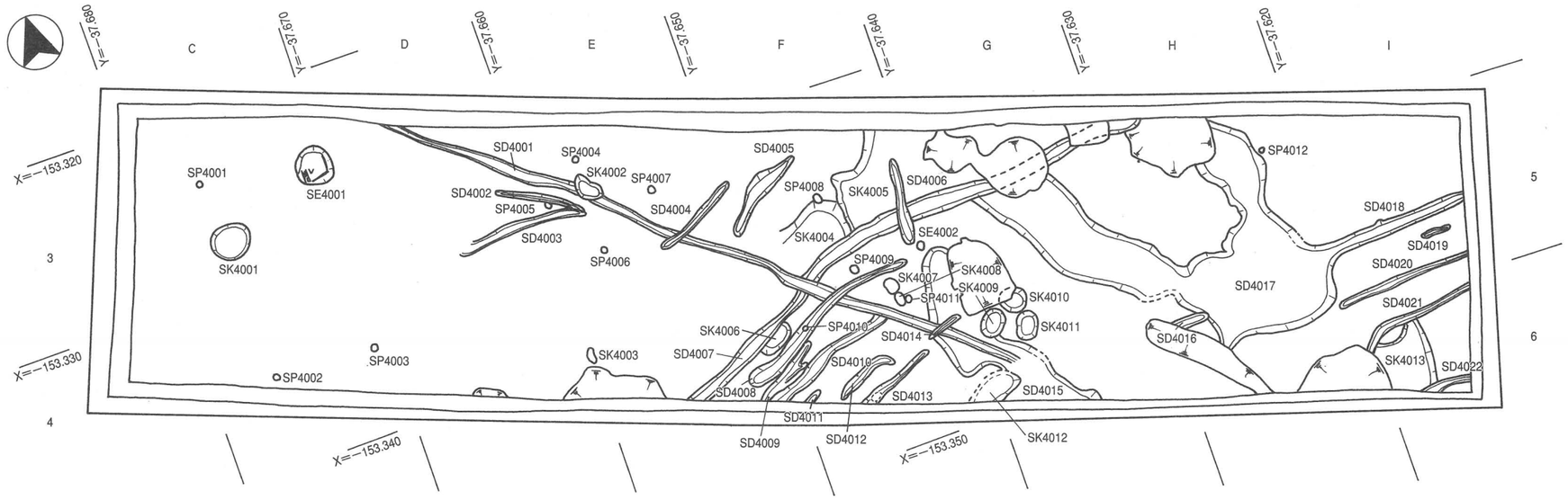
船材２（第75図）は南の井戸側（外側）と北の井戸側に使用されていたものである。共に先端部分を西にして内面が井戸側の内側に向くように設置されていた。上端が丸味を帯びた楕円形の形状から幅を減じて下部に至るもので、内面からみて船（首・尾）の左上部および下部の中途から欠損している。残存部分で長さ105cm、船（首・尾）幅56.5cm、船（首・尾）長37cm、下部幅38cm、船（首・尾）厚１～７cm、下部厚１～３cmを測る。先端部分から36cm前後の位置から下部に向かって段状に削られており、その高低差は６cm前後を測る。この段状の中央部に縦12cm、横



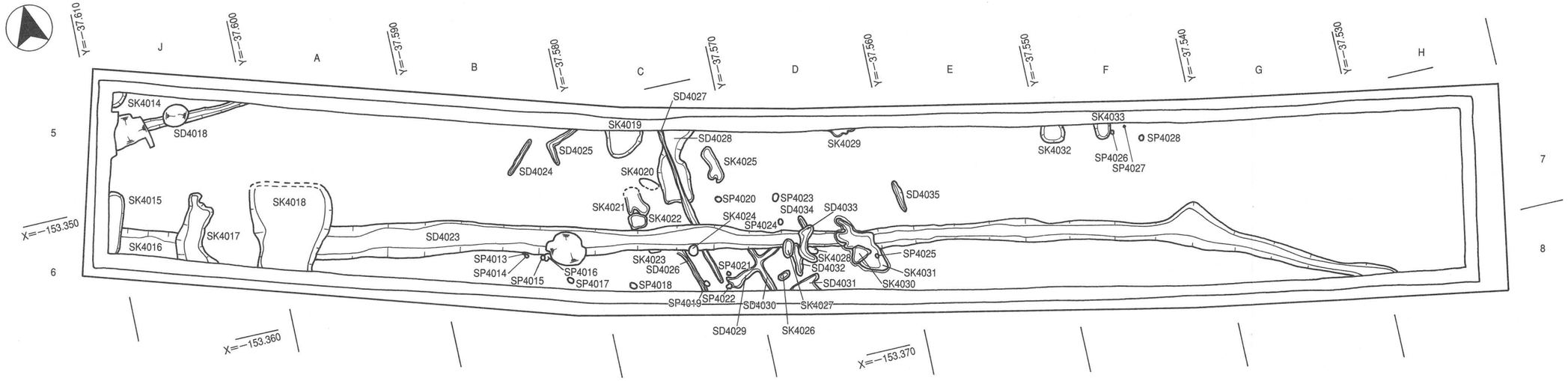
1　2.5Y4/2暗灰黄色シルト(炭化物を少量含む)
2　1層より砂質化
3　2.5Y5/4黄褐色シルト
4　2.5Y5/1黄灰色粘土質シルト
5　N6/0灰色シルト
6　N4/0灰色粘土質シルト(植物遺体を若干含む)
7　N7/0灰白色中粒砂

第71図　ＳＥ4001平断面図

14cmを測り底部が先端部分から下部に向けて傾斜を持つ方形状の刳形が設けられている。刳形部分の左側に楕円形を呈し長さ3.4cm、幅0.6cm、深さ2.9cmを測る一対の貫通しない枘穴が存在している。その他、下部の右上部には楕円形を呈し長さ10cm、幅５cmを測る枘穴やその左には長さ24cm、幅５cmを測る不定形の貫通穴がある。外面は樹木の輪郭に沿った形状を呈しており、先端



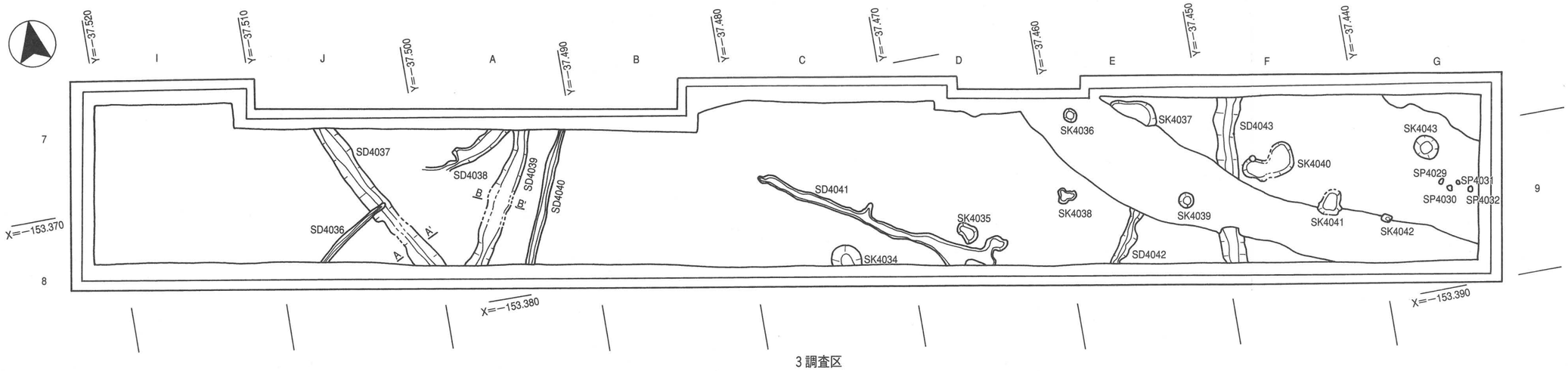
1調査区



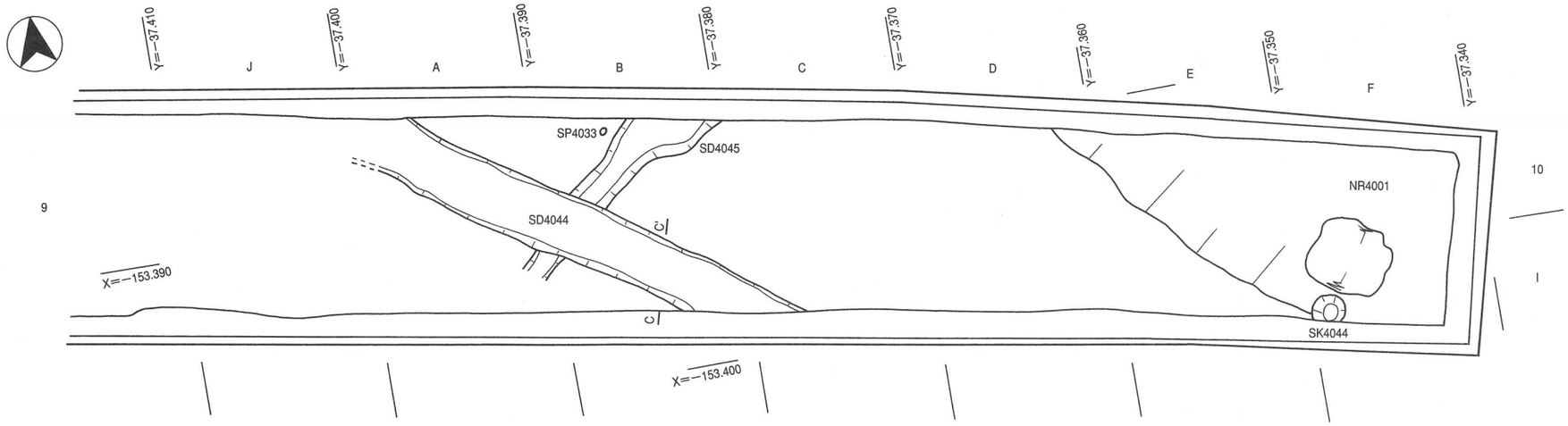
2調査区

0 10 20m
（S＝1/300）

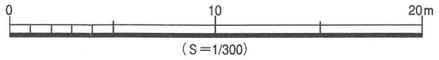
第72図　1・2調査区　第4面検出遺構平面図



3 調査区



4 調査区



第73図　3・4調査区　第4面検出遺構平面図

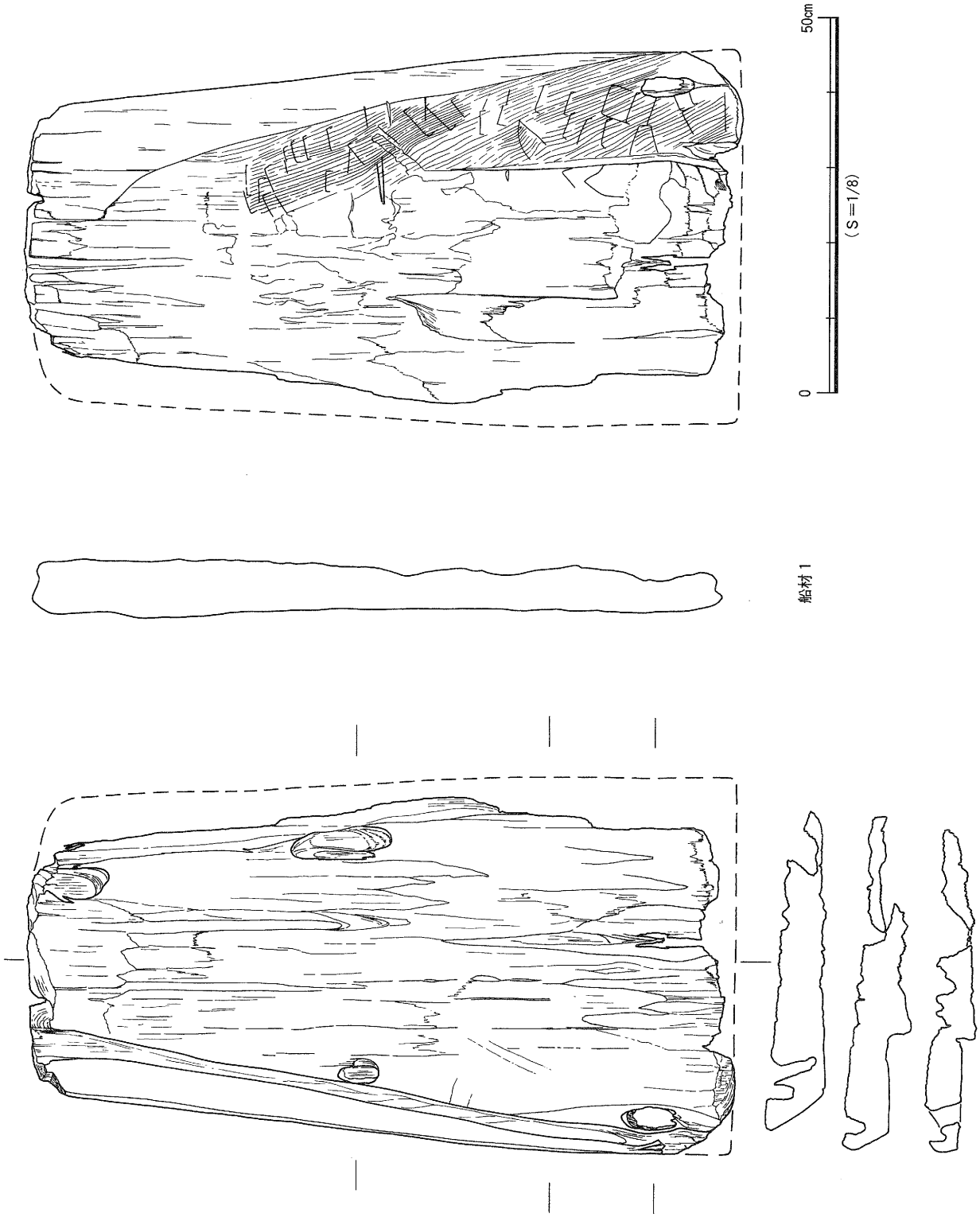
部分の左側部分には直線状に削り取られた痕跡が無数に残っている。樹種はスギである。

船材３（第76図）は南の井戸側（内部）に使用されていた船（首・尾）部材である。先端を東に向けて内面が井戸側の内側になるように設置されていた。内面側からみて右側を欠損するが、残存部分から推定して**船材２**と形状や加工方法に共通点が認められる。残存部分で長さ102cm、船（首・尾）長41cm、船（首・尾）幅42.8cm、下部幅12cm、船（首・尾）厚５cm、下部厚３cmを測る。先端部から41cm前後の位置から下部に向かって段状に削られており、その高低差は５cm前後を測る。その段状の中央部に縦12cm前後、横14cmを測り、底部が先端から下部に向かって傾斜を持つ方形状の刳形が設けられている。刳形部分の左側に楕円形で長さ4.5cm、幅2.8cm、深さ2.9cmを測る貫通しない枘穴がある他、刳形部分の右横の下部には楕円形で長さ17cm以上、幅４cmを測る貫通する穴がある。樹種はスギである。

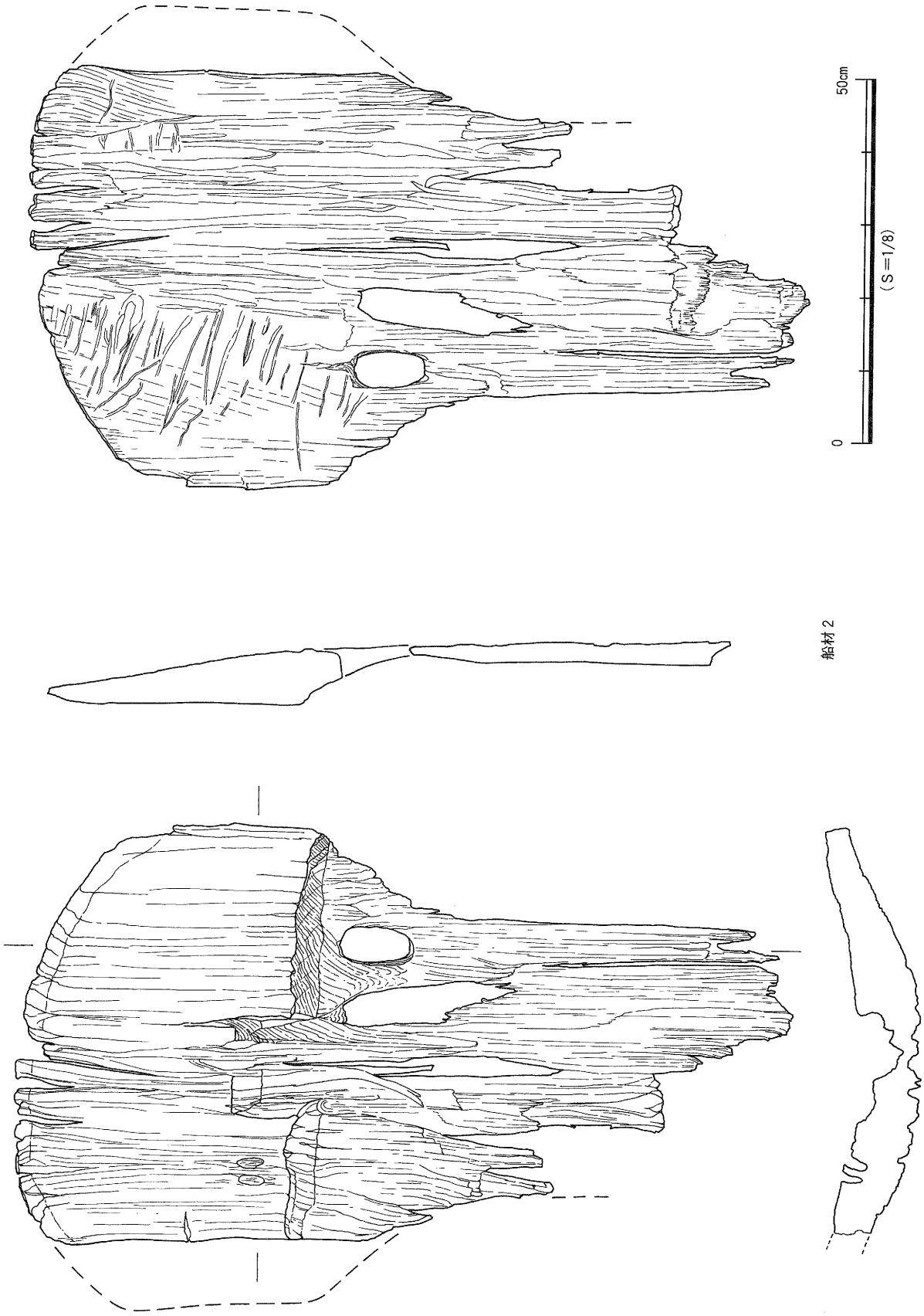
船材４（第77図）は北の井戸側に使用されていた部材である。幅10cm、厚さ2.5cm前後の柾目板の先端部分をペン先状に削り出すもので、片方は折り取られて欠損しており残存長77cmを測る。先端部分から約30cmの位置に幅1.3cm、長さ4.0cmを測る長方形の枘穴が2.7cmの間隔を開け並列に穿たれている。なお、左側面の端部は丸味を持つほか、側面端から2.5cm幅についてはやや厚みを減じることから側面端からこの部分までは他の部材と組まれていた可能性が高い。樹種はスギである。

船材５（第77図）は東の井戸側の北側上部に使用されていたものである。幅10cm、厚さ2.5～3.0cmを測り板材の一方の先端部分を斜めに削るものである。**船材４**と同様、一方は折り取られており残存長69.8cmを測る。枘穴は平面側と側面側に穿たれており、各２箇所確認される。平面側は枘穴部分を境として欠損しているため法量は不明であるが、長方形の枘穴が段違いに穿たれている。側面側は先端部分から27.5cmと57cmの位置に穿たれている。下段部分は上部が欠損しているが双方共に長方形で幅0.8cm、長さ2.3cm、深さ2.3cmを測る。樹種はスギである。なお、**船材４・５**とした部材については、船材の舷側板ないしは飾板の可能性があるため船材として掲載しているが他の部材である可能性が残されている。

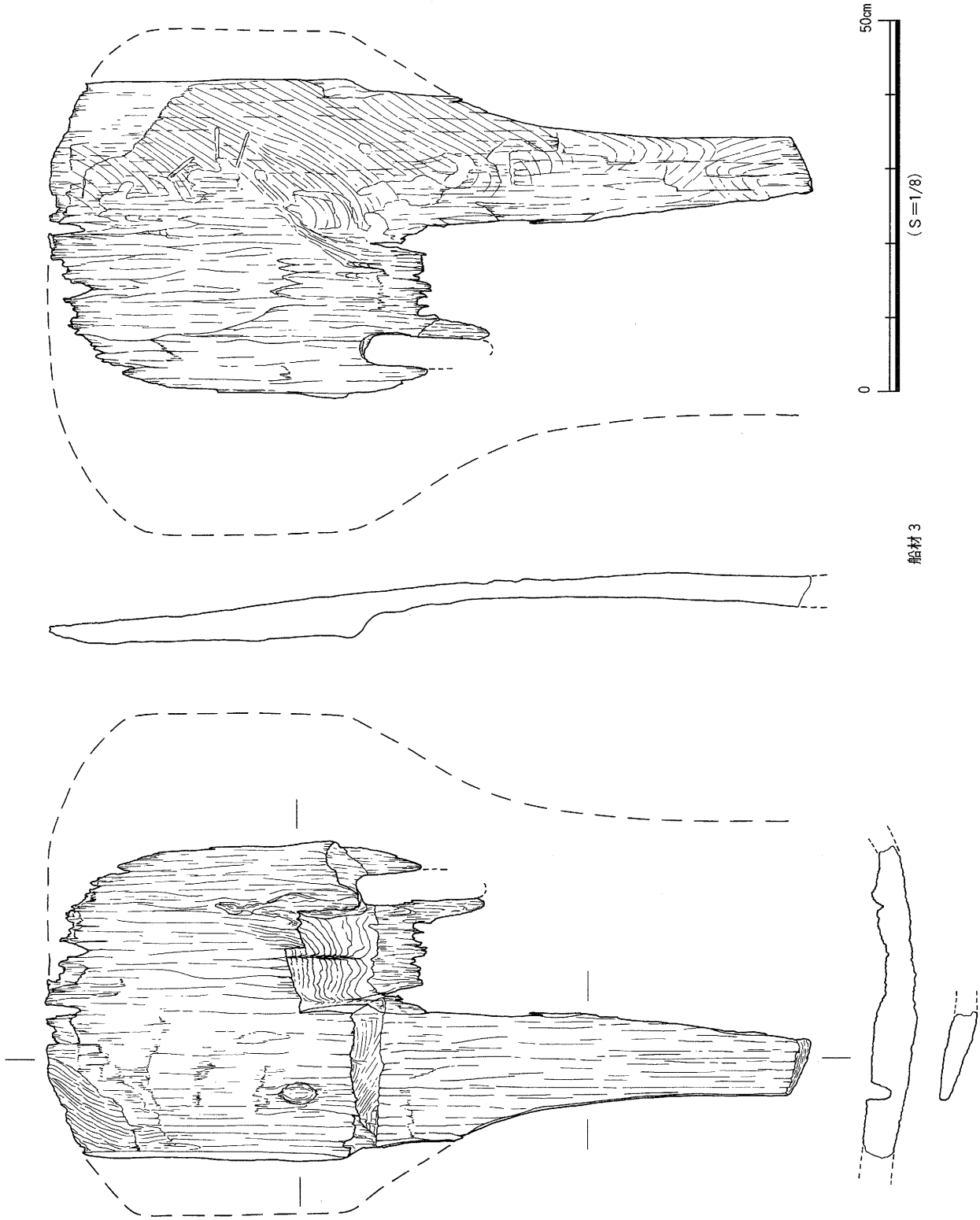
これらの船材から復元される準構造船の構造については、以下が想定される。船首、船尾部分については、船（首・尾）部材である**船材２・３**にみられた方形状の刳形部分に縦板の**船材１**外面の突起部分をはめ込むもので、この様に組んだ場合縦板の左下部にある貫通する枘穴と**船材２・３**の船（首・尾）の左側にある枘穴とが一致することから縦板を支える柱のようなものが設けられていたことが推定される。さらに舷側を高くするため舷側板、飾板（**船材４・５**）および船首、船尾付近には隔壁が設けられていたものと推定されるが、現状の船材を組み合わせて復元した場合、舷側板の設置するスペースが無いことから、本例については高廻り２号墳（５世紀初頭）〔大阪市平野区〕出土の船形埴輪に代表されるような二体成形の船であったと推定され、**船材２・３**については丸木船の先端部分に取り付く船（首・尾）部材とした。久宝寺南（その２）出土の準構造船（３世紀後半）との比較では、規模においては本例のほうが小形である他、形状では船首、船尾構造の違いがあることから、多様な形態化が存在した可能性や時期差による形態変化等を考えていく必要があろう。



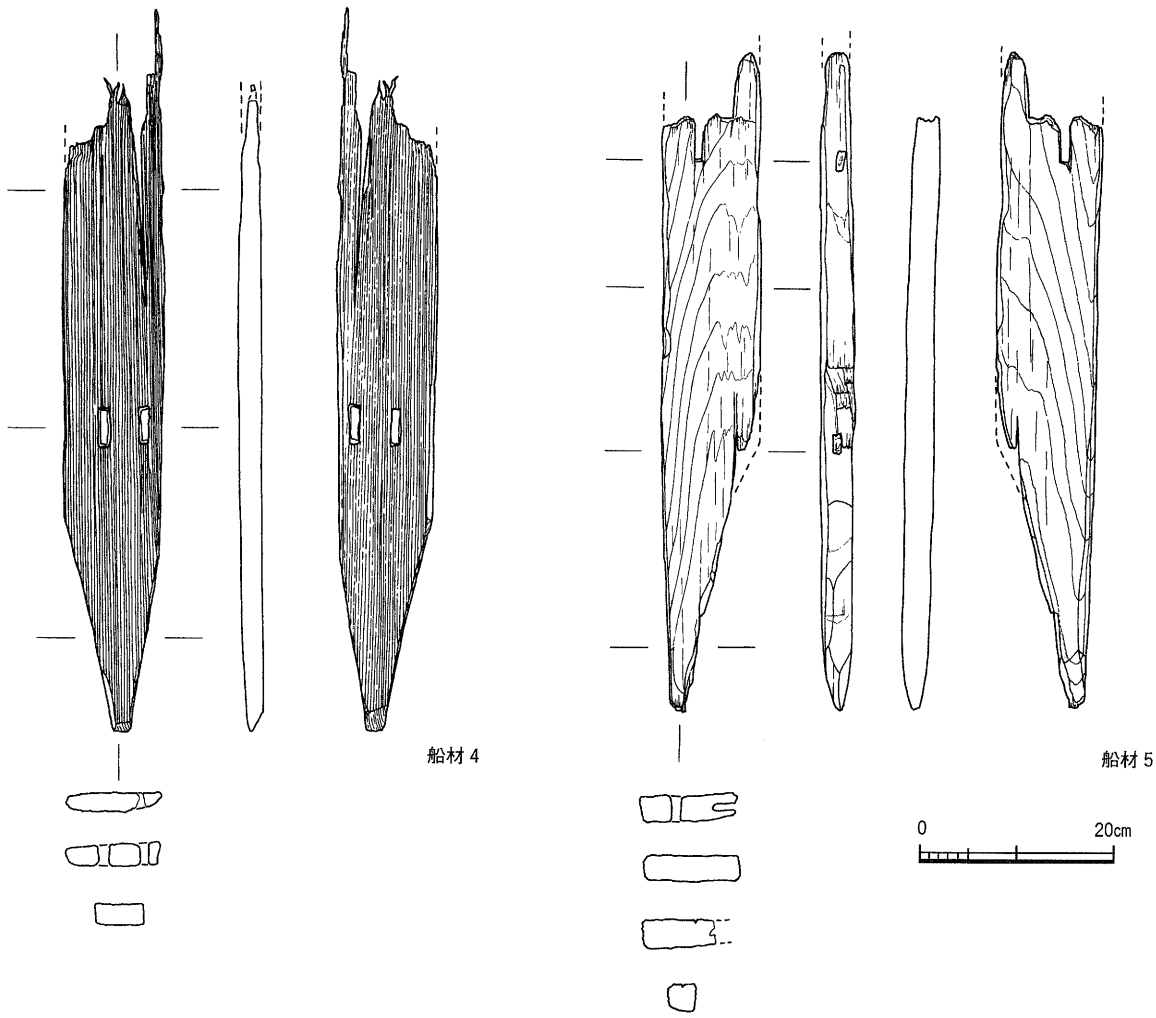
第74図　ＳＥ4001船材転用井戸側－１



第75図　ＳＥ4001船材転用井戸側－２



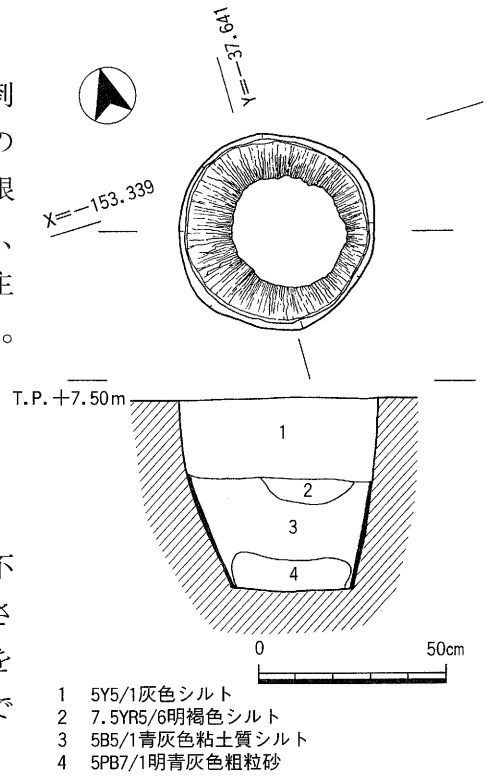
第76図　ＳＥ4001船材転用井戸側－３



第77図　ＳＥ4001船材転用井戸側－４・５

ＳＥ4002（第78図、図版二三・二六）

１調査区中央部のⅦ－19－４Ｆ地区で検出した。丸太刳抜き井戸側を有する井戸である。平面が円形を呈するもので、径0.52m、深さ0.51mを測る。丸太刳抜き井戸側は根元に近い幅広の部分を上にして設置されており、上幅48cm、下幅32cm、高さ29cmを測る。埋土は１～３層がシルトを主体とするもので、最下層の４層は粗粒砂が堆積している。遺物は出土していない。



第78図　ＳＥ4002平断面図

土坑（ＳＫ）

ＳＫ4001

１調査区西部のⅦ－19－３Ｃ地区で検出した。平面が不整円形を呈するもので、長径2.1m、短径1.85m、深さ0.42mを測る。埋土は８層から成るが不規則な堆積状況を示しており、短期間に埋め戻しが行なわれたことが推定できる。遺物は出土していない。

ＳＫ4002

１調査区北中部のⅦ－19－４Ｅ地区で検出した。ＳＤ4001を切る。平面不定形を呈するもので、東西幅1.0m、南北幅1.74m、深さ0.09mを測る。埋土は灰色シルト質粘土の単一層である。遺物は出土していない。

ＳＫ4003

１調査区中央部のⅦ－19－４Ｄ・Ｅ地区で検出した。南北に長い楕円形を呈するもので、長径0.64m、短径0.41m、深さ0.11mを測る。埋土は灰色シルトに暗灰黄色粘土のブロックが入る。遺物は出土していない。

ＳＫ4004

１調査区中央部のⅦ－19－４Ｆ地区で検出した。北部でＳＰ4008、東部でＳＫ4005、南部でＳＤ4007によって切られており、輪郭が顕著に窺えるのは北部のみである。検出部分で、東西幅4.0m、南北幅2.4mを測る。深さについては北部が0.12m前後、南部が0.05m前後と北部の方が深くなる。埋土は灰色砂質シルトが堆積する。遺物は出土していない。

ＳＫ4005

ＳＫ4004の北東側に隣接している。北部は調査区外に至り、東部は第１面で検出したＳＥ1003、ＳＥ1006、ＳＫ1008、南部はＳＤ4006、ＳＤ4007によって切られている。検出部分で東西幅3.3m、南北幅4.5mを測る。深さについては北部が0.3～0.4m、南部が0.15m前後と北部に向かって緩やかに落ち込む。埋土は上層が灰オリーブ色シルト、下層が緑灰色砂質シルトと暗オリーブ灰色粘土質シルトの互層となる。遺物は出土していない。

ＳＫ4006

１調査区中央部のⅦ－19－５Ｅ・Ｆ地区で検出した。北部はＳＤ4007に切られるが、検出状況から北東－南西に長い楕円形を呈するものと推定される。検出部分で、東西幅2.05m、南北幅0.8

m、深さ0.11mを測る。埋土は黒色粘土質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

ＳＫ4007

１調査区中央部のⅦ－19－５Ｆ地区で検出した。南－北に長い楕円形を呈する。規模は、長径0.9m、短径0.65m、深さ0.25mを測る。埋土は断面状況に沿ってシルト～粘土を主体とする５層が堆積している。遺物は出土していない。

ＳＫ4008

ＳＫ4007の南側に隣接している。ＳＫ4007と同様、南－北に長い楕円形を呈する。規模は、長径0.7m、短径0.5m、深さ0.05mを測る。埋土は暗オリーブ灰色粘土質シルトの単一層である。遺物は出土していない。

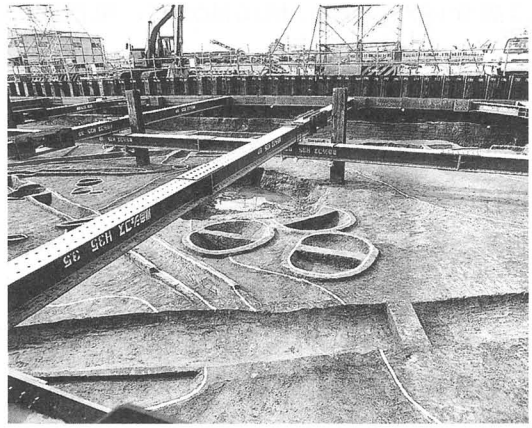


写真35　１調査区中央部ＳＫ4009～ＳＫ4012検出状況（南から）

ＳＫ4009

１調査区中央部のⅦ－19－５Ｇ地区で検出した。ＳＫ4010の南西側に位置する。北東－南西に長い楕円形を呈する。規模は長径1.55m、短径1.25m、深さ0.42mを測る。埋土は椀形の断面形状に沿ってシルトを主体とする３層がレンズ状に堆積している。遺物は出土していない。

ＳＫ4010

１調査区中央部のⅦ－19－５Ｇ地区で検出した。北西部分がＳＥ1005に切られているが、検出部分から円形を呈するものと推定される。規模は、径1.35m、深さ0.34mを測る。埋土は椀形の断面形状に沿ってシルト～シルト質粘土を主体とする５層が堆積している。遺物は出土していない。

ＳＫ4011

ＳＫ4009の東側で検出した。南－北に長い楕円形を呈する。規模は、長径1.5m、短径1.15m、深さ0.2mを測る。埋土はシルトを主体とする３層から成る。遺物は出土していない。

ＳＫ4012

１調査区中南部のⅦ－19－５Ｆ・Ｇ地区で検出した。南側は調査区外に至る。検出部分で東西幅2.15m、南北幅0.8m、深さ0.06mを測る。埋土は灰色シルトの単一層である。遺物は出土していない。

ＳＫ4013

１調査区南東部のⅦ－19－６Ｉ地区で検出した。北部はＳＤ4021、南部はＳＤ4022、西部は撹乱によって部分的に切られ、南部はさらに調査区外に至る。検出部分で東西幅3.0m、南北幅3.0m以上、深さは0.13m前後を測る。埋土は灰色シルトが堆積する。遺物は出土していない。

ＳＫ4014

２調査区北西部のⅦ－19－５Ｊ地区で検出した。北部および西部は調査区外に至る。検出部分で南北幅0.77m、東西幅0.8m、深さ0.04mを測る。埋土は黒褐色シルトの単一層でマンガン斑が認められる。遺物は出土していない。

ＳＫ4015

２調査区南西隅のⅦ－19－５・６Ｉ・Ｊ地区で検出した。東部の一部を検出したのみで、大半

は調査区外に至る。検出部分で、東西幅0.80m、南北幅0.64m、深さ0.09mを測る。埋土は黒褐色シルトの単一層である。遺物は出土していない。

ＳＫ4016

２調査区南西部のⅦ－19－６Ｉ・Ｊ地区で検出した。南部が調査区外に至る他、東部をＳＫ4017、西部をＳＫ4015に切られている。検出分部で東西幅3.36m、南北幅1.46m、深さ0.09mを測る。埋土は7.5YR5/2灰褐色シルトでN8/0灰白色極細粒砂が混入している。遺物は出土していない。

ＳＫ4017

２調査区南西部のⅦ－19－６Ｊ地区で検出した。南部が調査区外に至る。検出部分で東西幅1.5m、南北幅4.4m、深さ0.09mを測る。埋土は砂礫混シルトの２層から成る。遺物は出土していない。

ＳＫ4018

２調査区南西部のⅦ－19－６Ｊ、Ⅶ－20－６Ａ地区で検出した。南部は調査区外に至る。比較的規模の大きい土坑で、東側でＳＤ4023を切っている。検出部分で東西幅4.64m、南北幅4.89m、深さ0.19mを測る。埋土は７層から成る。遺物は出土していない。

ＳＫ4019

２調査区中北部のⅦ－20－６Ｃ地区で検出した。北部は調査区外に至る。検出部分で東西幅2.4m、南北幅1.7m、深さ0.05mを測る。埋土は褐色シルトの単一層である。遺物は出土していない。

ＳＫ4020～ＳＫ4031

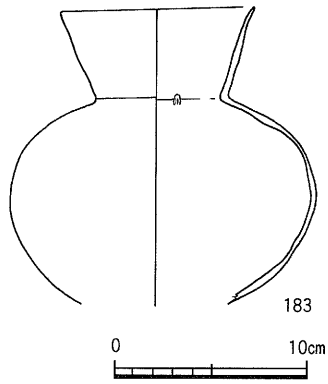
２調査区中央部のⅦ－20－６・７Ｃ・Ｄ地区で検出された土坑である。平面の形状では、円形、楕円形、三角形、不定形を呈する。そのうち、ＳＫ4024・ＳＫ4027・ＳＫ4031がＳＤ4023を切っている。規模は幅0.3～4.6mを測る。深さは0.04～0.13mで比較的浅いものが大半で、断面はすべて浅いⅢ形を呈する。埋土は粘土質シルト～シルトの単一層のものが多い。遺物はいずれの土坑からも出土していないため時期等は判然としない。法量等の詳細は第32表に示した。

第32表　２調査区　ＳＫ4020～ＳＫ4031法量表（単位m）

遺構番号	地　区	平面図	長径	短径	深さ	埋　土	出土遺物
ＳＫ4020	Ⅶ－20－6C	楕円形	1.40	0.55	0.08	2.5Y3/1黒褐色粘土質シルト	
ＳＫ4021	〃	不定形	2.20	1.05	0.05	7.5YR5/2灰褐色粘土質シルト	
ＳＫ4022	〃	楕円形	1.20	0.90	0.08	〃	
ＳＫ4023	Ⅶ－20－7C	不明	0.74	－	0.04	7.5YR3/3暗褐色シルトに 7.5YR8/1灰白色極細粒砂が混入	
ＳＫ4024	〃	円形	0.70	0.60	0.04	〃	
ＳＫ4025	Ⅶ－20－6C	不定形	2.40	0.64	0.04	2.5Y3/1黒褐色粘土質シルト	
ＳＫ4026	Ⅶ－20－7D	楕円形	0.70	0.40	0.07	7.5YR3/3暗褐色シルトに 7.5YR8/1灰白色極細粒砂が混入	
ＳＫ4027	〃	〃	1.00	0.60	0.06	7.5YR3/2黒褐色シルトに 7.5YR8/8黄橙色極細粒砂が混入	
ＳＫ4028	〃	不明	0.60	0.30	0.05	7.5YR3/3暗褐色シルトに 7.5YR8/1灰白色極細粒砂が混入	
ＳＫ4029	Ⅶ－20－6D	不明	1.30	－	0.05	7.5YR3/2黒褐色シルトに 7.5YR8/8黄橙色極細粒砂が混入	
ＳＫ4030	Ⅶ－20－7D	三角形	1.20	0.90	0.13	2.5Y3/1黒褐色粘土質シルト	
ＳＫ4031	〃	不定形	4.60	1.66	0.11	7.5YR3/2黒褐色シルト	

ＳＫ4032（第79・81図、図版二八・七三）

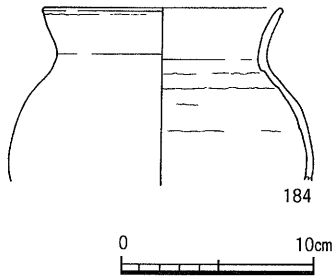
２調査区北東部のⅦ－20－６Ｆ地区で検出した。北部は調査区外に至る。検出部分で東西幅1.4m、南北幅1.08m、深さ0.06mを測る。埋土は灰褐色粘土質シルトの単一層で、マンガン斑が付着する。遺物は古墳時代中期に比定される土師器類が極少量出土している。土師器直口壺１点（183）を図化した。183は球形の体部に斜上方に伸びる口頸部が付く。内外面共に器面の風化が顕著で調整は不明瞭である。５世紀中葉の所産か。



第79図　ＳＫ4032出土遺物実測図

ＳＫ4033（第80・82図、図版二八・七三）

２調査区東部のⅦ－20－６Ｆ地区で検出した。北部は調査区外に至る。検出部分で東西幅1.1m、南北幅1.05m、深さ0.22mを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は上層が灰褐色砂礫混シルト、下層が暗褐色シルトである。遺物は５世紀代に比定される土師器が極少量出土している。１点（184）を図化した。184は中形の土師器甕である。内外面共に器面の風化が顕著で調整は不明瞭である。５世紀代のものと推定される。



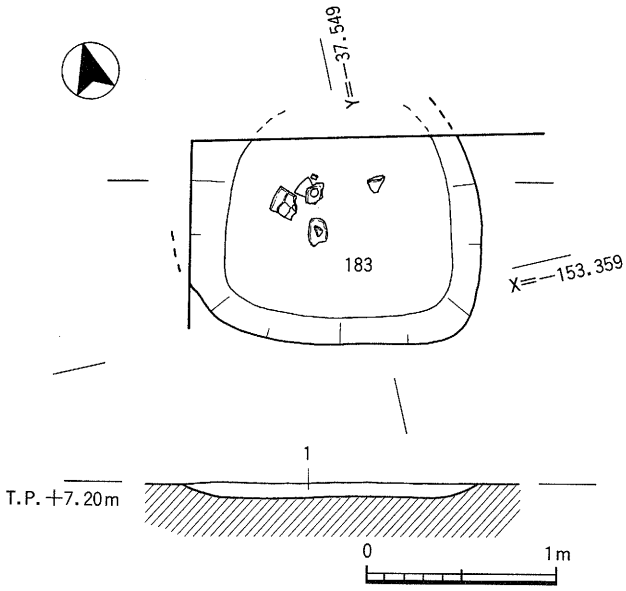
第80図　ＳＫ4033出土遺物実測図

ＳＫ4034（第85図、図版二五）

３調査区中南部のⅧ－16－９Ｃ地区で検出した。南部は調査区外に至るが、検出部分からみて平面は円形と思われる。検出部分で東西幅2.0m、南北幅1.2m、深さ0.53mを測る。埋土はシルト質粘土～粘土を主体とする５層から成る。遺物は出土していない。

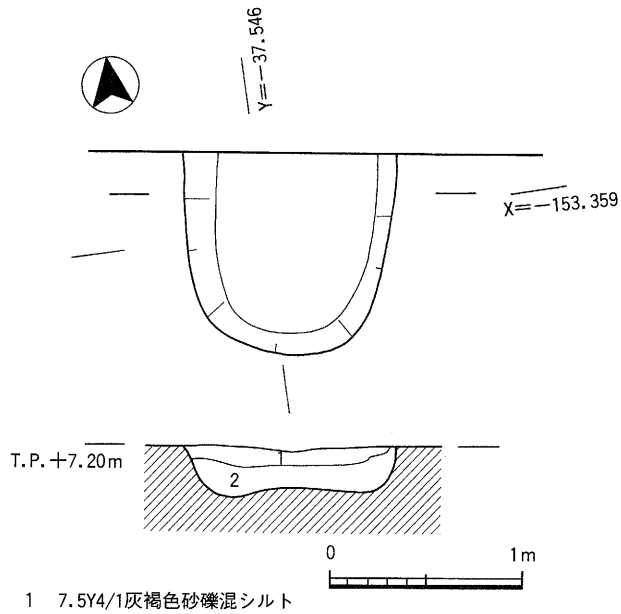
ＳＫ4035（第85図、図版二五）

３調査区中南部のⅧ－16－９Ｄ地区で検出した。不定形を呈するもので、規模は東西幅1.36m、南北幅0.9m、深さ0.12mを測る。断面はⅢ形を呈し、埋土は2.5GY4/1暗オリーブ灰色細粒砂混



1　7.5YR5/2灰褐色粘土質シルト

第81図　ＳＫ4032平断面図



1　7.5Y4/1灰褐色砂礫混シルト
2　10YR3/3暗褐色シルト（鉄分を多量に含む）

第82図　ＳＫ4033平断面図

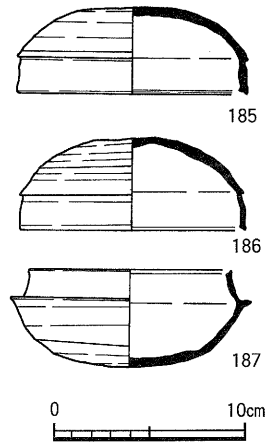
シルト質粘土（鉄分・マンガン斑含む）である。古墳時代中期の土師器、須恵器が出土している。

ＳＫ4036（第85図、図版二五）

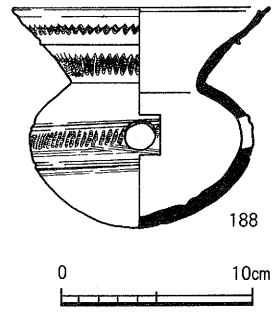
３調査区東部のⅧ－16－８Ｅ地区で検出した。円形を呈し、径0.8m、深さ0.25mを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は細粒砂～粗粒砂を主体とする３層がレンズ状に堆積している。ＮＲ3001の底部で検出したもので、上部は削平されている。遺物は出土しておらず時期等は不明である。

ＳＫ4037（第83図、図版二九・七三）

３調査区東部のⅧ－16－８Ｅ地区で検出した。南側はＮＲ3001に削平されている。検出部分で東西幅3.1m、南北幅1.0m、深さ0.28mを測る。埋土は上層が2.5Y6/1黄灰色粘質シルト～極細粒砂の互層、下層が7.5Y6/1灰色極細粒砂～シルトの互層で、上層にマンガン斑、また上部に斑鉄を含んでいる。出土遺物は木片のみである。なお、当遺構との関連は不明であるが、北側の肩際からは古墳時代中期に比定される完形の須恵器杯身１点・杯蓋２点がまとまって出土している。北側の肩際から出土した３点（185～187）を図化した。185・186は須恵器杯蓋である。185は完形品、186は完形品に近い。法量は185が口径12.1cm、器高4.6cm。186が口径12.0cm、器高4.9cmを測る。共に天井部を中心に灰かぶりが認められる他、185の天井部には、重ね焼きの痕跡と須恵器片の溶着が認められる。187は須恵器杯身で完形品である。口径10.6cm、器高5.2cmを測る。３点共に全体の小形化が進行し、天井部および底部に丸味を持つ特徴で区別されるＴＫ47型式（５世紀末）に比定される。



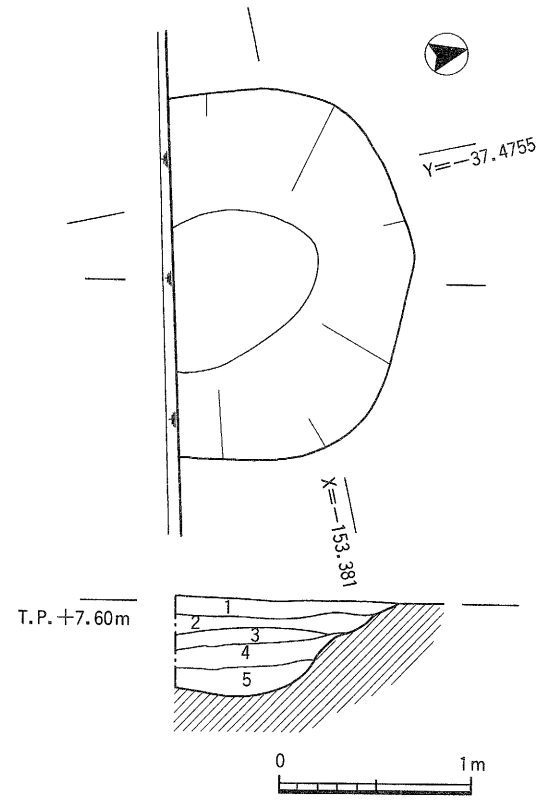
第83図　ＳＫ4037出土遺物実測図



第84図　ＳＫ4038出土遺物実測図

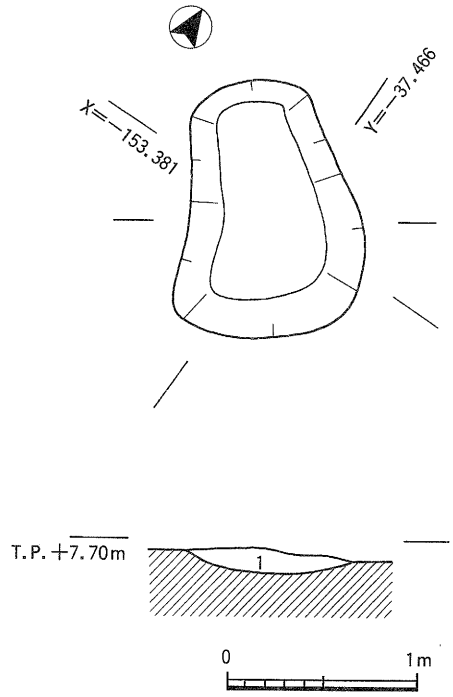
ＳＫ4038（第84・85図、図版三〇・七七）

３調査区東部のⅧ－16－８・９Ｅ地区で検出した。不定形の土坑で東西幅1.1m、南北幅0.5～0.9m、深さ0.08mを測る。断面皿形を呈し、埋土は上層が7.5YR5/1褐灰色シルト質粘土、下層が7.5YR6/1褐灰色シルト質粘土で、上層に炭・焼土を多量に含んでいる。出土遺物は古墳時代中期に比定される土師器、須恵器類が極少量出土している。須恵器瓶１点（188）を図化した。扁球形の体底部にラッパ状に開く口頸部が付くもので、口縁部の一部は焼き歪みを生じている。口頸部外面には、１条の凸帯の上下に波状文、体部中位には２本の沈線間に列点文が施文されている。内面から体底部外面に濃緑色の自然釉と灰かぶりが降着している。円孔は比較的大きく1.6cmを測る。ＴＫ216型式（５世紀前半）のものか。



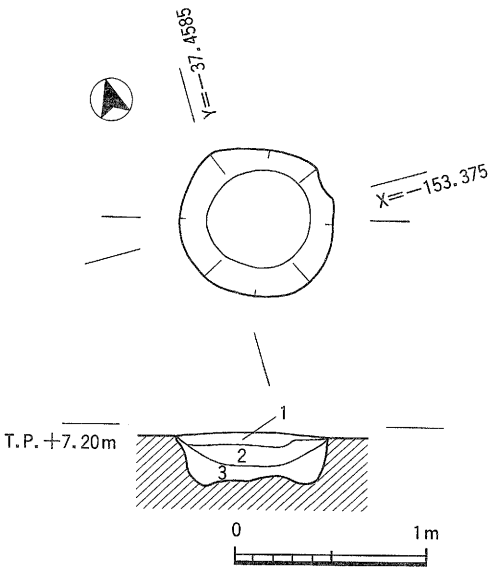
1　10YR6/3にぶい黄橙色極細粒砂混シルト質粘土
2　2.5Y5/1黄灰色シルト質粘土
3　10YR5/2灰黄褐色シルト質粘土
4　5BG5/1青灰色粘土(炭化植物含む)
5　10Y4/1灰色粘土(ブロック状)

S K 4034



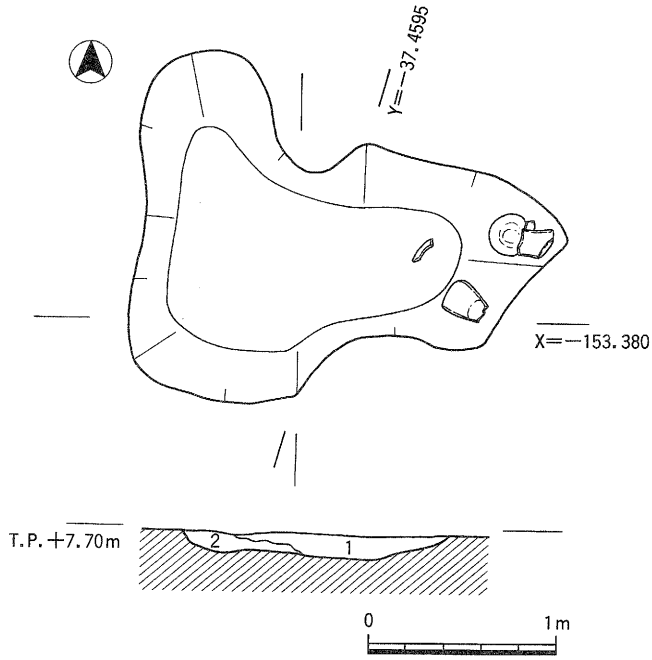
1　2.5GY4/1暗オリーブ灰色細粒砂混シルト質粘土

S K 4035



1　5Y4/1灰色シルト混細粒砂～中粒砂
2　5GY4/1暗オリーブ灰色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト
3　2.5GY5/1オリーブ灰色細粒砂～粗粒砂

S K 4036



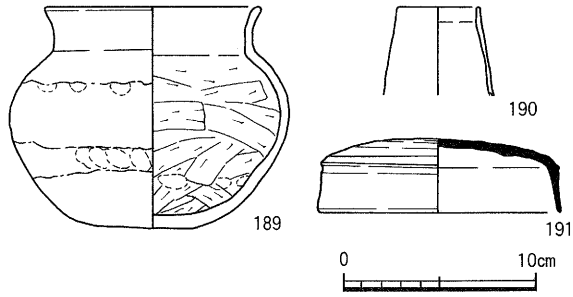
1　7.5YR5/1褐灰色シルト質粘土(炭・焼土を含む)
2　7.5YR6/1褐灰色シルト質粘土

S K 4038

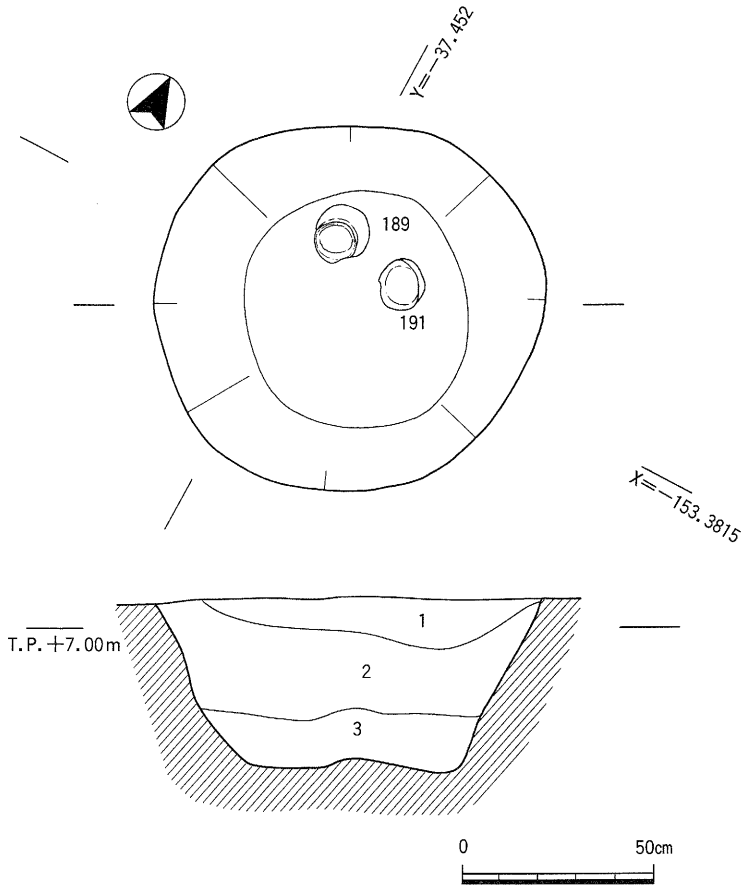
第85図　S K 4034～S K 4036・S K 4038平断面図

ＳＫ4039（第86・87図、図版三〇・七七）

３調査区東部のⅧ－16－９Ｅ地区で検出した。円形を呈し、径0.96～1.02m、深さ0.46mを測る。底部は湧水層には達していない。断面は逆台形を呈し、埋土は上から１層10Y4/1灰色粘土質シルト、２層2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土質シルト、３層10GY4/1暗緑灰色シルト混粘土質シルトで、全体にシルトブロック、植物遺体を含んでいる。出土遺物には古墳時代中期に比定される土師器（製塩土器を含む）、須恵器の土器類の他、瓢箪、自然木等がある。３層からは完形の土師器甕、須恵器杯蓋が出土している。ＮＲ3001の底部にあたり、ＳＫ4036と同様、上部は削平されているものと考えられるが、出土遺物から第４面遺構とした。出土遺物は３点（189～191）図化した。189は土師器甕である。体部は扁球形で底部は平底を呈する。頸部は垂直方向に直線的に伸びた後、小さく外反して直口の口縁部を作る。体底部内面はヘラケズリを多用しており、特に底部については断面「U」字状を呈する深いヘラケズリが顕著である。外面全体に煤の付着が認められる。190は薄手丸底式に分類される製塩土器である。淡橙色の色調である。191は須恵器杯蓋で口縁部の一部を欠く以外は完存している。口径12.7cm、器高2.9cmを測る。扁平な天井部を有するもので、ほぼ全体に灰かぶりが認められる。ＴＫ216型式（５世紀前半）に比定される。出土遺物から遺構の帰属時期は５世紀前半が考えられる。



第86図　ＳＫ4039出土遺物実測図



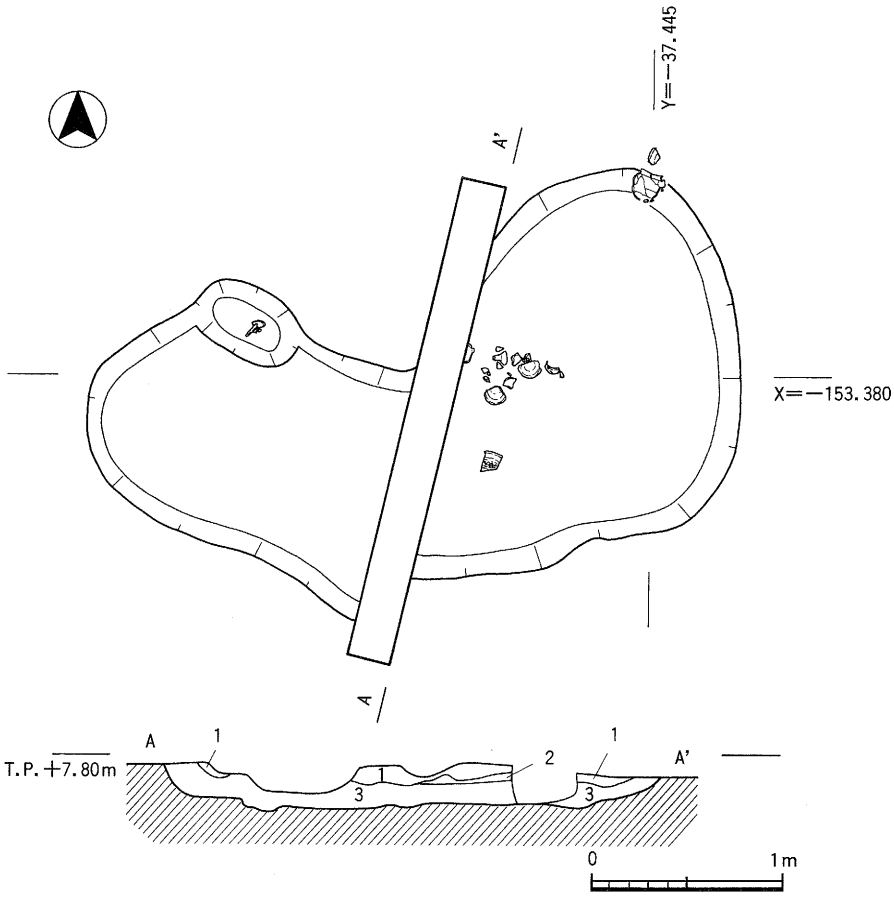
1　10Y4/1灰色シルトブロック混粘土質シルト（植物遺体含む）
2　2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルトブロック混粘土質シルト（植物遺体含む）
3　10GY4/1暗緑色シルト混粘土質シルト（植物遺体含む）

第87図　ＳＫ4039平断面図

ＳＫ4040（第88・89図、図版三一・七七）

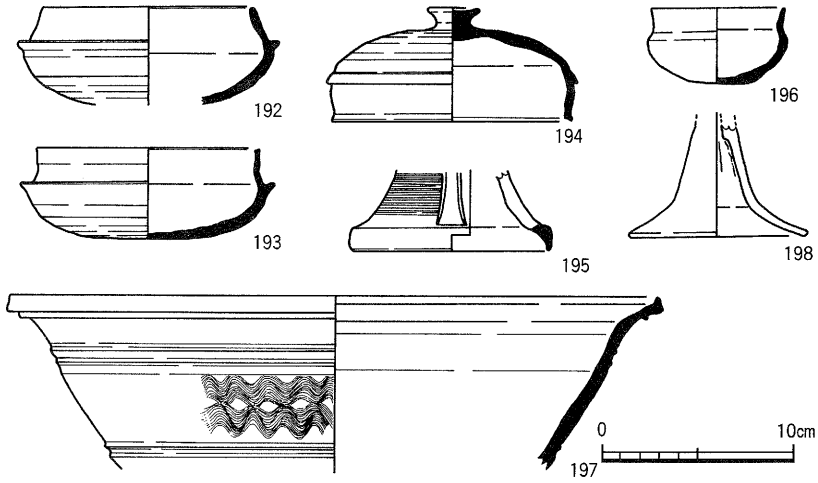
３調査区東部のⅧ－16－８・９Ｆ地区で検出した。不定形を呈するもので東西幅3.43m、南北幅1.2～1.9m、深さ0.21mを測る。断面は皿形を呈し、埋土はシルト～粘質シルトを主体とする３層から成る。北西部では粘土がブロック状に堆積する小穴状の窪みがみられた。出土遺物には

古墳時代中期に比定される土師器、須恵器があり、製塩土器を多く含んでいる。７点(192～198)を図化した。192･193は須恵器杯身である。残存率は192が1/4、193が1/2である。192がＴＫ216型式(５世紀前半)、193がＴＫ208型式（５世紀中葉)に比定される。194･195は須恵器高杯である。194は蓋である。天井部が丸味を持つものでつまみ部の中央部が窪む。195は脚部片である。外面にカキメ調整が行なわれている。194･195共にＴＫ23型式(５世紀後半)に比定される。196は有蓋の須恵器短頸壺である。口径7.0cm、器高4.0cmを測る。197は須恵器器台の杯部片である。残存部分で杯部外面の口縁直下以下に４条の凸帯が認められ、上から３番目と４番目の間に２段から成る波状文が施文されている。ＴＫ208型式か。198は土師器高杯の脚部である。裾部径9.3cmを測る。出土した遺物から遺構の帰属時期は５世紀中葉が推定される。



1　7.5Y5/1灰色極細粒砂混粘土質シルト(炭・焼土を含む)
2　7.5Y5/2灰オリーブ色シルト
3　2.5Y5/1黄灰色粘土質シルト

第88図　ＳＫ4040平断面図

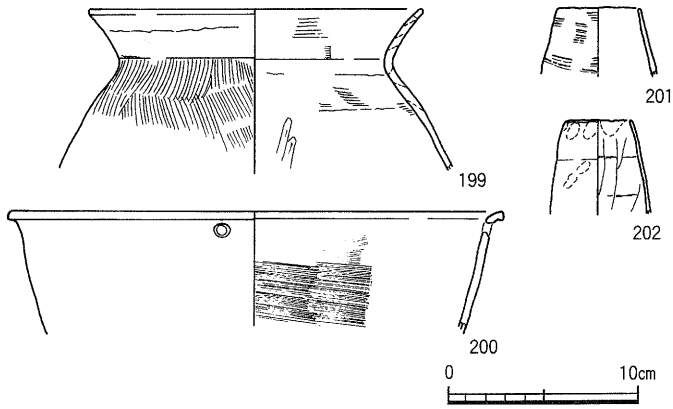


第89図　ＳＫ4040出土遺物実測図

ＳＫ4041（第90・93図、図版二五・七七）

３調査区東部のⅧ－16－９Ｆ地区で検出した。南側の上部はＮＲ3001に削平されている。検出部分では隅丸方形を呈し、長辺1.65m、短辺1.1m、深さ0.25mを測る。断面は逆台形を呈する。埋土はシルト～粘土を主体とする５層から成る。出土遺物には古墳時代中期に比定される土師器、須恵器、製塩土器が極少量出土している。４点(199～202)図化した。199は土師器甕である。体部中位以下を欠くが、おそ

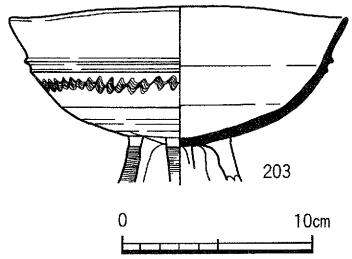
らく長胴形を呈するものと推定される。体部外面は縦位のハケメ調整が行なわれている。200は斜上方に伸びる体部から小さく外反して口縁部に至るもので、端部は平坦な面を作る。土師器の甑と考えられる。器壁は大型の器種にしては薄い。口縁部直下には焼成後に穿たれた孔（径5.5㎜）が１個ある。201･202は製塩土器である。２点共に薄手丸底式で、胎土中に0.5㎜前後の長石粒を多く含む。色調は201が橙色、202が淡褐色を呈する。出土遺物から遺構の帰属時期は５世紀中葉前後が想定される。



第90図　ＳＫ4041出土遺物実測図

ＳＫ4042（第93図）

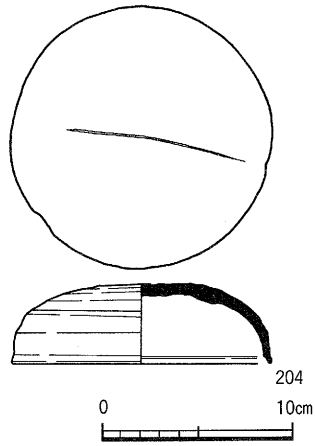
３調査区南東部のⅧ－16－９Ｇ地区で検出した。南部はＮＲ3001に削平されている。検出部分で長方形を呈し、規模は長辺0.65m、短辺0.5m、深さ0.1mを測る。断面は逆台形で、埋土は10YR4/1褐灰色シルト質粘土（マンガン斑含む）である。遺物は古墳時代中期に比定される土師器片が出土している。



第91図　ＳＫ4043出土遺物実測図

ＳＫ4043（第91・93図、図版三二・七八）

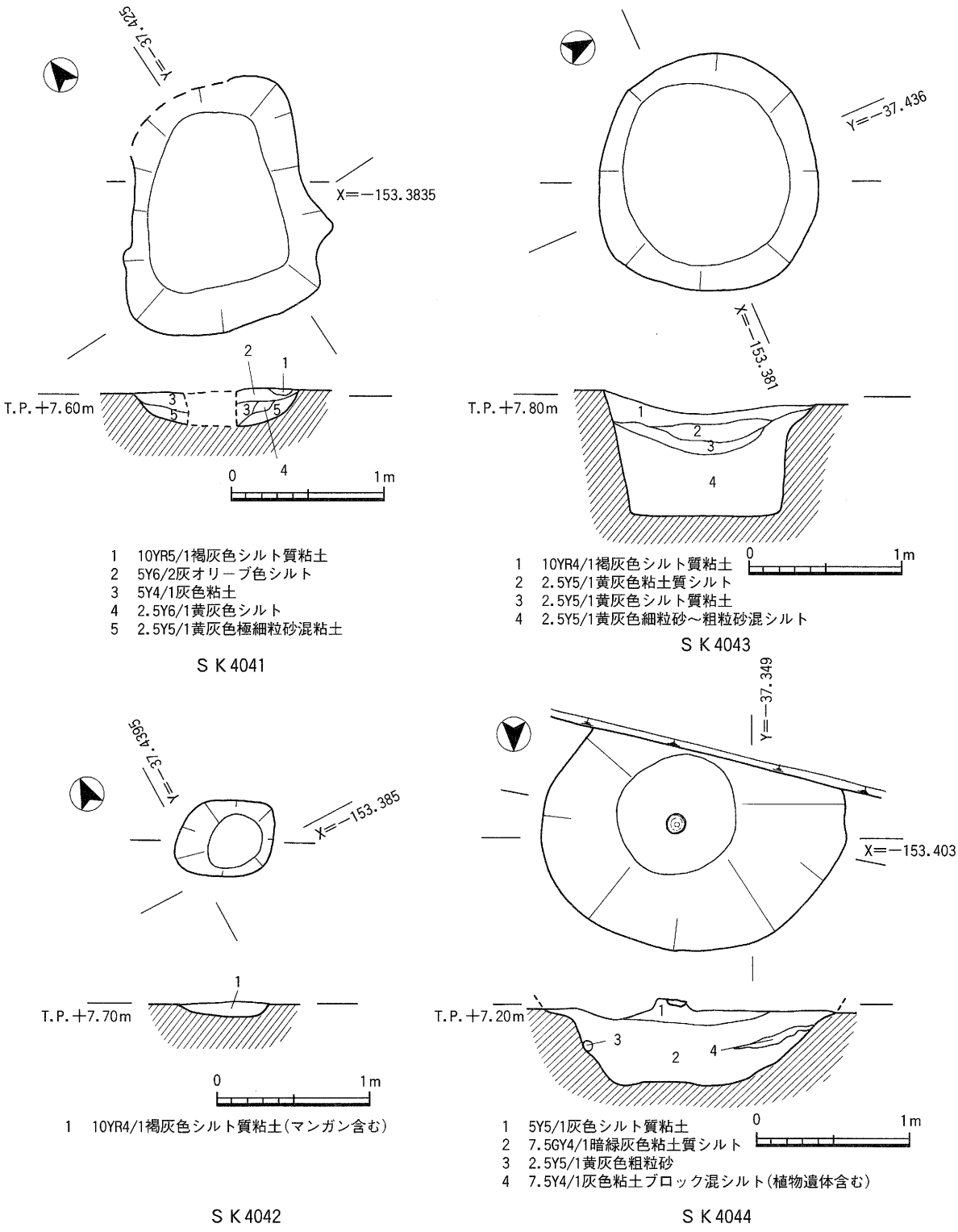
３調査区東部のⅧ－16－９Ｇ地区で検出した。ほぼ円形を呈するもので、径1.43～1.56m、深さ0.67mを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は断面形状に沿って４層がレンズ状に堆積している。古墳時代中期に比定される土師器、須恵器、製塩土器の小片が極少量出土している。須恵器無蓋高杯１点（203）を図化した。椀形を呈する杯部中位に２条の凸帯と波状文を施文している。脚部外面はカキメ調整。スカシ孔は３方に穿たれている。ＴＫ23型式（５世紀後半）に比定される。出土遺物から遺構の帰属時期は５世紀後半が推定される。



第92図　ＳＫ4044出土遺物実測図

ＳＫ4044（第92・93図、図版三二・七八）

４調査区東端のⅦ－22－１Ｆ地区で検出した。南部は調査区外に至るが検出部分から見て円形を呈するものと推定される。検出部分で東西幅1.9m、南北幅1.3m、深さ0.55mを測る。断面は逆台形を呈する。埋土は４層から成る。遺物は、１層から６世紀中葉に比定される須恵器杯蓋１点が出土している他、須恵器、土師器の小片が数点ある。須恵器杯蓋１点（204）を図化した。204は須恵器杯蓋の完形品である。口径13.6㎝、器高4.2㎝を測る。天井部に１本の直線文ヘラ記号がある。ＴＫ10型式（６世紀中葉）に比定される。出土遺物から遺構の帰属時期は６世紀中葉が推定される。



第93図　ＳＫ4041～ＳＫ4044平断面図

溝（ＳＤ）

ＳＤ4001～ＳＤ4022

１調査区全域と２調査区北西部で22条（ＳＤ4001～ＳＤ4022）を検出した。比較的規模の大きいＳＤ4015・ＳＤ4017を除けば、東－西、北東－南西、北西－南東に直線的に伸びるもので、生

産遺構に関連した耕作溝と思われる。そのなかでもＳＤ4001、ＳＤ4007については、方向および規模、さらに埋土から、灌漑用水路となる可能性が高い。なお、ＳＤ4015、ＳＤ4017については、形状や埋土ならびに遺物の出土状況から耕作溝とは異にするもので、不明なところが多く性格は判然としない。22条を数える溝の中で遺物が出土したのは、ＳＤ4008、ＳＤ4013、ＳＤ4017の３条のみである。そのなかで特異な遺物として、ＳＤ4013から馬の歯・骨、ＳＤ4017から韓式系土器（軟質甕）がある。本文ではＳＤ4001、ＳＤ4007、ＳＤ4015、ＳＤ4017の４条の溝についてのみ記し、それ以外の耕作溝と考えられるものについての法量等の詳細を第33表に示した。

ＳＤ4001

１調査区北西部のⅦ－19－３Ｄ地区から中南部の５Ｇ地区にかけて、北西－南東に直線的に伸びる。一部、ＳＤ4015を切る他、ＳＫ4002と数条の耕作溝に切られる。規模は、検出長36.9m、幅0.3～0.7m、深さは0.1m前後を測る。埋土は「Ｕ」字状を呈する断面形状に沿って、２層が堆積しており、下層は細粒砂を含むシルトである。遺物は出土していない。

ＳＤ4007

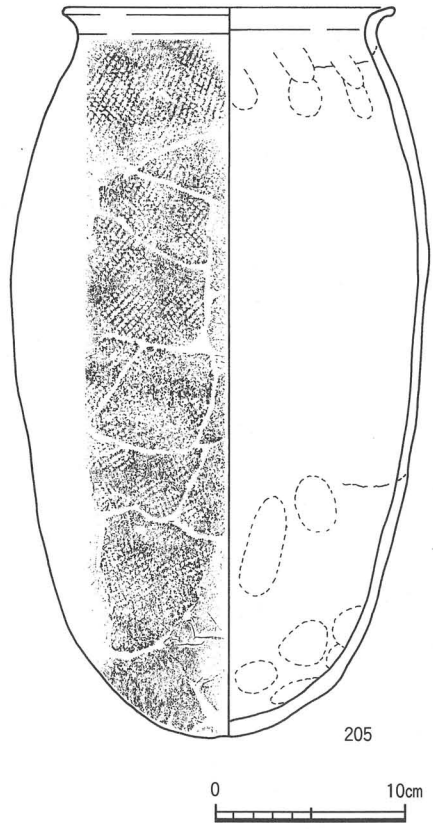
１調査区中央部のⅦ－19－４・５Ｅ～Ｈ地区で検出した。北東－南西にやや蛇行して伸びる。中央部付近でＳＤ4001・ＳＤ4006に切られる他、ＳＫ4004～ＳＫ4006・ＳＤ4017を切っている。検出長27.0m、幅0.5～1.0m、深さは0.15～0.3mを測る。両端部で顕著な高低差は見られない。埋土は逆台形を呈する断面形状に沿って、上層が灰オリーブ色シルト、下層が極細粒砂を多量に含む灰オリーブ色粘土質シルトの２層が堆積している。遺物は出土していない。

ＳＤ4015

１調査区中央部のⅦ－19－４～６Ｆ・Ｇ地区で検出した。南－北に蛇行気味に伸びるものでＳＫ4009、ＳＤ4001、ＳＤ4014に切られている。検出長10.6m、幅1.8～5.5mを測る。深さは、北部で0.05m前後、南部で0.15m前後と南部が0.1m前後深い。埋土は2.5Y5/1黄灰色砂質シルトに5Y3/1オリーブ黒色粘土質シルトがブロックで混入する。遺物は出土していない。

ＳＤ4017（第94図、図版三三・七八）

１調査区東部のⅦ－19－４・５Ｇ・Ｈ地区で検出した。南－北に「Ｕ」字形に展開する幅広の南東部からさらに東へ直線的にＳＤ4018が伸びている。規模は、東へ伸びるＳＤ4018が幅0.3～0.8m、北西方向に２股に分かれて伸びる双方の溝の幅は1.5～6.7mを測る。深さは、0.05～0.3mを測り、流路方向を示すようなの顕著な高低差は見られない。埋土はオリーブ黒色粘土質シルトの単一層である。遺物は、北部で２股に分かれる溝のうちの、東側流路の南部付近から韓式系の軟質甕１点（205）のみが出土した。205は砲弾形の長大な胴部に外反する小さな口縁部が付く韓式系の軟質甕である。検出時点では、



第94図　ＳＤ4017出土遺物実測図

細片化していたが約８割程度が残存しており、ほぼ完形近くに復元できた。口径17.3cm、器高39.0cm、体部最大径21.8cmを測る。外面調整は、口縁部がヨコナデ、底部はナデで、それ以外は斜格子タタキが施されている。内面調整は、口縁部がヨコナデで底部と口縁部近くに指頭圧痕を残す他は比較的丁寧なナデ調整が行なわれている。胎土は0.1～５㎜程度の長石、石英、チャート粒が散見される。色調は浅黄橙色である。外面の口縁部より以下で煤の付着が認められる。６世紀前半の所産か。

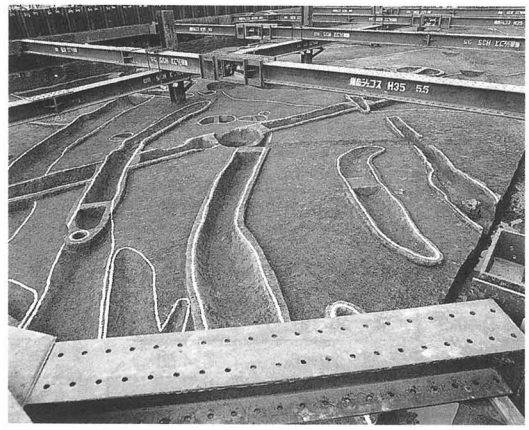


写真36　１調査区中南部溝群検出状況(南西から)

第33表　１・２調査区　ＳＤ4002～ＳＤ4006、ＳＤ4008～ＳＤ4014、ＳＤ4016、ＳＤ4018～ＳＤ4022法量表(単位ｍ)

遺構番号	地　区	全長(検出長)	幅(最大)	深さ	埋　土	出土遺物
ＳＤ4002	Ⅶ－19－3・4D・E	5.00	0.40	0.04	2.5Y6/2灰黄色砂質シルト	
ＳＤ4003	Ⅶ－19－4D・E	7.30	0.60	0.06	7.5Y5/1灰色粘土質シルト	
ＳＤ4004	Ⅶ－19－4E・F	5.20	0.40	0.08	2.5Y6/2灰黄色砂質シルト	
ＳＤ4005	〃	5.50	1.10	0.04	5Y4/1灰色粘土質シルト	
ＳＤ4006	Ⅶ－19－4F	4.80	0.70	0.15	5Y3/1オリーブ黒色粘土質シルト	
ＳＤ4008	Ⅶ－19－4・5E・F	11.00	1.10	0.18	7.5Y5/1灰色粘土質シルト	土師器
ＳＤ4009	Ⅶ－19－5E・F	4.40	0.50	0.07	〃	
ＳＤ4010	〃	3.60	0.50	0.15	7.5Y5/2灰オリーブ色シルト	
ＳＤ4011	Ⅶ－19－5F	1.10	0.40	0.11	7.5Y4/2灰オリーブ色シルト	
ＳＤ4012	〃	7.50	0.80	0.12	10Y5/2オリーブ灰色シルト	
ＳＤ4013	〃	4.80	0.60	0.25	〃	馬歯・骨
ＳＤ4014	〃	2.20	0.40	0.11	7.5Y4/1灰色粘土質シルト	
ＳＤ4016	Ⅶ－19－5H	2.20	0.60	0.15	上層－5Y5/2灰オリーブ色粘土質シルト 下層－10Y5/1灰色シルト	
ＳＤ4018	Ⅶ－19－5H～J	6.50	0.70	0.10	7.5YR5/1褐灰色シルト～細粒砂	
ＳＤ4019	Ⅶ－19－5I	1.70	0.30	0.07	7.5Y5/2灰オリーブ色粘土質シルト	
ＳＤ4020	Ⅶ－19－5H・I	7.60	0.40	0.12	10Y5/1灰色粘土質シルト	
ＳＤ4021	Ⅶ－19－6H・I	6.60	0.40	0.19	上層－10Y5/1灰色粘土質シルト 中層－2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質粘土 下層－2.5GY6/1暗オリーブ灰色シルト	
ＳＤ4022	Ⅶ－19－6I	3.00	0.60	0.06	7.5Y4/1灰色粘土質シルト	

ＳＤ4023

２調査区の東西にわたるⅦ－20－６～８Ａ～Ｈ地区で検出した。北西－南東に長く伸びる溝である。検出長70.0ｍ、幅0.8～2.9ｍ、深さ0.07～0.17ｍを測る。断面は皿形を呈する。埋土は、西部では褐灰色砂質シルト～灰色シルト、東部では暗青灰色～灰白色極細粒砂混粘土質シルトである。溝の底部には断面の形状に沿って薄く砂層が堆積することから、生産遺構に関連した灌漑用の水路であったことが想定される。Ⅶ－20－6Ａ区の南肩で杭を一本検出している。遺物は古墳時代前期後半(布留式新相)の土師器片が出土している。

ＳＤ4024～ＳＤ4035

２調査区中央部のⅦ－20－６・７Ｂ～Ｅ地区で検出した。いずれも小溝である。方向的には東－西、南－北、北東－南西の他、Ｌ字形を呈するものがある。規模は検出長1.1～8.2ｍ、幅

0.25～2.0m、深さ0.04～0.11mを測る。遺物はいずれの溝からも出土していない。各溝の法量等については第34表に示した。

第34表　2調査区　ＳＤ4024～ＳＤ4035法量表(単位m)

遺構番号	地　区	全長(検出長)	幅(最大)	深さ	埋　土	出土遺物
ＳＤ4024	Ⅶ－20－6B	2.70	0.30	0.04	7.5YR4/6褐灰色シルト	
ＳＤ4025	Ⅶ－20－6B・C	3.50	0.40	0.06	〃	
ＳＤ4026	Ⅶ－20－7C	2.90	0.25	0.11	7.5YR3/3暗褐色シルトに 7.5YR8/1灰白色極細粒砂が混入	
ＳＤ4027	Ⅶ－20－6・7C	8.20	0.50	0.10	〃	
ＳＤ4028	Ⅶ－20－6C	4.50	2.00	0.06	2.5Y3/1黒褐色粘土質シルト	
ＳＤ4029	Ⅶ－20－7C・D	4.10	0.70	0.06	7.5YR3/2黒褐色シルト	
ＳＤ4030	〃	3.30	0.45	0.06	〃	
ＳＤ4031	Ⅶ－20－7D	1.80	0.95	0.06	7.5YR3/2黒褐色シルトに 7.5YR8/8黄橙色極細粒砂が混入	
ＳＤ4032	〃	2.00	0.65	0.07	〃	
ＳＤ4033	〃	2.70	0.90	0.06	7.5YR3/3暗褐色シルトに 7.5YR8/1灰白色極細粒砂が混入	
ＳＤ4034	〃	1.10	0.40	0.06	〃	
ＳＤ4035	Ⅶ－20－6・7D・E	2.70	0.40	0.04	7.5YR4/6褐色シルト	

ＳＤ4036

3調査区西部のⅦ－20－8Ｊ地区で検出した。北東－南西に直線的に伸びる。北東端はＳＤ4037を切り南部は調査区外に至る。検出長5.5m、幅0.3m、深さ0.13mを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は2.5Y6/1黄灰色細粒砂～粗粒砂混シルトで鉄分を多く含む。本来は第3面の遺構と推定される。遺物は出土していない。

ＳＤ4037（第95図）

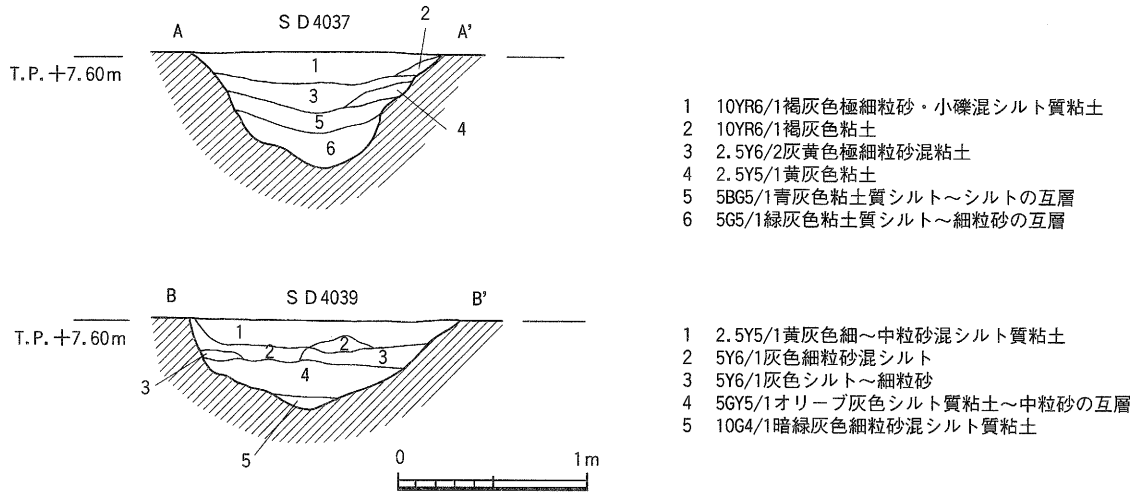
3調査区西部のⅦ－20－7・8Ｊ地区、Ⅷ－16－8Ａ地区で検出した。北西－南東に直線的に伸びるもので両端は調査区外に至る。検出長12.0m、幅1.3m、深さ0.6mを測る。断面はＶ字形を呈し、埋土は上層が褐灰色系の極細粒砂混粘土（マンガン斑多く含む)、下層が青灰色系の粘質シルト～細粒砂の互層で、緩やかな水流があったものと捉えられる。遺物は古墳時代中期の土師器、須恵器片が極少量出土しているが、図化し得たものはない。

ＳＤ4038

3調査区西部のⅧ－16－7・8Ａ地区で検出した。東－西に伸びるもので、西部は削平されている。調査区北壁断面をみると、ＳＤ4039と合流しており切り合いは認められない。検出長約5.0m、幅1.0m、深さ0.6mを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は灰色系の粘質シルト～細粒砂が複雑に堆積し、一部に褐色系の粗粒砂層もみられる。遺物は出土していない。

ＳＤ4039（第95図）

3調査区西部のⅧ－16－7・8Ａ地区で検出した。北東－南西に伸びるもので、検出長9.3m、幅1.2m、深さ0.47mを測る。断面はほぼ逆台形を呈し、埋土は上部が黄灰色系の細粒砂～中粒砂混シルト、下部が10G4/1暗緑灰色粘質シルト～粗粒砂の互層である。断面観察からみて当溝が埋没するのは第3面の時期である。遺物は古墳時代中期に比定される製塩土器の破片が少量出土したが、図化し得たものはない。



第95図　ＳＤ4037、ＳＤ4039断面図

ＳＤ4040

３調査区西部のⅧ－16－７・８Ａ地区で検出した。ＳＤ4039に並行して伸びる溝である。規模は検出長9.1m、幅0.6m、深さ0.5mを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は上部が灰黄褐色系のシルト質粘土、下部が10G4/1暗緑灰色粘土～シルトの互層である。遺物は出土していない。

ＳＤ4041

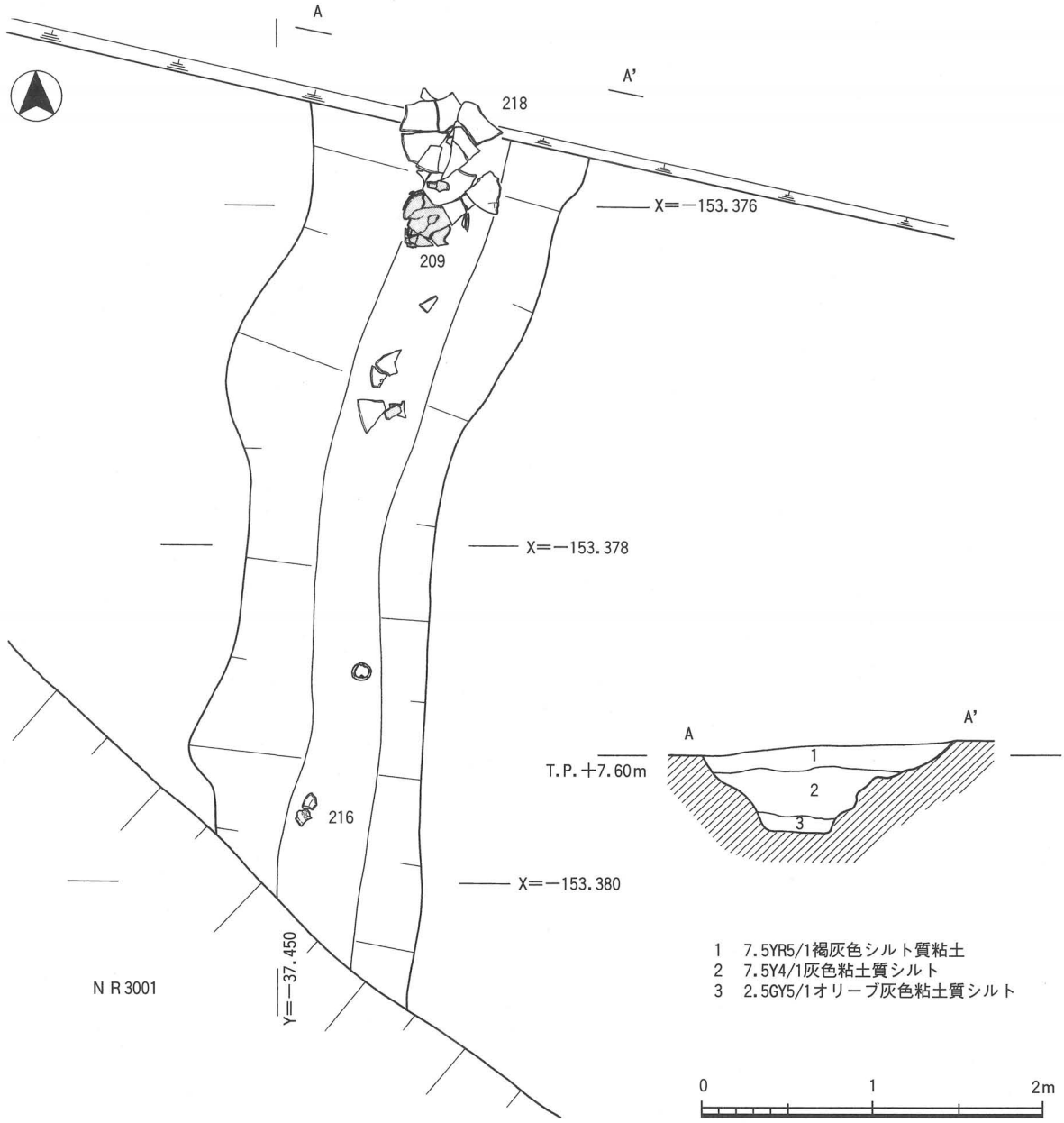
３調査区中央部のⅧ－16－８・９Ｃ・Ｄ地区で検出した。北西－南東に伸びる溝で南端は調査区外に至る。検出長16.1m、幅0.4～1.4m、深さ0.15mを測る。断面逆台形を呈し、埋土は7.5YR5/6明褐色極細粒砂混粘土（マンガン・鉄分多量に含む）である。遺物は出土していない。

ＳＤ4042

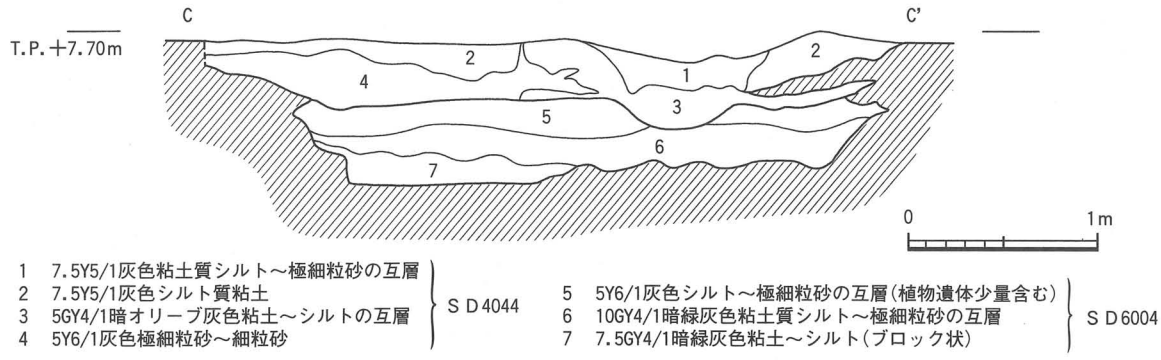
３調査区東部のⅧ－16－９Ｅ地区で検出した。北東－南西に伸びる。北はＮＲ3001に削平されており、南部は調査区外に至る。検出長3.7m、幅0.5～0.9m、深さ0.15mを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は10YR5/1褐灰色中粒砂～粗粒砂混シルトで、鉄分が多く、上部にはマンガンを含む。遺物は出土していない。

ＳＤ4043（第96・98・99図、図版七八・七九）

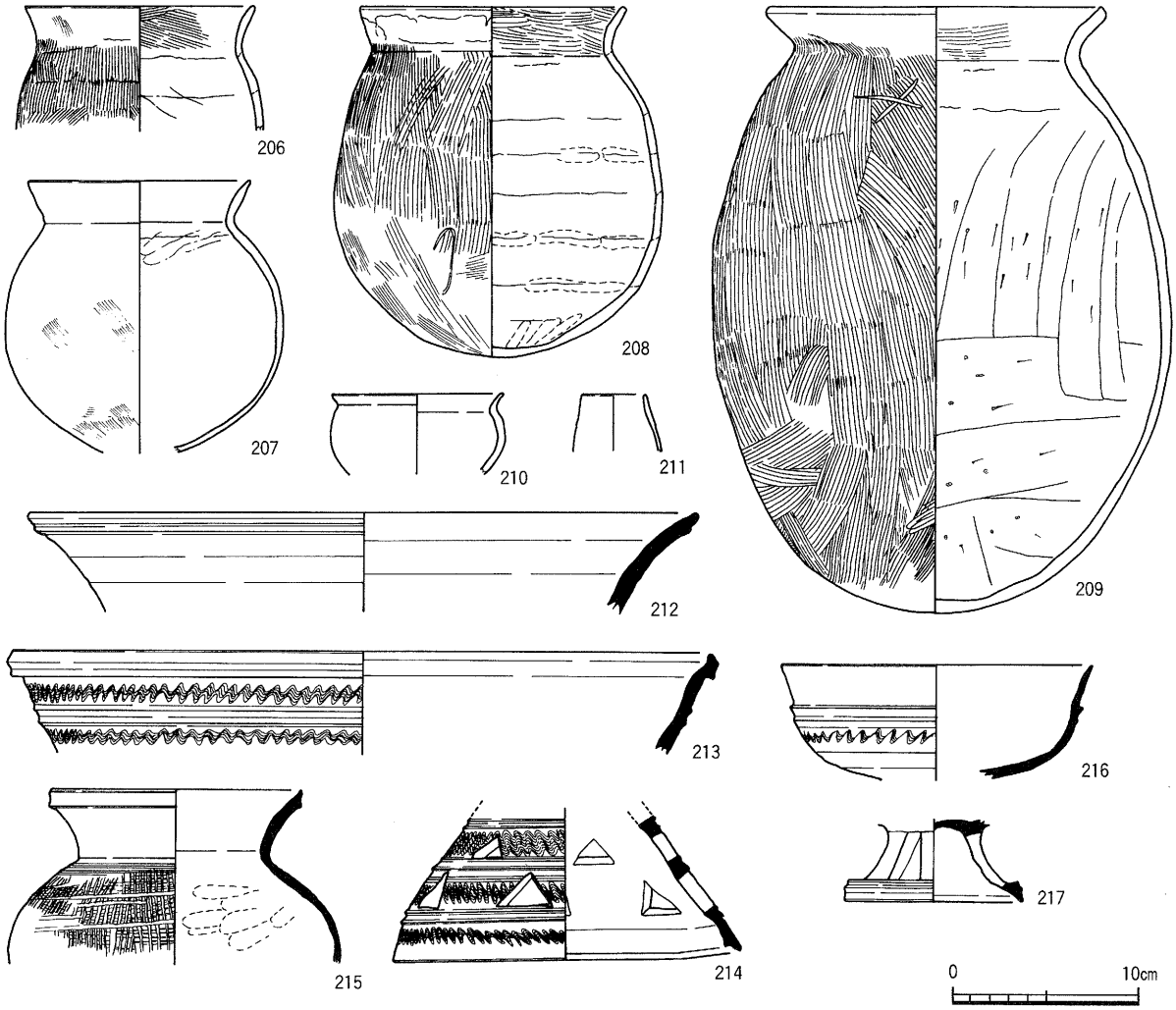
３調査区東部のⅧ－16－８・９Ｅ・Ｆ地区で検出した。南－北に伸びる溝で、中央はＮＲ3001に削平されている。検出長10.3m、幅1.5m、深さ0.65mを測る。埋土は逆台形を呈する断面形状に沿って３層（１～３層）が堆積している。遺物は１層から古墳時代中期に比定される土師器、須恵器、製塩土器等が少量出土しており、特に北端部分からは、ほぼ1/3個体分の須恵器大甕片の集積が検出された。13点（206～218）を図化した。206～209は球形ないしは長胴形の体部に外反して開く口縁部が付く土師器甕である。法量の違いから、206・207は口径12cm前後、器高14cm前後の小形品、208は14.3cm、器高18.8cmの中形品、209は口径18cm、器高32.5cm前後の大形品に区別される。外面の調整は風化のため不明である207を除けば縦位のハケ調整が主である。内面の調整は209がヘラケズリで他はナデを施す。210は半球形の体部から外反して短い口縁部を作る土師器鉢である。211は薄手丸底式の製塩土器である。砂粒をほとんど含まない精良な胎土が使用されている。212・218は須恵器甕である。共に口縁部直下に１条の凸帯を持つもので、口縁端部が丸く終わる212と面を持つ218がある。218の内面体部上半にのみ同心円タタキが消されずに



第96図　ＳＤ4043北部平断面図



第97図　ＳＤ4044、ＳＤ6004断面図

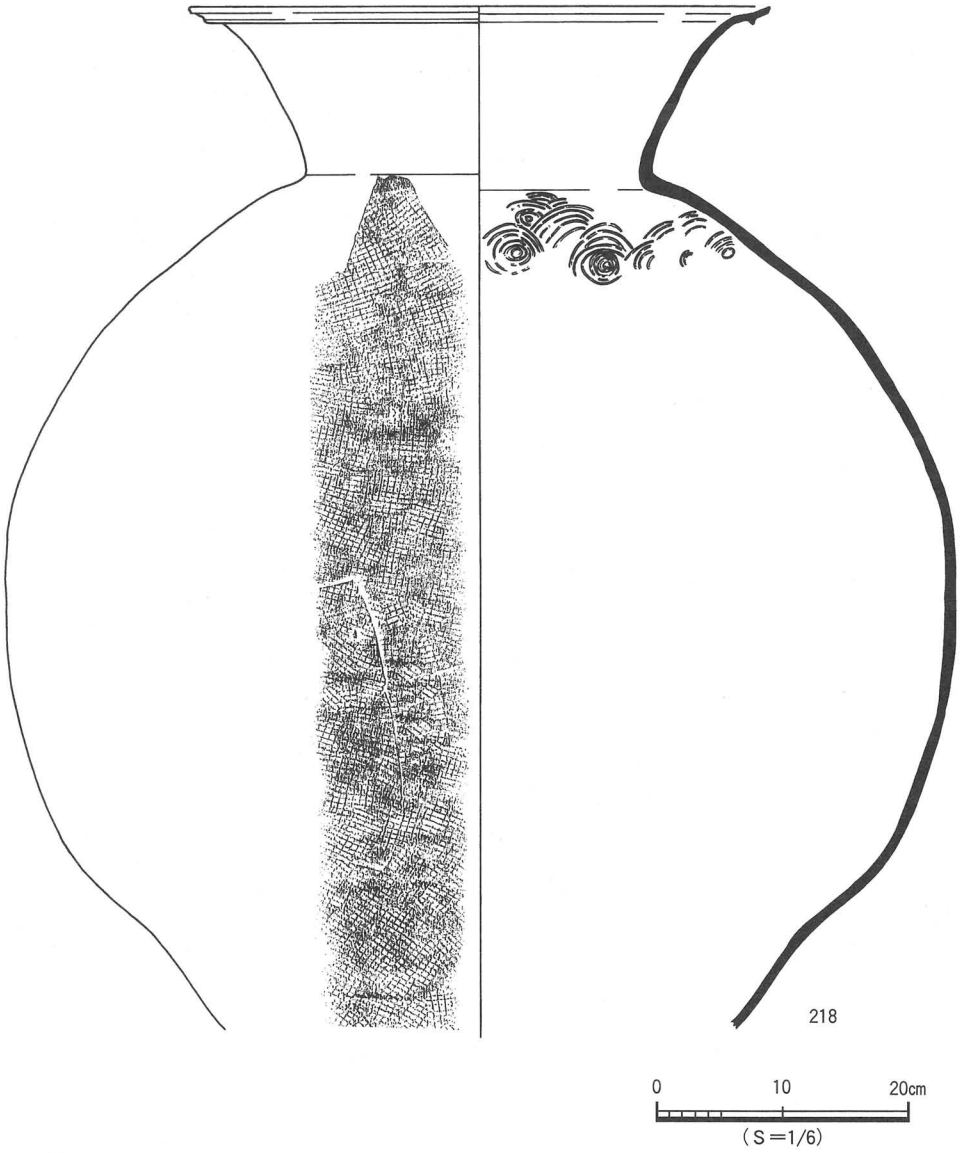


第98図　ＳＤ4043出土遺物実測図－１

残っている。ＴＫ73型式（５世紀前半）に比定される。213・214は須恵器器台である。213は器台の杯部である。残存部分では、口縁端部は上下に肥厚させ下方に凸線状に垂下する部分が作られているほか体部には２条の凸線で区画された上下に波状文が施文されている。214は器台の脚部で、２条を一対とする凸線で区画された部分に波状文と三角形のスカシ孔が千鳥に配置されている。213・214共にＯＮ46型式（５世紀前半）前後のものか。215は須恵器壺で口頸部は完存している。口径13.4cm、頸部高3.7cmを測る。体部外面はタタキの後、螺旋状にヘラミガキ調整が行なわれている。216・217は須恵器高杯である。216は無蓋高杯である。口縁部と体部を区画する２条の凸帯の下に３本を１単位とする幅の狭い波状文が配されている。217は脚部である。スカシ孔は３個穿たれている。ＴＫ208型式前後のものか。出土遺物からみて５世紀中葉の遺構と推定される。

ＳＤ4044（第97図）

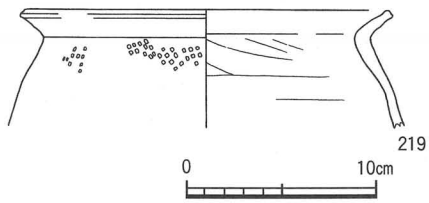
４調査区中央部のⅧ－16－９Ｊ地区、Ⅷ－17－９・10Ａ～Ｃ地区で検出した。北西－南東へ直線的に伸びる溝でＳＤ4045を切っており両端は調査区外に至る。検出長27.0m、幅3.2m、深さ0.3mを測る。断面は逆台形で、埋土は7.5Y5/1灰色～5GY4/1暗オリーブ灰色の粘土～シルト～細粒砂が複雑な互層状を呈する。弥生時代後期～古墳時代中期の土器が出土している。



第99図　ＳＤ4043出土遺物実測図－２

ＳＤ4045（第100図）

４調査区中央部のⅧ－17－９・10Ａ～Ｃ地区にわたる北東－南西に伸びる溝で、南部は第３面ＳＤ3052に削平されているほかＳＤ4044に切られている。検出長13.7m、幅3.2m、深さ0.25mを測る。断面は皿形で、埋土は7.5YR5/1褐灰色～7.5Y5/1灰色の粗粒砂～シルトの互層状を呈し、最下部には細礫が堆積する。古墳時代中期の韓式系土器の破片等が極少量出土している。韓式系土器１点（219）を図化した。器形としては、甕ないしは平底鉢が推定される。口縁部は「く」の字に屈曲し外傾する端面を形成する。復元口径19.2cmを測る。体部外面に格子状タタキが認められるが、器面風化のため全体に不明瞭である。浅黄橙色の色調で胎土は精良である。



第100図　ＳＤ4045出土遺物実測図

小穴・柱穴（ＳＰ）

ＳＰ4001～ＳＰ4012

１調査区全域で12個の小穴を検出した。平面形状では、円形・楕円形がある。規模は幅0.15～0.5m、深さ0.03～0.25mを測る。埋土はＳＰ4003を除けば単一層である。検出状況は散発的で、その規則性については不明な点が多いが、ＳＰ4003・ＳＰ4007・ＳＰ4012からは柱根・柱痕が確認されている。これらの柱穴については、周辺に建物を構成する柱穴が検出できず、その性格は不明であり、第３面の掘り残しの可能性が高い。各小穴・柱穴の規模等の詳細については第35表に示した。

第35表　１調査区　ＳＰ4001～ＳＰ4012法量表（単位m）

遺構番号	地　区	平面図	長径	短径	深さ	埋　土	出土遺物
ＳＰ4001	Ⅶ－19－3C	円形	0.24	0.24	0.08	5Y5/1灰色シルト	
ＳＰ4002	Ⅶ－19－4C	〃	0.35	0.33	0.06	2.5Y4/3オリーブ褐色粘土質シルト	
ＳＰ4003	〃	〃	0.23	0.20	0.14	柱痕埋土－2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂 掘方埋土－5Y4/1灰色粘土質シルト	柱根
ＳＰ4004	Ⅶ－19－3E	〃	0.28	0.28	0.13	5Y5/2灰オリーブ色シルト	
ＳＰ4005	Ⅶ－19－4E	楕円形	0.33	0.30	0.03	〃	
ＳＰ4006	〃	円形	0.32	0.30	0.14	5Y4/1灰色シルト	
ＳＰ4007	〃	〃	0.38	0.35	0.12	〃	土師器高杯、須恵器、柱痕
ＳＰ4008	Ⅶ－19－4F	楕円形	0.48	0.40	0.14	2.5GY4/1暗オリーブ灰色砂質シルト	
ＳＰ4009	〃	〃	0.50	0.50	0.25	〃	
ＳＰ4010	Ⅶ－19－5F	円形	0.23	0.20	0.10	2.5GY6/1オリーブ灰色シルト質粘土	
ＳＰ4011	〃	楕円形	0.42	0.30	0.06	7.5GY4/1灰色粘土質シルト	
ＳＰ4012	Ⅶ－19－5H	円形	0.25	0.15	0.15	10Y5/1灰色粘土	柱根

ＳＰ4013～ＳＰ4025

２調査区中央部のⅦ－20－６・７Ｂ～Ｄ地区で13個を検出した。平面形状では円形・楕円形がある。規模は幅0.18～0.5m、深さ0.02～0.12mを測る。埋土は暗褐色シルトの単一層ならびに暗褐色シルトに極細粒砂が混在する層相のものに二分される。散発的な分布状況であり、建物を復元できる規則性は見受けられない。なお、各小穴・柱穴の法量等の詳細については第36表に示した。

第36表　２調査区　ＳＰ4013～ＳＰ4025法量表（単位m）

遺構番号	地　区	平面図	長径	短径	深さ	埋　土	出土遺物
ＳＰ4013	Ⅶ－20－6B	円形	0.18	0.18	0.02	10YR3/1黒褐色シルト	
ＳＰ4014	〃	楕円形	0.33	0.22	0.03	〃	
ＳＰ4015	〃	円形	0.35	0.35	0.05	〃	
ＳＰ4016	〃	不定形	0.50	0.36	0.03	10YR3/3暗褐色シルトにN7/0 灰白色極細粒砂混入	
ＳＰ4017	Ⅶ－20－7B	円形	0.40	0.38	0.04	10YR3/1黒褐色シルト	
ＳＰ4018	Ⅶ－20－7C	楕円形	0.50	0.43	0.05	〃	
ＳＰ4019	〃	円形	0.40	0.35	0.12	10YR3/3暗褐色シルトにN7/0 灰白色極細粒砂混入	土師器
ＳＰ4020	Ⅶ－20－6C	楕円形	0.46	0.39	0.06	〃	
ＳＰ4021	Ⅶ－20－7C	円形	0.25	0.23	0.05	10YR3/1黒褐色シルトに 10YR8/6黄橙色極細粒砂混入	
ＳＰ4022	〃	楕円形	0.41	0.33	0.10	10YR3/1黒褐色シルト	
ＳＰ4023	Ⅶ－20－6D	〃	0.32	0.20	0.05	〃	
ＳＰ4024	Ⅶ－20－7D	〃	0.34	0.24	0.04	10YR3/1黒褐色シルトに 10YR8/6黄橙色極細粒砂混入	
ＳＰ4025	〃	円形	0.32	0.30	0.08	10YR3/1黒褐色シルト	

ＳＰ4026～ＳＰ4028

２調査区東部のⅦ－20－６・７Ｆ地区で検出した。ＳＫ4033の東で検出した小穴である。平面はすべて円形を呈する。規模は径0.1～0.32m、深さ0.14～0.25mを測る。埋土はシルトないしはシルト質粘土である。層位的にはＳＫ4033・ＳＰ4028が同時期と考えられ、ＳＰ4026・ＳＰ4027は前者よりも古いと言える。また、ＳＰ4026には腐蝕の著しい柱根が遺存していたが、先が尖っており杭の可能性がある。検出範囲では、建物を復元できる規則性は認められなかった。遺物はＳＰ4026の柱根以外は出土していない。なお、各小穴・柱穴の法量等の詳細については、第37表に示した。

第37表　２調査区　ＳＰ4026～ＳＰ4028法量表（単位m）

遺構番号	地　区	平面図	長径	短径	深さ	埋　土	出土遺物
ＳＰ4026	Ⅶ－20－6F	円形	0.31	0.25	0.25	10YR3/3暗褐色シルト・10BG4/1暗青灰色シルト質粘土	柱根
ＳＰ4027	〃	〃	0.12	0.10	0.15	7.5YR6/1褐灰色シルト質粘土	
ＳＰ4028	Ⅶ－20－7F	〃	0.32	0.30	0.14	7.5YR6/2灰褐色シルト	

ＳＰ4029～ＳＰ4032

３調査区東部のⅧ－16－９Ｇ地区に集中している。平面形状では、円形・楕円形・不定形がある。法量は径0.2～0.4m、深さ0.15～0.21mを測る。埋土は全て単一層である。遺物はＳＰ4032から古墳時代中期頃の土師器、製塩土器の小片が少量出土している。なお、各小穴・柱穴の法量等の詳細については、第38表に示した。

第38表　３調査区　ＳＰ4029～ＳＰ4032法量表（単位m）

遺構番号	地　区	平面図	長径	短径	深さ	埋　土	出土遺物
ＳＰ4029	Ⅷ－16－9G	楕円形	0.40	0.20	0.15	5Y5/1灰色粘土質シルト	
ＳＰ4030	〃	不定形	0.35	0.30	0.21	〃	
ＳＰ4031	〃	楕円形	0.25	0.20	0.15	〃	
ＳＰ4032	〃	円形	0.35	0.30	0.16	2.5Y5/1黄灰色シルト質粘土	土師器・製塩土器

ＳＰ4033

４調査区中央部のⅧ－17－９Ｂ地区で検出した。楕円形を呈し、長径0.47m、短径0.33m、深さ0.1mを測る。断面逆台形を呈し、埋土は2.5Y5/1黄灰色シルトで斑鉄を多く含む。遺物は時期不明の土師器片が１点出土している。

自然河川（ＮＲ）

ＮＲ4001（第101図、図版二六・七九）

４調査区東部のⅧ－17－10Ｄ～Ｆ、Ⅷ－22－１Ｅ・Ｆ地区で検出した北西－南東に伸びる自然河川で、規模は検出長24.0m、幅12.0m以上、深さ2.6m以上を測る。東部には幅約５mの流路痕跡が認められ、この部分が最終段階の流路と考えられる。なお、検出面から約1.0m以下については、調査区北部に設定した幅約１mの東西方向のトレンチによる調査である。それによる底部の様相は、肩からなだ

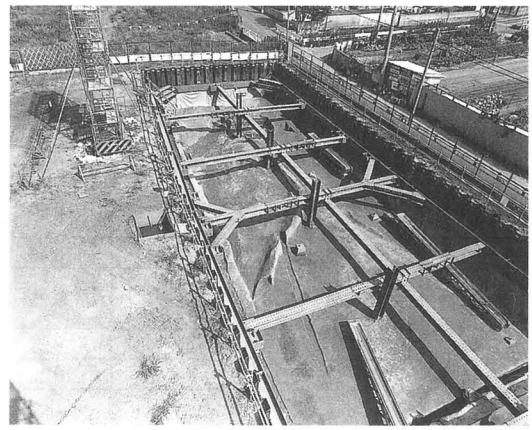
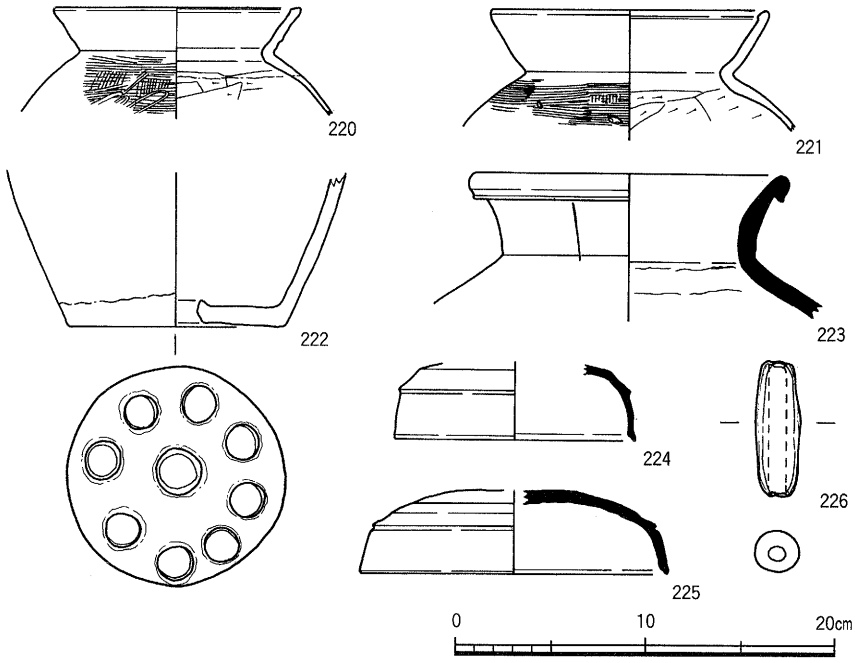


写真37　４調査区ＮＲ4001検出状況（北から）

らかに深さ約2.2mまで落ち込んだ後、幅約３mのほぼ水平なテラス状を成し、さらに垂直気味に深さ0.4m以上落ち込むというものである。埋土は上部の層厚約1.4mが10YR5/4にぶい黄褐色～5GY4/1暗オリーブ灰色の粘土～中礫の互層、以下が5Y5/1灰色～5Y5/3灰オリーブ色の中粒砂～中礫の互層である。

遺物は弥生時代後期～古墳時代後期までの土器類、土錘等が少量出土している。７点(220～226)を図化した。220・221は布留式甕の小片である。２点共に体部外面上半は横方向のハケ、体部内面は屈曲部の下部までヘラケズリが行われている。221の体部上位には２箇所に深く刻まれた刺突文がある。２点共に淡褐色の色調で、胎土には角閃石が多く含まれている。古墳時代前期後半（布留式新相）に比定される。222は土師器甑である。底部は完存しており、底径11.4cmを測る。底部の蒸気孔はいずれも円形で、中央に１個とその周辺に８個が配されている。５世紀中葉に比定される。223は須恵器の広口壺である。口縁端部は外側に肥厚し、最下部に幅広の凹線が巡る。口頸部外面にヘラ先による縦方向の直線文が施文されている。６世紀前半の所産か。224・225は須恵器杯蓋である。224が1/8、225が1/2残存している。225の天井部内面に同心円タタキが施されている。224が５世紀代。225がＭＴ15型式（６世紀前半）に比定される。226は土師器土錘である。管状土錘で、全長7.2cm、幅2.3cm、孔径0.9cmを測る。出土遺物からみて、６世紀前半には河川としての機能が停止している。



第101図　ＮＲ4001出土遺物実測図

第５面（第102・103図、図版三五～三九）

第５面は第４面以下約0.4m付近に存在する第Ⅵ層上面（T.P.＋7.1～7.5m）を調査対象とした。１調査区では管路敷設部分である下部調査区で検出した。２調査区西部から４調査区西部にかけて東西方向に展開する水田遺構が中心である。第５面で検出した遺構としては、水田89筆（**水田5001～水田5089**）、畦畔59条（**畦畔5001～畦畔5059**）、土坑１基（ＳＫ5001）、溝２条（ＳＤ5001・ＳＤ5002）、小穴１個（ＳＰ5001）、落ち込み１基（ＳＯ5001）、道路状遺構１基（**道路状遺構5001**）がある。第５面の主な遺構である水田の構築時期としては、古墳時代前期後半（布留式後半）が想定される。

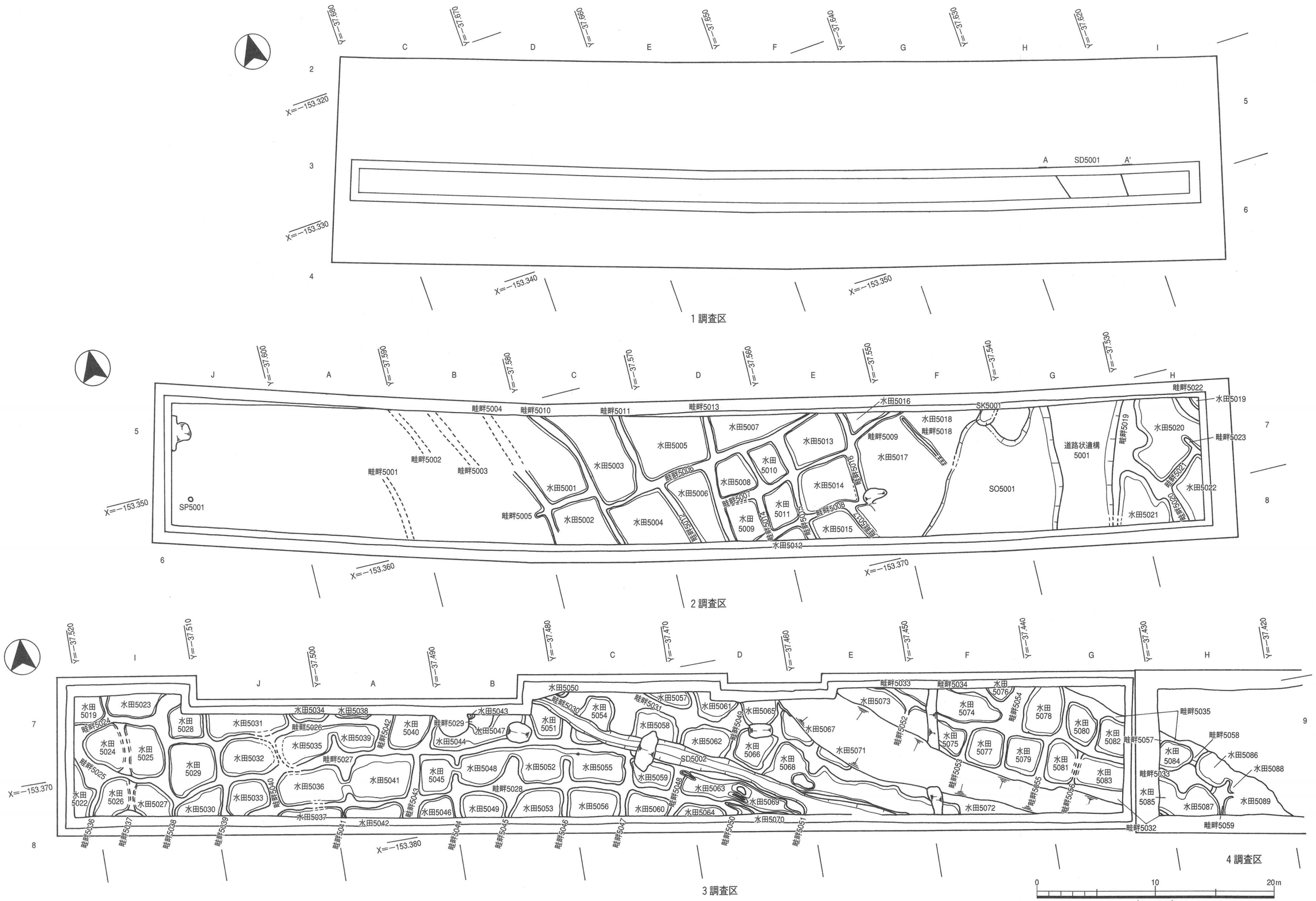
水田（**水田**）

２調査区西部～４調査区西部にかけて検出した。構築面は第Ⅵ層上面（T.P.＋7.1～7.5m）である。東西方向に約170mの広がりを持つもので、一筆の田積規模が小さな小区画水田である。２調査区の東部で検出した南北方向に伸びる**道路状遺構5001**を境として、東・西に展開する水田の企画性が異なっており、西側を西部水田、東側を東部水田と区別した。

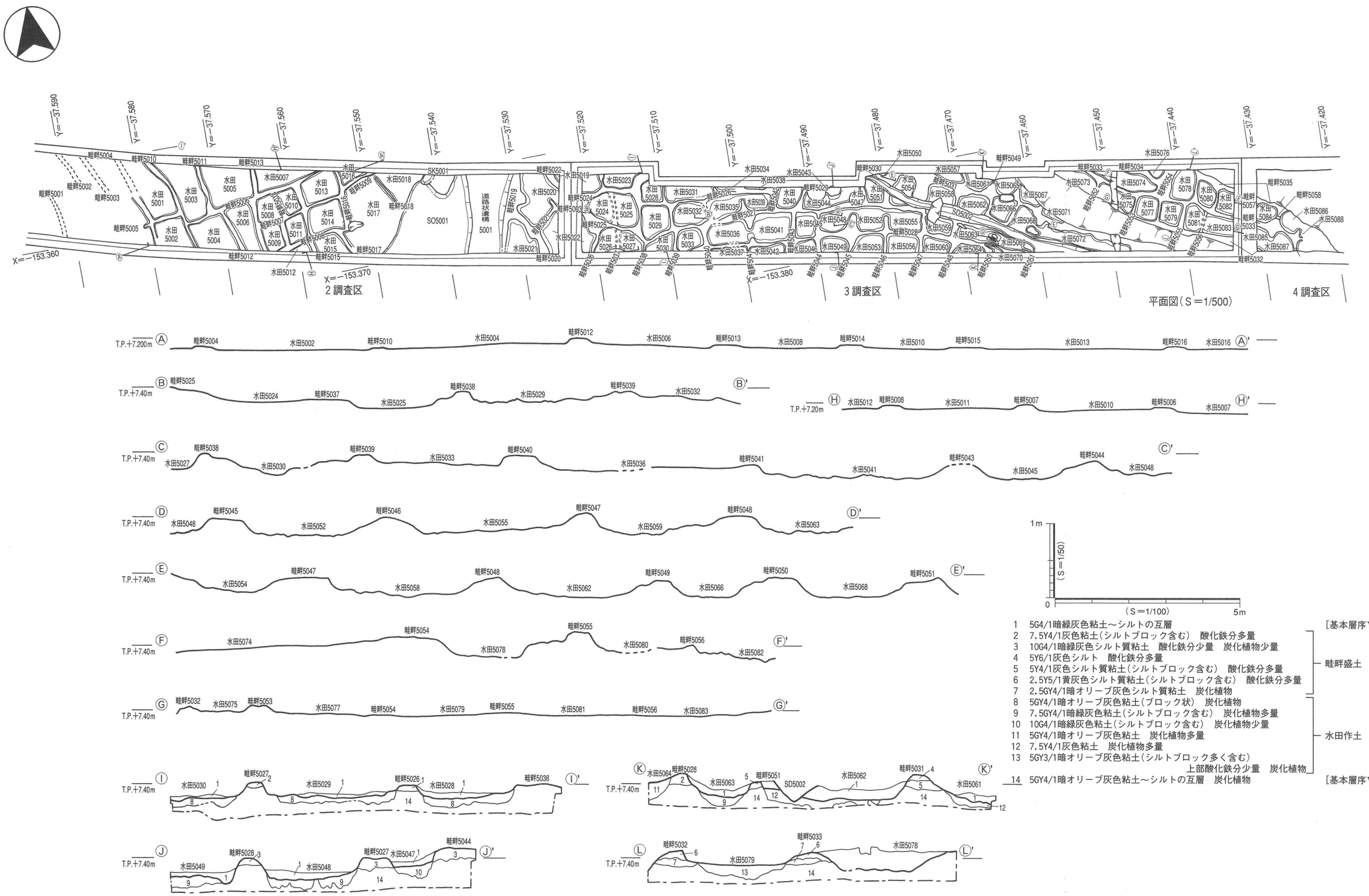
西部水田（**水田5001～水田5018、畦畔5001～畦畔5018**）

西部水田は、２調査区の西部から東部にかけて東西方向に約50mに亘って広がっている。検出部分で水田18筆（**水田5001～水田5018**）、畦畔18条（**畦畔5001～畦畔5018**）を確認した。東端はＳＯ5001ならびに**道路状遺構5001**で区画されている。畦畔は削平を受けているため遺存状態は悪く、西部の**畦畔5001～畦畔5004**についてはその痕跡を留める程度である。水田の構築に際しては、**畦畔5006**のように南西－北東方向に伸びるやや規模の大きい畦畔に、南北方向の畦畔を直交させる形が取られている。水田の一筆単位は、**水田5008～水田5011・水田5013・水田5014**のように方形を呈し、田積が5.6～15.34㎡程度の小規模な区画を行う以外は、南北方向に長い区画を持つものが多い。水田作土は青灰色粘土質シルトで、畦畔は第Ⅵ層の灰色粘土が盛られている。畦畔は断面形状が低い台形で、法量は上幅0.2～0.7m、基底幅0.5～1.3m、高さ0.02～0.1mを測る。水口は**畦畔5018**の北端に設けられている以外は検出されていないが、水田面の標高は**畦畔5005**および**畦畔5006**を境として南側が平均で５cm高いため、南から北方向への灌漑水利が想定される。なお、水田作土である青灰色粘土質シルト中には酸化鉄・マンガンの集積が認められないため、水捌けの悪い湿田の環境が推定される。水田上面に堆積している覆土はシルト～粘土から成る水成層の第Ⅴ層で古墳時代前期後半（布留式期後半）に比定される遺物が出土している。畦畔および水田から遺物は出土していない。なお、各水田・畦畔の法量等の詳細については、第39・40表に示した。

写真38　２調査区西部水田検出状況（南西から）



第102図　1～4調査区　第5面検出遺構平面図



第103図　2～4調査区　第5面検出遺構平面図

第39表　2調査区西部水田　水田法量表(単位m)　　※(　)は推定値。田積は一筆として捉えたものに限定。

遺構番号	地　区	形　状	規模 東西×南北	田積(m²)	標高(T.P.+)	備　考
水田5001	Ⅶ−20−6B·C	−	3.8×(7.8)	−	7.057	
水田5002	Ⅶ−20−6·7C	−	3.8×(3.9)	−	7.055	
水田5003	Ⅶ−20−6C	−	3.35×(8.5)	−	7.060	
水田5004	Ⅶ−20−6·7C·D	−	4.85×(4.5)	−	7.158	
水田5005	Ⅶ−20−6C·D	−	6.3×(4.2)	−	7.059	
水田5006	Ⅶ−20−6·7D	−	3.2×(5.8)	−	7.181	
水田5007	Ⅶ−20−6D·E	−	(8.0)×(3.0)	−	7.081	
水田5008	Ⅶ−20−6·7D	正方形	3.0×2.9	8.70	7.110	
水田5009	Ⅶ−20−7D	長方形	2.5×3.1	7.75	7.174	
水田5010	Ⅶ−20−6·7D·E	〃	2.0×2.8	5.60	7.140	
水田5011	Ⅶ−20−7D·E	〃	2.5×3.0	7.50	7.161	
水田5012	〃	−	2.4×(1.2)	−	7.170	
水田5013	Ⅶ−20−6·7E	長方形	4.65×3.3	15.34	7.055	
水田5014	Ⅶ−20−7E	〃	4.4×3.3	14.52	7.146	
水田5015	〃	−	3.4×(2.2)	−	7.157	
水田5016	Ⅶ−20−6E·F	−	3.2×(1.7)	−	7.076	
水田5017	Ⅶ−20−6·7E·F	−	(6.0)×(5.0)	−	7.035	水口
水田5018	Ⅶ−20−6·7F	−	(4.8)×(4.6)	−	7.115	水口

第40表　2調査区西部水田　畦畔法量表(単位m)

遺構番号	地　区	検出長	上幅	基底幅	高さ	盛　土
畦畔5001	Ⅶ−20−6A	5.60	不明	0.50	不明	不明
畦畔5002	Ⅶ−20−5·6A·B	4.80	〃	0.50	〃	〃
畦畔5003	Ⅶ−20−5·6B	6.20	〃	0.60	〃	〃
畦畔5004	Ⅶ−20−6·7B·C	5.80	〃	0.70	〃	N3/0暗灰色極細粒砂混じり粘土質シルト
畦畔5005	Ⅶ−20−6B·C	5.80	0.57	1.06	0.060	N3/0暗灰色粘土質シルト
畦畔5006	Ⅶ−20−6·7C〜E	19.40	0.57	1.16	0.090	〃
畦畔5007	Ⅶ−20−7D·E	11.80	0.40	0.60	0.120	〃
畦畔5008	〃	7.70	0.70	0.90	0.020	〃
畦畔5009	Ⅶ−20−6E·F	4.50	0.45	0.70	0.040	〃
畦畔5010	Ⅶ−20−6·7C	13.0	0.55	0.80	0.030	〃
畦畔5011	Ⅶ−20−6C	7.00	0.60	0.90	0.061	N3/0暗灰色極細粒砂混じり粘土質シルト
畦畔5012	Ⅶ−20−6·7D	6.10	0.55	0.90	0.065	N5/0灰色粘土質シルト
畦畔5013	〃	10.50	0.55	0.80	0.080	N3/0暗灰色粘土質シルト
畦畔5014	〃	7.70	0.60	0.90	0.082	〃
畦畔5015	Ⅶ−20−6·7E	9.50	0.60	1.10	0.067	〃
畦畔5016	〃	7.80	0.70	1.30	0.051	〃
畦畔5017	Ⅶ−20−7E	3.50	0.55	0.90	0.106	〃
畦畔5018	Ⅶ−20−6·7F	5.30	0.20	0.55	0.014	〃

東部水田（水田5021〜水田5089、畦畔5019〜畦畔5059）

東部水田は、2調査区東部から4調査区西端にかけて、東西方向に約116mに亘って検出した。検出部分で水田69筆（水田5021〜水田5089）・畦畔41条（畦畔5019〜畦畔5059）を確認した。

水田の構成をおおまかにみると、東西方向に平行して弧状に伸びる畦畔（畦畔5026〜畦畔5035）と、南北方向の畦畔（畦畔5019、畦畔5036〜畦畔5059）により格子状に区画される水田である。前者は地形に規制されたものと推定される。また西端にあたる畦畔5019は道路状遺構5001に取り付く。畦畔の交点は十文字形を成す所が多いが、やや歪んだ部分やT字形を成す部分もみられ、西部では区画がやや乱れ、それが顕著である。水田面の標高は、東端部分にあたる4調査区西部

でT.P.＋7.45m、西端部分にあたる２調査区東部でT.P.＋7.20mを測るもので、東から西に向かって低く（平均10cm/60m）なっている。各水田の形状は、平面正方形・長方形を基調とし、規模は一辺約２～５m、田積4.32～14.85㎡を測る。作土層は暗オリーブ灰色粘土を基調とするもので、撹拌は著しいものではなく、土壌化はあまり進んでいないことから、長期にわたって機能していた水田ではないと考えられる。畦畔は第Ⅵ層上面に盛土されるもので、断面形状は蒲鉾形である。西部水田に比して遺存状態は良好である。畦畔の規模は、上幅0.2～2.0m、基底幅0.6～2.5m、高さ0.15～0.40mを測る。水田規模に比して畦畔の規模が大きいといえる。**畦畔5025・畦畔5036**は下位の**畦畔状遺構6003・畦畔状遺構6004**の高まりを踏襲しているものと思われる。水口は南北方向の畦畔にのみ認められ、畦畔を断ち割って東西方向に水田をつなぐ箇所が、**畦畔5041・畦畔5044・畦畔5045・畦畔5046・畦畔5050・畦畔5051**で認められる。水田面の標高と考え合わせて、水の供給源は東部に求められ、水田域内では東→西へ水口を通して、また南北方向については、水田面の標高に顕著な比高差が認められず方向は不明であるが、畦畔をオーバーフローさせていたものと考えられる。水田の環境としては、西部水田と同様の状況からみて湿田が想定される。遺物は、**水田5070・水田5083**の作土、**畦畔5050**の水口から布留式土器片が１点づつ出土しているのみである。水田の時期は、水田遺構を切るＳＤ5002が古墳時代前期後半（布留式新相）であり、この溝は水田遺構が完全に埋没しない段階に開削されたことが想定される他、この水田遺構に関連した居住域が南東部に近接する跡部遺跡内で検出されており、これらの居住域が一様に古墳時代前期後半（布留式新相）に限定されることから水田の存続時期は古墳時代前期後半（布留式新相）が推定される。水田上面に堆積している覆土はシルト～粘土から成る水成層の第Ⅴ層で古墳時代前期後半（布留式新相）～古墳時代中期に比定される遺物が出土している。各水田・畦畔の法量等の詳細については、第41・42表に示した。

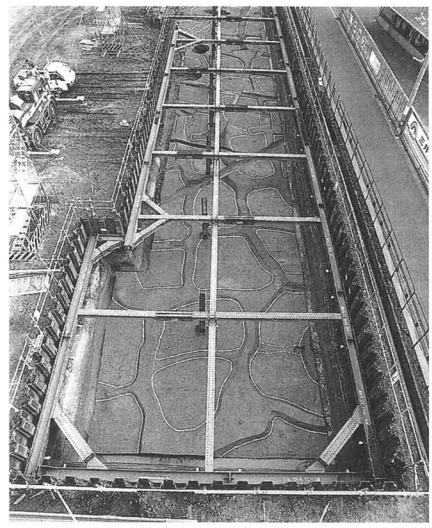


写真39　３調査区東部水田検出状況（西から）

なお、４調査区西部の**水田5084・水田5085**及び**畦畔5033**付近の土壌について花粉分析を実施しており、イネ科植物の花粉が高率で検出されている。詳細は第４章第１節を参照されたい。

第41表　２～４調査区東部水田　水田法量表（単位m）　※（　）は推定値。田積は一筆として捉えたものに限定。

遺構番号	地　区	形　状	規模 東西×南北	田積（㎡）	標高（T.P.＋）	備　考
水田5019	Ⅶ－20－7H・I	－	3.0×(2.15)	－	7.200	
水田5020	Ⅶ－20－7H	－	3.5×(2.6)	－	7.221	
水田5021	Ⅶ－20－7・8G・H	－	(4.0)×(4.0)	－	7.105	
水田5022	Ⅶ－20－7・8H・I	－	3.85×(4.45)	－	7.190	
水田5023	Ⅶ－20－7I	－	4.6×(1.9)	－	7.150	
水田5024	Ⅶ－20－7H・I	不定形	3.0×4.1	12.3	7.200	
水田5025	Ⅶ－20－7・8I	長方形	2.5×4.0	10.0	7.200	
水田5026	Ⅶ－20－8H・I	不定形	2.25×(2.85)	－	7.120	

遺構番号	地　区	形　状	規模 東西×南北	田積(m²)	標高(T.P.＋)	備　考
水田5027	Ⅶ—20—8I	不定形	3.0×(2.45)	—	7.110	
水田5028	Ⅶ—20—7I·J	〃	2.55×(2.5)	—	7.290	
水田5029	Ⅶ—20—7·8I·J	〃	3.65×4.4	12.2	7.290	
水田5030	Ⅶ—20—8I·J	—	3.55×(2.2)	—	7.25	
水田5031	Ⅶ—20—7J	—	6.4×(2.0)	—	7.27	
水田5032	Ⅶ—20—7·8J	不定形	4.4×2.6	11.57	7.27	
水田5033	Ⅶ—20—8J	〃	3.1×2.7	8.37	7.23	
水田5034	Ⅶ—20—7J Ⅷ—16—7A	—	2.6×(0.5)	—	7.32	
水田5035	Ⅶ—20—7·8J Ⅷ—16—7·8A	不定形	4.1×2.0	8.20	7.25	水口
水田5036	Ⅶ—20—8J Ⅷ—16—8A	長方形	5.2×2.35	12.22	7.22	水口
水田5037	〃	—	5.0×(0.7)	—	7.24	
水田5038	Ⅷ—16—7A	—	2.6×(0.25)	—	7.32	
水田5039	Ⅷ—16—7·8A	長方形	3.0×1.8	5.40	7.22	水口
水田5040	〃	—	2.85×(2.65)	—	7.28	
水田5041	Ⅷ—16—8A	長方形	4.95×3.0	14.85	7.20	水口
水田5042	〃	—	4.7×(1.0)	—	7.22	
水田5043	Ⅷ—16—8B	—	0.45×(0.25)	—	7.36	
水田5044	Ⅷ—16—8A·B	—	3.3×(1.85)	—	7.35	水口
水田5045	〃	正方形	2.6×2.6	6.76	7.18	水口
水田5046	Ⅷ—16—8A	—	2.8×(1.5)	—	7.25	
水田5047	Ⅷ—16—8B	—	4.3×(1.7)	—	7.35	水口
水田5048	〃	不定形	3.65×2.45	8.94	7.22	水口
水田5049	〃	—	3.35×(1.85)	—	7.22	
水田5050	Ⅷ—16—8C	—	(0.65)×(0.2)	—	7.47	
水田5051	Ⅷ—16—8B·C	—	2.4×(2.3)	—	7.39	
水田5052	Ⅷ—16—8B	長方形	3.3×2.7	8.91	7.23	水口
水田5053	Ⅷ—16—8·9B	—	4.0×(2.15)	—	7.23	
水田5054	Ⅷ—16—8C	不定形	2.5×3.7	9.25	7.35	
水田5055	〃	長方形	4.1×2.15	8.815	7.28	水口
水田5056	Ⅷ—16—8·9B·C	—	3.9×(2.1)	—	7.28	
水田5057	Ⅷ—16—8C·D	—	3.3×(1.1)	—	7.40	
水田5058	Ⅷ—16—8C	不定形	3.3×3.6	11.88	7.35	
水田5059	〃	長方形	3.2×1.35	4.32	7.30	
水田5060	Ⅷ—16—8·9C	—	3.5×(1.7)	—	7.33	
水田5061	Ⅷ—16—8D	—	(3.55)×(1.4)	—	7.33	
水田5062	〃	—	3.85×(2.3)	—	7.35	
水田5063	Ⅷ—16—8·9C·D	長方形	4.05×1.1	4.455	7.33	水口
水田5064	Ⅷ—16—9C·D	—	4.2×(0.85)	—	7.42	
水田5065	Ⅷ—16—8D	—	2.65×(1.9)	—	7.26	
水田5066	〃	長方形	2.4×2.8	6.72	7.33	
水田5067	Ⅷ—16—8D·E	—	(3.3)×(1.2)	—	7.33	
水田5068	Ⅷ—16—8·9D·E	—	(2.2)×(3.15)	—	7.35	水口
水田5069	Ⅷ—16—9D	—	(4.5)×(1.1)	—	7.32	水口
水田5070	〃	—	(2.2)×(0.35)	—	7.46	
水田5071	Ⅷ—16—8·9E	—	(2.7)×(0.5)	—	7.39	
水田5072	Ⅷ—16—9E·F	—	(12.2)×1.8	—	7.32	水口
水田5073	Ⅷ—16—8E	—	(5.1)×1.0	—	7.35	
水田5074	Ⅷ—16—8E·F	—	(6.8)×(2.2)	—	7.39	
水田5075	Ⅷ—16—8·9E·F	—	(5.2)×1.4	—	7.36	
水田5076	Ⅷ—16—8F	—	(2.1)×(1.05)	—	7.45	
水田5077	Ⅷ—16—8·9F	正方形	2.6×2.8	7.28	7.35	
水田5078	Ⅷ—16—8·9F·G	—	2.85×(3.9)	—	7.46	

遺構番号	地　区	形　状	規模 東西×南北	田積(m²)	標高(T.P.＋)	備　考
水田5079	Ⅷ－16－9F・G	正方形	2.7×2.55	6.88	7.29	
水田5080	Ⅷ－16－8・9G	不定形	2.45×2.4	5.88	7.40	
水田5081	Ⅷ－16－9G	長方形	2.25×3.0	6.75	7.33	
水田5082	〃	－	(2.15)×2.5	－	7.38	
水田5083	〃	－	(3.9)×1.9	－	7.33	
水田5084	Ⅷ－16－9G・H	－	(2.65)×2.05	－	7.40	
水田5085	〃	－	(1.4)×2.2	－	7.39	
水田5086	Ⅷ－16－9H	－	(2.8)×(2.6)	－	7.40	
水田5087	〃	－	(2.8)×(2.85)	－	7.45	
水田5088	〃	－	(0.5)×(1.75)	－	7.41	
水田5089	〃	－	(0.6)×(1.5)	－	7.45	

第42表　2～4調査区東部水田　畦畔法量表(単位m)

遺構番号	地　区	検出長	上幅	基底幅	高さ	盛　土
畦畔5019	Ⅶ－20－7・8G・H	10.50	2.70	3.80	0.07	5B4/1暗青灰色粘土質シルト
畦畔5020	〃	6.90	0.80	1.60	0.03	〃
畦畔5021	Ⅶ－20－7・8H	3.50	0.75	1.25	0.04	〃
畦畔5022	Ⅶ－20－7H	3.00	0.95	1.20	0.07	〃
畦畔5023	〃	2.40	0.25	0.60	0.03	〃
畦畔5024	Ⅶ－20－7H・I	6.70	0.53	0.85	0.07	10Y4/1灰色シルト質粘土
畦畔5025	Ⅶ－20－7・8H・I	8.40	0.70	1.00	0.05	〃
畦畔5026	Ⅶ－20－7I・J Ⅷ－16－7・8A	18.05	0.40	1.00	0.09	7.5Y4/1灰色シルトブロック混粘土
畦畔5027	Ⅶ－20－8I・J Ⅷ－16－8・9A～E	55.27	0.70	1.00	0.09	〃
畦畔5028	Ⅶ－20－8J Ⅷ－16－8・9A～D	39.12	0.50	1.00	0.07	〃
畦畔5029	Ⅷ－16－8B	0.50	0.35	0.70	0.04	10G4/1暗緑灰色シルト質粘土
畦畔5030	Ⅷ－16－8B・C	3.20	0.63	0.78	0.04	5Y6/1灰色シルト
畦畔5031	Ⅷ－16－8・9C～F	28.65	0.70	1.20	0.19	〃
畦畔5032	Ⅷ－16－9F～H	17.00	0.70	0.95	0.13	2.5Y5/1黄灰色シルトブロック混シルト質粘土
畦畔5033	Ⅷ－16－8・9E～H	27.87	0.50	1.10	0.22	5GY3/1暗オリーブ灰色シルトブロック混シルト質粘土
畦畔5034	Ⅷ－16－8F	5.50	0.60	0.90	0.04	〃
畦畔5035	Ⅷ－16－8・9G・H	10.12	0.90	1.20	0.12	〃
畦畔5036	Ⅶ－20－8H・I	4.00	0.40	0.90	0.13	10Y4/1灰色シルト質粘土
畦畔5037	Ⅶ－20－7・8I	9.75	0.40	0.60	0.10	〃
畦畔5038	〃	10.20	0.30	0.70	0.08	〃
畦畔5039	Ⅶ－20－7・8J	8.25	0.40	0.70	0.14	7.5Y4/1灰色粘土
畦畔5040	〃	8.45	0.65	1.15	0.16	〃
畦畔5041	Ⅷ－16－7・8A	8.90	0.50	1.00	0.08	10G4/1暗緑灰色シルト質粘土
畦畔5042	〃	3.00	1.00	1.30	0.05	7.5Y4/1灰色シルトブロック混粘土
畦畔5043	Ⅷ－16－8A	8.85	0.70	1.10	0.05	10G4/1暗緑灰色シルト質粘土
畦畔5044	Ⅷ－16－8A・B	7.31	0.70	1.00	0.04	〃
畦畔5045	Ⅷ－16－8B	8.70	0.90	1.40	0.15	〃
畦畔5046	Ⅷ－16－8・9B・C	10.32	0.63	1.09	0.11	〃
畦畔5047	Ⅷ－16－8・9C	9.37	2.00	2.50	0.09	7.5Y4/1灰色シルトブロック混粘土
畦畔5048	Ⅷ－16－8・9C・D	10.47	0.50	0.90	0.09	〃
畦畔5049	Ⅷ－16－8D	4.77	0.45	0.70	0.07	〃
畦畔5050	Ⅷ－16－8・9D	10.10	0.40	0.70	0.07	〃
畦畔5051	Ⅷ－16－8・9D・E	5.90	0.60	1.10	0.03	〃
畦畔5052	Ⅷ－16－8E	2.15	0.30	0.60	0.04	2.5Y5/1黄灰色シルトブロック混シルト質粘土
畦畔5053	Ⅷ－16－8・9F	2.40	0.30	0.65	0.08	〃
畦畔5054	Ⅷ－16－8・9F・G	7.00	1.60	1.90	0.04	2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質粘土

遺構番号	地　区	検出長	上幅	基底幅	高さ	盛　土
畦畔5055	Ⅷ－16－8·9F·G	7.70	0.51	0.70	0.05	2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質粘土
畦畔5056	Ⅷ－16－9G	6.45	0.27	0.55	0.21	〃
畦畔5057	Ⅷ－16－9G·H	0.75	0.20	0.35	0.03	〃
畦畔5058	Ⅷ－16－9H	3.50	0.50	1.10	0.10	〃
畦畔5059	〃	2.80	0.40	0.80	0.62	〃

土坑（ＳＫ）

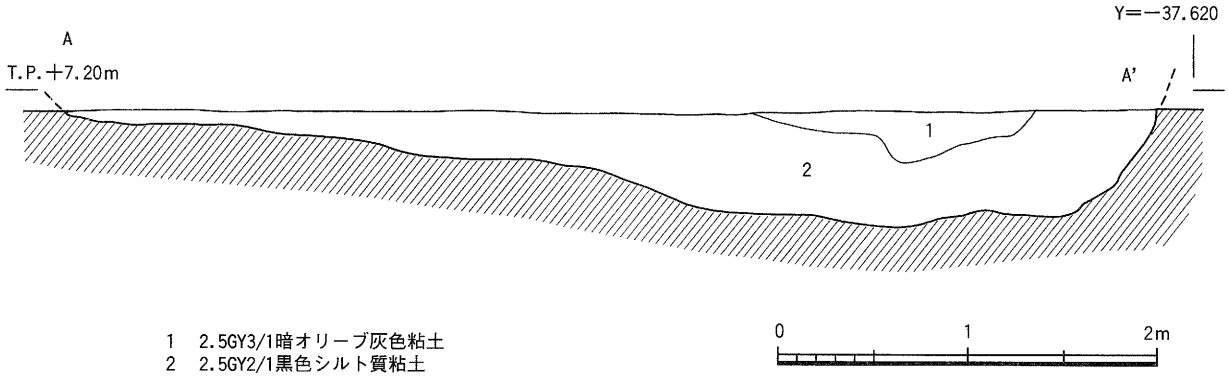
ＳＫ5001

２調査区北東部のⅦ－20－６・７Ｆ地区で検出した。北部は調査区外に至る。検出部分で東西幅1.3m、南北幅1.4m、深さ0.45mを測る。埋土は、上層がにぶい褐色～褐色シルト、中層が灰褐色砂質シルト、下層が暗オリーブ色粘土質シルト・灰白色粗粒砂～極粗粒砂の概ね３層に分層される。遺物は出土していない。

溝（ＳＤ）

ＳＤ5001（第104図、図版三五）

１調査区の管路敷設部分を対象とした調査で検出した。検出地点はⅦ－19－５Ｈ地区である。南北の壁面で検出されたもので不明な点があるが、南－北に伸びる溝で、掘方の東西の角度は、東部が急勾配で深みがあるのに対し、西部は浅く緩やかに中心部に向かって落ち込む。規模は、検出部分で南側の東西幅4.5m、北側の東西幅5.8m、深さ0.6m前後を測る。埋土は概ね上層が2.5GY3/1暗オリーブ灰色粘土質シルト（炭化物を含む）、下層が2.5GY2/1黒色シルト質粘土の２層に分層される。しかし、東部の一部には2.5GY3/1暗オリーブ灰色粘土質シルト（炭化物を含む）と5G3/1暗緑灰色シルト質粘土がブロック状に混在する箇所があり、東肩部分が人為的に埋められたことを示している。遺物は、上層および先述の東肩埋土内から弥生時代後期末～古墳時代前期にかけての壺や甕の破片が少量出土した。なお、前述する西部水田の西端を画する溝の可能性がある。

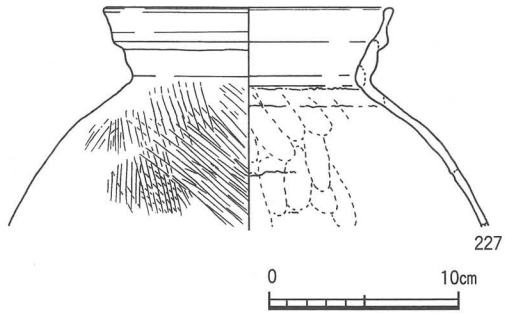


第104図　ＳＤ5001北壁断面図

ＳＤ5002（第105図、図版三七・七九）

３調査区中央部のⅧ－16－８・９Ｂ～Ｅ地区で検出した。北西－南東にのびるもので、水田・畦畔を切っているが、西肩の一部については、畦畔を利用して肩とする部分が認められることから、水田遺構が完全に埋没しない段階に構築されたものと考えられる。検出長34.0m、幅1.0～

1.9m、深さ0.1～0.3mを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は2.5Y6/1黄灰色シルト～粗粒砂の互層で、底部には中礫を含み、全体に鉄分を含んでいる。遺物は古墳時代前期後半（布留式期新相）に比定される土師器が少量出土している。土師器壺１点（227）を図化した。227は口頸部の中位に幅広で丸味のある凸帯を付加させて二重口縁壺とするものである。口径15.3cm、口頸部高4.0cmを測る。体部外面は単位幅の広いハケ調整、内面はナデ調整を施す。古墳時代前期後半（布留式期新相）の所産か。



第105図　ＳＤ5002出土遺物実測図

小穴・柱穴（ＳＰ）

ＳＰ5001

２調査区西部のⅦ－19－６Ｊ地区で検出した。円形を呈するもので、直径0.36m、深さ0.05mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトの単一層で植物炭化物を含む小穴である。遺物は出土していない。

落ち込み（ＳＯ）

ＳＯ5001

２調査区のⅦ－20－７・８Ｆ・Ｇ地区で検出した落ち込みである。西部水田遺構の東端に位置し、東部が**道路状遺構5001**に取り付くもので、北・南側は調査区外に至っている。検出部の規模は、東西幅9.2m、南北幅5.2～7.6m、深さ0.09mを測る。埋土は青灰色粘土質シルトの単一層である。遺物は古式土師器片が出土している。水田遺構の一角を占める遺構であるため、性格としては水田耕作に何らかの関わりを持った遺構と考えられる。

道路状遺構（**道路状遺構**）

道路状遺構5001

２調査区のⅦ－20－７・８Ｇ地区で検出した南北方向に伸びる道路状遺構で、西部水田と東部水田の境界となっている。検出部の規模は、検出長10.2m、東西幅3.7～5.9mを測り、北・南側は調査区外に至っている。上面の標高は約T.P.＋7.2mを測り、西部水田面より約0.1m高く、未耕地となっていることから道路状遺構とした。第６面（下部調査）で検出した**畦畔状遺構6002**の上位に重複する位置関係にあることから、水田形成時に標高の高かった部分を利用したものと考えられる。

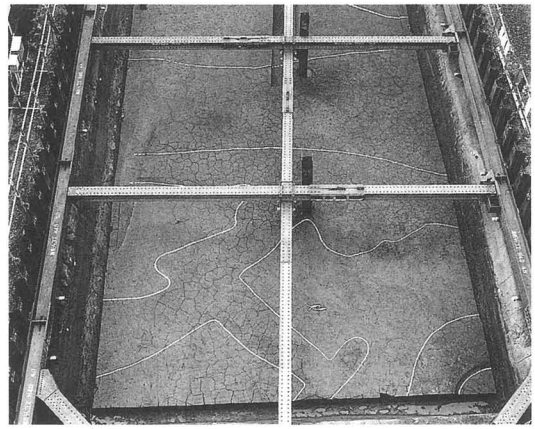


写真40　２調査区道路状遺構5001および東部水田西部検出状況（東から）

第６面（第107図、図版四一・四二）

第６面とした調査面は２～４調査区で検出したもので、そのうち２・３調査区では管路敷設部分の調査で検出した。調査の結果、第Ⅶ層上面（T.P.＋6.2～7.1m）で弥生時代中期末～古墳時代初頭前半（庄内式古相）に比定される土坑４基（ＳＫ6001～ＳＫ6004）、溝７条（ＳＤ6001～ＳＤ6007）、土器集積６箇所（ＳW6001～ＳW6006）、畦畔状遺構５条（**畦畔状遺構6001～畦畔状遺構6005**）、埋甕１基（**埋甕6001**）を検出した。

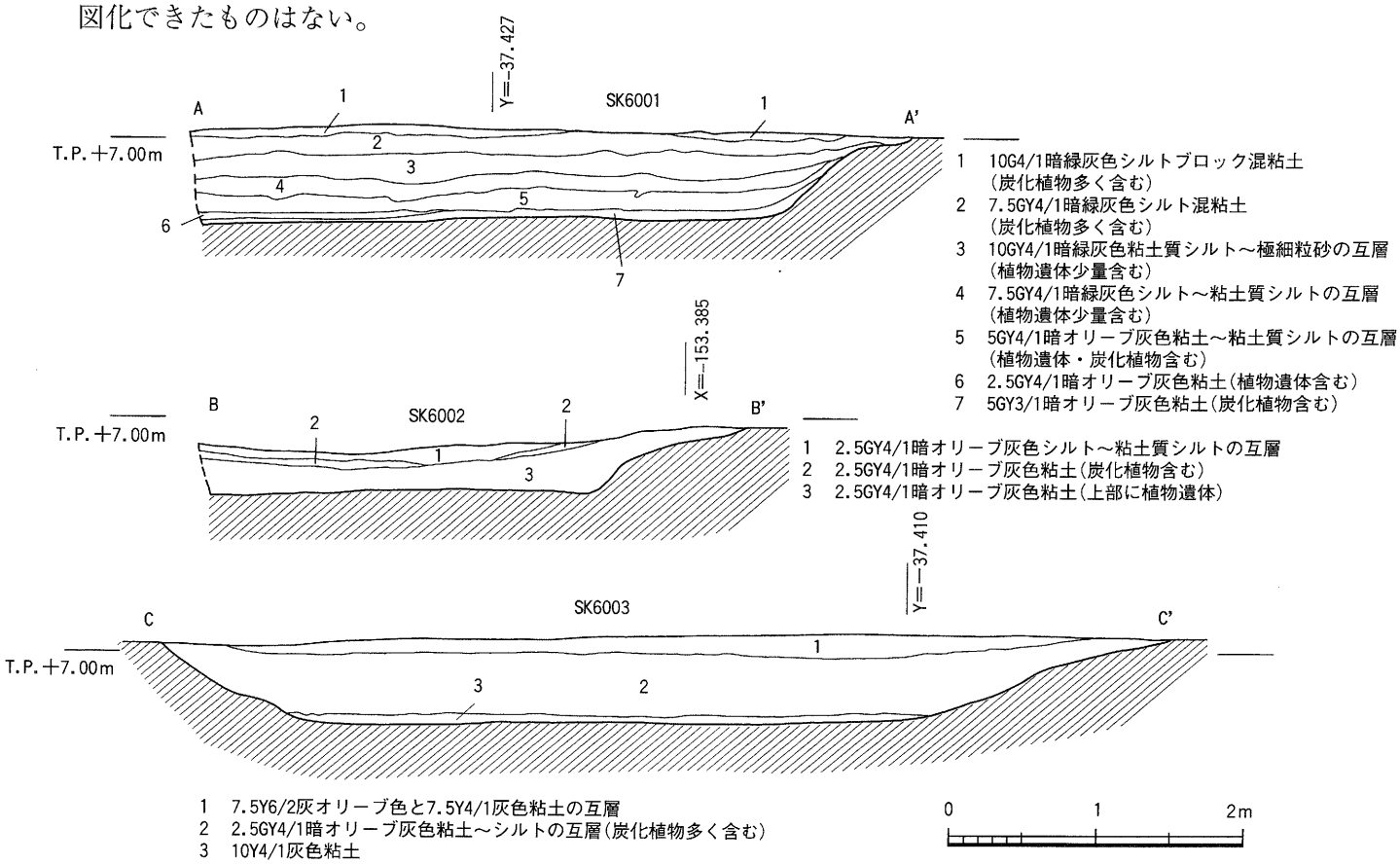
土坑（ＳＫ）

ＳＫ6001（第106図、図版四二）

４調査区西部のⅧ－16－８・９Ｈ地区で検出した。北側および西側は調査区外に至る。検出部分で東西幅4.8m、南北幅2.9m、深さ0.65mを測る。埋土は静水域に特有な粘土～粘土質シルトで、炭化植物・植物遺体をラミナ状に含む６層が水平に堆積している。弥生時代後期の土器が少量出土しているが図化できるものはない。

ＳＫ6002（第106図、図版四二）

４調査区西部のⅧ－16－９Ｇ・Ｈ地区で検出した。ＳＫ6001の南側にＳＤ6001を隔てて検出した。西側および南側は調査区外に至る。検出部分で東西幅8.0m、南北幅3.1m、深さ0.3mを測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土はシルト～粘土の互層で、炭化植物・植物遺体をラミナ状に多く含む３層から成る。弥生時代後期の土器類が少量の他、砥石の破片が少量出土しているが図化できたものはない。



第106図　ＳＫ6001～ＳＫ6003断面図

ＳＫ6003（第106図、図版四三）

４調査区西部のⅧ－16－９Ｉ・Ｊ地区で検出した。北側は調査区外に至る。検出部分では逆三角形状を呈し、東西幅9.4m、南北幅4.8m、深さ0.6mを測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土はシルト～粘土を主体とし全体に炭化植物をラミナ状に多く含む３層がほぼ水平に堆積している。弥生時代後期の土器が少量出土しているが図化できたものはない。

ＳＫ6004

４調査区西部のⅧ－16－９Ｊ地区～Ⅷ－17－９Ａ地区で検出した。検出部分で南北に長い楕円形を呈し、東西幅4.3m、南北幅8.0m、深さ0.5mを測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土は10GY4/1暗緑灰色～10GY5/1緑灰色粘土～シルトの互層で、炭化植物を多く含む。弥生時代後期の土器が少量出土しているが図化できたものはない。

溝（ＳＤ）

ＳＤ6001

４調査区西部のⅧ－16－９・10Ｈ・Ｉ地区で検出した。北西－南東に伸びる溝で、ＳＫ6001・ＳＫ6002の間を通る。検出状況から東はＳＤ6002に連続する可能性が高い。検出長14.9m、幅1.2～2.9m、深さ0.7mを測る。断面は逆台形から椀形を呈し、埋土は2.5GY3/1暗オリーブ灰色～10Y5/1灰色極細粒砂～粘土の互層で、植物遺体・炭化植物を多く含む。弥生時代後期の土器が少量出土しているが図化できたものはない。

ＳＤ6002（第108図、図版四三）

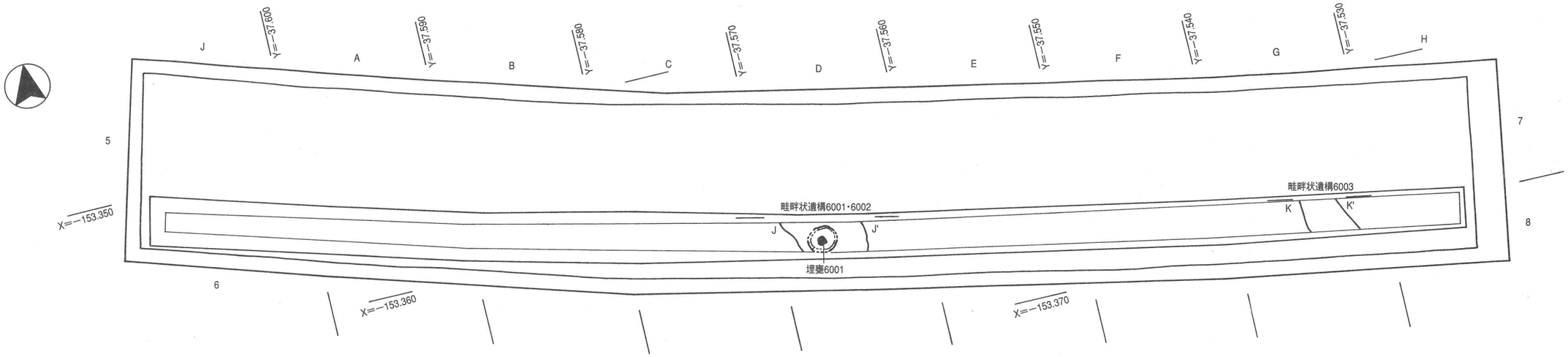
４調査区中央西よりのⅧ－16－９・10Ｊ地区、Ⅷ－17－９・10Ａ地区で検出した。ほぼ直角に屈曲する溝で、東部でＳＤ6003と合流し、西側はＳＤ6001と連続する可能性がある。規模は検出長17.0m、幅1.5m、深さ0.75mを測り、南部合流部分では幅約4.0mとなる。埋土はＵ字形ないしはＶ字形の断面形状に沿ってレンズ状に堆積しており、全体に不均質な層相で植物遺体・炭化植物を多量に含んでいる。遺物は弥生時代後期の土器が少量の他、長さ198cm、幅約15cm、厚さ２～３cmを測る板材が出土している。

ＳＤ6003（第108図、図版四三）

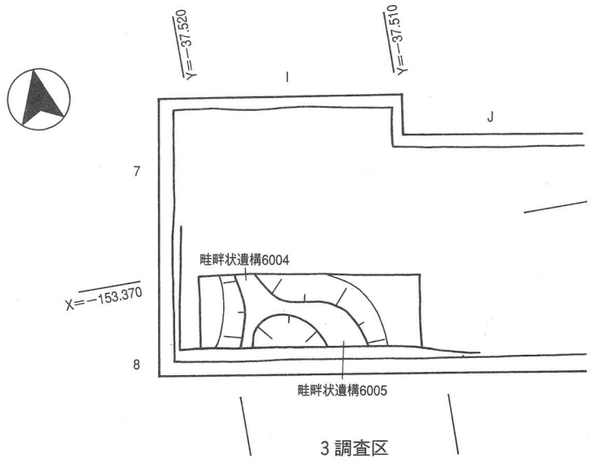
４調査区中央西よりのⅧ－17－９・10Ａ地区で検出した。南－北に伸びる溝で、北部はＳＤ6004に切られている。ＳＫ6004との関係については、平面的にみて一連の遺構と捉えていたため切り合い等を確認できなかった。検出長13.0m、幅1.7～4.3m、深さ0.85mを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は粘土～シルトが主体で植物遺体を含む不均質な層が大半を占める。弥生時代中期末～後期の土器が少量出土しているが図化できたものはない。

ＳＤ6004（第97図、図版四三）

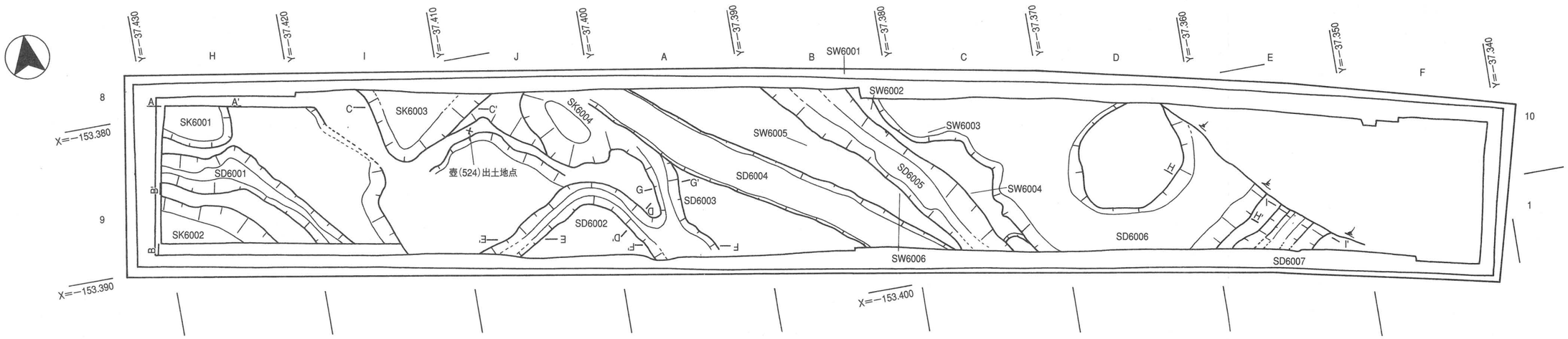
４調査区中央部のⅧ－16－９Ｊ、Ⅷ－17－９・10Ａ～Ｃ地区で検出した。北西－南東に伸びる溝で、第４面で検出したＳＤ4044に先行する溝である。検出長27.0m、幅2.6～2.9m、深さ0.4mを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は上層が5Y6/1灰色シルト～極細粒砂の互層、下層が10GY4/1暗緑灰色粘質シルト～極細粒砂の互層である。下部にはベース層の粘土や粗粒砂がブロック状に含まれる。弥生時代後期の土器が出土しているが図化できたものはない。



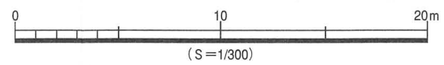
2 調査区



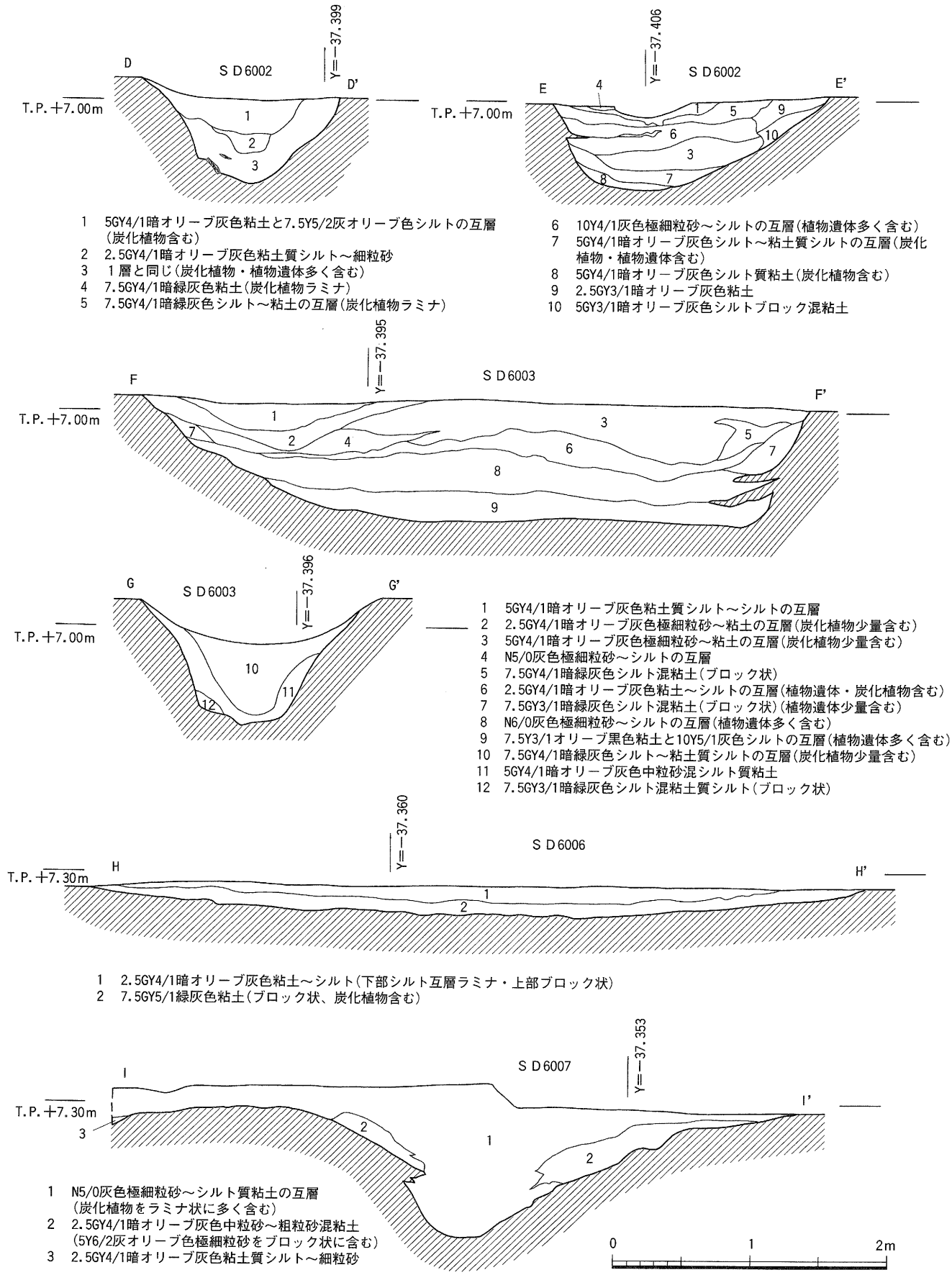
3 調査区



4 調査区



第107図　2～4調査区　第6面検出遺構平面図



1 5GY4/1暗オリーブ灰色粘土と7.5Y5/2灰オリーブ色シルトの互層（炭化植物含む）
2 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土質シルト～細粒砂
3 1層と同じ（炭化植物・植物遺体多く含む）
4 7.5GY4/1暗緑灰色粘土（炭化植物ラミナ）
5 7.5GY4/1暗緑灰色シルト～粘土の互層（炭化植物ラミナ）
6 10Y4/1灰色極細粒砂～シルトの互層（植物遺体多く含む）
7 5GY4/1暗オリーブ灰色シルト～粘土質シルトの互層（炭化植物・植物遺体含む）
8 5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質粘土（炭化植物含む）
9 2.5GY3/1暗オリーブ灰色粘土
10 5GY3/1暗オリーブ灰色シルトブロック混粘土

1 5GY4/1暗オリーブ灰色粘土質シルト～シルトの互層
2 2.5GY4/1暗オリーブ灰色極細粒砂～粘土の互層（炭化植物少量含む）
3 5GY4/1暗オリーブ灰色極細粒砂～粘土の互層（炭化植物少量含む）
4 N5/0灰色極細粒砂～シルトの互層
5 7.5GY4/1暗緑灰色シルト混粘土（ブロック状）
6 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土～シルトの互層（植物遺体・炭化植物含む）
7 7.5GY3/1暗緑灰色シルト混粘土（ブロック状）（植物遺体少量含む）
8 N6/0灰色極細粒砂～シルトの互層（植物遺体多く含む）
9 7.5Y3/1オリーブ黒色粘土と10Y5/1灰色シルトの互層（植物遺体多く含む）
10 7.5GY4/1暗緑灰色シルト～粘土質シルトの互層（炭化植物少量含む）
11 5GY4/1暗オリーブ灰色中粒砂混シルト質粘土
12 7.5GY3/1暗緑灰色シルト混粘土質シルト（ブロック状）

1 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土～シルト（下部シルト互層ラミナ・上部ブロック状）
2 7.5GY5/1緑灰色粘土（ブロック状、炭化植物含む）

1 N5/0灰色極細粒砂～シルト質粘土の互層（炭化植物をラミナ状に多く含む）
2 2.5GY4/1暗オリーブ灰色中粒砂～粗粒砂混粘土（5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂をブロック状に含む）
3 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土質シルト～細粒砂

第108図　ＳＤ6002、ＳＤ6003、ＳＤ6006、ＳＤ6007断面図

ＳＤ6005（第109・110図、図版四一）

４調査区中央部のⅧ－17－９・10Ｂ・Ｃ地区で検出した。北西－南東に伸びる溝である。検出長19.5m、幅2.3～3.2m、深さ1.0mを測る。断面は逆台形を呈し、埋土はおおまかに5GY5/1オリーブ灰色～10Y5/1灰色シルト～粗粒砂の互層で、植物遺体を多く含んでいる。遺物は弥生時代後期～古墳時代中期の土器、木製品（角材）が出土しているが、弥生時代後期の土器に関しては後述する土器集積に伴う可能性がある。

ＳＤ6006（図版四一）

４調査区中央部から東部にかけてのⅧ－17－９・10Ｂ～Ｅ、Ⅷ－22－１Ｄ・Ｅ地区で検出した。直径8.2×6.6mの不整楕円形を成す高まりの周囲を巡る状況である。幅4.9～5.8m、深さ0.2mを測る。断面はⅢ形を呈し、北部では２箇所で底部が北に向かってさらに落ち込む。埋土は上層が2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土～シルト（上部ブロック状。下部互層状。）、下層が7.5GY5/1緑灰色粘土（ややブロック状。炭化植物含む。）である。形状から周溝墓あるいは古墳の痕跡とも考えたが、断ち割り等の結果からは断定できなかった。弥生時代後期～古墳時代初頭前半（庄内式古相）の土器が出土している。

ＳＤ6007（図版四一）

４調査区東部のⅧ－17－10Ｅ、Ⅷ－22－１Ｅ地区で検出した。北東－南西に伸びる溝で、北東部はＮＲ4001に削平されている。検出長5.0m、幅4.7m、深さ0.9mを測る。断面は逆台形を呈し、埋土はN5/0灰色極細粒砂～シルト質粘土の互層で、有機物層もみられ、炭化植物をラミナ状に多く含んでいる。弥生時代後期の土器が出土している。

土器集積（ＳＷ）

ＳＷ6001～ＳＷ6006（第109～133図、図版四一・四二）

４調査区中央部のⅧ－17－９・10Ｂ・Ｃ地区で検出した。ＳＤ6005の両岸に広がるもので、土器の出土状況や、ある程度のまとまりから６箇所（ＳＷ6001～ＳＷ6006）に分けた。右岸で検出した土器集積を北からＳＷ6001～ＳＷ6004とし、左岸を北からＳＷ6005、ＳＷ6006とした。恣意的な要素を含み、土器集積の境界に厳密性を欠く部分もあるが、個々の土器集積形成時における規則性や時期差の追求においては有効と考えられる。このうち、図示した土器類の総点数は195点（228～422）である。

ＳＷ6001

約3.0×1.2mの範囲に拡がり、北は調査区外に続いている。ほぼ平坦面に形成されており、土器の出土レベルはT.P.＋6.99～6.75mを測る。土器は壺の占める割合が高く、完形品やそれに近いものもみられる。溝を挟んで対岸に位置するＳＷ6005出土土器と接合関係が確認された。図示した土器類の点数は37点（228～264）である。

ＳＷ6002

約2.3×1.0mの範囲に拡がる。土器の出土レベルはT.P.＋6.90～6.69mを測り、溝に向かって下がっている。土器は甕の占める割合が高く、完形品やそれに近いものもみられる。図示した土器類の点数は31点（265～295）である。

第109図　S W6001～S W6006平面図

ＳＷ6003

約4.5×2.0mの範囲に拡がる。土器の出土レベルはT.P.＋6.93～6.50mを測り、溝に向かって下がっている。土器は破片の占める割合が高いが、完形に近いものもみられる。図示した土器類の点数は50点（296～345）である。

ＳＷ6004

土器の出土レベルはT.P.＋7.08～6.70mを測り、溝肩に沿って約3.0mにわたって土器が点在する。図示した土器類の点数は10点（346～355）である。

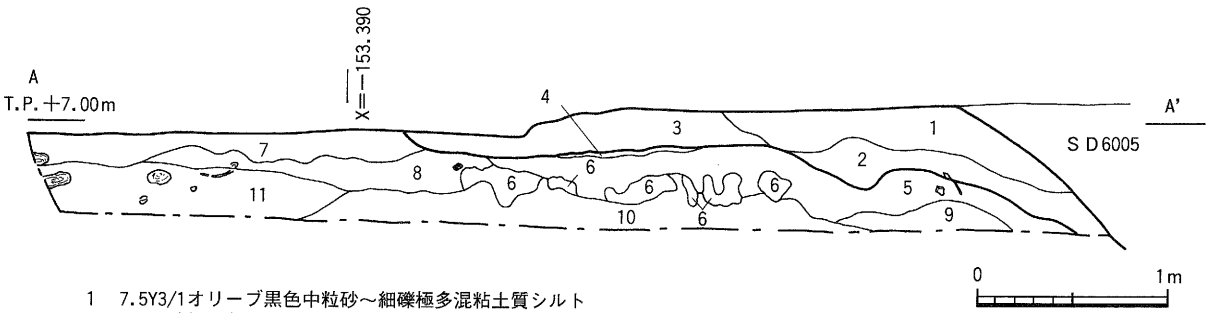
ＳＷ6005

約4.5×2.5mの範囲に拡がり、南西部の約3.0×2.0mに特に土器が集中する。ほぼ平坦面に形成され、土器の出土レベルはT.P.＋6.95～6.71mを測る。土器は甕の占める割合が高く、完形品やそれに近いものもみられる。図示した土器類の点数は62点（356～417）である。

ＳＷ6006

土器は溝肩に沿って約3.8mにわたって数点が散在する程度である。土器の出土レベルはT.P.＋6.99～6.80mを測る。図示した土器類の点数は５点（418～422）である。

ＳＤ6005東肩の断ち割り断面観察(第110図)によると、ＳＤ6005の前段階の肩はさらに約３ｍ広がることが確認できる。この肩から緩やかに傾斜してほぼ平坦な面を経たのち溝に至る状況で、ある時期７層をベースとして溝が機能していたものと考えられる。５層上面に上層との隔絶を示す砂層（４層）が存在することもそのことを示唆している。５層は非常に汚れた土壌化層で、５層中に認められるブロック状の６層は、５層中からの踏み込みにより形成されたと考えられ、溝岸の湿潤な環境を物語っている。５層上位に堆積し、第５面でのＳＤ6005の肩を形成する地層（１～３層)は、中粒砂～細礫を多く含むシルト～粘土質シルトで、ラミナ構造がまったく認められない攪拌されたような層相であり、溝の埋没に伴って自然に堆積した地層とは考えられない。中粒砂～細礫の存在から、溝を浚えた際に掻き揚げた土を盛土した可能性が考えられ、溝肩に堤を形成していたのかもしれない。土器集積は５層上面、及び１～３層中で検出した。土器の出土状況をみると、重層的な状況はあまり見られず、ＳＷ6001・ＳＷ6002・ＳＷ6005は土器が平面的に敷き詰められた状況、ＳＷ6004では溝肩に沿って等間隔に並べられた状況である。右岸のＳＷ6001～ＳＷ6004は溝に向かって下がる緩斜面に形成されている。ＳＷ6003は明確な規則性は認められず破片が多い。しかし完形品に近い土器が溝に沿って点在して出土しており、南東側のＳＷ



1　7.5Y3/1オリーブ黒色中粒砂～細礫極多混粘土質シルト
2　5G4/1暗緑灰色細粒砂～極粗粒砂混粘土質シルト
3　7.5Y3/1オリーブ黒色細粒砂～中粒砂少混粘土質シルト
4　5Y5/3灰オリーブ色極細粒砂～細粒砂
5　7.5GY4/1暗緑灰色細粒砂少混シルト
6　7.5GY5/1緑灰色粘土質シルト(ブロック状)
7　2.5GY4/1暗オリーブ灰色細粒砂少混粘土質シルト
8　2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土質シルト
9　7.5GY5/1緑灰色シルト
10　2.5GY5/1オリーブ灰色シルト～中粒砂
11　2.5GY5/1オリーブ灰色シルト

第110図　ＳＤ6005東肩断割り南壁断面図

6004と同じ状況が続いているものと考えられる。左岸のＳW6005はほぼ平坦面に形成されておりやや様相が異なるが、ＳW6001との接合関係から同時期に形成されたものと捉えられよう。

個々の土器集積については、無秩序な、また長期にわたる継続的な廃棄ではないことは出土状況から明らかであり、一括性・一時性の高い土器群であるといえよう。そしてこの土器集積を覆うように先述した盛土が行われている。ＳW6001・ＳW6002・ＳW6004・ＳW6005に関しては溝肩に埋め込まれた土器群といえる。ＳW6003は規則性のない出土状況や破片が多い特徴からみて、溝から掻き揚げられた土（１～３層）に伴う土器片が多くを占める可能性が高い。出土した土器は弥生時代後期後半に比定される。器種構成をみると全体的に甕が多いが、これは一般的な傾向といえ、また甕には煤が付着していることからも、日常的に使用していた土器であったことがわかる。穿孔や打ち欠き行為が認められたものはない。

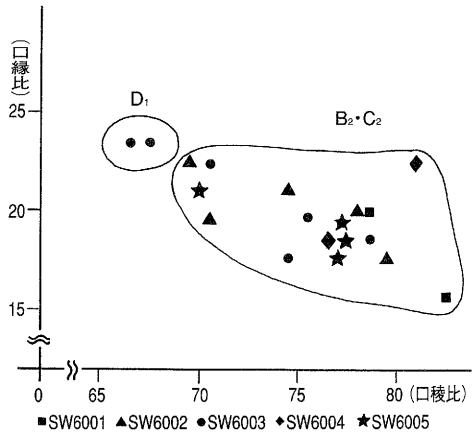
なお、周辺で検出された当該期の遺構は溝のみであり、明確な包含層も存在しない。この土器集積を形成した集団の集落域は、やや離れた場所に位置しているのであろう。

器種分類

６箇所の土器集積（ＳW6001～ＳW6006）からは、多種･多様な土器類が出土しており、掲載した土器の総量は195点に及ぶ。これらの土器集積は、溝（ＳＤ6005）の両岸で広範囲にわたって広がりが認められるもので、個々の土器集積形成時期の新旧関係については必ずしも明晰にできたわけではないが、完形土器を多く含む良好な資料で、弥生時代後期後半の河内地域の土器組成を考える上で重要な基準資料の一つとなろう。

器種分類については、弥生時代後期～古墳時代初頭の土器形式の基本形式である壺・甕・高杯・鉢・器台を中心として、その他手焙形土器・蓋を対象とした（分類表はＰ240～Ｐ248を参照）。個々の器種については、個体器形の特徴からＡ・Ｂのように名称を付与し、中分類とし更に細分が必要なものはA_1・A_2のように小分類した。また、甕形土器については、器形の大小関係として器高による分類をⅠ～Ⅳ（小形～超大形）、体部の形態差による分類（A_1～A_3）、口縁端部の形態分類（ａ～ｄ）、底部裏面の形態分類（イ～ニ）としている。高杯形土器のうち有稜高杯については、有稜高杯の口径・杯部径（稜径）・口縁部の長さ（口縁長）の数値から導かれる口稜比（稜径÷口径×100）、口縁比（口縁長÷口径×100）数値の違いと形態差から型式を分類した。

調整用語としては、基本的には『紫雲出』報告の用語を採用した。甕形土器内面の器面を平滑にするために行われている「板ナデ」の用語については、調整具の原体幅の痕跡が残るものは「板ナデ」とし、原体幅の痕跡が残りその中にハケメが見られるものについては「ハケナデ」の用語を使用した。胎土については、特に角閃石の含有に主眼を置き観察した。肉眼観察で確認できない場合は、ナショナルライトスコープＦＦ-393（30倍）を使用した。本文中でスコープとしたものがこれにあたる。なお、土器集積間で接合関係がある場合は本文で記述し、土器の帰属は遺存部分が大きい方のものとした。



第111図　有稜高杯Ａの法量分布

ＳＷ6001出土遺物（第112～116図、図版四四・四五・八〇～八四）

総数で37点（228～264）を図化した。その内訳は壺14点（228～241）、甕15点（242～256）、鉢５点（257～261）、高杯２点（262・263）、器台１点（264）である。完形の土器が多く、器種別では壺・甕で７割以上を占めている。

壺

壺類は14点（228～241）で、広口壺$A_1$５点（228～231・234）、広口壺$B_1$３点（235～237）、広口壺Ｃ１点（232）、広口直口壺１点（233）、短頸直口壺Ａ１点（238）、長頸壺$A_3$１点（239）、壺底部２点（240・241）である。

228～231・234は広口壺A_1である。230はほぼ完形品で口径16.8cm、器高30.2cm、底径5.5cmを測る。230の口縁端部は上部に肥厚し幅広の面を作る。色調は赤褐色系である。胎土は229が非生駒西麓産の他は0.5mm未満の角閃石を含む生駒西麓産である。なお、229はＳＷ6005から出土した土器片と接合している。231は扁球形の体部に口頸部が大きく外反して開く。完形品で、口径15.3cm、器高25.0cm、体部最大径24.8cmを測る。底部は突出しており裏面はロ形態である。生駒西麓産である。234は球形の体部から外反してラッパ状に開く口頸部が付くもので、口縁端部側面には刻み目が装飾的に施文されている。生駒西麓産である。232は広口壺Ｃでほぼ完形に復元が可能で口径14.8cm、器高36.0cm、体部最大径32.2cmを測る。体部中位より上部は風化による剥離が顕著である。底部は突出しており裏面はロ形態である。色調は褐色で、胎土中に0.5～１mmの角閃石が多量に含まれている。生駒西麓産である。235～237は広口壺B_1で235・236は扁球形の体部を持つ。共に口縁部端部は上部に肥厚し幅広の端部を作るもので236の端面には擬凹線が巡る。235が生駒西麓産、236が非生駒西麓産である。237は完形品である。球形の体部を持つ中形品である。236と同様、口縁端部は上部に肥厚するもので、端面に擬凹線が巡る。底部は突出しており裏面はハ形態で木葉痕が残る。238は短頸直口壺Ａである。球形の体部に上外方に直線的に伸びる口頸部が付く。底部は突出が小さいもので裏面はロ形態である。ほぼ完形品で、口径7.5cm、器高18.8cm、体部最大径18.2cmを測る。外面の体部中位より上部は風化のため調整は不明瞭である。生駒西麓産である。239は長頸壺A_3である。ほぼ完形品で口径8.6cm、器高1.5cm、体部最大径10.6cmを測る。底部は突出しており裏面はハ形態である。体部外面はヘラミガキ調整を多用している。生駒西麓産である。240・241は中形に分類される壺底部である。共に突出しており裏面はイ形態である。共に生駒西麓産である。

甕

甕Ａを15点（242～256）図化した。242～247は小形品のＩにあたる。体部形態はA_1が242～246、A_3が247である。口縁端部の形態分類ではａが242・244、b_1が245、c_1が247、ｄが243・246に分類される。底部はやや突出しており裏面の形態は242・245がイ形態、243がロ形態、244がハ形態に分類される。なお、245は底部裏面に木葉痕が残る。体部外面のタタキ調整は二分割ないしは三分割成形に沿って行なわれており、242・246にはタタキ調整を消すハケ調整が上位部分で行なわれている。赤褐色～褐灰色の色調で、胎土中に0.5mm未満の角閃石が含まれている。生駒西麓産である。

248～252は中形品Ⅱに分類される。体部形態はA_1が248・249、A_2が250～252である。口縁端部の形態分類はａが250～252、b_1が249、ｄが248である。底部は突出しており裏面の形態は

248・249がハ形態、252がイ形態である。体部は三分割成形に沿ってタタキ調整が行われている。249・251はタタキ調整を消すハケ調整が部分的に施されている他、251・252の分割接合部は補足粘土の貼り付けにより無紋の帯状を呈している。色調は赤褐色～褐灰色である。胎土には１㎜以下の角閃石を多く含むものが多い。生駒西麓産である。なお、248・251の外面には煤の付着が認められない。

253～256は大形品Ⅲに分類される。体部形態は253がA_1、254がA_2、255・256がA_3にあたる。口縁端部の形態分類は256がａ、255がb_1、254がc_2、253がｄである。底部は突出ないしはやや突出しており裏面の形態は256がイ形態、255がロ形態、253がハ形態である。体部外面は254が四分割、その他は三分割成形である。体部外面のタタキ調整は分割部位毎にタタキの方向を変えており、四分割の254については下から２段目、三分割の255・256については最上段にタタキ調整を消すハケ調整が認められる。体部内面の調整は板ナデ、ハケナデが行なわれている。色調は253～255が淡褐灰色～褐灰色。256は灰黄色を呈する。253～255は生駒西麓産。256は非生駒西麓産である。

鉢

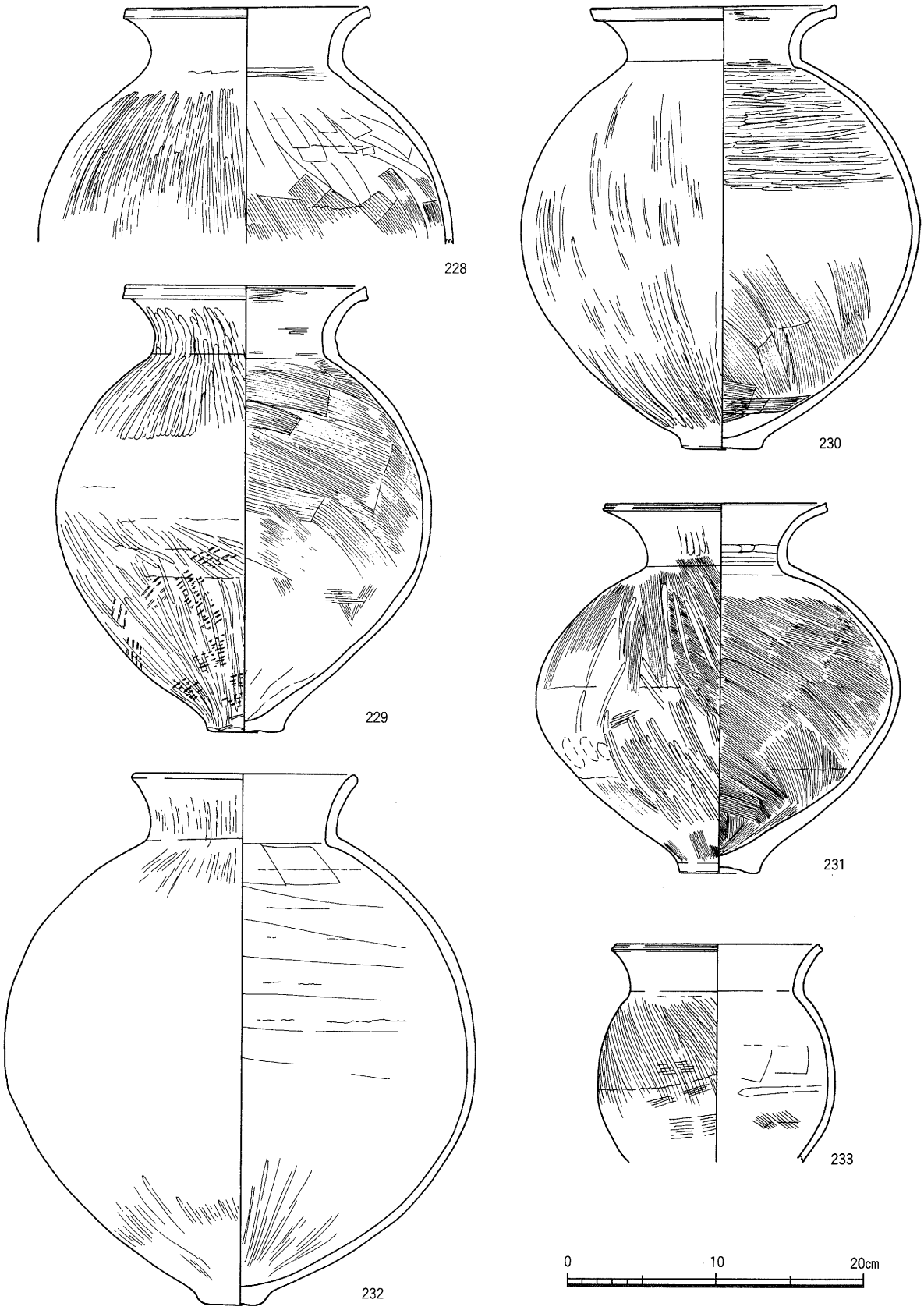
鉢類は５点（257～261）で内訳は小形鉢Ｂ１点（257）、小形鉢$B_1$１点（258）、小形鉢$B_2$１点（259）、小形鉢Ｃ１点（260）と大形鉢Ｄ１点（261）がある。小形鉢Ｂ類は３点で底部が不明な257以外は小形鉢B_1の258と小形鉢B_2の259に分類される。258は口径が14cmで椀形の体部を持つ。259は口径が9.5cmで逆三角形を呈する。共に底部外側面に指圧痕が明瞭に残っている。257～259は生駒西麓産である。260の小形鉢Ｃは内湾屈曲する椀形の体部に小さく突出する底部が付く。ほぼ完形で口径10.2cm、器高6.6cm、底径3.8cmを測る。体部上半には縦方向に走るクラックが認められる。胎土は１㎜以上の角閃石が多量に含まれている。生駒西麓産である。261の大形鉢Ｄはほぼ完形品で口径29.5cm、器高21.0cm、底径6.5cmを測る。底部は突出しており裏面はハ形態である。分割成形によるもので、下位から上位にかけては、タタキの後ヘラミガキによる調整が行なわれている。赤褐色～褐灰色の色調で、胎土中には0.5～１㎜の角閃石が含まれている。生駒西麓産である。

高杯

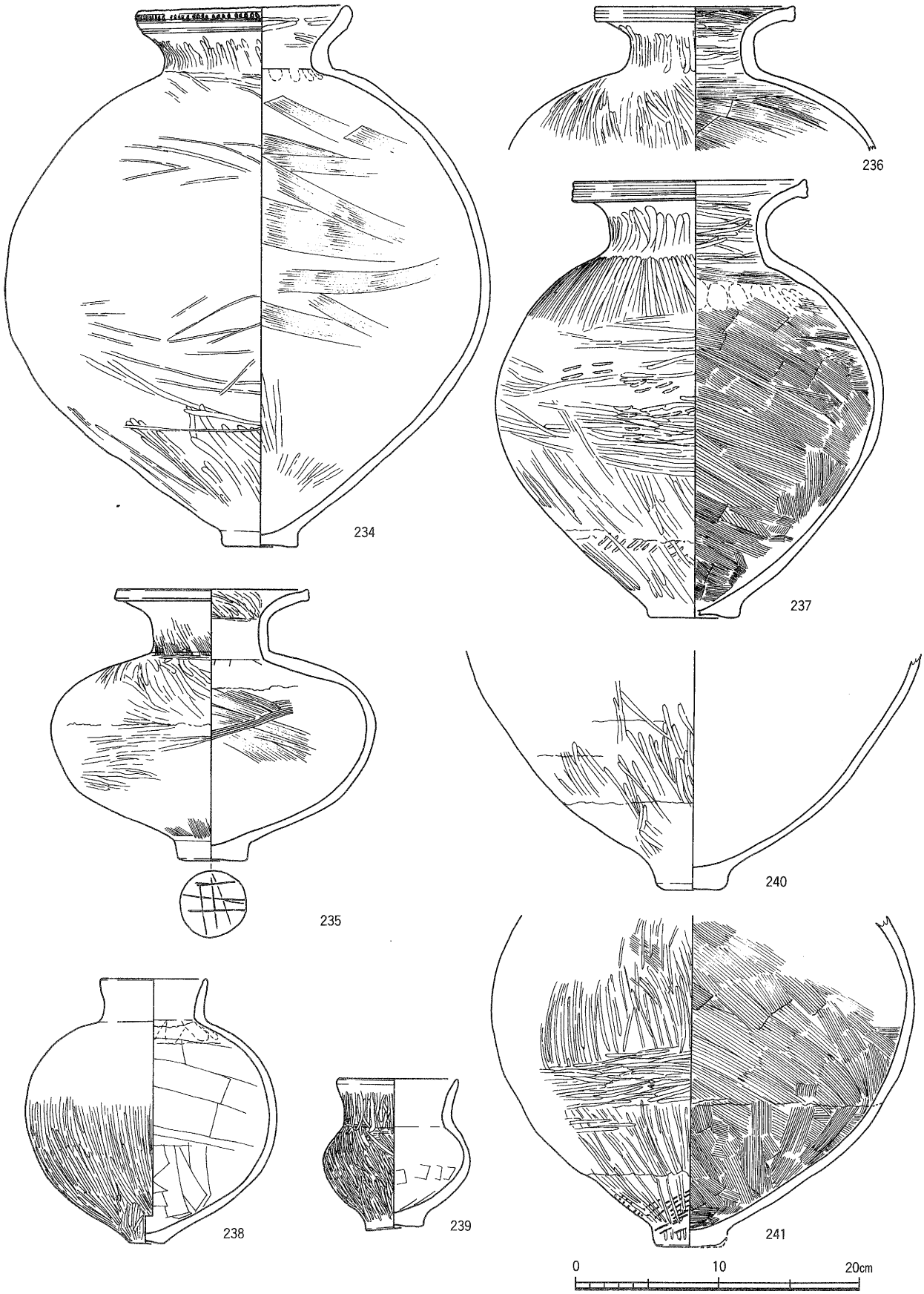
有稜高杯C_2は２点（262・263）で、近接した位置から出土している。２点共に杯部径が16cm前後の小形品である。脚部は共に中空で柱状部上位から「ハ」の字状に開く262と柱状部下位が開く263がある。スカシ孔は共に４個で、263については孔径が1.4cmを測り一般的なものに比べてやや大きい。263の杯部底は円板充填部分が剥がれている。共に赤褐色の色調である。生駒西麓産で、スコープで角閃石が少量含有していることが確認できる。

器台

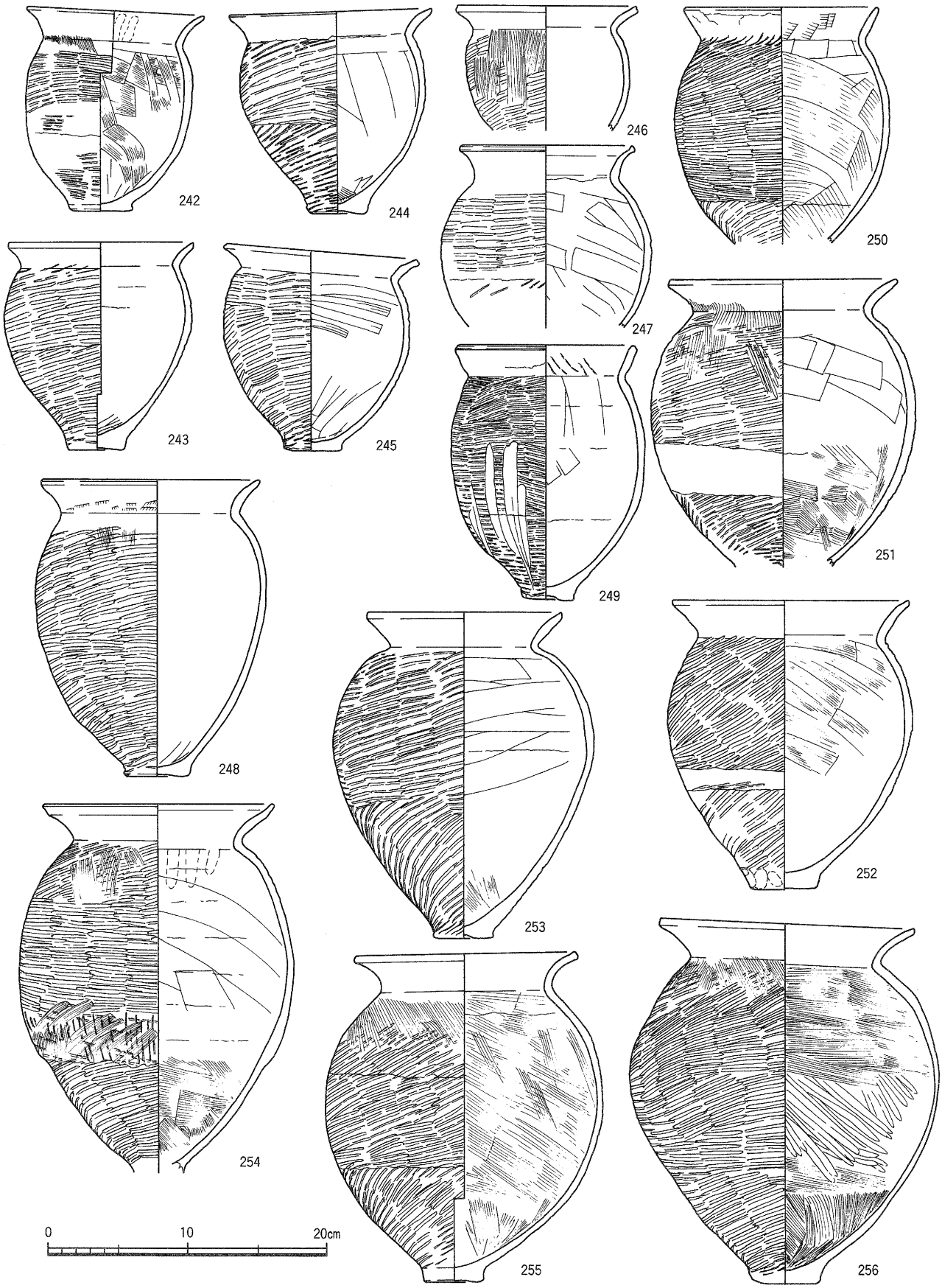
264は大形器台Ｂに分類される。出土位置は有稜高杯$C_2$２点（262・263）と近接している。中空の器台で、古墳時代初頭（庄内式期）に盛行する小形器台の祖形になるものと考えられるが中河内地域では本例以外に類例を知らない。ほぼ完形に近いもので口径16.6cm、器高11.1cm、裾部径15.8cmを測る。脚部にはスカシ孔が２段に配されており、上下段ともに４個を数える。色調は褐灰色である。生駒西麓産で、裸眼で0.5㎜以下の角閃石を多く含有していることが確認できる。



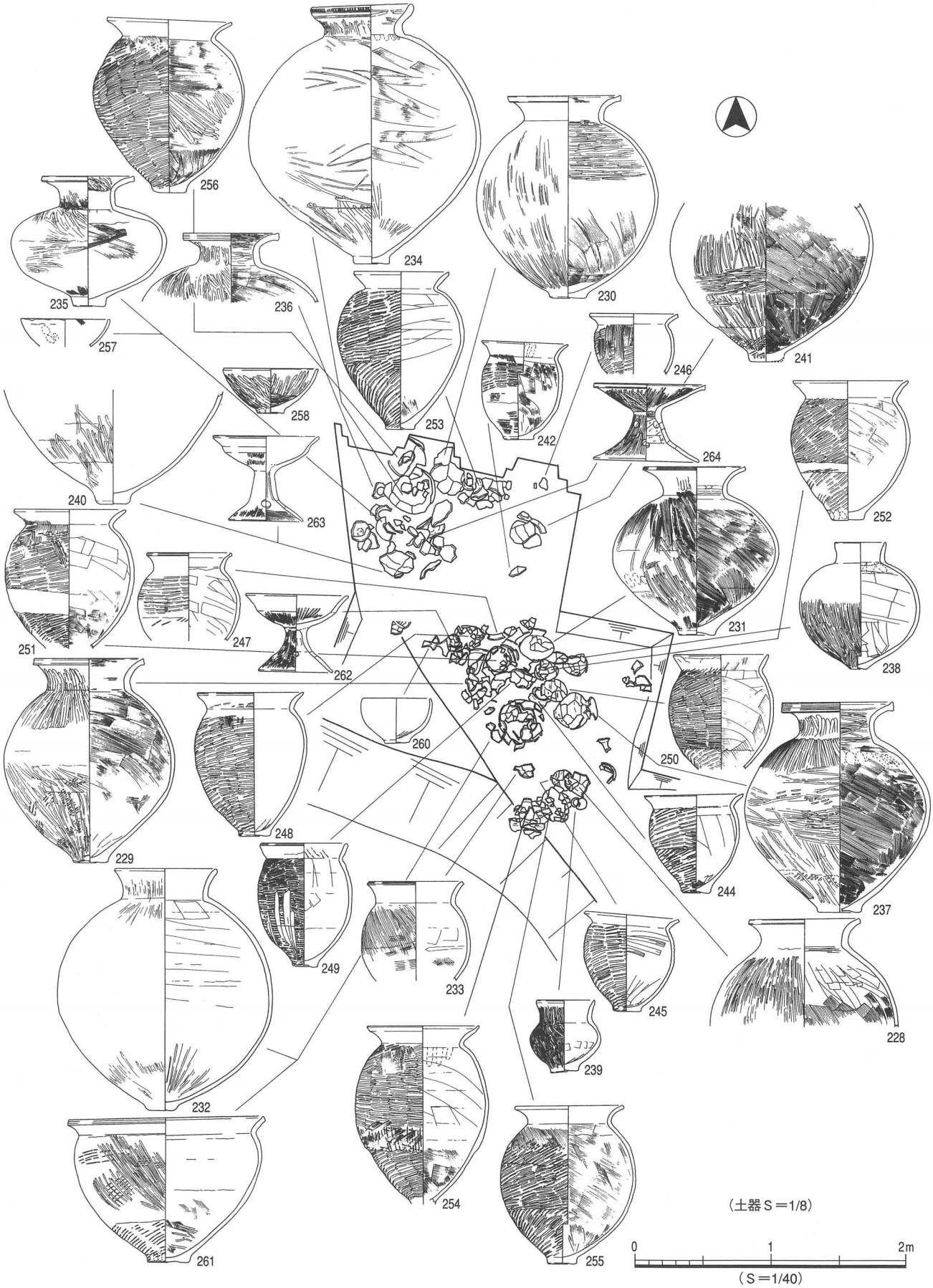
第112図　ＳＷ6001出土遺物実測図－１



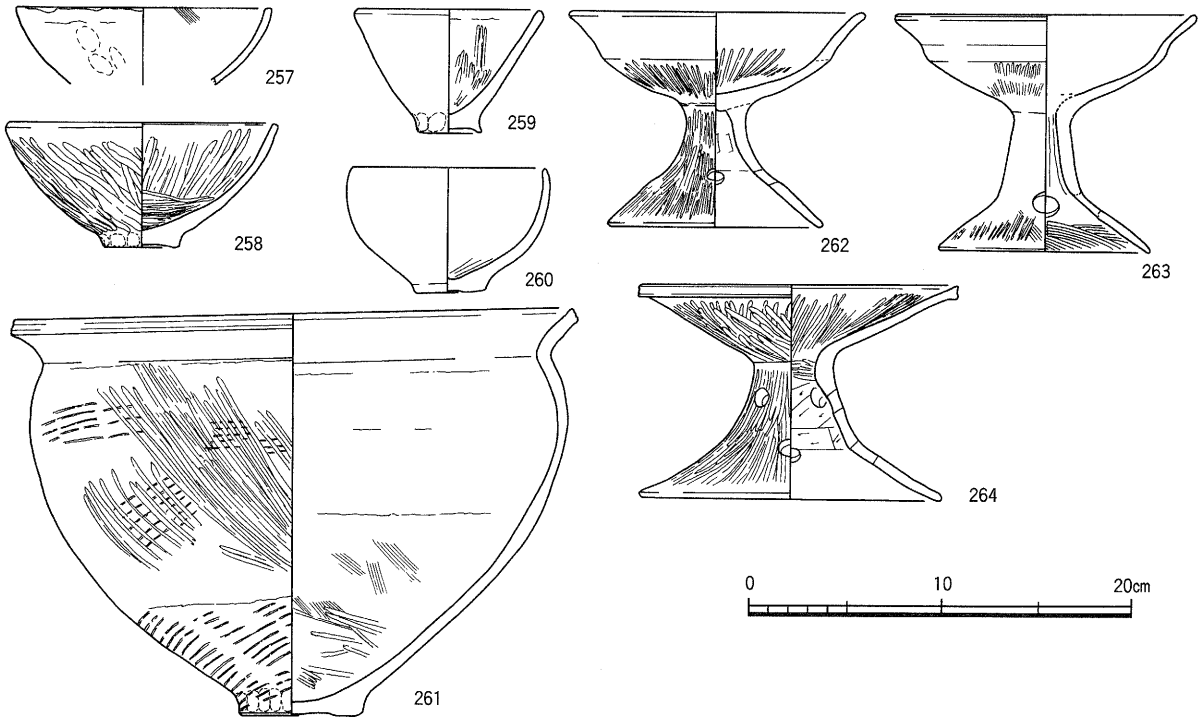
第113図　ＳＷ6001出土遺物実測図－２



第114図　ＳＷ6001出土遺物実測図－３



第115図　ＳＷ6001出土遺物位置図



第116図　ＳＷ6001出土遺物実測図－４

ＳＷ6002出土遺物（第117～119図、図版四六・八四～八八）

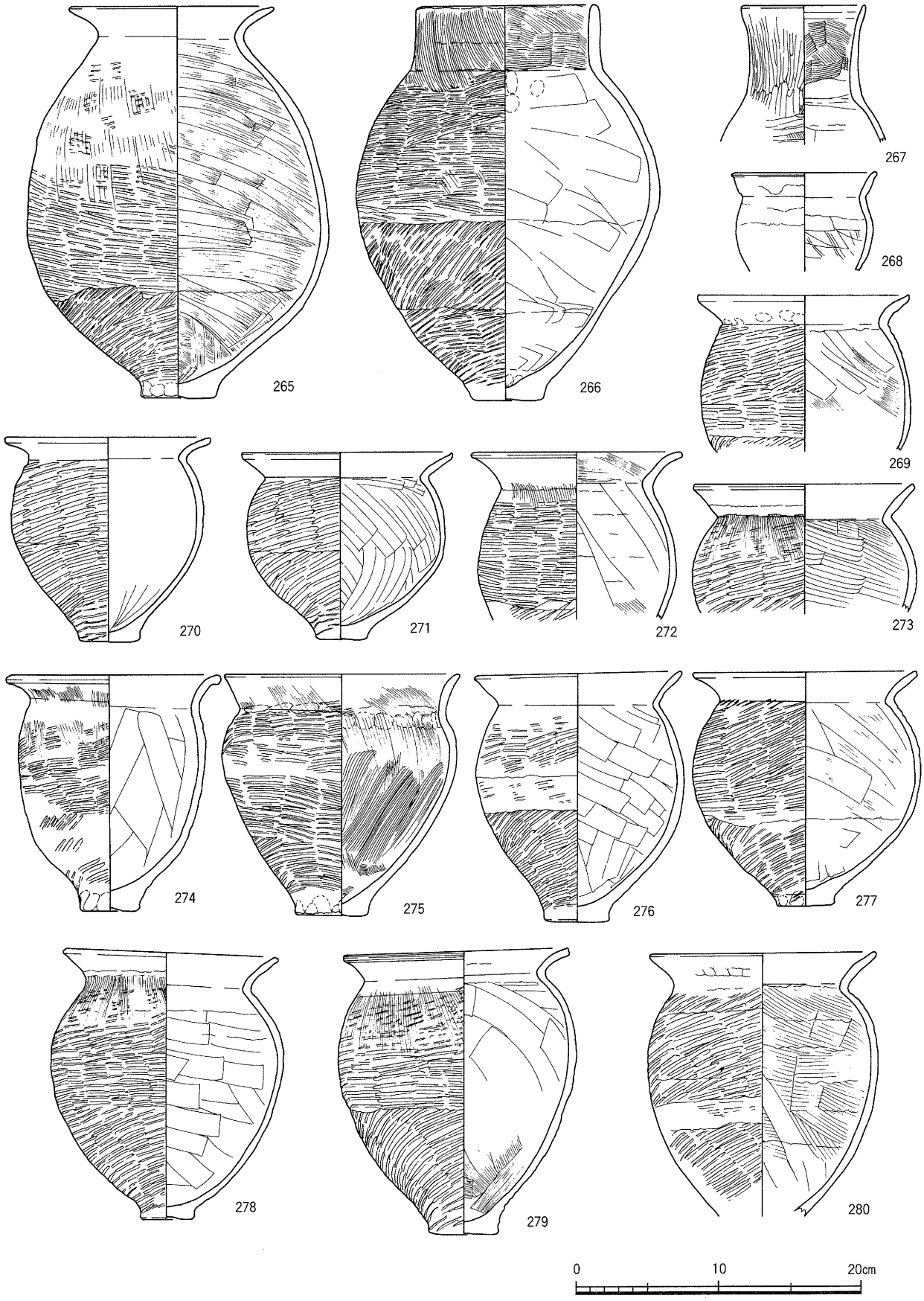
総数31点（265～295）を図化した。その内訳は壺３点（265～267）、甕21点（268～288）、鉢２点（289・290）、高杯５点（291～295）で、完形の土器が多く、器種別では甕の占める割合が非常に多い。

壺

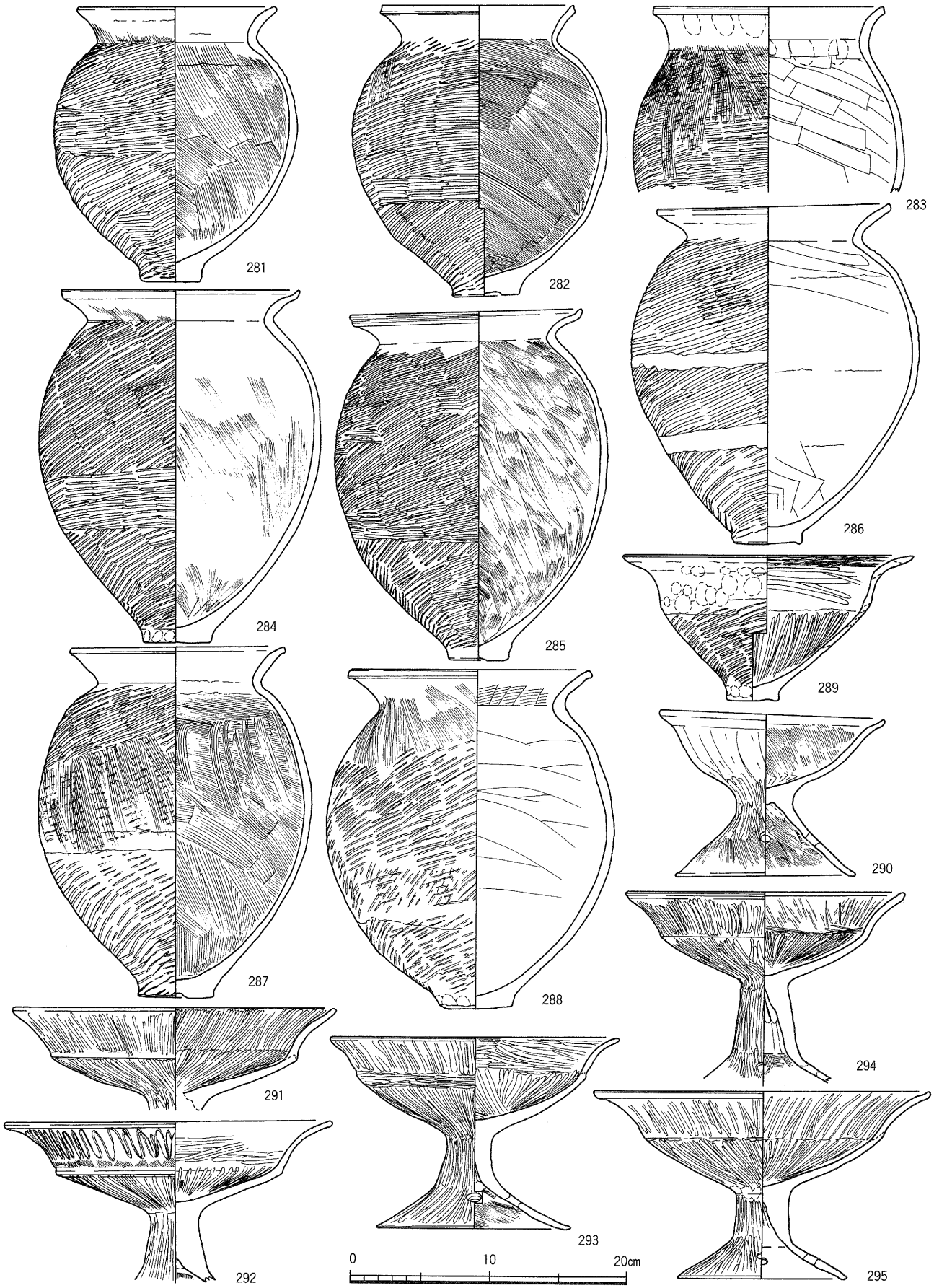
265は広口壺Ａ$_1$でほぼ完形に復元できる。口径14.4cm、器高27.8cm、底径5.0cmである。倒卵形でやや下膨れの体部形態を呈する。底部は突出しており裏面はハ形態である。体部外面は四分割成形に沿ってタタキ調整が行なわれており、上部から中位にかけて縦位のハケ調整で一部のタタキが消されている。色調は明るい淡橙色で、胎土中に0.5～１㎜程度の長石・石英・チャートを多量に含んでいる。非生駒西麓産である。266は短頸直口壺Ａである。完形品で口径12.8cm、器高28.0cm、体部最大径21.6cm、底径5.0cmを測る。体部は四分割成形によるもので、分割部分毎にタタキ調整の方向に違いがある。口頸部は直上に4.8cm伸びるもので、外面の調整はハケを施す。底部は突出しており、裏面はハ形態である。色調は淡褐灰色で、スコープで角閃石の含有が確認できる。生駒西麓産。類例の少ない器形で、製塩土器の可能性がある。267は長頸壺Ａ$_2$である。口頸部は直上に直線的に伸びた後、口縁部付近でやや外反気味に開くもので、復元口径8.8cm、口頸部高6.3cmを測る。生駒西麓産である。

甕

甕Ａは21点（268～288）で、その内訳は小形品Ⅰが６点（268～273）、中形品Ⅱが10点（274～283）、大形品のⅢが５点（284～288）である。完形ないしは完形近く復元可能なものが多い。胎土中の角閃石の含有は裸眼で観察できるものは少なく、スコープにより確認されたものが大半である。色調は①赤褐色、②橙色、③灰白色、④褐灰色であるが①ないしは④のものが多い。体部



第117図　ＳＷ6002出土遺物実測図－１



第118図　ＳＷ6002出土遺物実測図－２

外面は271・273・275を除いて煤の付着が認められる他、火熱による器面剥離のものが多く認められる。

小形品Ⅰの268～273のうち、268が体部にタタキ調整が行われていないもので、Ⅰの中でも小形で復元口径10.5cmを測る。その他は体部二分割成形で、体部形態では270がA_1、268・269・271～273がA_2に区別される。口縁端部の形態分類は、272がａ、268がb_1である以外はｄである。底部が残る270・271は共に突出底で裏面はイ形態である。体部外面のタタキ調整は下段が右上がり、上段が右上がりないしは水平方向で、272・273の体部上半から口縁部にハケ調整が施されている。

中形品Ⅱは274～283で、275・276・279・281・282が完形ないしは完形に近い。体部形態では、274・275・278がA_1、276・279・280・283がA_2、277・281・282がA_3に分類される。底部は突出が明瞭な278・281とやや突出した底部の274～277・279・282がある。底部裏面はイ形態が275～277・281、ハ形態が274・278・279・282である。口縁端部の形態分類はaが274～276・278・280・281で他はｄである。279の端面には沈線が１条巡る。体部は全て三分割によるもので、280のように中段のタタキが消されているものや282のように中段の幅が短いものがある。外面のタタキ調整は、上段と下段が右上がり、中段が水平ないしはやや右上がりで274・278・279・282・283の上段から口縁部下半にかけてハケ調整によりタタキが消されている。体部内面は板ナデないしはハケナデが全体に施されている。なお、275・278・280・282の体部外面には火熱による器面剥離が認められる。

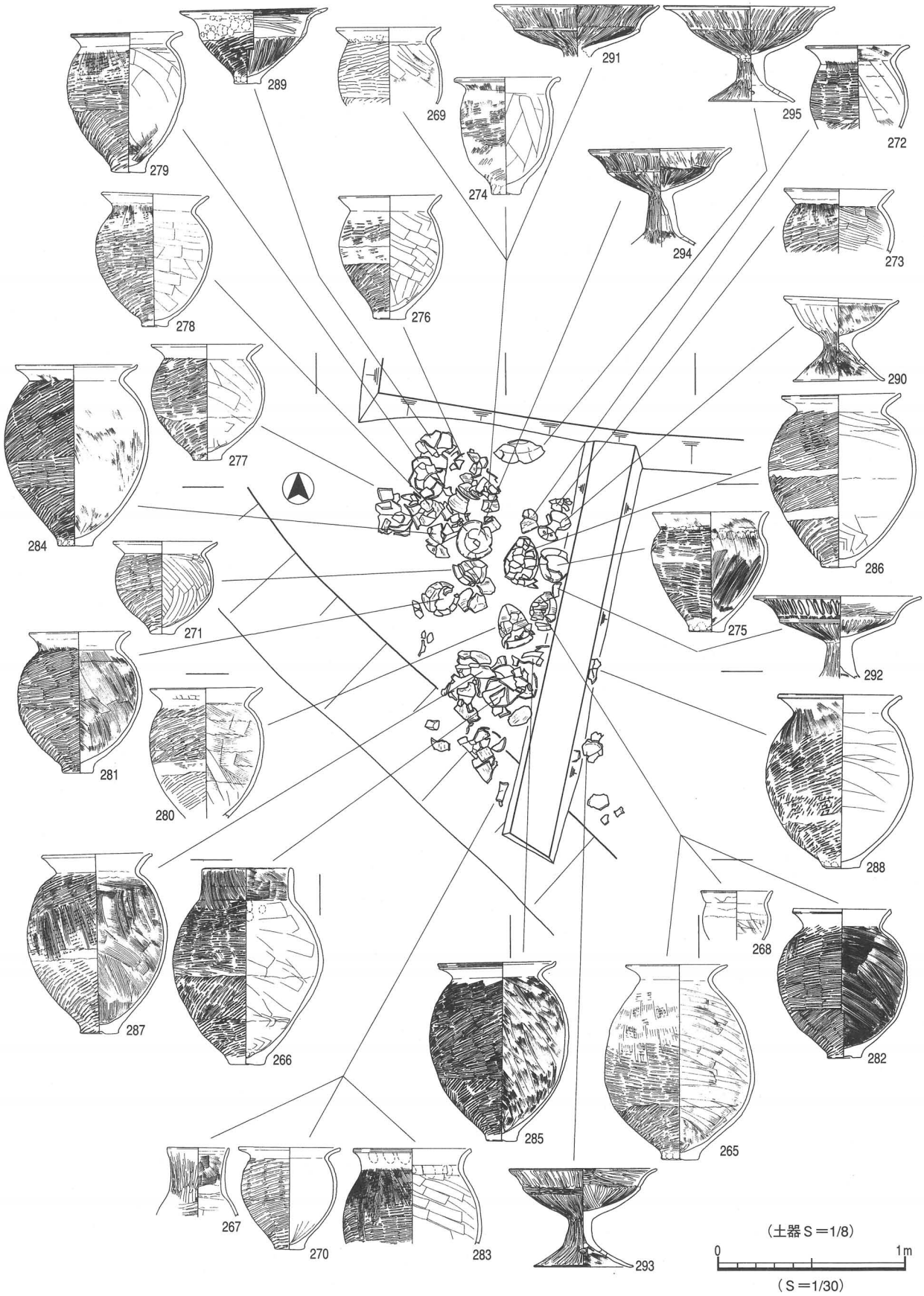
大形品Ⅲは284～288で284・286・287が完形ないしは完形に近い。体部形態は284・285・287がA_2、286・288がA_3に区別される。口縁端部の形態分類はb_1が287・288、c_2が284・285、ｄが286である。底部は突出しており裏面は284・286・288がイ形態、285・287がハ形態である。三分割成形によるもので、外面のタタキ範囲は小形Ⅰ、中形Ⅱに比して上段の占める比率が高い。なお、286のように分割成形部分の接合に際して、補足粘土の痕跡が帯状に巡るものや、体部中位および上位でタタキを消すハケメを認める287・288がある。内面は286・288以外は全面に縦位のハケナデを施す。

鉢

289は逆円錐台の体底部から上部に拡張させ外折し大きく開く口縁部を持つ中形鉢Ａである。体部の約1/2が残存している。口径21.2cm、器高10.8cm、底径3.8cmを測る。底部は突出しており、側面に指頭圧痕が残る。裏面はロ形態である。生駒西麓産である。290は台付き鉢Ａである。体部は椀形で口縁部付近で斜上方に小さく外折する。脚部は「ハ」の字に開くものでスカシ孔は４個である。完形品で口径16.5cm、器高11.9cm、脚部径13.0cmを測る。褐灰色および赤褐色の色調である。生駒西麓産である。

高杯

有稜高杯は５点（291～295）で、有稜高杯B_2の291・292・294・295と有稜高杯C_2の293に区別される。杯部と口縁部の境に段を持つ291・292・293と段を持たない294・295がある。292の段部分に沈線が１条巡る。なお、291の口縁欠損部の状況から杯体部先端に擬口縁を形成した後、外反して伸びる口縁部が作られていることがわかる。脚部は屈折して開くもので、中空のもの294・295と中実の292・293がある。杯部内外面および脚部外面には比較的丁寧なヘラミガキ調整が多用されており、292・295の杯部外面については波状文が施文されている。スカシ孔は全て４



第119図　ＳＷ6002出土遺物位置図

個である。色調は褐灰色・赤褐色である。胎土は大粒の長石が散見される293以外は良好で、角閃石はスコープで確認できるものが大半で量も僅少である。

ＳＷ6003出土遺物（第120～123図、図版四七・八八～九三）

50点（296～345）を図化した。その内訳は壺３点（296～298）、甕29点（299～327）、鉢５点（328～332）、有孔鉢２点（333・334）、高杯９点（336～344）、器台１点（345）、手焙形土器１点（335）である。完形品が数点で、破片の占める割合が多い。器種では甕が６割近くを占める。

壺

壺類は３点（296～298）で広口壺$A_3$１点（296）、二重口縁壺$A_2$１点（297）、台付き壺$B_2$１点（298）である。296は広口壺A_3で、口縁部の約1/2が残存している。口縁端部の下半に沈線が１条巡る他、口縁部内面にはヘラ描きによる２本の直線で構成される記号文が施文されている。褐灰色の色調である。胎土はやや粗く0.5～５㎜の長石が散見される他、５㎜未満の角閃石が多量に含まれている。297は二重口縁壺A_2で底部を欠く以外は完形に近く復元できる。扁球形の体部から二段に屈曲する口頸部を作るが口縁部は他の部位に比して成形は雑である。５㎜未満の角閃石を多量に含む。生駒西麓産である。298は小形の直口壺に裾部が大きく開く脚部が付く台付き壺Ｂ2である。完形品で口径7.0cm、器高13.8cm、脚部径12.0cmを測る。色調は灰白色である。胎土にはスコープで観察できる微細な角閃石が含まれているが量は僅少である。

甕

甕Ａは29点（299～327）である。その内訳は小形品Ⅰが13点（299～311）、中形品Ⅱが14点（312～325）、大形品Ⅲが２点（326・327）である。

小形品Ⅰの299～311のうち、306がほぼ完形品である。304・305が体部外面にタタキ調整が行われていないもので、他は二分割成形に沿ってタタキ調整が施されている。体部形態は破片が多く不確定な要素を含むが、A_1が299・300・304・310・311で他はA_2と区別した。底部が残存しているものは306で、やや突出しており、裏面の形態はイ形態である。口縁端部の形態分類ではａが299・301・304～306・310・311、b_1が303、c_1が302、c_2が300、c_3が309、ｄが307・308である。個々の特徴では、屈曲部に補足粘土を厚く貼る302や器壁の厚みが２㎜程度と薄い309がある。タタキ調整をハケメにより消すものが302・310、指ナデにより消すものが311であるが、いずれも体部上半から口縁部に施されている点で共通している。306は体部外面に火熱による器面剥離が顕著である。色調は赤褐色ないしは褐灰色である。309を除く胎土中に、スコープで観察できる微細な角閃石が含まれている。

中形品Ⅱは312～325で、312・318・319・324・325が完形ないしはほぼ完形に復元が可能である。体部形態では、A_2が312～316・318～325、A_3が317である。底部の形態は、突出ないしはやや突出しており、底部裏面の形態は319がイ形態、312・318・323～325がハ形態である。口縁端部の形態分類はａが316・320・322・324、b_1が314・318、c_2が312・313・317・321・323、ｄが315・319・325である。体部は323が四分割の他は三分割で、分割部位毎に方向を異にするタタキ調整が行なわれている。タタキの単位幅は３本/cm程度のものが大半を占めるが、313・314・317のようにやや太くて２本/cmのものや325のように細く４本/cmのものがある。タタキ調整を消すハケメは312・315・318が共に体部上半付近に認められる他、324のように１段目と２段目の接合部に使用されるものがある。色調は赤褐色ないしは褐灰色である。胎土中の角閃石は

320・325以外で確認されているが、321・324のように1㎜程度の粒径が裸眼で観察されるのは少なく、スコープでのみ確認できるものが大半である。

大形品Ⅲは2点（326・327）で、共に底部を欠く破片である。体部形態は326がA_2、327がA_3である。口縁端部の形態分類はaが326、b_1が327である。体部外面のタタキは太く共に2本/cm程度である。褐灰色の色調で共に生駒西麓産である。

鉢

鉢は7点(328～334）で、その内訳は小形鉢$A_2$1点(330)、小形鉢$B_1$2点(328・329)、小形鉢$B_2$2点(331・332)、有孔鉢A1点(333)、有孔鉢B1点(334)である。330は小形鉢A_2である。色調は淡褐灰色である。生駒西麓産である。小形鉢B_1の328・329は共に逆円錐台形を呈するもので、底部は突出する328と突出しない329がある。口縁端部の成形はやや雑で、未整形の部分を残す。色調は共に褐灰色である。生駒西麓産である。331・332は上げ底の底部を有する小形鉢B_2である。331がほぼ完形である。共に口縁端部が未整形で332は波状口縁を呈する。色調は共に褐灰色である。スコープで角閃石の含有を認める。生駒西麓産である。333・334は有孔鉢で、底部が平らな333が有孔鉢A、尖り気味の底部を有する334が有孔鉢Bにあたる。333の口縁部は未整形で波状口縁の形状を呈する。色調は333が赤褐色、334が橙色である。共に生駒西麓産である。

高杯

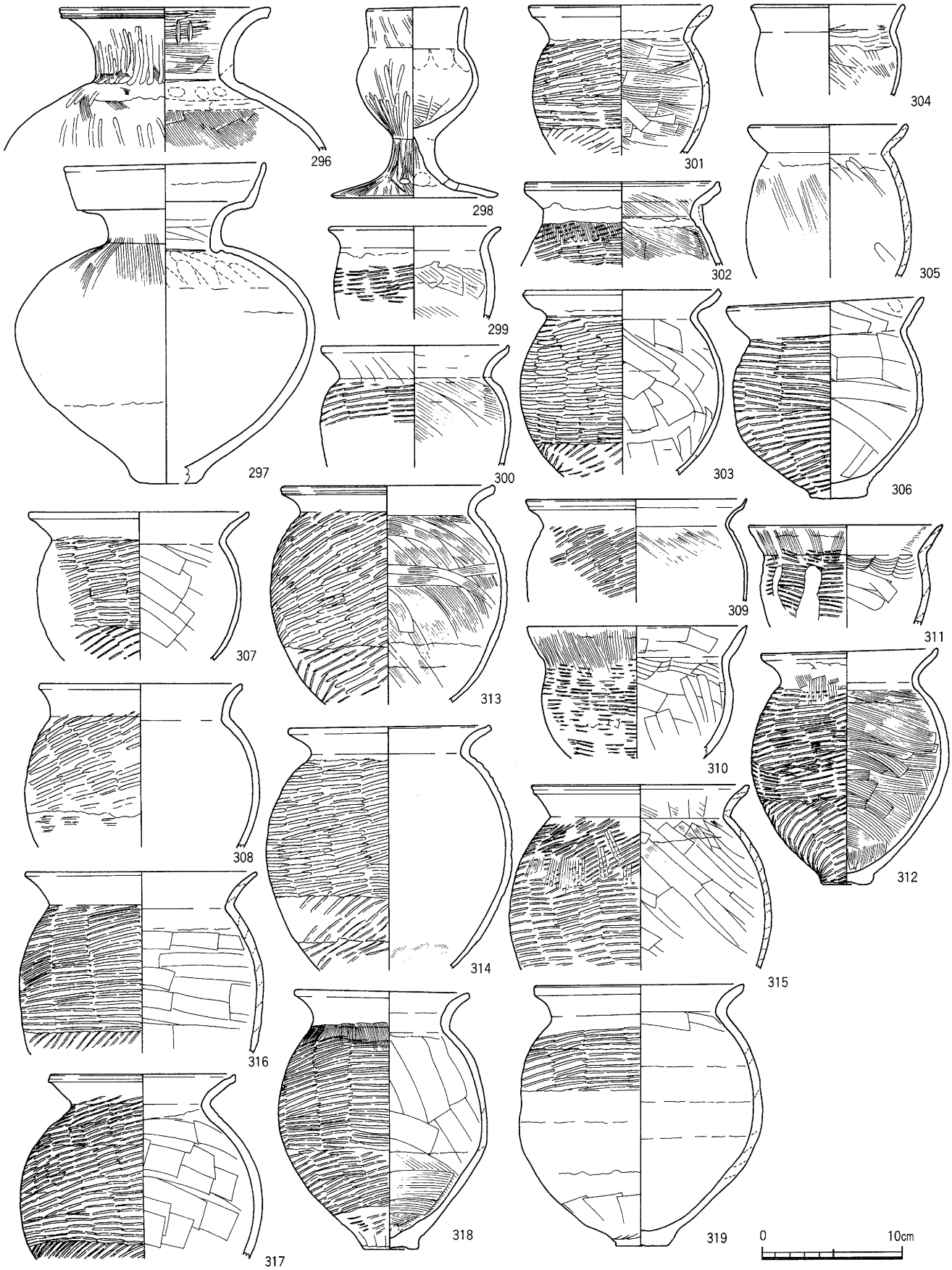
高杯は9点（336～344）で内訳は、有稜高杯B_2が3点（336～338)、有稜高杯C_2が1点（341)、有稜高杯D_1が2点（339・340)、椀形高杯Bが1点（342)、椀形高杯$B_1$1点（343）椀形高杯Cが1点（344）である。有稜高杯B_2の336～338は杯部径が20.8～23.7cmを測る。有稜高杯D_1の339・340は杯部径18.5～18.9cmを測る。杯部の各比率法量は、有稜高杯B_2が口稜比70.1～78.9、口縁比18.9～22.5。有稜高杯C_2が口稜比74.6、口縁比17.9。有稜高杯D_1が口稜比66.1～67.5、口縁比23.2を測る。杯部の形状では、杯体部が深めで、口縁部は大きく外反して伸び、端面は幅狭の面を形成している。脚部は屈折して開くもので、338が中実の他は中空である。スカシ孔は337・339・340が3個、338・341は4個である。338の裾部には3条の直線で構成されるヘラ記号がある。色調は淡褐灰色、橙色、赤褐色で比較的明るい色調のものが多い。胎土は比較的良好なもので、角閃石については裸眼で観察できるものは少なく、大半がスコープで確認できる微細なものである。343は椀形高杯B_1である。完形品で口径11.5cm、器高8.5cm、裾部径7.8cmを測る。色調は橙色である。胎土には0.5㎜以下の長石の他、スコープで確認できる角閃石が僅少含まれいる。344の椀形高杯Cは大きく開く脚部に椀形の杯部が付く。杯部は完存しており、杯部口縁部付近に3条の沈線が巡る。全体に丁寧な作りで、杯部および脚部外面は密なヘラミガキを多用している。スカシ孔は4個である。色調は赤褐色である。生駒西麓産である。

器台

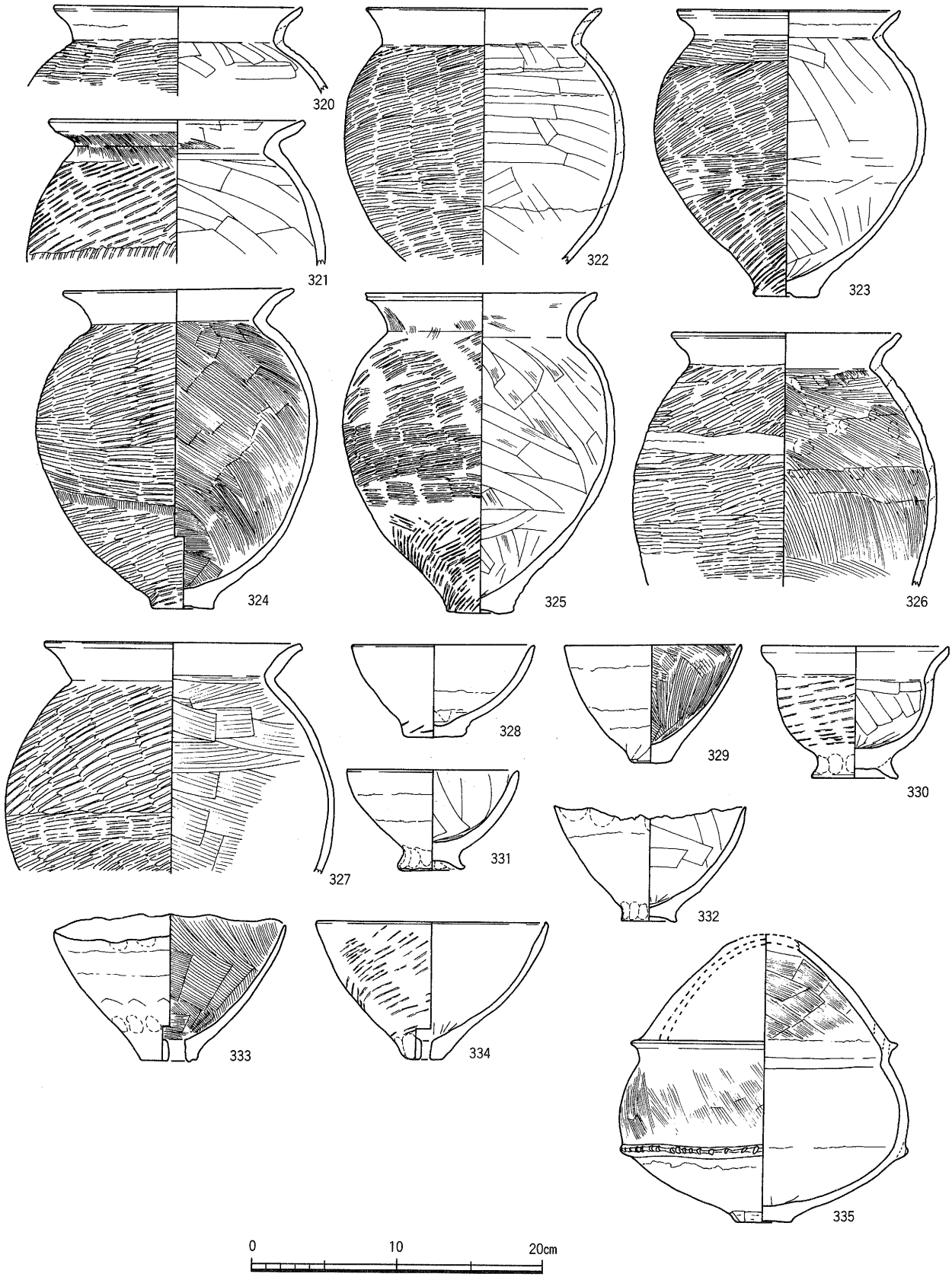
345は大形器台A_1である。上部を欠損する以外は完存している。体部の上下2段にスカシ孔が穿たれており、上下段共に4個を数える。色調は褐灰色で、胎土中に0.5㎜以下の角閃石が多量に含まれている。生駒西麓産。

手焙形土器

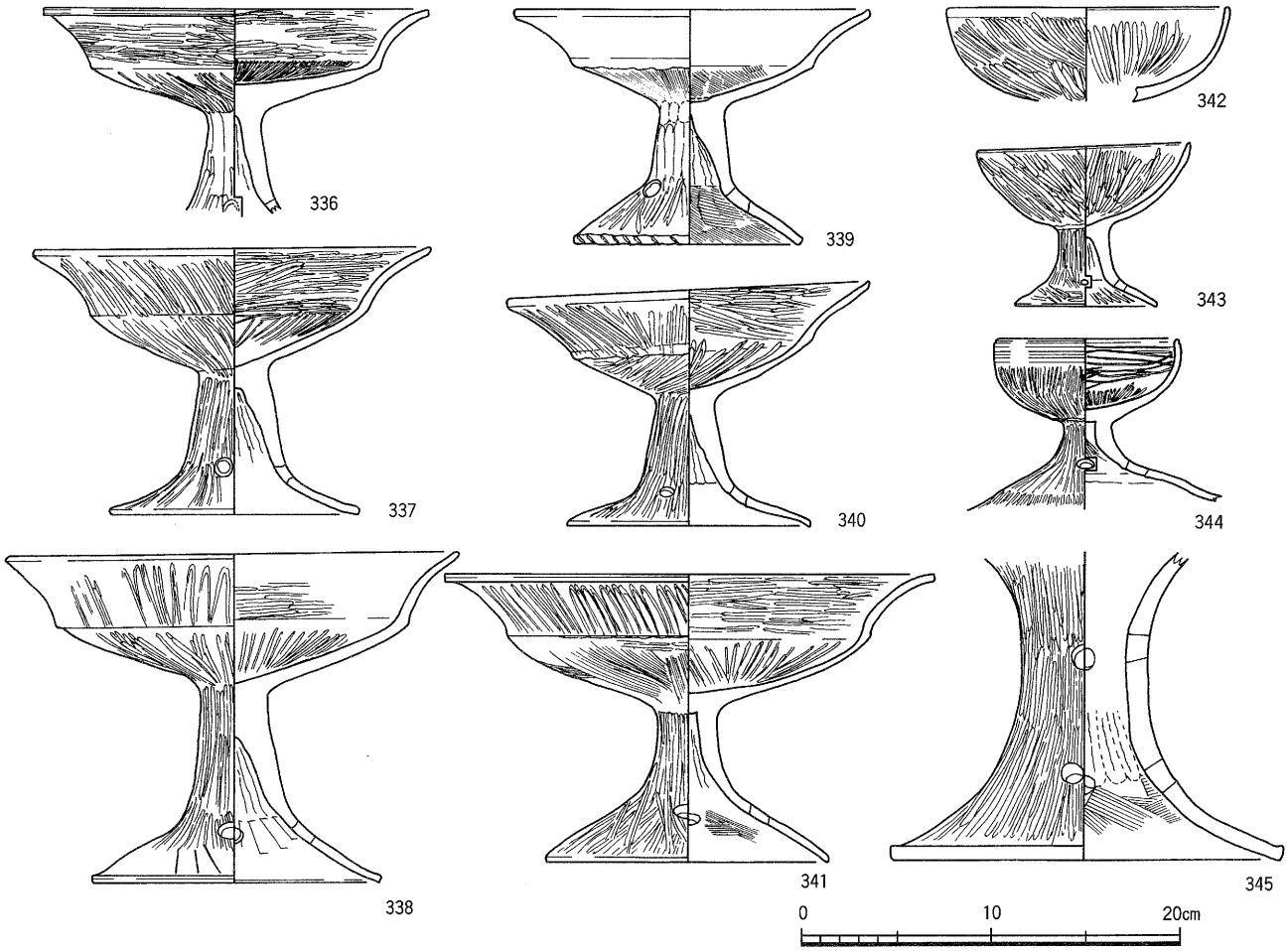
335は手焙形土器Bに分類されるもので、約1/2が残存している。浅い鉢形の底部から体部は内湾して伸びるもので、覆部は欠損しており全容は不明であるが三角形状を呈するものと推定され



第120図　ＳＷ6003出土遺物実測図－１



第121図　ＳＷ6003出土遺物実測図－２



第122図　ＳＷ6003出土遺物実測図－３

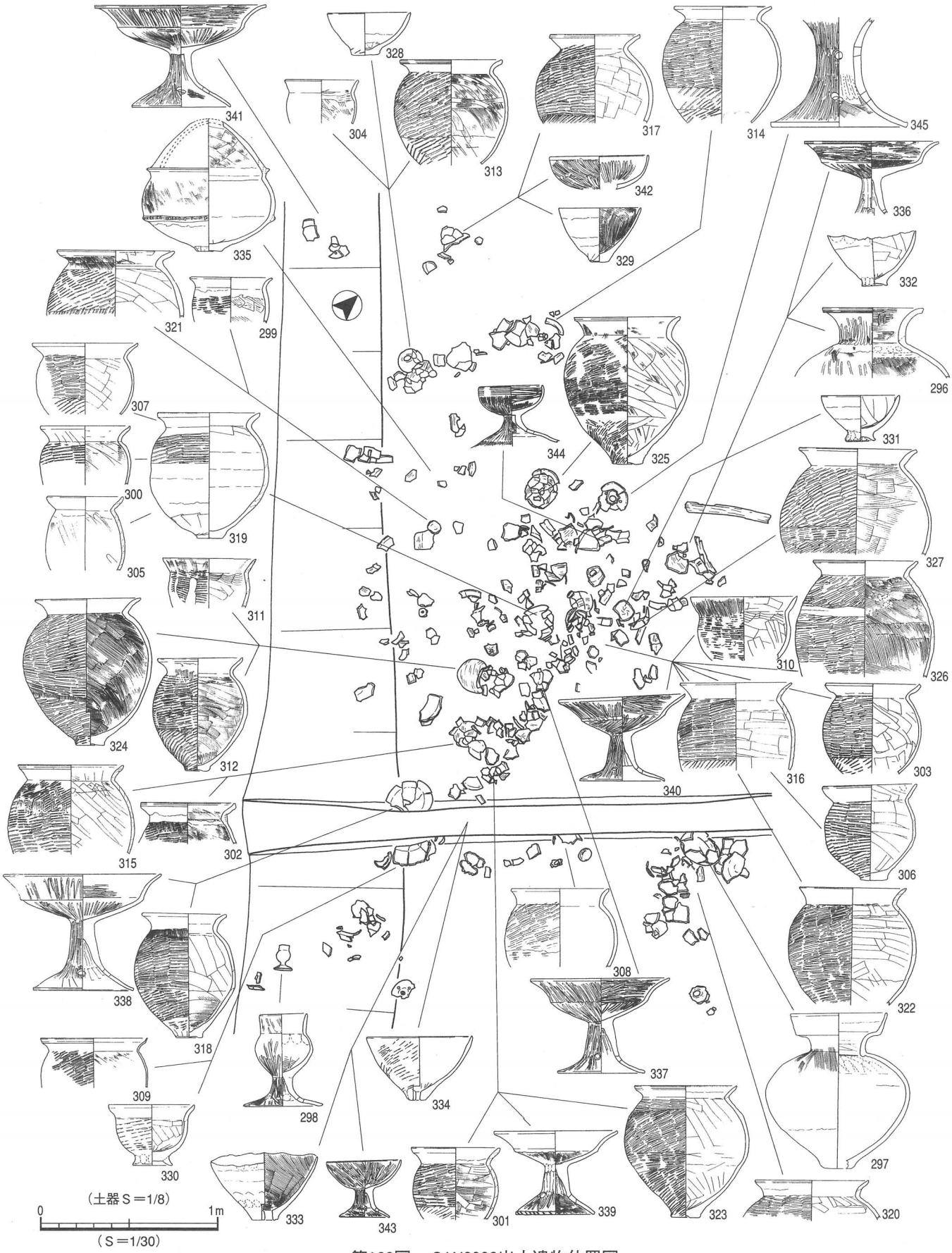
る。底部と体部の境は凸帯で区画されており、凸帯上部に刻目が施されている。内面の全面に亘って煤の付着が認められる。色調は淡褐色である。スコープで確認できる微細な角閃石を多く含む。生駒西麓産。

ＳＷ6004出土遺物（第124・125図、図版四八・九四・九五）

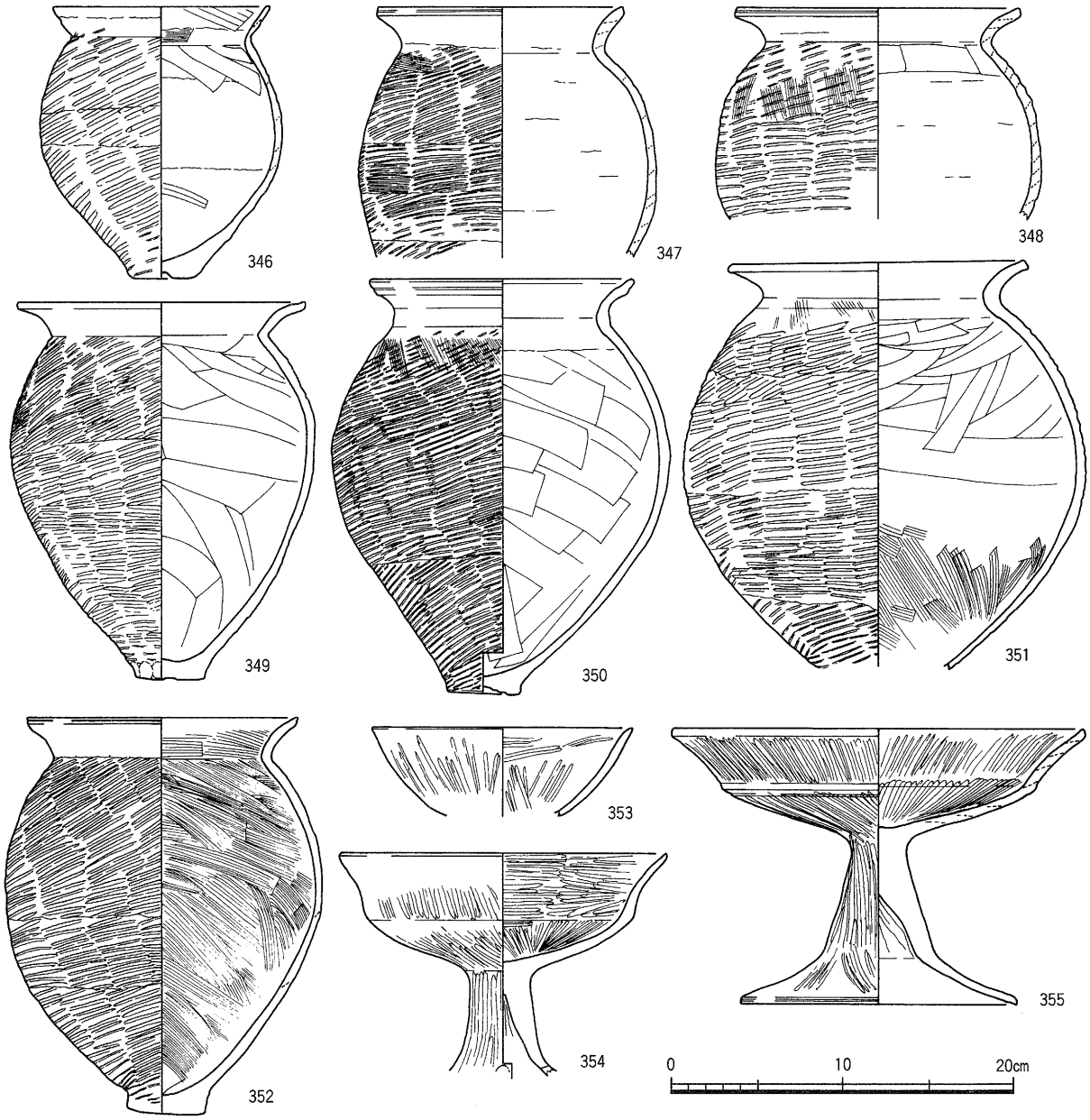
総数で10点（346～355）を図化した。その内訳は甕７点（346～352）、鉢１点（353）、高杯２点（354・355）である。

甕

甕Ａは７点（346～352）を図化した。346は小形品のＩにあたる。ほぼ完形に復元が可能なもので、口径12.7cm、器高16.0cm、体部最大径14.2cm、底径3.5cmを測る。体部形態はA_2で底部は突出しないもので、裏面はハ形態である。体部は二分割成形によるもので、タタキ調整の幅は太く２本/cm程度である。口縁端部の形態はaであるが、全体に雑な作りで未成形部分を残す。色調は赤褐色である。生駒西麓産。347・348は中形品のⅡで、体部形態は347がA_2、348がA_3で口縁端部の形態は共にｄである。348の体部外面上位でタタキを消すハケが散発的に施されている。色調は347が灰白色、348が赤褐色で、胎土中にスコープで確認できる微細な角閃石が含まれている。349～352は大形品のⅢにあたる。349・352がほぼ完形品である。体部形態では、A_2が349・350・352、A_3が351に区別される。底部形状は突出する352と突出しない349・350があり、底部



第123図　ＳＷ6003出土遺物位置図



第124図　ＳＷ6004出土遺物実測図

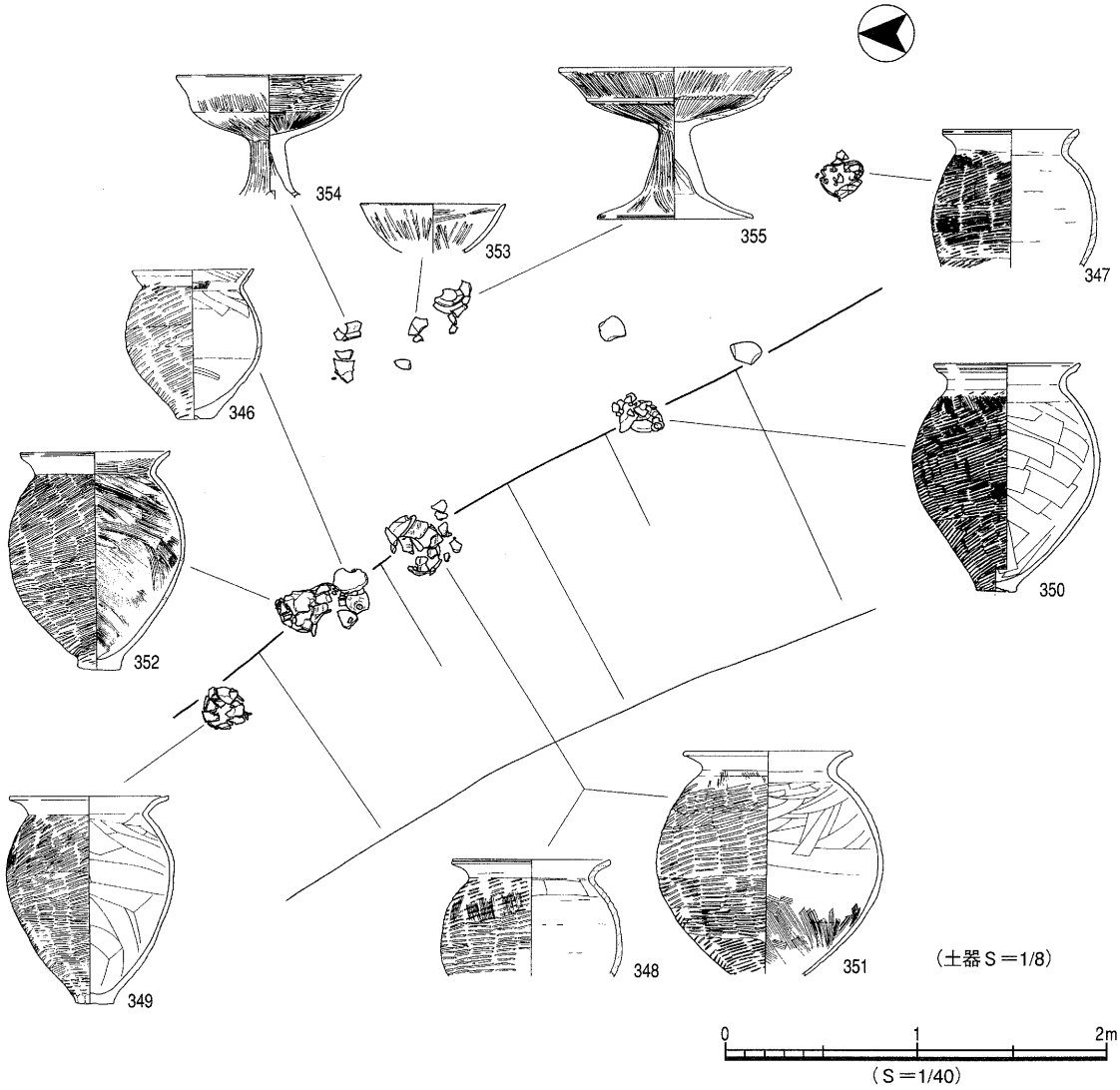
裏面の形態は352がイ形態、349・350がハ形態である。口縁端部の形態に付いては351がｂ$_1$、350がｃ$_2$、349・352がｄである。色調は褐灰色で、胎土中にスコープで確認できる微細な角閃石が少量含まれている。

鉢

353は鉢Ｂに分類されるが底部が不明なため細分はできない。体部内外面はヘラミガキが多用されている。色調は褐灰色で、胎土中にスコープで確認できる微細な角閃石が少量含まれている。

高杯

高杯は２点（354・355）で、内訳は354が有稜高杯Ｃ$_2$、355が有稜高杯Ｂ$_2$に分類される。354は口径に比して杯部が深い。355の杯部は稜線によって画された口縁部下半に幅広の段を形成す



第125図　ＳＷ6004出土遺物位置図

る他、体部外面の上半に小さな段が廻る。２点共に杯部内外面および脚部外面の調整はヘラミガキが多用されている。脚部は共に中実である。355の脚部形態は屈折して開くもので、スカシ孔は認められない。色調は354が淡褐灰色、355が淡橙色である。共にスコープで確認できる微細な角閃石を極少量含んでいる。

ＳＷ6005出土遺物（第126～131図、図版四九・五〇・九五～一〇二）

62点（356～417）を図化した。その内訳は壺13点（356～368）、甕32点（369～400）、鉢９点（401～409）、高杯８点（410～417）である。

壺

壺は13点で内訳は広口壺Ａ$_1$２点（356・357）、広口壺Ａ$_2$２点（359・361）、広口壺Ａ$_3$１点（358）、広口壺Ｂ$_1$１点（360）、長頸壺Ａ$_2$１点（362）、広口直口壺３点（363～365）、二重口縁壺Ｂ２点（366・367）、台付壺Ｂ$_2$１点（368）である。

356・357は広口壺Ａ$_1$で体部中位以下を欠く。共に口縁部は完存しており、直口を呈する356と内傾する端面に１条の沈線が巡る357がある。体部外面は共にヘラミガキが多用されており、356

の頸部付近は縦位のハケ調整が行なわれている。357の内外面に煤の付着が認められる。色調は356が淡橙色、357が褐灰色である。共に生駒西麓産である。359は広口壺A_2である。ほぼ完形に復元が可能で、口径13.4cm、器高22.7cm、体部最大径22.1cm、底径4.1cmを測る。底部裏面に木葉痕がある。色調は淡褐灰色で、胎土中に0.1～4㎜程度の長石・石英・チャート・角閃石が多量に含まれている。361は広口壺A_2である。ほぼ完形で、口径14.8cm、器高20.1cm、体部最大径25.7cm、底径4.2cmを測る。底部は小さく突出するドーナツ底のハ形態である。色調は赤褐色である。胎土には0.5～3㎜の長石粒が多量に含まれている。0.1㎜程度の角閃石を含む生駒西麓産である。358は扁球形の体部を有する広口壺A_3である。360は広口壺B_1に分類される。ほぼ完形品で口径13.5cm、器高20.9cm、体部最大径21.4cm、底径5.1cmを測る。全体に丁寧な作りで、口頸部から体部にかけて密なヘラミガキが施されている。体部下半の調整はハケの後ヘラミガキを行う。体部中位以下に煤の付着が認められる。色調は褐灰色である。生駒西麓産である。362は長頸壺A_2で口径10.9cm、器高14.4cm、体部最大径12.5cm、底径4.4cmを測る。外面は体部上半から頸部下半に粗いナデが施される以外は未調整である。色調は淡褐灰色である。胎土には0.1～0.4㎜の砂粒が多量に含まれている。生駒西麓産である。363～365は広口直口壺である。363が小片、364・365が1/2程度残存している。364・365は中形の広口直口壺である。共に長胴形の体部で、口頸部が外反する364と直線的に伸びる365がある。法量は364が口径14.2cm、器高20.0cm、体部最大径17.1cm、底径4.4cm。365が口径14.8cm、器高22.6cm、体部最大径18.0cm、底径5.0cmを測る。共に体部外面は縦位のヘラミガキが多用されている。色調は364が赤褐色、365が褐灰色である。共に生駒西麓産である。366・367は共に装飾を施した二重口縁壺Bに分類される。共に口頸部は完存している。366は口径19.1cm、口頸部高7.6cmを測る。外傾する面を有する口縁端面に3条の擬凹線と端面の上下および口縁部下端に刻み目を施す。なお、SW6001から出土した土器片と接合している。367は大形品で口径27.6cm、口頸部高11.9cmを測る。口縁部は外反して開くもので端部は垂下し幅広の端面を作る。端面には3条の凹線と竹管押圧円形浮文が全体で24個巡る。口縁部下半には刻み目文と3個の竹管押圧円形浮文を1単位とする文様が6箇所に認められる。その他、体部と頸部の境に貼付け凸帯の痕跡が認められる他、体部上半に波状文が認められる。共に比較的丁寧な作りのもので、各部位の調整にヘラミガキが多用されている。色調は共に褐灰色である。生駒西麓産である。368は台付壺B_2の小片である。形態的には298に近いものと考えられる。色調は橙色である。胎土中にスコープで確認できる角閃石が含まれている。

甕

甕Aは32点（369～400）を図化した。その内訳は小形品Ⅰが4点（369～372）、中形品Ⅱが18点（373～390）、大形品Ⅲが8点（391～398）、超大形品Ⅳが2点（399・400）である。

小形品Ⅰは369～372で、369が完形品で370・371が完形近くに復元が可能である。口縁部の形態では小さく外折する369、大きく外折する370・371、外反して開く372に区別されるが口縁端部は一様に丸く終わるa形態である。体部形態は369～371がA_1、372がA_2に分類される。底部が残存する369～371はいずれも突出するもので、裏面の形態はイ形態である。体部外面のタタキ調整は体部下半にのみ残る369を除けば、二分割成形に沿って行われている。体部内面はハケナデが多用されている。外面に煤が付着するものは、370を除くものに認められ、そのうち372は加熱による器面の剥離が著しい。色調は369が褐灰色、370が橙色、371・372が赤褐色である。4点共に

角閃石の含有を認める。生駒西麓産である。

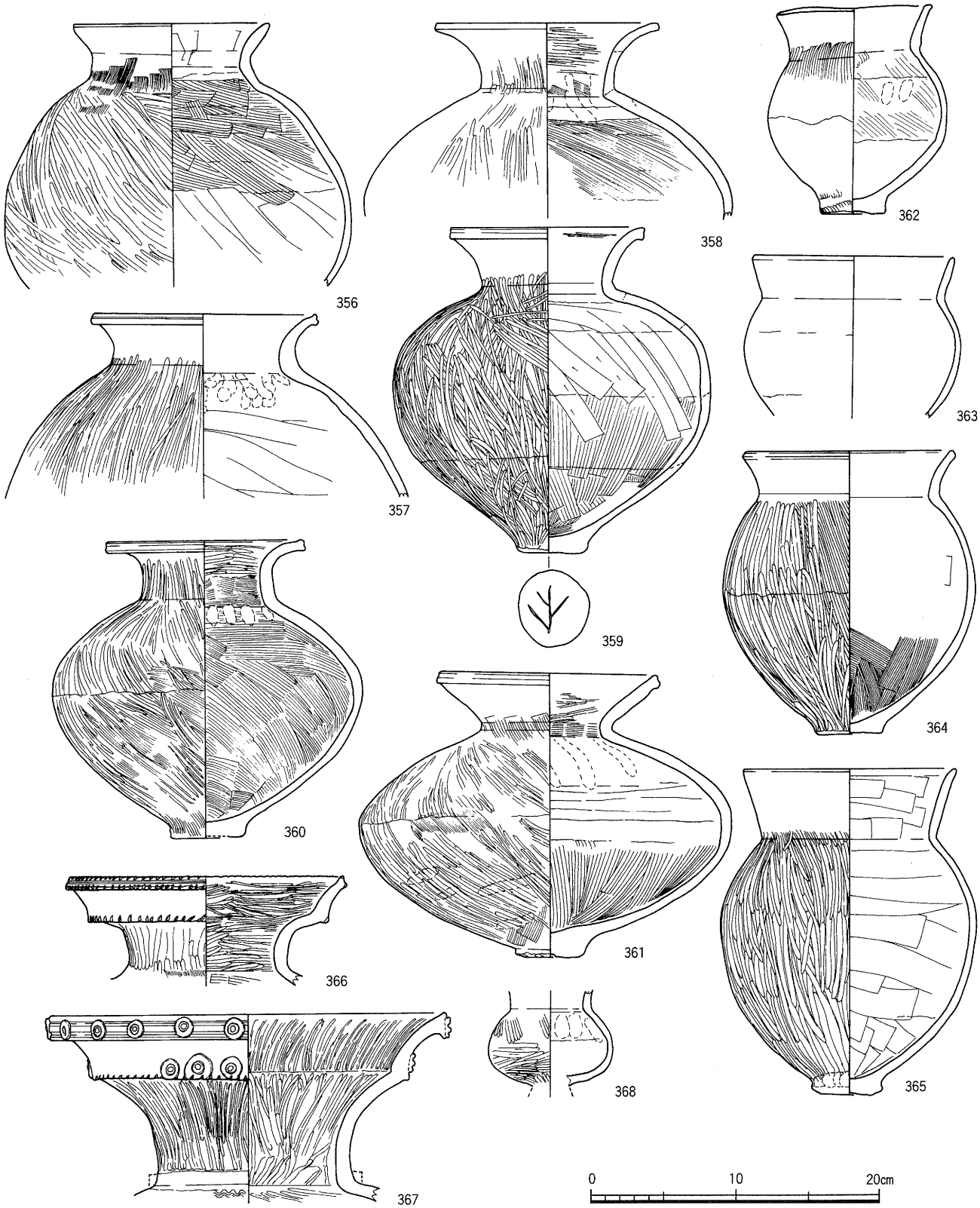
中形品Ⅱは373～390で、そのうち381～390は残存率が3/4から完形品のものである。体部形態は残存率が高い378～390に限定すれば379～381・384がA_1、378・382・383・385～390がA_2に区別される。口縁端部の形態分類は、aが373・374・376・378・383・385・387・390、b_1が377・379・384・389、c_2が388、dが375・380・381・382・386に区別される。底部は突出ないしは突出気味で、裏面の形態は382・383・387・388・390がイ形態、381・385・386・389がハ形態である。体部外面のタタキ調整は二分割ないしは三分割に沿って行なわれており、タタキ幅は粗いもので２本/cmであるが大半は３本/cm程度である。タタキ調整の一部を消す形で施されているハケメについては、体部上半から口頸部にかけて行われている375・380・383・390と体部中位付近に施される384・386・387がある。体部内面の調整は板ナデおよびハケナデを多用している。残存率が高いもののうち外面に煤の付着が認められない378・384・390以外は煮沸機能としての使用を示す外面の煤、加熱による器面の剥離さらに内面には炭化物の付着が認められる。色調は灰白色、赤褐色、淡褐灰色、褐灰色に区別される。胎土においては、大半がスコープで確認できる程度の微細な角閃石を含んでおり、生駒西麓産が推定される。383については、角閃石を含むものの灰白色の色調で、タタキ調整が生駒西麓産に比して幅広で不明瞭であることから搬入品と推定される。

大形品のⅢは391～398で、そのうちの392・393・398がほぼ完形である。体部の形態は全て長胴形を呈するもので、体部最大径が中位にある甕A_2に分類される。口縁端部の形態分類では、aが391～393・395、c_2が394、dが398である。底部裏面の形態は391・397・398がイ形態、393がロ形態、392・396がハ形態である。なお、398の裏面に木葉文が認められる。体部外面のタタキ調整は三分割ないしは四分割に沿って行なわれている。タタキ調整を消すハケメは392・393・395・397・398に認められ、１段目と２段目の境付近と最上部に施されるものが多い。体部内面の調整は板ナデおよびハケナデを多用している。色調は赤褐色・褐灰色である。胎土中にスコープで確認できる微細な角閃石が多量に含まれている。

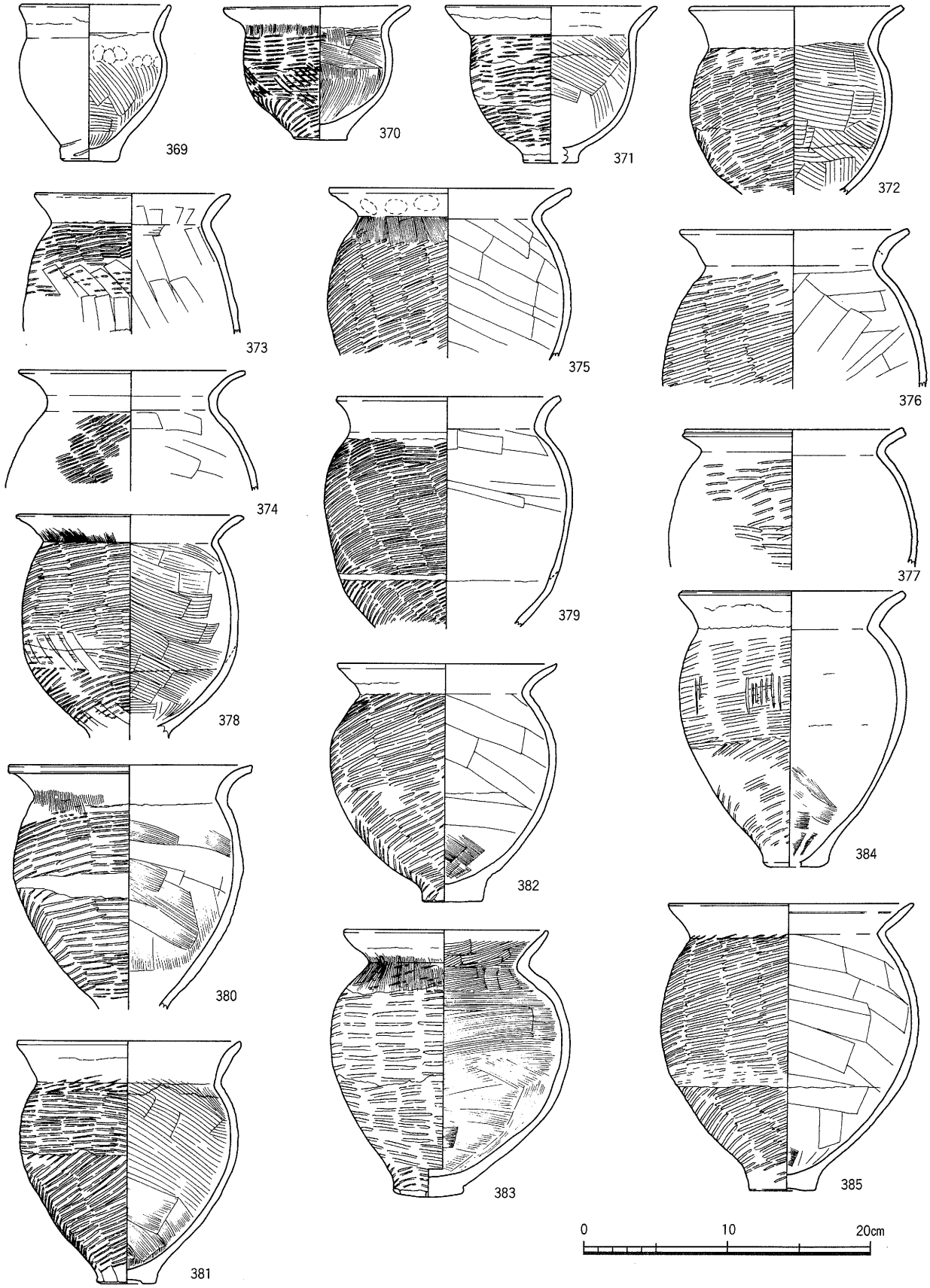
超大形品のⅣは399・400の２点である。各部位の法量は、399が口径17.2cm、器高29.8cm、体部最大径22.8cm、底径5.2cm、400が口径17.6cm、器高29.5cm、体部最大径26.2cm、底径4.4cmを測る。体部形態の違いから399がA_2、400がA_3に分類される。口縁端部の形態分類ではaが400、b_1が399である。底部裏面の形態は399がハ形態、400がイ形態である。体部外面のタタキは399が三分割、400が四分割に沿って行われている。体部内面は板ナデによる調整が行なわれている。色調は399が橙色、400が淡褐灰色である。胎土は400がやや粗で、0.1～4mm大の砂粒が多く含んでいる他、共にスコープで微細な角閃石の含有を認める。なお、399の外面には煤の付着が認められない。

鉢

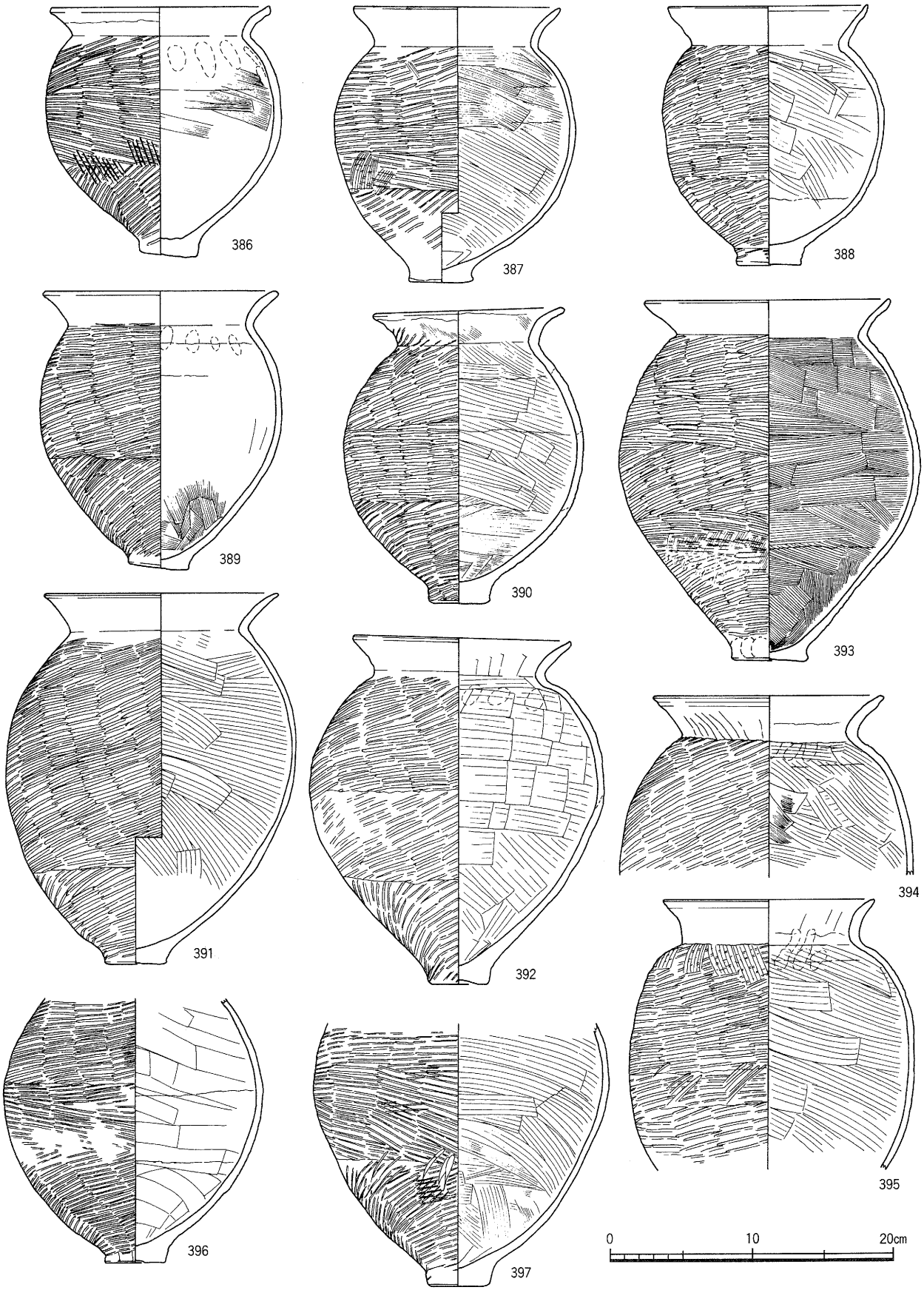
鉢は９点(401～409)で内訳は小形鉢$B_1$５点(401～405)、有孔鉢Ａ１点(406)、大形鉢Ｄ２点(407・408)、台付鉢Ｂ１点(409)である。小形鉢B_1は体部外面にタタキを施す401・402とナデにより器面を平滑にする403～405がある。底部裏面はドーナツ底のハ形態である。401・402は共に完形で、内外面の成形・調整ならびに色調・胎土に共通点が認められ、同一工人による可能性が高い。色調は403が赤褐色の他は淡褐灰色である。胎土中にスコープで確認できる角閃石が含まれている。全て生駒西麓産である。406は有孔鉢Ａである。孔は底部の中央よりややずれた位置に焼成前に穿たれている。色調は褐灰色である。生駒西麓産である。407・408は大形鉢Ｄである。



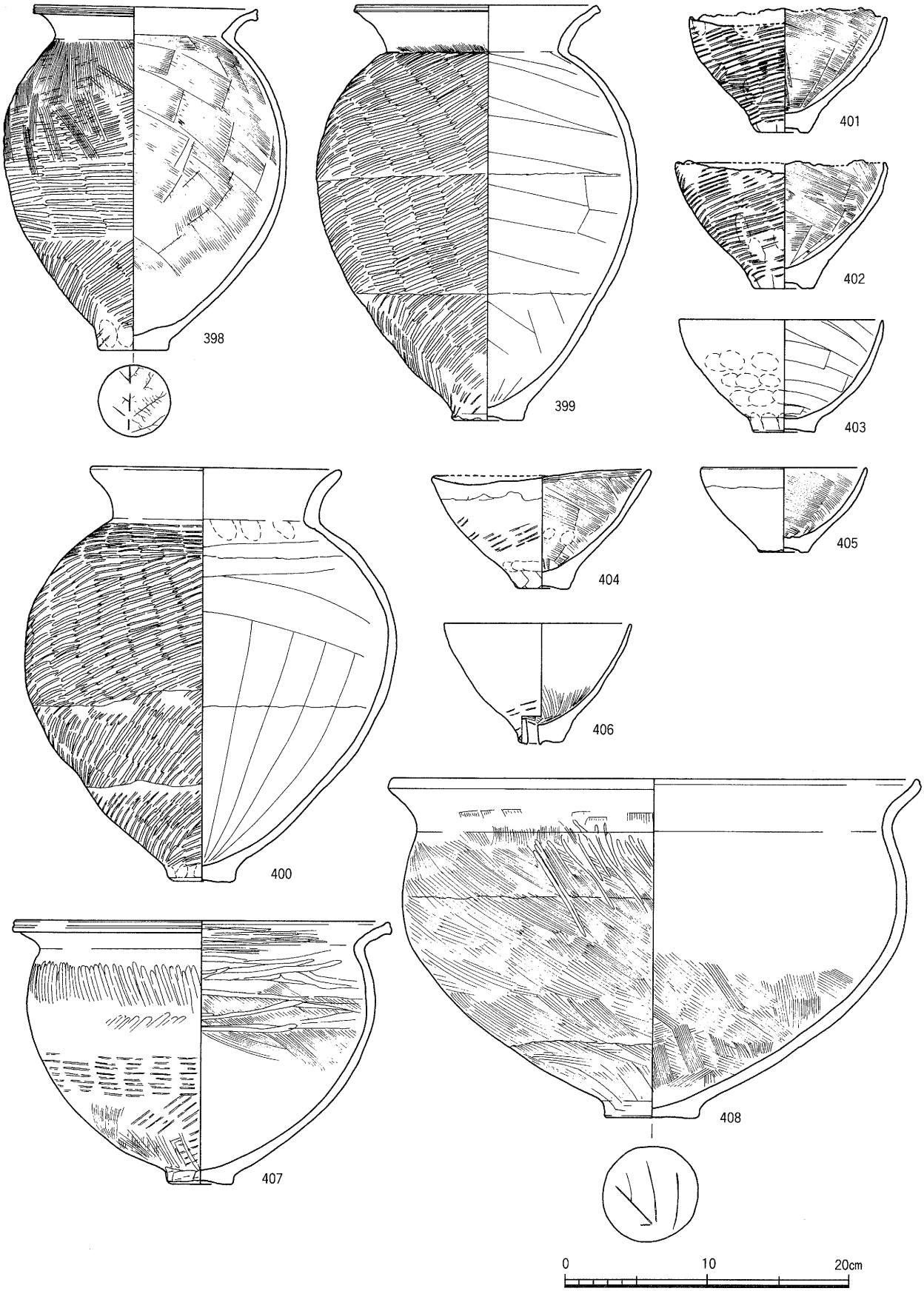
第126図　ＳＷ6005出土遺物実測図－１



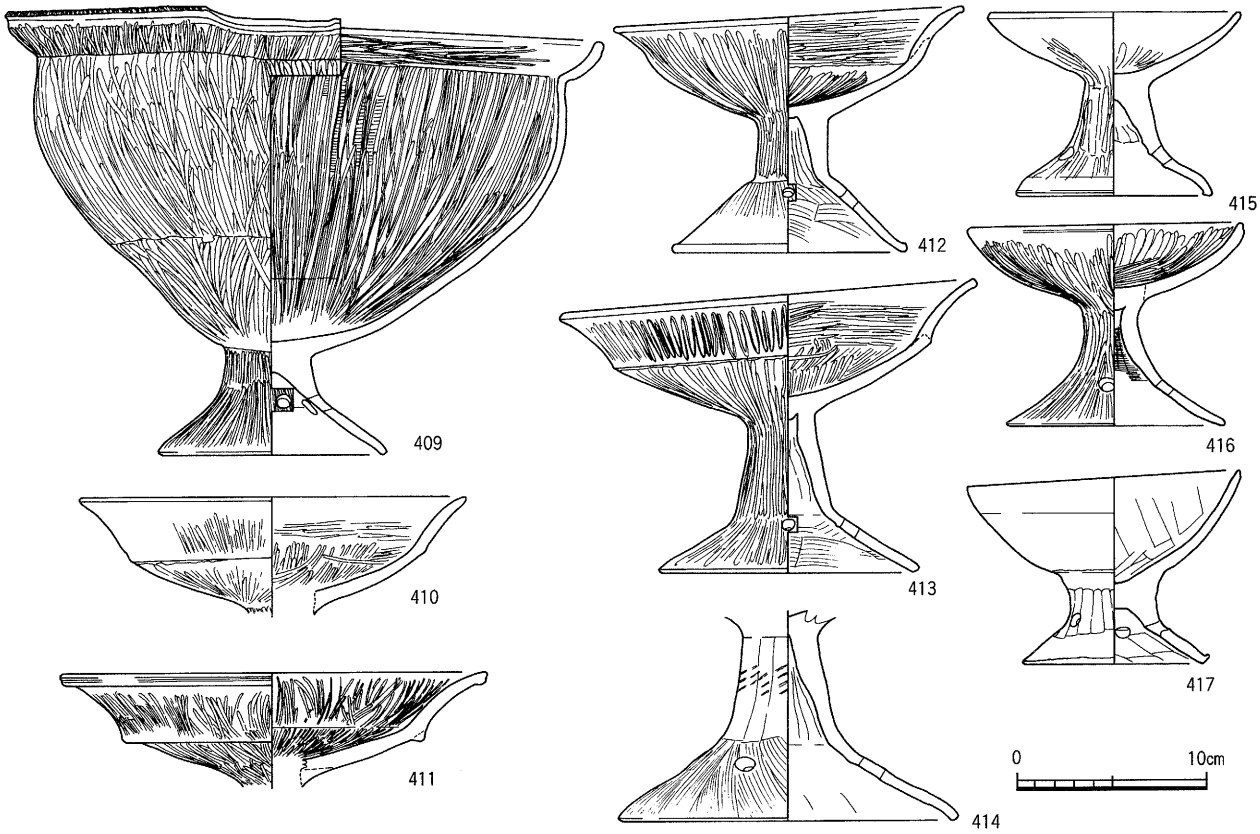
第127図　ＳＷ6005出土遺物実測図－２



第128図　ＳＷ6005出土遺物実測図－３



第129図　ＳＷ6005出土遺物実測図－４

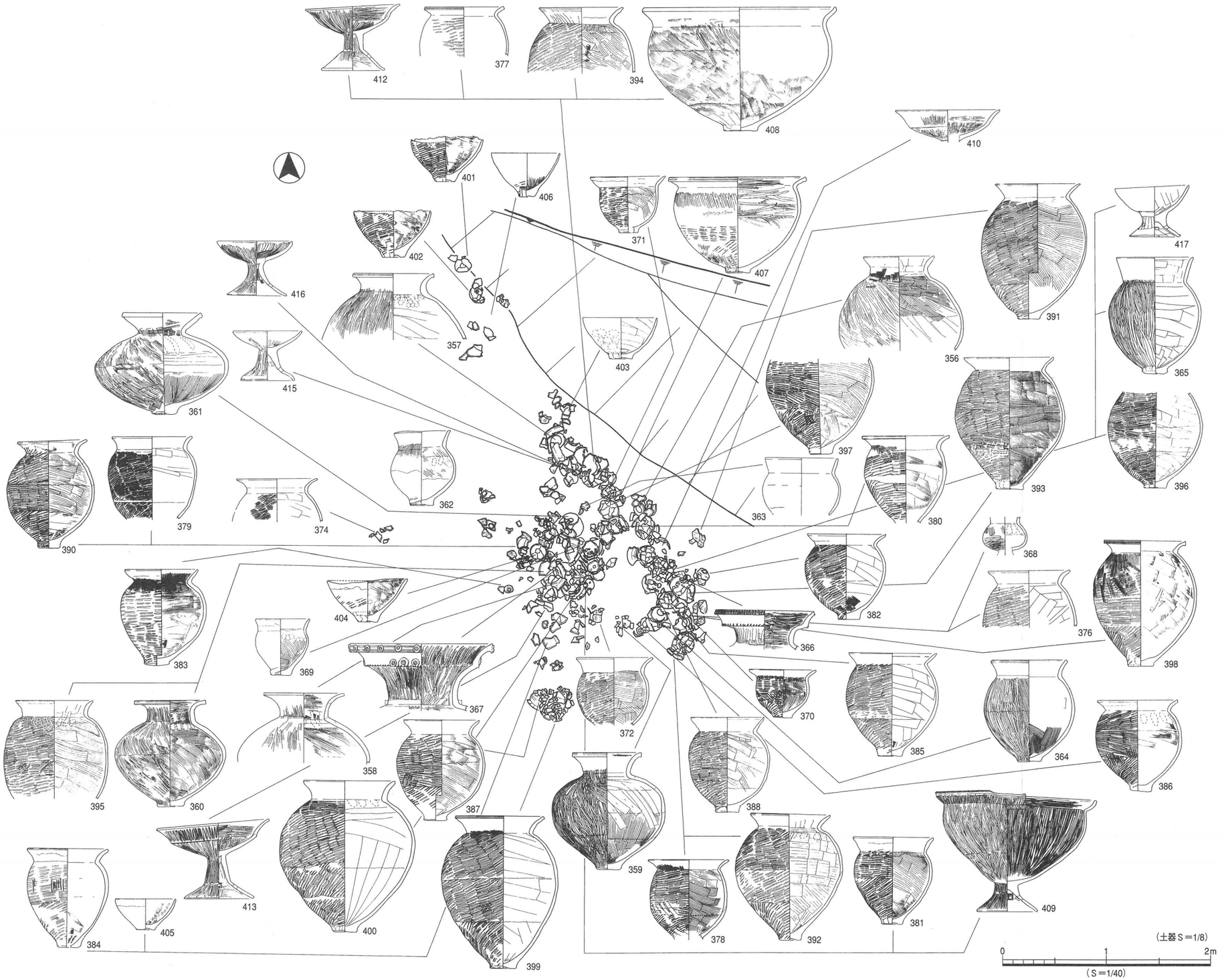


第130図　ＳＷ6005出土遺物実測図－５

共に1/2以上が残存している。407の法量は口径26.5cm、器高18.8cm、底径4.7cmを測る。半球形の体部上位に最大径を持つもので、口頸部は大きく外反し幅広で内傾する端面に擬凹線を巡らす。底部は小さく突出する平底で、裏面はドーナツ底である。色調は赤褐色を呈する。胎土は精良で0.5mm未満の長石・石英・黒雲母・角閃石を多量に含む。生駒西麓産である。なお、407はＳＷ6001から出土した土器片と接合している。408は口径37.5cm、器高24.0cm、底径6.6cmを測るもので、鉢Ｄの中でも大形に分類される。半球形の体部から外反して口縁部が伸びるもので、端部は上方に摘み上げられ内傾する面を有する。底部は小さく突出するもので、外側面に補足粘土が貼り付けられたため、裏面周縁がわずかに高くなっている。裏面に木葉痕が残るが周縁は補足粘土の貼り付けにより消されている。体部内外面はハケ調整を多用している。全体に化粧土が塗布されており、明橙色を呈するが一部化粧土が剥がれた部分では、いわゆる生駒西麓産に特有な褐灰色の色調を呈する。胎土は407に似る。生駒西麓産である。409は台付鉢Ｂに分類される。ほぼ完形に復元が可能である。大形品で口径31.3cm、器高23.7cm、脚部高5.6cm、裾部径11.8cmを測る。底部がやや尖り気味になる半球形の体部から口縁部が内湾して伸びるもので、流し口を持つ他、端面に刻み目が密に施されている。脚部は「ハ」の字状に開くもので、スカシ孔が３個穿たれている。器面調整は内外面共に縦方向のヘラミガキが多用されている。色調は淡橙色～褐灰色である。生駒西麓産である。

高杯

高杯は有稜高杯Ｂ$_2$３点（410・411・413）、有稜高杯Ｃ$_2$１点（412）、有稜高杯脚柱部１点（414）椀形高杯Ａ$_1$２点（415・416）、椀形高杯Ｂ$_1$１点（417）を図化した。410・411・413は有



第131図　ＳＷ6005出土遺物位置図

稜高杯Ｂ$_2$で、413がほぼ完形に復元が可能である。410は杯部が完存している。口径20.2cmを測る。413は杯部に明瞭な稜を有するもので、口縁部外面に波状文状のヘラミガキが施されている。有稜高杯Ｂ$_2$の411は口縁部と体部の境に粘土紐を付加することにより稜部が強調されている。413の器面調整はヘラミガキが多用されている。スカシ孔は４個穿たれている。色調は410が赤褐色、414が橙色、411～413が褐灰色である。胎土は比較的精良なものが多い。含有する角閃石は0.1mm未満のものに限定される。生駒西麓産。412は有稜高杯Ｃ$_2$で稜部分は丸い。415・416は椀形高杯Ａ$_1$に分類される。415がほぼ完形。416は脚部が完存、杯部は1/10程度残存している。２点共に椀形高杯の中でも杯部が浅いもので、415については高杯に分類したものの、庄内式期に盛行する小形器台の祖形になる可能性がある。色調は共に淡褐灰色。生駒西麓産である。417は椀形高杯Ｂ$_1$である。完形品で口径14.5cm、器高9.8cm、裾部径9.5cmを測る。脚部にスカシ孔が３個穿たれている。色調は淡褐灰色である。

ＳＷ6006出土遺物（第132・133図、図版五一・一〇二・一〇三）

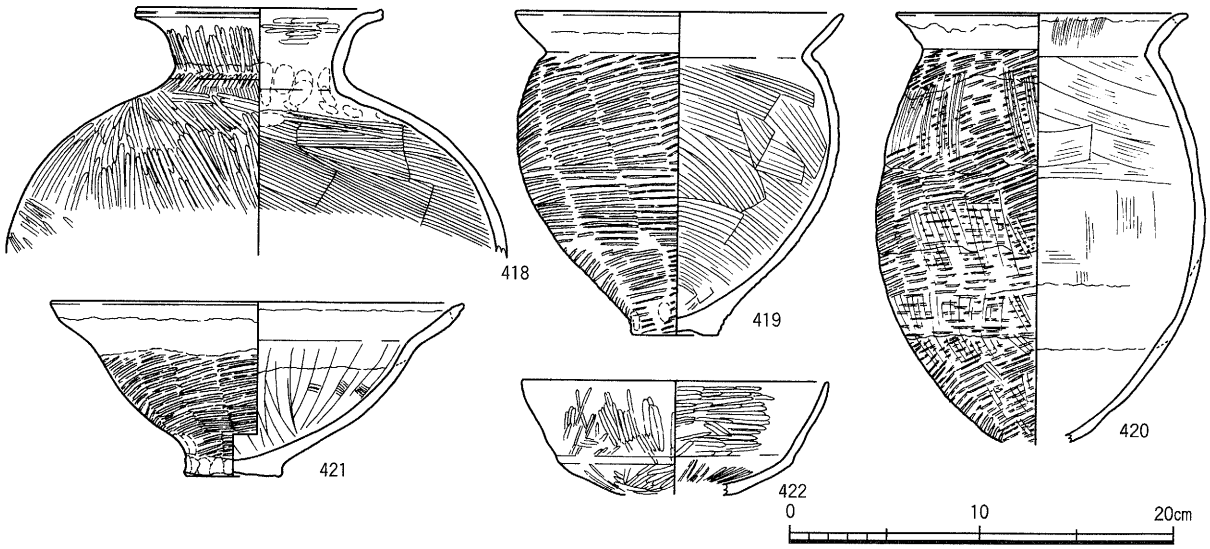
５点（418～422）を図化した。内訳は壺１点（418）、甕２点（419・420）、鉢１点（421）、高杯１点（422）である。

壺

418は広口壺Ａ$_3$である。口頸部が大きく外反して伸びるもので、内傾して上部にわずかに肥厚する端面に１条の沈線が巡る。頸部および体部の外面調整はヘラミガキ、体部内面はハケ調整が行なわれている。色調は褐灰色である。胎土はやや粗く、１～４mm大の長石が散見される。生駒西麓産である。

甕

419は甕Ａで、口径17.0cm、器高17.1cm、底径4.5cmを測る。中形品のⅡに分類されもので体部の形態はＡ$_2$、口縁端部の形態はａである。底部は突出するもので、裏面はハ形態である。体部外面のタタキ調整は三分割成形に沿って行われている。体部内面はハケナデ調整である。420は倒卵形の体部を有する甕Ａで、底部を欠くが器高が24cm前後と推定されるため大形品のⅢに分類



第132図　ＳＷ6006出土遺物実測図

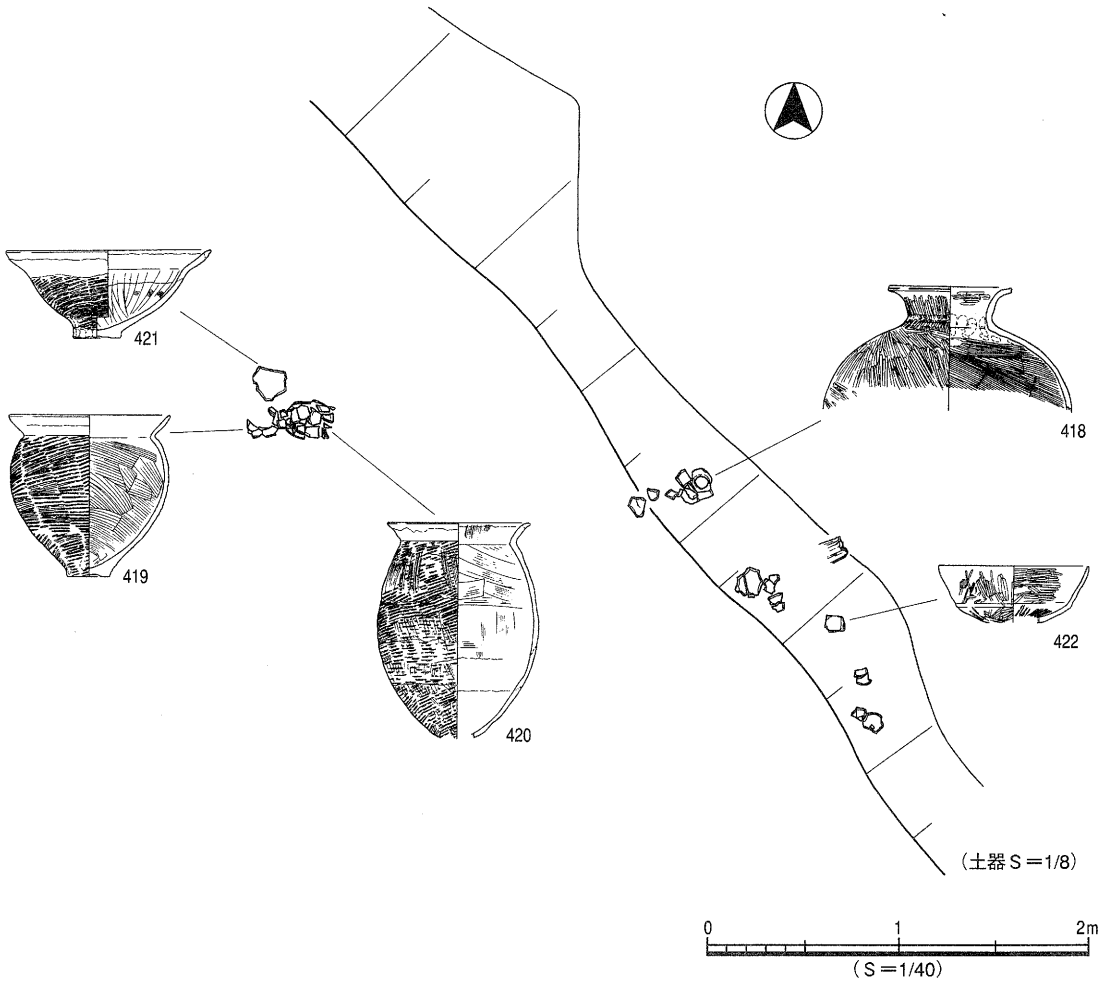
される。体部形態はA$_2$、口縁端部の形態はaである。体部外面は四分割成形に沿ってタタキ調整を行なった後、散発的にハケメや上部では指ナデによりタタキが消されている。419・420共に色調は褐灰色である。生駒西麓産である。

鉢

421は中形鉢Aに分類される。口径21.7cm、器高9.3cm、底径5.0cmを測る。底部は突出しており、裏面はハ形態である。体部外面は右上がりのタタキであるが上半ハヨコナデにより消されている。色調は褐灰色である。生駒西麓産である。

高杯

422は有稜高杯B$_2$の小片である。杯部は口縁部が外反せず直線的に伸びるもので、有稜高杯B$_2$に分類したが小片のため詳細は不明である。色調は淡橙色である。胎土中にスコープで確認される角閃石が含まれている。

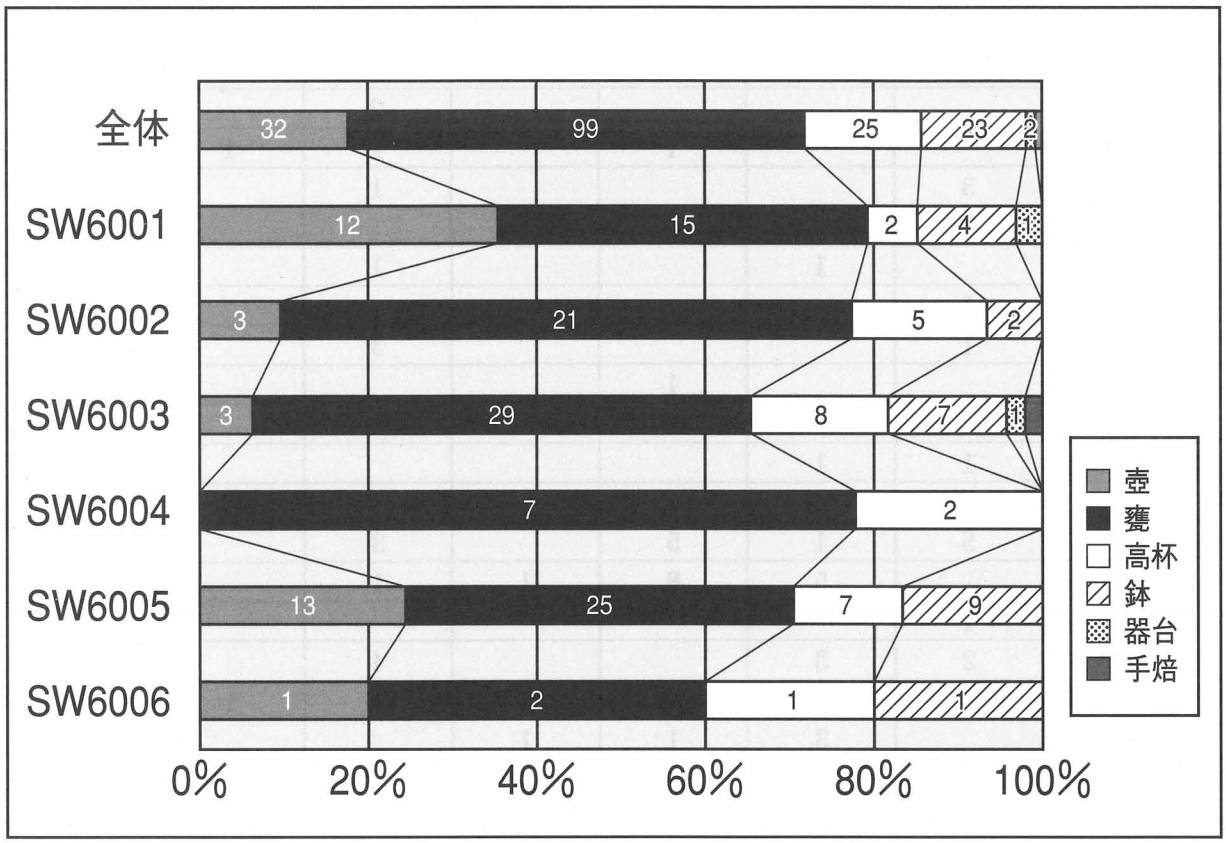


第133図　SW6006出土遺物位置図

第43表　ＳＷ6001～ＳＷ6006出土遺物器種別数量表　　※但し、底部および不明を除く。

		ＳＷ6001	ＳＷ6002	ＳＷ6003	ＳＷ6004	ＳＷ6005	ＳＷ6006	小計
広口壺	A1	5	1			2		8
	A2					2		2
	A3			1		1	1	3
	B1	3				1		4
	C	1						1
長頸壺	A2		1			1		2
	A3	1						1
広口直口壺		1				3		4
二重口縁壺	A2			1				1
	B					2		2
短頸直口壺Ａ		1	1					2
台付壺B2				1		1		2
甕	A1－Ⅰ	5	1	5		3		14
	A2－Ⅰ		5	8	1	1		15
	A3－Ⅰ	1						1
	A1－Ⅱ	2	3			4		9
	A2－Ⅱ	3	4	13	1	9	1	31
	A3－Ⅱ		3	1	1			5
	A1－Ⅲ	1						1
	A2－Ⅲ	1	3	1	3	6	1	15
	A3－Ⅲ	2	2	1	1			6
	A2－Ⅳ					1		1
	A3－Ⅳ					1		1
有稜高杯	B2		4	3	1	3	1	12
	C2	2	1	1	1	1		6
	D1			2				2
椀形高杯	A1					2		2
	B1			1		1		2
	C			1				1
器台	A1			1				1
	B	1						1
小形鉢	A2			1				1
	B1	1		2		5		8
	B2	1		2				3
	C	1						1
中形鉢Ａ			1				1	2
大形鉢Ｄ		1				2		3
台付鉢	A		1					1
	B					1		1
有孔鉢	A			1		1		2
	B			1				1
手焙形土器Ｂ				1				1
合　計		34	31	49	9	54	5	182

第44表　ＳＷ6001～ＳＷ6006出土遺物器種別比率表



第45表　ＳＷ6001～ＳＷ6006出土甕形土器口縁端部形態累計表

口縁形態 / 甕形態	a	b			c			d	小計
		b_1	b_2	b_3	c_1	c_2	c_3		
A_1－Ⅰ	9	1				1		3	14
A_2－Ⅰ	6	2			1		1	5	15
A_3－Ⅰ					1				1
A_1－Ⅱ	3	3						3	9
A_2－Ⅱ	15	3				5		8	31
A_3－Ⅱ	1					1		3	5
A_1－Ⅲ								1	1
A_2－Ⅲ	6	1				5		3	15
A_3－Ⅲ	1	4						1	6
A_2－Ⅳ		1							1
A_3－Ⅳ	1								1
合　計	42	15	0	0	2	12	1	27	99

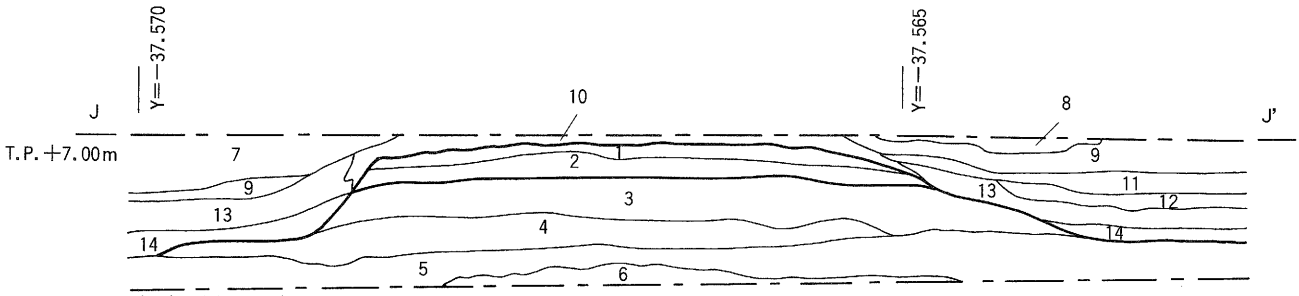
畦畔状遺構

畦畔状遺構6001（第134図、図版五一）

２調査区中央部のⅦ－20－７Ｄ地区で検出した。断面形状は台形状で、盛土は２層で構成されており、下部が5B2/1青黒色粘土質シルトにN3/0暗灰色粘土質シルトのブロック、上部がN3/0暗灰色粘土質シルトに10GY3/1暗緑灰色シルトのブロックである。規模は、上幅約3.7m、基底幅6.3m、高さ0.45mを測る。遺物は出土していない。なお、上部を構築面として弥生時代中期後半の**埋甕6001**が存在しており、その上部に盛土された１・２層（第134図参照）から古墳時代前期初頭（庄内式古相）の遺物が出土していることから、この部分については**畦畔状遺構6002**として捉えた。

畦畔状遺構6002（第134・135図、図版五一・一〇三）

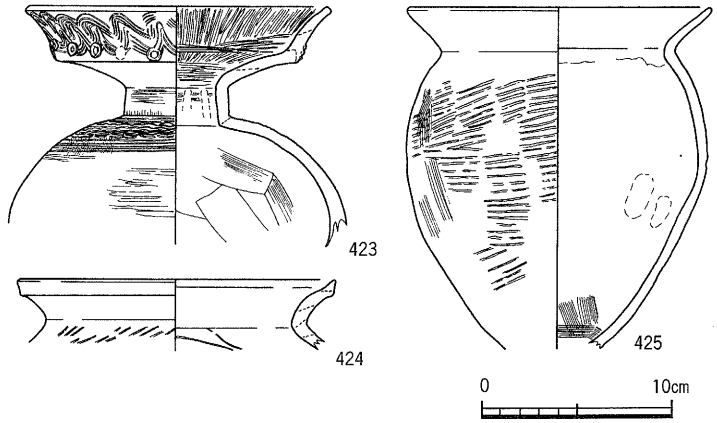
２調査区中央部のⅦ－20－７Ｄ地区で検出した。**畦畔状遺構6001**の上部に、N3/0暗灰色粘土質シルトと5B2/1青黒色粘土質シルトを台形状に盛り上げて構築されている。規模は、上幅約3.0m、基底幅3.8m、高さ0.2mを測る。盛土内の出土遺物から、古墳時代初頭前半（庄内式古相）の時期に構築されたものと考えられる。しかしながら、この畦畔状遺構に伴う耕作土層は断面観察の結果では確認できず、さらに調査面的にも狭小である等の理由から、性格を決定付けるまでに至らなかった。遺物は３点（**423**～**425**）を図化した。**423**は口縁部および体部外面上位に装飾が施された二重口縁壺である。復元口径15.3cmを測る。扁球形の体部から直上に短く頸部が伸びた後、大きく屈曲するもので、口縁部の外反度はゆるく端面は内傾する面を作る。口縁部は外面に波状文と下端に竹管押圧円形浮文、内面にヘラミガキ調整が施されている。頸部外面は下端のタテハケ以外はヨコナデ、内面はナデを施す。体部外面上位には、上下の櫛描き直線文の間に波長の短い波状文が施文されている。体部内面は板ナデ後ナデが施されている。色調は灰白色で、胎土には0.5～２mmのチャート・長石粒が多く含まれている。焼成は良好であるが、体部中位以下の器壁剥離が顕著である。**424**は甕の小片である。復元口径16.8cmを測る。口縁端部を上方に肥厚させ、外傾する幅広の端面を作る。体部外面はタタキ調整を行なう。赤褐色の色調で、焼成は良好、胎土中に0.1～２mmの長石・石英・チャート粒を含む。**425**はＶ様式系甕に分類される。底部を除く約1/2が残存している。体部外面は三分割成形によるもので、部分的にタテハケでタタキが消されている。体部内面は下半にハケ調整がある以外はナデである。浅黄橙色の色調で、胎土中に



1　5B2/1青黒色粘土質シルト
2　N3/0暗灰色粘土質シルト　} 畦畔状遺構6002
3　N3/0暗灰色粘土質シルトに10GY3/1暗緑灰色シルトのブロック
4　5B2/1青黒色粘土質シルトにN3/0暗灰色粘土質シルトのブロック　} 畦畔状遺構6001
5　N3/0暗灰色シルト（植物遺体のラミナ）
6　2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト～極細粒砂
7　10BG7/1明青灰色砂質シルト
8　5PB4/1暗青灰色粘土（植物遺体を含む）
9　N4/0灰色粘土質シルト
10　10BG7/1明青灰色粘土
11　N7/0灰白色中粒砂
12　10BG7/1明青灰色粘土
13　N4/0灰色粘土質シルト（植物遺体を多量に含む）
14　N3/0暗灰色シルト（植物遺体のラミナ）

第134図　畦畔状遺構6001・6002断面図

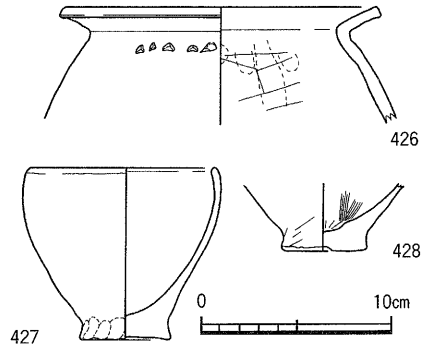
0.5㎜以下の長石・石英・赤色酸化土粒が含まれいる。非生駒西麓産である。なお、425と埋甕6001の内部から出土した土器片が接合している。時期的には、古墳時代初頭前半（庄内式古相）に比定されよう。



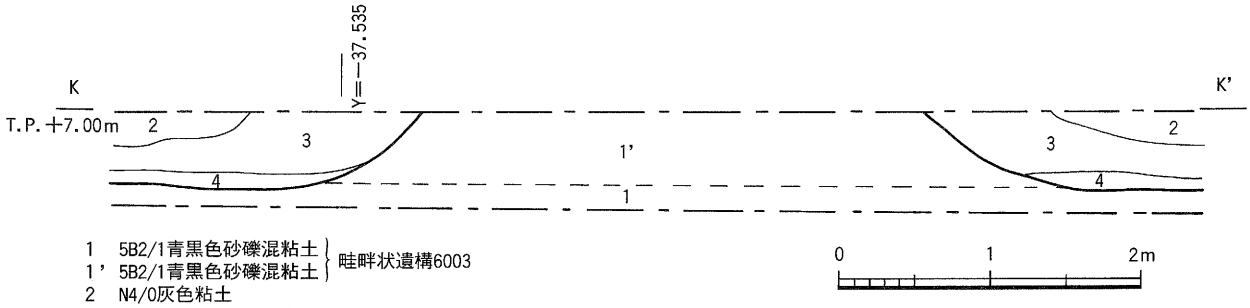
第135図　畦畔状遺構6002出土遺物実測図

畦畔状遺構6003（第136・137図、図版一〇三）

２調査区東部のⅦ－20－７・８Ｇ地区で検出した。断面でのみ検出したもので、上幅約4.1m、基底幅5.1m、高さ0.5mを測る。5B2/1青黒色砂礫混粘土を台形状に盛り上げて構築されている。盛土内から弥生時代後期（畿内第Ｖ様式）に比定される土器片が出土している。３調査区の西端で検出された**畦畔状遺構6004・畦畔状遺構6005**と一連のもので、層位および堆積土、さらに出土遺物からも対応できるものである。しかしながら、**畦畔状遺構6002**と同様に生産域を示唆する耕作土層は確認できなかった。弥生時代後期前半を中心とする遺物が出土している。弥生土器３点（426～428）を図化した。426は甕である。口縁部が「く」の字に屈曲するもので、端部は外傾する面を有する。体部外面上半に不定形の刺突文が横方向に連続する。褐灰色の色調で、胎土中に0.5～３㎜の長石が散見されるほか、0.5㎜以下の角閃石が多量に含まれている。生駒西麓産である。427は深鉢形の体部を有する小形の鉢である。1/2程度が残存しており、口径9.7㎝、底径5.0㎝を測る。底部は上げ底で、側面は指頭圧痕が顕著である。淡赤橙色の色調で、胎土中に0.1～３㎜の長石・石英が散見される。428はドーナツ底を呈する底部の資料であるが器種は特定できない。底径4.5㎝を測る。多量の角閃石の含有が認められる。生駒西麓産である。出土遺物の時期は、弥生時代後期前半に比定される。



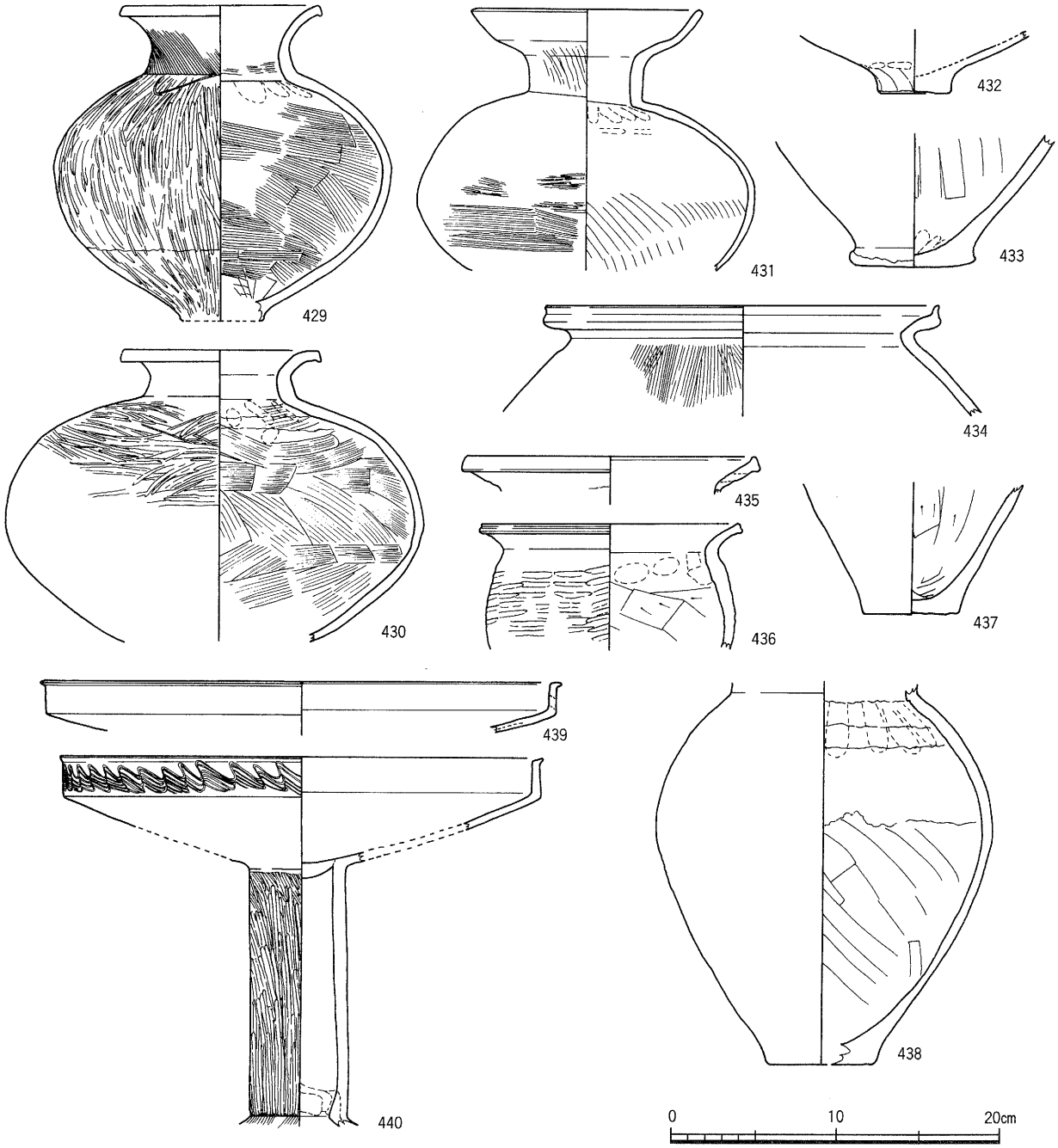
第136図　畦畔状遺構6003出土遺物実測図



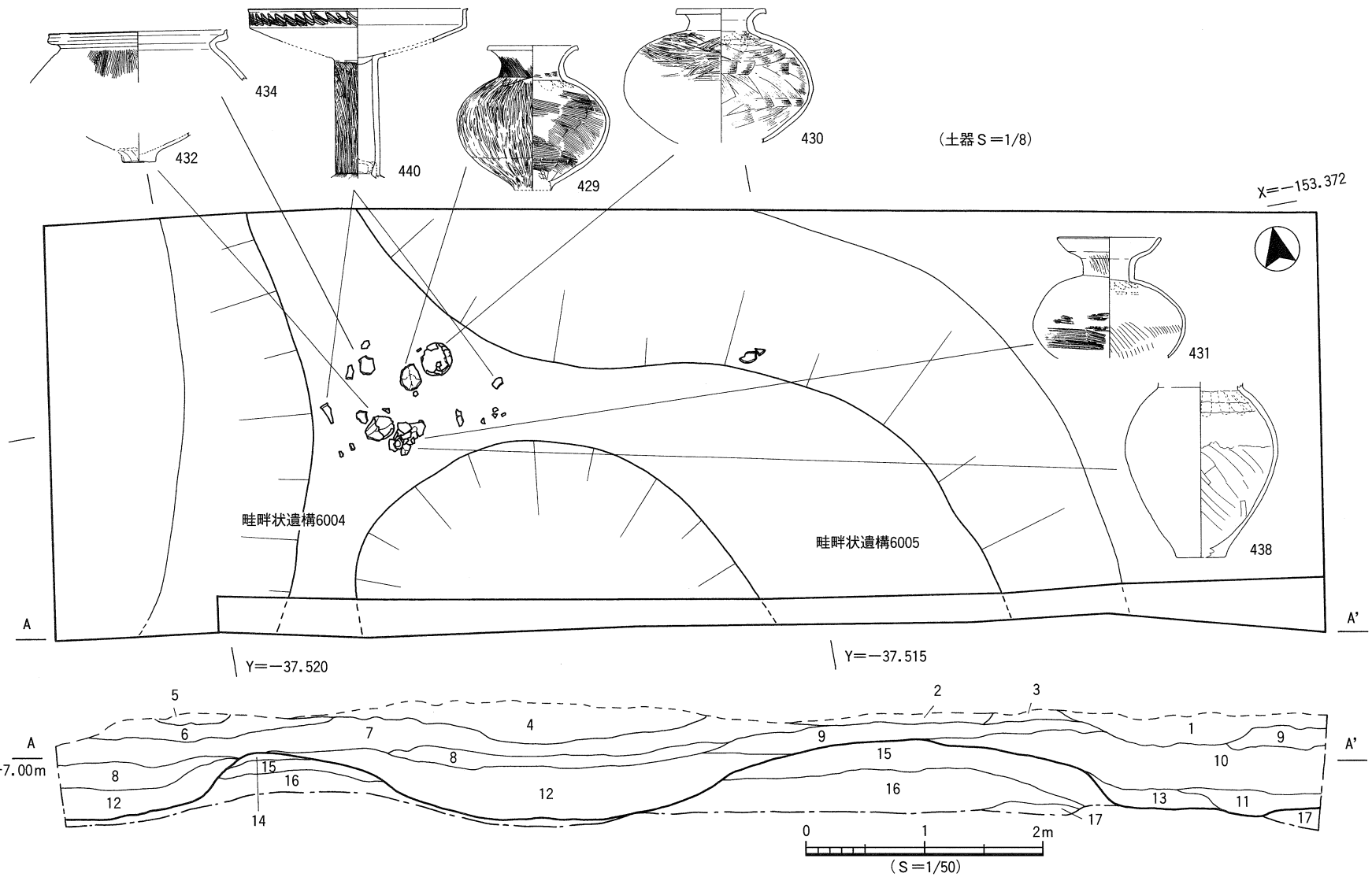
第137図　畦畔状遺構6003断面図

畦畔状遺構6004・畦畔状遺構6005（第138・139図、図版五二・五三・一〇三・一〇四）

３調査区西部のⅦ－20－８Ｈ・Ｉ地区で検出した。南北方向に伸びる**畦畔状遺構6004**の東側に弧状を成す**畦畔状遺構6005**が取り付いている。上幅0.6～1.8m、基底幅3.0～5.0m、高さ0.5mを測る大規模なもので、第Ⅶ層上面に盛土されたものである。水田に伴う大畦畔の可能性があるが、調査範囲では畦畔状遺構の両側は自然堆積層で、水田作土は認められなかった。畦畔状遺構交点部分の盛土内からは、弥生時代後期初頭頃に比定される土器が多く出土している。意図的に埋め込まれたものである可能性があり、これが遺構構築の時期と考えられる。弥生土器13点（429～441）を図化した。429～433は壺である。429は扁球形の体部から外反して伸びる口頸部が



第138図　畦畔状遺構6004・6005出土遺物実測図



第139図　畦畔状遺構6004・6005平断面図

1　10GY5/1緑灰色シルトブロック混粘土［水田5028］
2　10Y5/1灰色シルトブロック混粘土［水田5025］
3　2.5GY5/1オリーブ灰色細粒砂少混シルト質粘土［畦畔5038］
4　10GY4/1暗緑灰色粘土質シルト～シルトの複雑な層［畦畔5037］
5　10Y5/1灰色シルト質粘土［畦畔5036］
6　10GY4/1暗緑灰色粘土　斑鉄
7　10GY4/1暗緑灰色粘土　炭化植物
8　2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土　炭化植物多
9　5GY4/1暗オリーブ灰色粘土
10　2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土～シルトの互層　上部炭化植物
11　7.5Y4/1灰色シルト質粘土　炭化植物
12　5GY4/1暗オリーブ灰色粘土～粘土質シルトの互層　植物遺体
13　10Y4/1灰色細粒砂少混シルト質粘土　15の崩落土か？
14　10GY4/1暗緑灰色粘土
15　5Y3/1オリーブ黒色細粒砂～細礫少混粘土　シルトブロック
16　2.5GY3/1暗オリーブ灰色細粒砂～細礫混粘土　植物遺体
17　5GY4/1暗オリーブ灰色細粒砂～粗粒砂混粘土

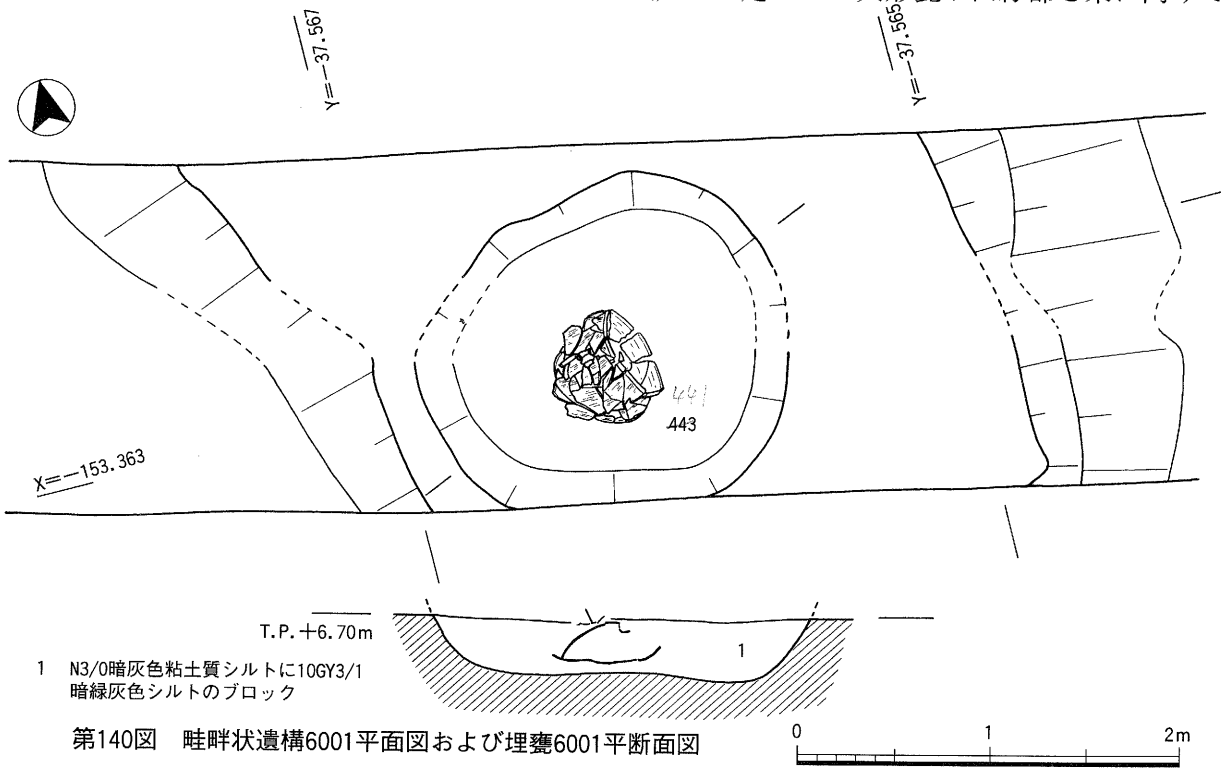
13～17：畦畔状遺構盛土

付く広口壺である。底部を欠くが約1/2程度残存している。口径11.7cm、体部最大径20.5cm、復元器高19.5cmを測る。淡褐灰色の色調で、胎土中に0.1～5mm程度の長石・石英と0.5mm程度の角閃石を多量に含んでいる。430は扁球形の体部を持つ広口壺である。口径11.7cm、体部最大径25.5cmを測る。429と同様生駒西麓産である。429・430共に体部中位以下に煤の付着が認められる。431は二重口縁壺で、口頸部は完存している。口径14.1cm、口頸部高5.6cmを測る。431は429・430と同様体部外面に煤の付着が認められ、火熱による円形の器面剥離が顕著である。432・433は壺底部である。2点共に生駒西麓産である。434は「く」の字に屈曲する口縁端部を上方に肥厚させ、幅広の端面を作る甕である。体部外面はタテハケが行なわれている。生駒西麓産である。435は甕の口縁部である。口縁端部は上下に肥厚させ、幅広で内傾する端面を作る。生駒西麓産である。436は屈曲外反する口縁端面に1条の沈線が巡る甕である。体部外面は水平方向のタタキ、内面はヘラケズリが行われている。生駒西麓産である。437・438は壺と推定される。438は体部下半以下で器面剥離が認められる。共に生駒西麓産である。439・440は高杯である。439は高杯の杯部の小片である。2点共に口縁部が直上方に伸びた後、端部付近で外折し幅広の端面を作る。440の口縁部外面に波状文が施文されている。柱状部は長い筒状の形態を持つ。柱状部径5.9cm、柱状部高15.5cmを測る。円板充填法により杯底部が形成されている。生駒西麓産で微細な角閃石が多量に含まれている。出土遺物の時期は、弥生時代後期初頭（寺沢・森井編年の河内Ⅴ－1様式）に比定される。

埋甕（埋甕）

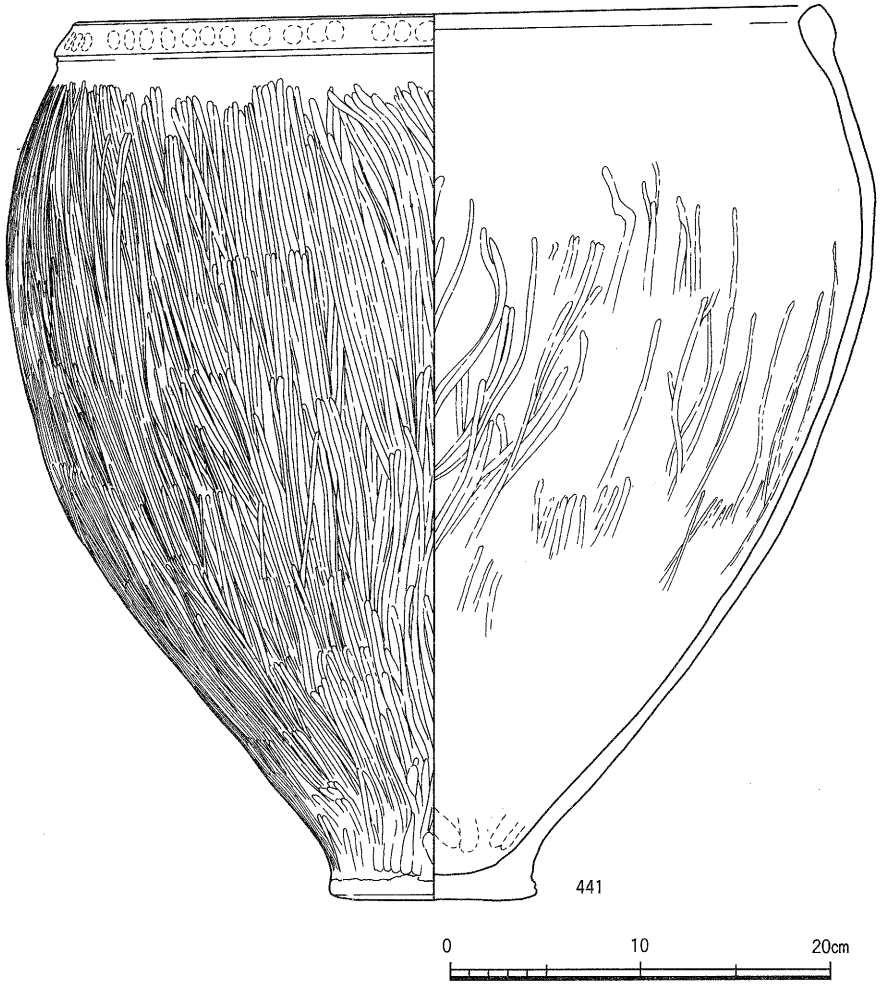
埋甕6001（第140・141図、図版五四・一〇四）

2調査区中央部のⅦ－20－7D地区で検出した。**畦畔状遺構6001**の上部を削平した面で検出した。平面形状は円形状で径1.7～1.97m、深さ0.3mを測る。断面は逆台形である。その内に、弥生時代中期後半（寺沢・森井編年の河内Ⅳ－4様式）に比定される大形甕が口縁部を東に向けて



第140図　畦畔状遺構6001平面図および埋甕6001平断面図

横位で埋められている。土圧により押し潰されているがほぼ完形に復元できる。掘方内および埋甕内の埋土は暗灰色粘土質シルトに暗緑灰色シルトがブロックで混入するもので、やや粘性が強いものである。出土遺物は掘方内からは出土していないが、埋甕内からは古墳時代初頭前半（庄内式期古相）に比定される甕の小片が出土している。この土器片が**畦畔状遺構6002**の２層から出土した（425）と接合したため畦畔を構築した段階では、埋甕内への土砂流入が完全で無く一部空洞部分があったことが推定される。埋甕に用いられている大甕（441）は、口径39cm、器高47cm、底径11cm、体部最大径45.4cmを測る。体部上位に最大径を持つもので、口縁部は外側に肥厚して内傾する幅広の端面を形成するが平滑ではなく指頭圧痕が多く残存する。体部外面の調整は、体部最上部を除く全体に縦位の密なヘラミガキが行なわれている。体部内面の調整は、中位に縦位のヘラミガキがある以外はナデが行なわれている。底部は突出する平底で側面はヨコナデによる調整が行なわれている。穿孔や打ち欠き等は認められない。生駒西麓産である。なお、形状からみて土器棺墓の可能性があるが、埋甕内部における微細遺物分析、土壌理化学分析、脂肪酸分析の結果からは人体を埋納した土器棺である可能性を積極的に示唆することは困難であるとされていることから、ここでは埋甕とした。詳細については、第４章第２節を参考されたい。



第141図　埋甕6001実測図

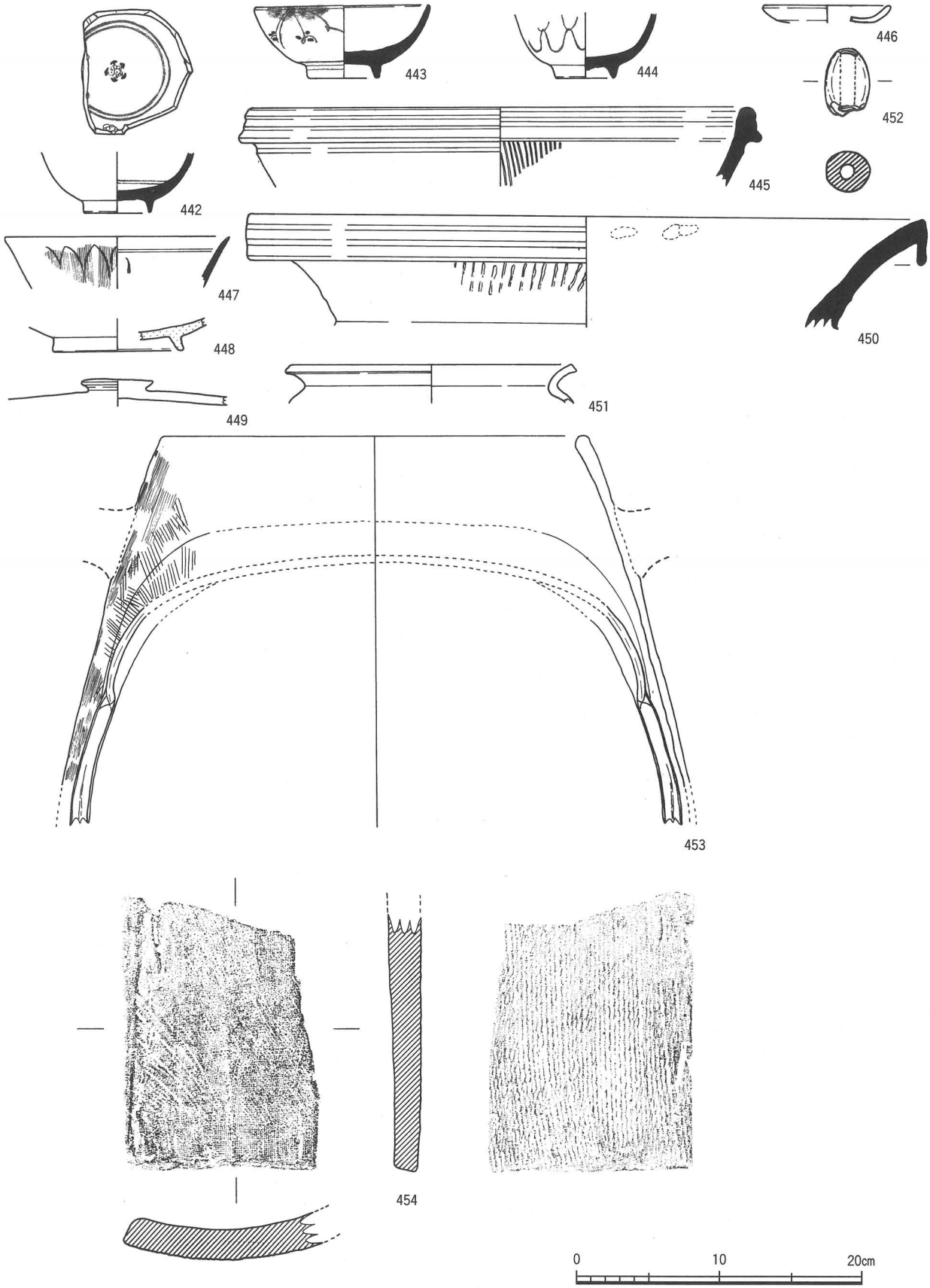
遺構に伴わない遺物

第Ⅱ層出土遺物（第142図、図版一〇五・一〇六）

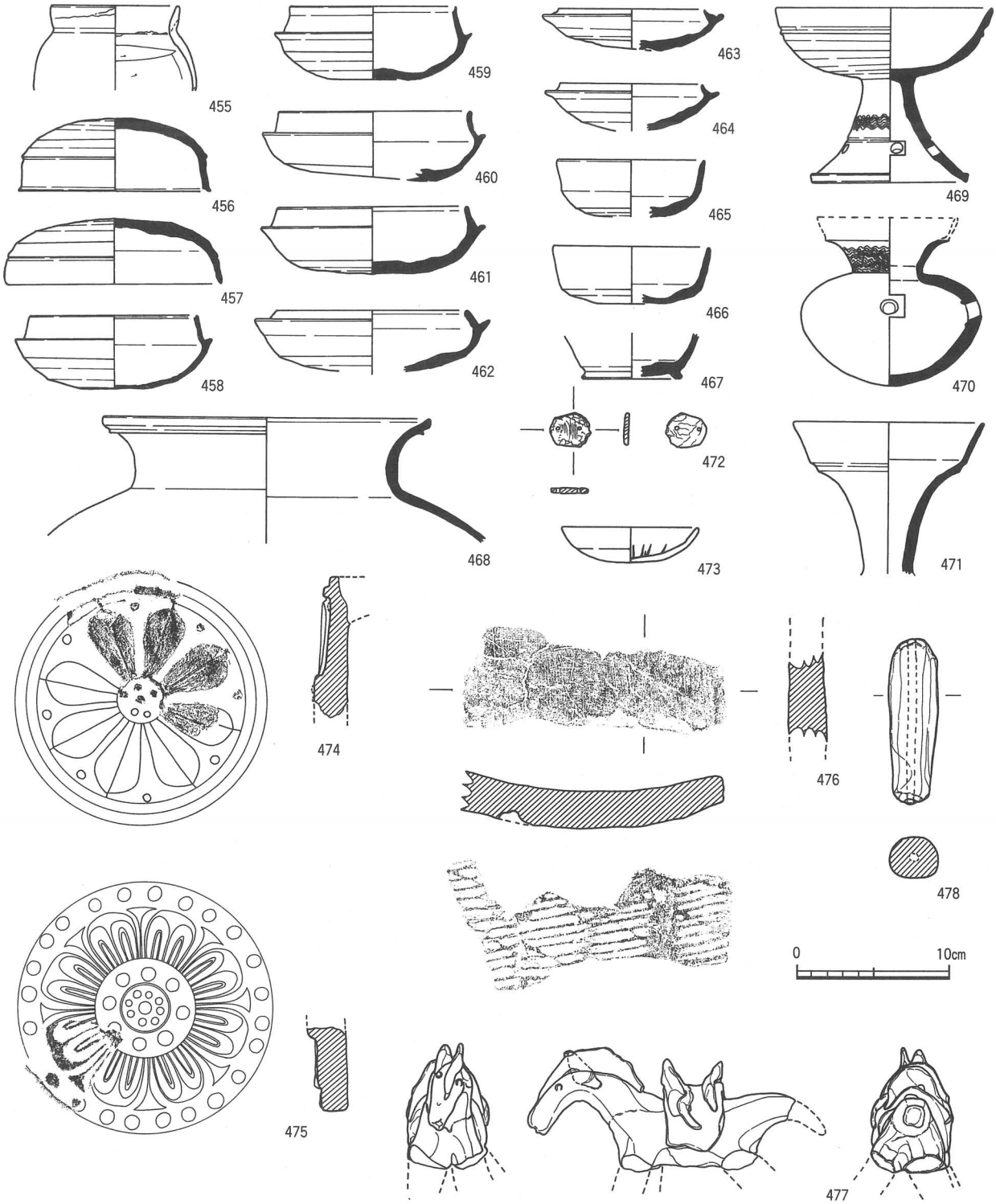
12点（442～454）を図化した。古墳時代中期～江戸時代中期の遺物を含む。442～444は肥前焼系の碗である。442は青磁染付碗である。見込みに淡い呉須により２条の圏線と五弁花を施文する。1750～1780年代に比定される。３調査区のⅧ－16－８・９Ｄ地区出土。443はやや浅目の体部を有するもので、体部外面に梅樹文と体部下半から高台部に３条の圏線を巡らす。見込みに蛇の目釉剥ぎがある。1750～1770年代に比定される。１調査区のⅦ－19－５Ｆ地区出土。444は体部外面に網目文を施文するもの。1650～1670年代に比定される。３調査区のⅧ－16－８・９Ｄ地区出土。445は備前焼の擂鉢の小片である。17世紀末～18世紀初頭の所産であろう。２調査区のⅦ－20－７Ｅ地区出土。446は土師器小皿の小片である。13世紀代の所産である。２調査区のⅦ－20－７・８Ｈ地区出土。447は中国製青磁碗である。体部外面は蓮華文の上に櫛描文、内面劃花文が施文されている。釉色はオリーブ灰色で光沢がある。横田・森田分類の龍泉窯系青磁碗Ⅰ－６ｂ類（12世紀中頃～後半）に比定される。３調査区のⅧ－16－８・９Ｅ地区出土。448は灰釉陶器椀の小片である。内面は淡灰緑色の釉、外面の残存部分は露胎である。９世紀後半の所産か。３調査区のⅧ－16－８Ｂ地区出土。449は大形のつまみを有する土師器杯蓋である。つまみ部分は完存しており、径5.0cm、つまみ高0.7cmを測る。内面および破面に煤が付着している。１調査区Ⅶ－19－３・４Ｄ・Ｅ地区出土。450は須恵器大甕の小片である。復元口径47.8cmを測る。口縁端部は垂下し幅広の端面を作る。頸部は縦方向の平行タタキの後、回転ナデを行う。ＴＫ112型式に類例が認められる。平安時代前期の所産と考えられる。３調査区のⅧ－16－８Ｄ地区出土。451は土師器甕の小片である。復元口径19.8cmを測る。平安時代前期の所産と考えられる。１調査区のⅦ－19－３～４Ｄ・Ｅ地区出土。452は土師器の管状土錘である。長さに比して幅が大きい形態である。紐孔は大きく１cmを測る。１調査区のⅦ－19－３・４Ｃ・Ｄ地区出土。453は土師器の移動式竈の小片である。焚き口の上部を曲げて庇とする曲げ庇系の竈である。外面にハケを多用している。褐灰色の色調で、胎土中に角閃石の含有を認める。生駒西麓産である。７世紀代のものか。１調査区のⅦ－19－５Ｇ地区出土。454は平瓦である。凹面は模骨痕と細い布目、凸面は縦方向の縄目タタキを施す。２次加熱を受けたもので、色調は淡橙色を呈する。１調査区のⅦ－19－５Ｇ地区出土。

第Ⅲ層出土遺物（第143図、図版一〇六～一〇九）

24点（455～478）を図化した。古墳時代中期～平安時代後期に比定される遺物が出土している。455は土師器の小形壺の小片である。復元口径8.4cmを測る。５世紀代のものか。１調査区のⅦ－19－５Ｇ地区出土。須恵器類は16点（456～471）である。456・457は杯蓋で残存率は共に3/4以上である。456がＴＫ47型式（５世紀末）、457がＴＫ10型式（６世紀中葉）に比定される。456が３調査区のⅦ－20－８Ｊ地区、457が４調査区のⅦ－16－９・10地区出土。458～466は杯身である。458・459は共に体底部が丸味を持つもので、立ち上がりは内傾して直線的に伸び、端部は平らで内傾する。ＴＫ47型式（５世紀末）に比定される。460～462は立ち上がりが内傾して短く伸びるもので、端部は丸く終わる。460の底部内面に焼き歪みが認められる。460・461がＴＫ10型式（６世紀中葉）、462がＴＫ43型式（６世紀末）に比定される。458が４調査区のⅧ－16－９・10地区、459が３調査区のⅦ－16－８Ｆ地区、460～462が４調査区のⅧ－16－９・10地区出土。463・464は浅く扁平な皿形の体底部で、立ち上がりは強く内傾した角度で短く伸びる。共に底部



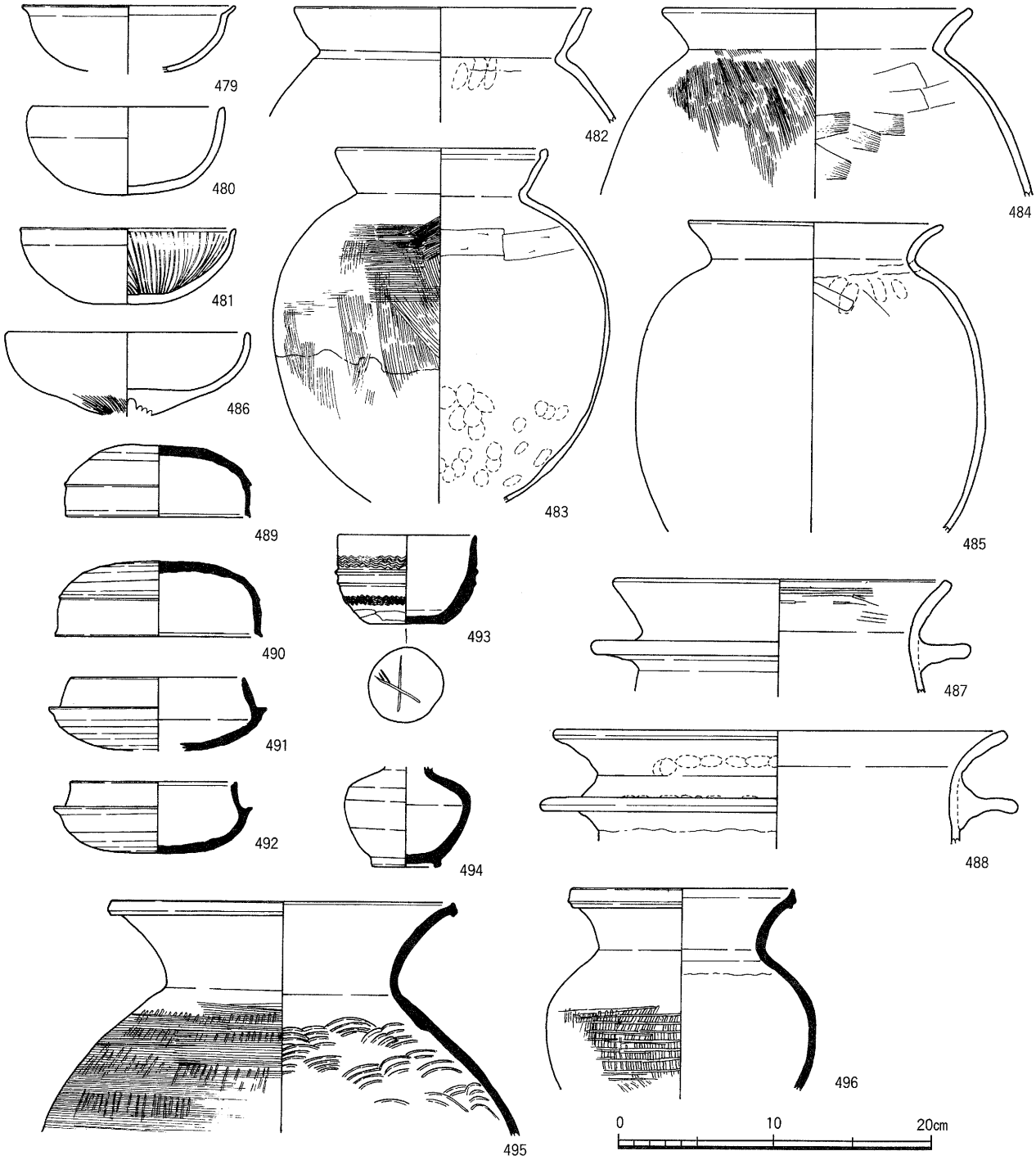
第142図　第Ⅱ層出土遺物実測図



第143図　第Ⅲ層出土遺物実測図

外面は未調整で凹凸面が顕著である。ＴＫ217型式（７世紀中葉）に比定される。463が４調査区のⅧ－17－10Ｆ地区、464が４調査区のⅧ－16－９・10Ａ地区出土。465・466は宝珠つまみが付く杯蓋とセットになる杯身である。共に残存率は1/2程度である。底部裏面はヘラケズリ調整を行う465とナデを行う466がある。ＴＫ217型式（７世紀中葉）に比定される。465が４調査区のⅧ－16－９・10Ａ地区、466が４調査区のⅧ－16－９Ａ地区出土。467は高台を有する須恵器小壺

の小片である。１調査区のⅦ－19－５Ｇ地区出土。468は須恵器甕の小片である。口縁端部からやや下方に１条の凸帯が巡る。初期須恵器（５世紀前半）の範疇と考えられる。３調査区のⅧ－16－８・９Ｇ地区出土。469は須恵器の無蓋高杯で、ほぼ完形品である。口径14.2cm、器高11.5cmを測る。杯部は浅い半円形で外面の上位に１条の凸帯が巡る。脚部は円錐状で中位の沈線を境として上部に波状文、下部にスカシ孔５個を配する。杯内面と脚部外面に灰かぶりが認められる。裾端部が外傾する面を持つ特徴などからＴＧ232号窯と共通しており、５世紀初頭の時期が推定される。470・471は須恵器瓶である。470は扁球形の体部から口頸部がラッパ状に開く瓶である。頸部外面に波長の短い波状文が施文されている。体部の上半全面に灰の降着がある他、底面には火襷が認められる。円孔は径1.2cmで、注口として竹を挿入した場合、斜上方に向く角度に穿たれている。ＴＫ216型式（５世紀前半）に比定される。471はラッパ状に開く口頸部が付く瓶の小片である。焼成はやや不良で、色調が淡灰色のため視覚的には瓦質土器風を呈している。７世紀前半の所産である。469～471は４調査区のⅧ－17－10Ｅ地区出土。472は双孔円板の未製品である。両面共にピンホール状の窪みがある他、片面には工具による擦痕が認められる。２孔の孔径は共に２㎜を測る。石材は滑石製である。３調査区のⅧ－16－９Ｅ地区出土。473は深味のある体底部を持つ瓦器小皿である。見込みに平行線状ヘラミガキが施されている。炭素付着は全体に不良で見込みの一部を除いて灰白色を呈する。12世紀中葉の所産である。３調査区のⅧ－16－７・８Ｇ地区出土。474は以前から渋川廃寺の創建瓦と考えられている軒丸瓦である。いわゆる高句麗様式の素弁８弁蓮華文を主文とする。突出する中房の中央部に同規模の連子を１＋５に配する。弁は弁中央に細い稜線を持ち先端部に向かって幅が漸増する。弁端は尖形を呈しており、弁端から隆起して短く伸びる細線で外区と繋がっている。弁間に珠文が配置されているが、確認できた３個すべてが欠損しており、隆起の程度を知り得たものはない。圏線は幅広で隆起の高く、そこから外区端迄６㎜前後は平坦な平縁を形成している。焼成は堅緻で、色調は灰白色を呈する。胎土には１～３㎜の長石・石英が散見される他、スコープで角閃石の含有が認められる。飛鳥時代前半（７世紀前半）が推定される。本例を含めて４例の出土が知られており、そのなかで本例が最も遺存部分が大きい。３調査区のⅧ－16－８・９Ｇ地区出土。475は複弁８弁蓮華文軒丸瓦の小片である。中房は凸形で高い。花弁は複弁で子葉を隆起した２条の線で表現している。花弁を区画する間弁は先端で大きく三角形状を呈する。外区は平縁で大きい珠文が巡る。色調は赤褐色で胎土は１㎜程度の長石・石英が散見される他、スコープで角閃石の含有が認められる。近接する位置で行われた第33次調査では、同紋の軒丸瓦が出土しており、中房の形態が明らかである。それによれば、中房は凸形で大きく連子の配列は圏線内に小粒の連子を１＋８に配し、その外側に大粒の連子を８個が巡る特異なもので、管見ではここ３例以外類例を知らないが朝鮮新羅系古瓦に類似したものが認められる。奈良時代前半（８世紀前半）のものか。３調査区のⅧ－16－９Ｅ地区出土。476は平瓦片である。凹面には細かい布目痕が残存する他、へら先を使用した草書体の線刻文字が縦二行以上に亘って存在する。そのうちの右側の一字は「寺」ないしは「寿」の可能性がある。火中したもので凹面及び破面部分に煤の付着が認められる。凸面には横方向の単位の太いタタキが施されている。胎土は良好で１㎜以下の長石粒が散見される。１調査区のⅧ－18－３・４地区出土。477は土馬で４脚および尻尾の先端部分を欠く。飾馬で粘土紐により各部および鞍部分が写実的に表現されている。頭部は細目で長く表現されている。顔部のうち口につ



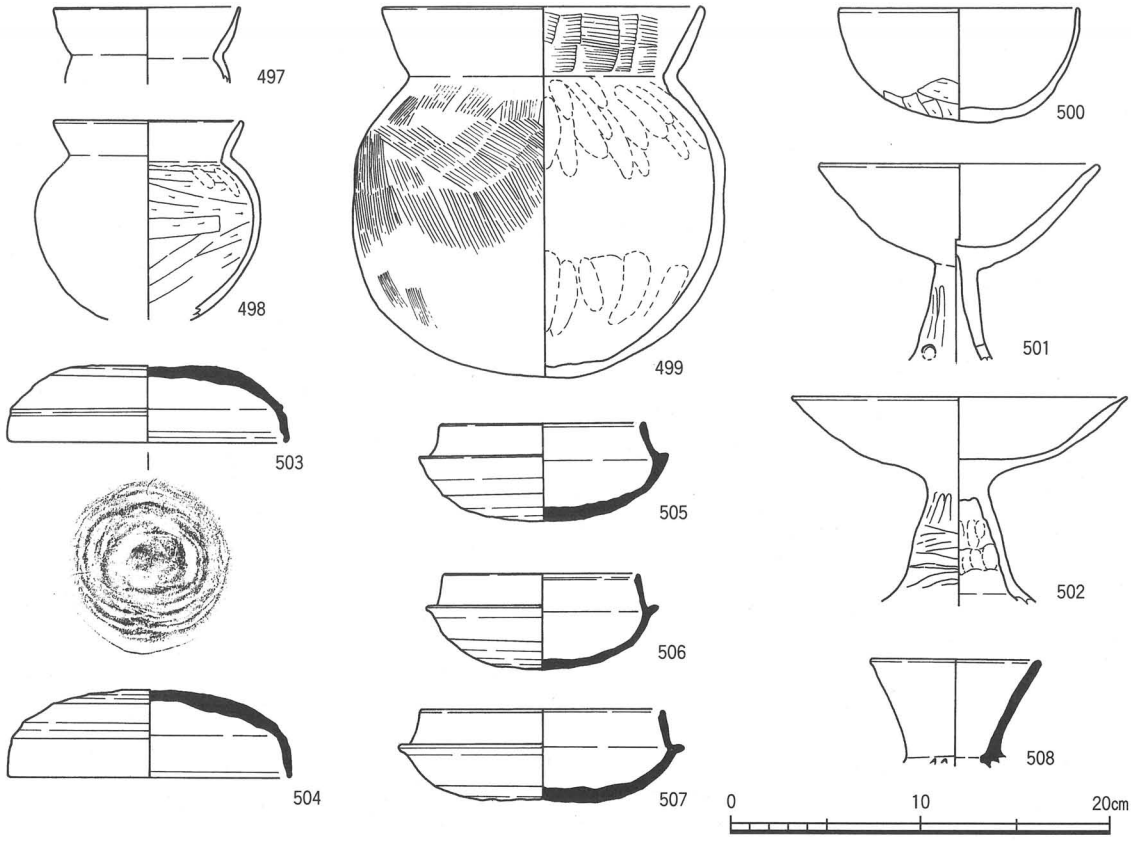
第144図　第Ⅳ層出土遺物実測図

いては、竹櫛状の物で刺突され内側に窪むもので、横からは口元がわずかに見える程度である。目は半載した細い竹管を押圧することにより丸く表現されるが、片方は半分程度である。鼻孔の表現はない。耳は片方が遺存しており、わずかに前方に傾く形に貼り付けられている。額部から頸部にかけて粘土紐の貼付けが行われており、頭部から額部については「白徴（はくちょう）」と呼称される白いアクセント模様を表現したものと推定される。鬣（たてがみ）部分は粘土紐の先端を摘み上げ、高さを強調する形で表現されている。胴部から脚部については、馬の特徴が忠実に表現されており、尻尾は太く少し上がった後先端は下方に向く。馬具としては、鞍があり、障泥の上に鞍橋を構成する居

木以外の前輪、後輪が表現されている。鐙は「L」字形を呈する。赤褐色の色調で胎土は精良である。時期は7世紀中葉～7世紀後半が考えられる。1調査区のⅦ－19－4H地区出土。478は管状土錘である。全長11.0cm、幅3.2cm、紐孔幅0.6cmを測る。2調査区のⅦ－20－6B地区出土。

第Ⅳ層出土遺物（第144図、図版一〇九・一一〇）

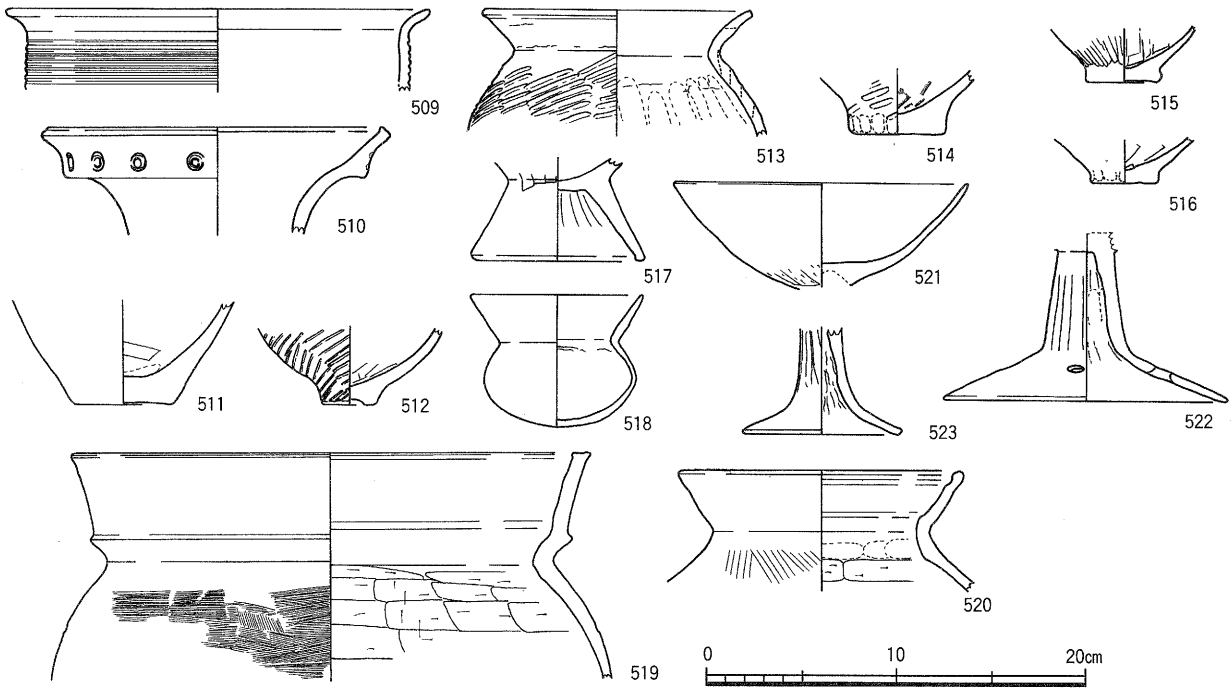
18点（479～496）を図化した。古墳時代前期～奈良時代末の遺物が含まれている。479・480は土師器鉢で480が完形品である。479は浅い半円形の体部に強く外折する口縁部を有する。480は深目の体部に直口の口縁部が付く。口径12.2cm、器高5.8cmを測る。479が5世紀中葉前後、480が6世紀後半に比定される。479が2調査区のⅦ－20－6D地区、480が3調査区のⅧ－16－9F地区出土。481は土師器杯である。ほぼ完形品で口径13.8cm、器高4.8cmを測る。内面に放射状暗文が施文されている。7世紀前半の所産である。1調査区のⅦ－19－3・4E地区出土。482～485は土師器甕である。482は布留式甕の属性の一つである口縁端部の肥厚形態が形骸化した段階の甕と考えられる。5世紀前半の所産である。2調査区のⅦ－20－7F地区出土。483は布留式甕で口縁端部の内面肥厚が最も発達した段階のもので、古墳時代前期中葉（布留式中相）に比定される。2調査区のⅦ－20－7G地区出土。484・485は口縁部が「く」の字に屈曲するもので、口縁端部が丸く終わる。484の体部外面は縦位のハケメを多用している。5世紀後半～6世紀前半の所産か。484が2調査区のⅦ－20－6A地区、485が4調査区のⅧ－17－10D地区出土。486は椀形の杯部を有する土師器高杯である。復元口径15.5cmを測る。5世紀中葉の所産である。3調査区のⅧ－16－8・9G地区出土。487・488は土師器土釜の小片である。2点共に口縁部は外反して大きく開くもので、体部上位に水平方向に伸びる鍔が付く。色調は褐灰色で胎土中に角閃石が散見される。本例を含めてこの種の土釜については、いわゆる生駒西麓産の胎土が使用されたものが通有である。共に4調査区のⅧ－17－10B地区出土。489・490は須恵器杯蓋である。共に完形品で489が口径11.8cm、器高4.5cm。490が口径13.2cm、器高4.8cmを測る。共に天井部に灰かぶりが認められる。489の胎土中に微細な黒色粒子が無数に見られる。489がTK47型式（5世紀末）、490がTK23型式（5世紀後半）に比定される。489が4調査区のⅧ－17－10B地区、490が4調査区のⅧ－16－9・10B地区出土。491・492は須恵器杯身である。492が完形品で、491が1/4程度残存している。492は口径10.5cm、器高4.8cmを測る。491がTK216型式（5世紀前半）、492がTK47型式（5世紀末）に比定される。491が2調査区のⅦ－20－7E地区、492が4調査区Ⅷ－17－10B地区出土。493は須恵器の把手付椀の小片と推定される。体部中位の2条の凸帯を境として、上下に波状文が施文されている。体部下半は静止ヘラナデによる調整が行われている。底部裏面に「×」の記号が認められる。初期須恵器の範疇のものであるが、型式は限定できない。3調査区のⅧ－16－8F地区出土。494は須恵器の小形壺で口頸部を欠く。平城宮分類の壺Mにあたる。奈良時代末期の所産と考えられる。2調査区のⅦ－20－8G地区出土。495は須恵器甕の小片である。口頸部は大きく外反するもので、口縁端部は上下に肥厚する。体部外面は縦方向のタタキの後、水平方向のカキメ、体部内面は青海波タタキが行われている。5世紀後半の所産と推定される。4調査区のⅧ－17－10B地区出土。496は口縁端部下半に1条の凹線を持つ小形の須恵器壺である。体部外面は縦方向のタタキの後、横方向に沈線を巡らす。5世紀後半の所産である。4調査区のⅧ－16－9・10B地区出土。



第145図　第Ⅴ層出土遺物実測図

第Ⅴ層出土遺物（第145図、図版一一〇・一一一）

各調査区から出土した。図化したものは12点（497～508）である。時期的には古墳時代前期半（布留式古相）～古墳時代後期に至る。497は口径が体部最大径を凌駕する土師器の小形丸底壺である。復元口径9.8cmを測る。器面調整は剥離のため不明瞭。古墳時代前期前半（布留式古相）に比定される。２調査区のⅦ－20－６Ｄ地区出土。498は丸底の底部を有する土師器の小形壺で体底部の一部が欠損する以外は完存している。口径10.0cm、体部最大径11.8cmを測る。器面調整は口縁部外面がヨコナデ、体部外面は中位より上部がナデ、下半はヘラケズリが行われている。体部内面はヘラケズリが行われている。色調は灰白色で胎土中に0.5mm未満の長石・石英・赤色酸化土が多量に含まれている。非生駒西麓産。時期的には497と同様か。１調査区のⅦ－19－４・５Ｈ地区出土。499は土師器甕である。全体の約1/2が残存している。全体にやや雑な作りで、胎土も粗く１～５mmの長石・石英が多く含まれている。古墳時代前期後半（布留式新相）の所産か。２調査区のⅦ－20－７Ｇ・Ｈ地区出土。500はやや深目の体部を有する土師器鉢の完形品である。口径12.8cm、器高6.0cmを測る。器面調整は底部外面がヘラケズリ、他はナデを施す。６世紀代の所産と考えられる。３調査区のⅧ－16－８Ｅ地区出土。501・502は土師器高杯で共に裾部を欠く。501はやや深目の杯部を有するもので、口径14.7cm、杯部高5.2cmを測る。502は浅目の杯部を有するもので、柱状部はやや太く内面に粘土紐の接合痕が明瞭に残っている。501が５世紀前半。502が６世紀代に推定される。共に１調査区のⅦ－19－３・４地区出土。須恵器は６点（503～508）である。503・504は杯蓋で残存率は503が3/4、504が1/2である。にぶい稜を持ち天井部上面が凹状になる503と稜が無く天井部が丸味を持つ504がある。503の天井部内面に青海



第146図　第Ⅵ層出土遺物実測図

波タタキが認められる。共にＴＫ10型式（６世紀中葉）に比定される。503が１調査区Ⅶ－19－３・４地区、504が４調査区Ⅷ－17－10Ｅ地区出土。505・506は共にやや小振りの杯身で、残存率は505がほぼ完形、506が2/3である。506の受部から立ち上がりの下部に焼成時に溶着した須恵器片が認められる。ＴＫ47型式（５世紀末）に比定される。506・507は共に４調査区のⅧ－17－９・10地区出土。507は焼き歪みのため受部の部分が変形している他、受部に焼成時に溶着した須恵器片が認められる。なお、体底部外面に自然釉が厚く降着していることから、蓋身を一対として窯入れの際に507の底部が上になるように置かれていたものと推定される。ＭＴ15型式（６世紀前半）に比定される。４調査区のⅧ－17－９・10Ｂ地区出土。508は提瓶の口頸部と推定される。口頸部は完存しており口径8.8cm、口頸部高5.2cmを測る。６世紀後半の所産か。１調査区のⅦ－19－３・４地区出土。

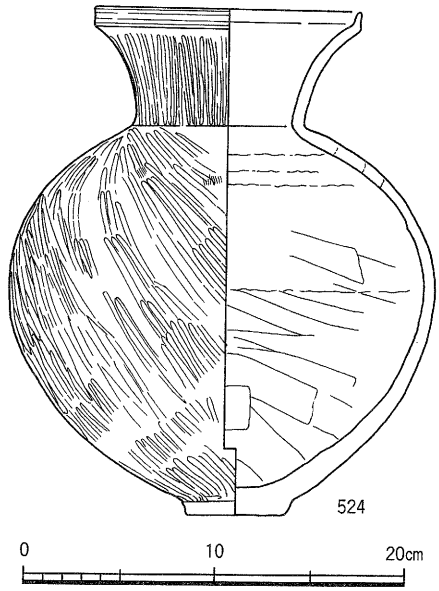
第Ⅵ層出土遺物（第146図、図版一一一・一一二）

１調査区で検出した河川堆積層を中心として遺物が出土している。量的には少量でローリングを受けたものが大半を占めている。時期的には弥生時代前期～古墳時代中期初頭のものである。15点（509～523）を図化した。掲載した土器類は全て１調査区から出土したものである。509は如意形口縁を持つ弥生時代前期の甕の小片である。頸部に６条の沈線が施されている。色調は淡褐灰色で胎土中に１㎜程度の長石・チャート・角閃石を多く含む。寺沢・森井編年の河内Ｉ－３様式に比定される。510は二重口縁壺の口頸部で約1/4が残存している。復元口径18.0cmを測る。口縁部外面に竹管文が施文されている。全体にローリングを受けている。淡褐灰色の色調で、胎土中に１㎜以下の長石・石英。チャートが含まれている他、スコープで角閃石の含有が認められる。弥生時代後期後半に比定される。509・510共に１調査区のⅦ－19－４・５地区出土。511は甕の底部である。底部は完存しており、底径5.2cmを測る。生駒西麓産特有の褐灰色の色調で、胎土中に0.5㎜以下の角閃石を多量に含有している。弥生時代中期のものか。１調査区のⅦ－19－４Ｄ・Ｅ、５Ｆ・Ｇ地区出土。512は甕ないしは鉢の底部と推定される。やや突出気味の底

部で底径2.8cmを測る。体部外面にタタキ調整が行なわれている。色調は赤褐色で、胎土中にスコープで確認できる角閃石が含まれている。１調査区のⅦ－19－４・５Ｇ地区出土。弥生時代後期に比定される。513・514は畿内Ｖ様式の甕である。513は体部上半から口縁部にかけての小片である。復元口径14.0cmを測る。514は突出した平底の底部で底径5.0cmを測る。色調は共に淡褐灰色で、胎土中にスコープで確認できる角閃石を含んでいる。513が１調査区のⅦ－19－４・５地区、514が１調査区のⅦ－19－４Ｄ・Ｅ、５Ｆ・Ｇ地区出土。515・516は共に小形鉢の底部である。515が上げ底、516が平底である。色調は515が灰白色、516が淡褐灰色である。共にスコープで角閃石の含有が認められる。弥生時代後期に比定される。515・516共に１調査区のⅦ－19－４Ｄ・Ｅ、５Ｆ・Ｇ地区出土。517は台付壺ないしは甕の脚部と推定される。脚部はほぼ完存しており、脚部高4.2cm、脚部径9.0cmを測る。褐灰色の色調である。スコープで角閃石の含有が認められる。弥生時代後期に比定される。１調査区のⅦ－19－４・５地区出土。518は口径が体部径を凌駕する土師器の小形丸底壺である。残存率1/2以上。口径9.0cm、器高7.0cm、体部最大径8.0cmを測る。内外面の器面調整はローリングを受けており不明である。古墳時代前期前半（布留式古相）に比定される。１調査区のⅦ－19－４・５地区出土。519は口縁部が二段に屈曲する大形の鉢である。体部外面はヨコハケ、体部内面は屈曲部以下にヘラケズリを行う。山陰地方からの搬入品である。518と同様、古墳時代前期前半（布留式古相）に比定される。１調査区のⅦ－19－４Ｄ・Ｅ、５Ｆ・Ｇ地区出土。520は布留式甕の小片である。全体に器壁が厚く口縁端部の肥厚が大きい特徴を持っている。古墳時代前期後半（布留式新相）に比定される。１調査区のⅦ－19－４Ｄ・Ｅ、５Ｆ・Ｇ地区出土。521～523は土師器高杯である。521は高杯の杯部片である。杯部は明瞭な稜を作らず口縁部が斜上方に直線的に伸びる。内外面共に化粧土の塗布と体部下位にヘラケズリが行われている。なお、焼成時に生じたピンホール状の剥離が内外面の全面に認められる。523は小形高杯の脚部である。時期は521・522が古墳時代前期前半（布留式古相）、523が古墳時代中期初頭に比定される。521が１調査区のⅦ－19－４・５Ｇ地区、522が１調査区のⅦ－19－５Ｈ地区、523が１調査区のⅦ－19－６Ｈ・Ｉ地区出土。

第Ⅶ層出土遺物（第147図、図版一一二）

弥生土器の広口壺１点（524）を図化した。524は球形の体部から斜上方に外反して伸びる口頸部が付くもので、口縁端部は上方に拡張され幅広の端面を形成している。底部は突出する平底である。ほぼ完形に復元が可能で、口径14.0cm、器高21.8cm、体部最大径22.4cm、底径5.2cmを測る。体部外面および口頸部外面はヘラミガキ、体部内面は板ナデ調整が行なわれている。色調は淡橙色で、胎土中に１mm以下の長石・石英が多量に含まれている他、スコープで角閃石の含有を認める。弥生時代後期後半に比定される。４調査区のⅧ－16－９Ｊ地区出土。



第147図　第Ⅶ層出土遺物実測図

参考文献

・弥生土器

小林行雄・佐原　真　1964『紫雲出』詫間町文化財保護委員会

寺沢　薫・森井貞雄　1989「１河内地域」『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅰ』木耳社

・土師器

原田昌則　1993「第５章　まとめ　３）中河内地域における庄内式から布留式土器の編年試案」『Ⅱ久宝寺遺跡（第１次調査）』(財)八尾市文化財調査研究会報告37

辻　美紀　1999「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学－大阪大学考古学研究室10周年記念論集－』大阪大学考古学研究室

・須恵器

田辺昭三　1966　『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ

〃　　1981　『須恵器大成』角川書店

・古代～中世の土師器

奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財調査研究所学報第32冊

古代の土器研究会編　1992「古代の土器Ⅰ　都城の土器集成」

古代の土器研究会編　1993「古代の土器Ⅱ　都城の土器集成」

土師器調整『平城宮報告』

a手法　口縁部外面をヨコナデし、底部を調整せずに残すもの。

b手法　口縁部をヨコナデし、底部をヘラ削りで調整するもの。

c手法　口縁部と底部の全面にヘラ削りを施すもの。

e手法　口縁部直下を幅狭くヨコナデし、それ以下を調整しないもの。

（土器外面のヘラミガキを施す場所の違いによる区別）

0手法　口縁部も底部も磨かないもの。

1手法　口縁部だけを磨くもの。

2手法　底部を磨くもの。

3手法　口縁部と底部の両方を磨くもの。

・中国産磁器

横田賢次郎・森田　勉　1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集４』九州歴史資料館

・黒色土器

橋本久和　1986「畿内の黒色土器（１）」『中近世土器の基礎研究Ⅱ』中世土器研究会

・瓦器椀

川越俊一　1982「大和地方の瓦器をめぐる二三の問題」『文化財論集　奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集』同朋舎

尾上　実　1983「南河内の瓦器椀」『藤澤一夫先生古稀記念論集　古文化論集』藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会

森島康雄　1992「畿内産瓦器椀の併行関係と暦年代」『大和の中世土器Ⅱ』大和古中近研究会

・土釜

森島康雄　1990「中河内の羽釜」『中近世土器の基礎研究Ⅵ』日本中世土器研究会

菅原正明　1982「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢　奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集』同朋舎

・備前焼

間壁忠彦・間壁葭子　1966～68・84　「備前焼ノート」１～５　『倉敷考古館研究集報』１・２・５・18号

・近世陶磁器

大橋康二他　2000『九州陶磁の編年九州近世陶磁学会10周年記念』九州近世陶磁学会

・屋瓦

濱田耕作・梅原末治　1934『京都帝国大学文学部考古学研究報告第13冊　新羅古瓦の研究』京都帝国大学文学部考古学教室

山本 昭　1984「河内竜華寺と渋川寺」『藤澤一夫先生古希記念 古代文化論叢』藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会

山本 昭　1986「河内国渋川寺について」『帝塚山考古学Ｎｏ６』帝塚山考古学研究所

2002 渋川廃寺第２次現地説明会資料（財）八尾市文化財調査研究会

・井戸

宇野隆夫　1982「井戸考」『史林　65巻５号』史学研究会

第４章　自然科学分析

第１節　久宝寺遺跡第29次調査（ＫＨ99－29）に伴う花粉分析

総合科学株式会社　水谷陸彦

１．調査概要

１）業務名

久宝寺遺跡第29次調査４調査区（ＫＨ99－29－４）に伴う花粉分析

２）目的

八尾都市計画事業大阪竜華都市拠点土地区画整理事業に先立って、継続的に発掘調査が行われている。調査地全体では、弥生時代後期以降から現在までに堆積した地層がみられる。今回の第29次調査では弥生時代後期～古墳時代中期の地層がみられ、主な遺構として古墳時代前期の水田跡と、弥生時代後期の地層に畦畔状の高まりがあった。畦畔状の高まりによって囲まれた内側の地層が堆積した時代と水田跡が形成された時代の、遺跡周辺の植生を考える。

３）調査地

大阪府八尾市渋川

４）履行期間

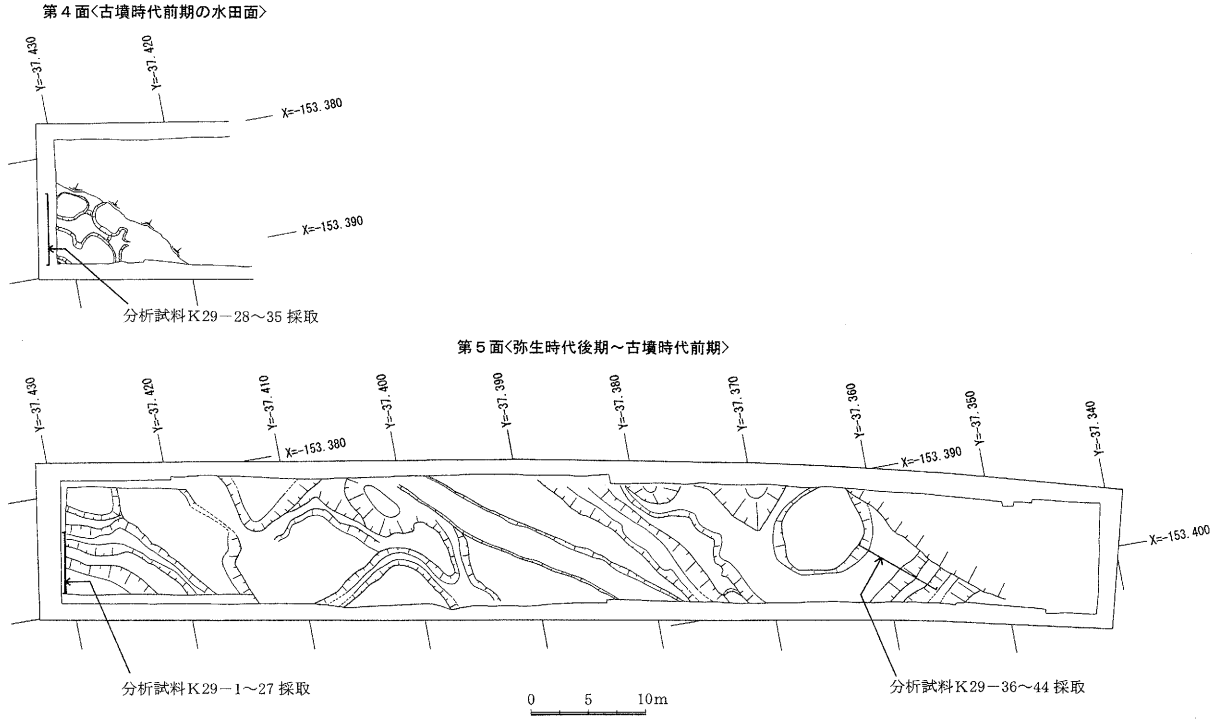
平成12年９月29日～平成12年11月30日

５）分析試料の数量

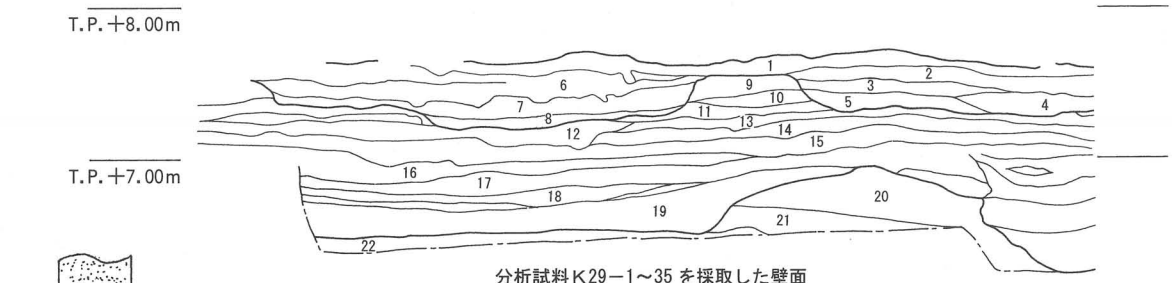
花粉分析：44点

６）分析試料の採取位置

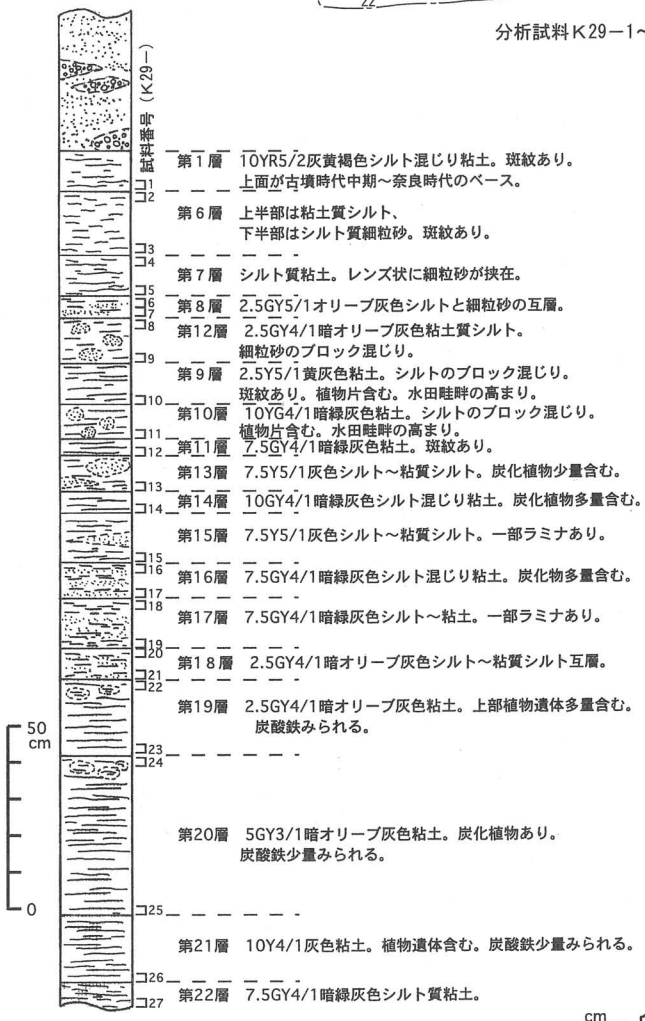
分析試料の採取位置を図－１の平面図、図－２の壁面図・柱状図に示す。



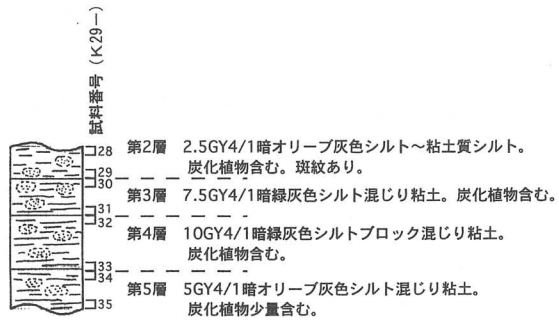
図－１　４調査区内の試料採取位置図



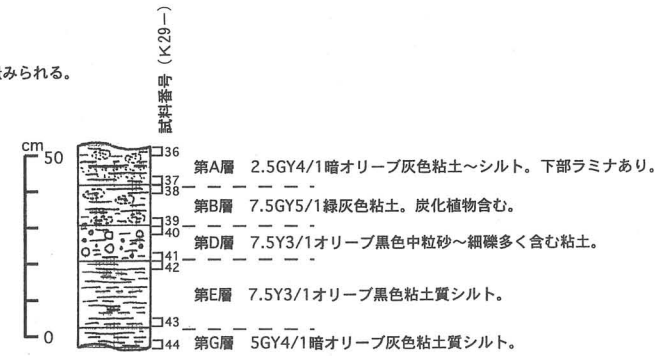
分析試料K29－1～35を採取した壁面



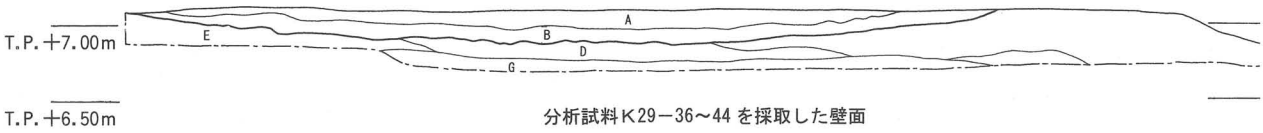
柱状図（分析試料K29－1～27）



柱状図（分析試料K29－28～35）



柱状図（分析試料K29－36～44）



分析試料K29－36～44を採取した壁面

図－2　壁面図・柱状図

2．分析方法

試料からの花粉化石抽出およびプレパラートの作成は、以下の手順で行った。

(1)湿潤重量で20ｇ程の試料を10％水酸化カリウム水溶液に室温で１日浸す。

(2)砂粒および植物片の除去。

(3)傾斜法により粘土鉱物およびフミン酸の除去。

(4)蒸発皿処理によるシルト粒および植物片の除去。

(5)塩化亜鉛（飽和水溶液）による重液分離（800r.p.m.で15分、その後2000r.p.m.で10分間、遠心分離)。

(6)フッ化水素酸処理（室温で１日)。

(7)アセトリシス処理（１分間湯煎)。

(8)グリセリジェリーで封入。

(9)ネイルエナメルで密封。

上記の方法で各試料２～５枚のプレパラートを作成した。花粉の同定は、オリンパスの生物顕微鏡（ＢＨ２）で主に400倍（接眼10倍×対物40倍)、必要に応じて1000倍（接眼10倍×対物100倍）の鏡下で行った。集計はメカニカルステージを用いて木本花粉の総数が200個を越えるまで同定・計数を行い、その過程で検出される草本花粉やシダ・コケ胞子についても同定・計数した。出現率の計算は、木本花粉の総数を基数として行った。

3．分析結果

花粉化石の産出状況を表－１に、花粉ダイアグラムを図－３①、②と図－４①、②、図－５①、②に、産出頻度が低かったタクサを表－２①、②に示す。

今回採取し分析した44試料全てから花粉化石は産出した。試料全体の産出傾向として、木本花粉と草本花粉は少なくシダ・コケ胞子が多かった。特に、Ｋ29－28の試料では木本花粉が産出しなかった。また、Ｋ29－１、２、10、23、29、30、32、34、42、43の試料では、木本花粉の含まれる割合が非常に低かった。

花粉ダイアグラムとして、木本花粉の総数が少ない試料は花粉１粒の産出で出現率に大きな違いが出てくるためグラフ化しないことが多い。表－１において◎印が付いていない試料が、木本花粉の総数が少ない試料である。これではダイアグラムにならないので、多少異常な出現率であるかもしれないが、産出傾向をすこしでも視覚的にとらえるために、表－１において◎と○印が付いている試料までを花粉ダイアグラムとして表した。

産出した木本花粉としては、ほぼ全試料においてアカガシ亜属（*Cyclobalanopsis*）が非常に多く、クリ属（*Castanea*）やシイ属・マテバシイ属（*Castanopsi-Pasania*)、コナラ亜属（*Quercus*)、ブナ属（*Fagus*）ハンノキ属（*Alnus*）などの広葉樹の花粉も伴われた。針葉樹の花粉では、コウヤマキ属（*Sciadopitys*）が多く、マツ属（*Pinus*）やモミ属（*Abies*)、ツガ属（*Tsuga*）スギ属（*Cryptomeria*）なども産出した。

草本花粉としては、イネ科（Gramineae）とヨモギ属（*Artemisia*）が多く、カヤツリグサ科（Cyperaceae）やキク亜科（Carduoideae)、セリ科（Umbelliferae）などが伴われた。

シダ・コケ胞子では、オシダ科－チャセンシダ科（Aspidaceae-Asplenniaceae）を含んだ単条溝の胞子が多く、三条溝の胞子も比較的高率であった。

表－1　分析重量と花粉化石産出状況

試料番号	分析重量（湿潤重量）g	産出状況	試料番号	分析重量（湿潤重量）g	産出状況
K29－1	23.18	△	K29－23	18.61	△
K29－2	20.57	△	K29－24	17.13	○
K29－3	27.77	○	K29－25	17.46	○
K29－4	20.95	○	K29－26	15.57	○
K29－5	25.32	◎	K29－27	20.79	○
K29－6	18.51	◎	K29－28	24.46	×
K29－7	26.22	◎	K29－29	24.22	△
K29－8	18.94	◎	K29－30	20.93	△
K29－9	23.95	○	K29－31	17.45	○
K29－10	21.56	△	K29－32	24.83	△
K29－11	22.12	○	K29－33	20.08	○
K29－12	20.41	○	K29－34	18.78	△
K29－13	18.30	○	K29－35	22.61	○
K29－14	16.56	○	K29－36	18.73	◎
K29－15	19.93	○	K29－37	22.30	○
K29－16	22.92	○	K29－38	20.07	◎
K29－17	21.02	◎	K29－39	16.25	○
K29－18	20.00	◎	K29－40	19.84	○
K29－19	22.02	○	K29－41	21.63	○
K29－20	18.52	◎	K29－42	18.55	△
K29－21	17.36	○	K29－43	18.38	△
K29－22	16.73	○	K29－44	31.95	○

◎：木本花粉50個以上　　○：木本花粉10～50個未満

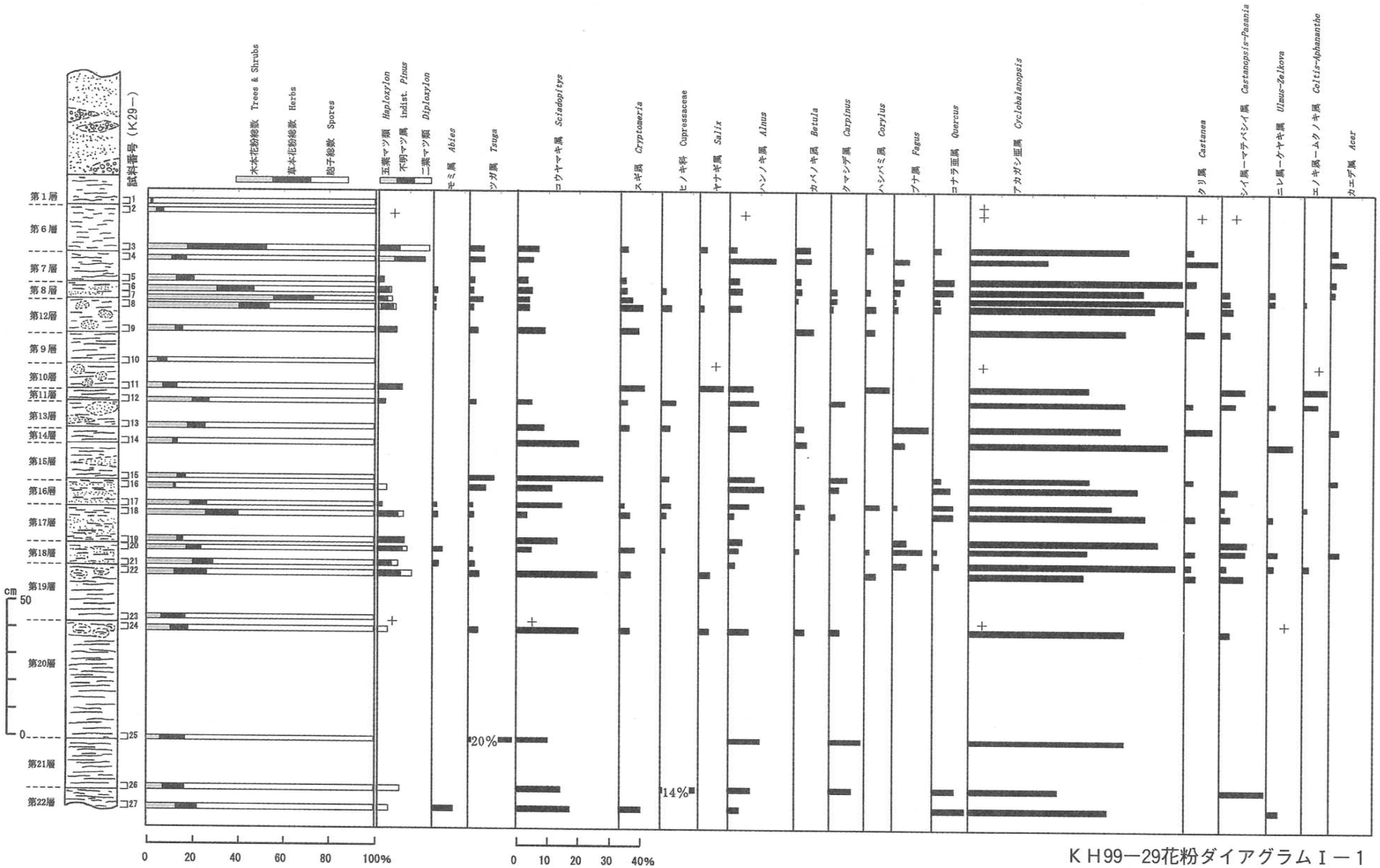
△：木本花粉１～10個未満　　×：木本花粉が産出しない

4．古植生・古気候

1）分帯

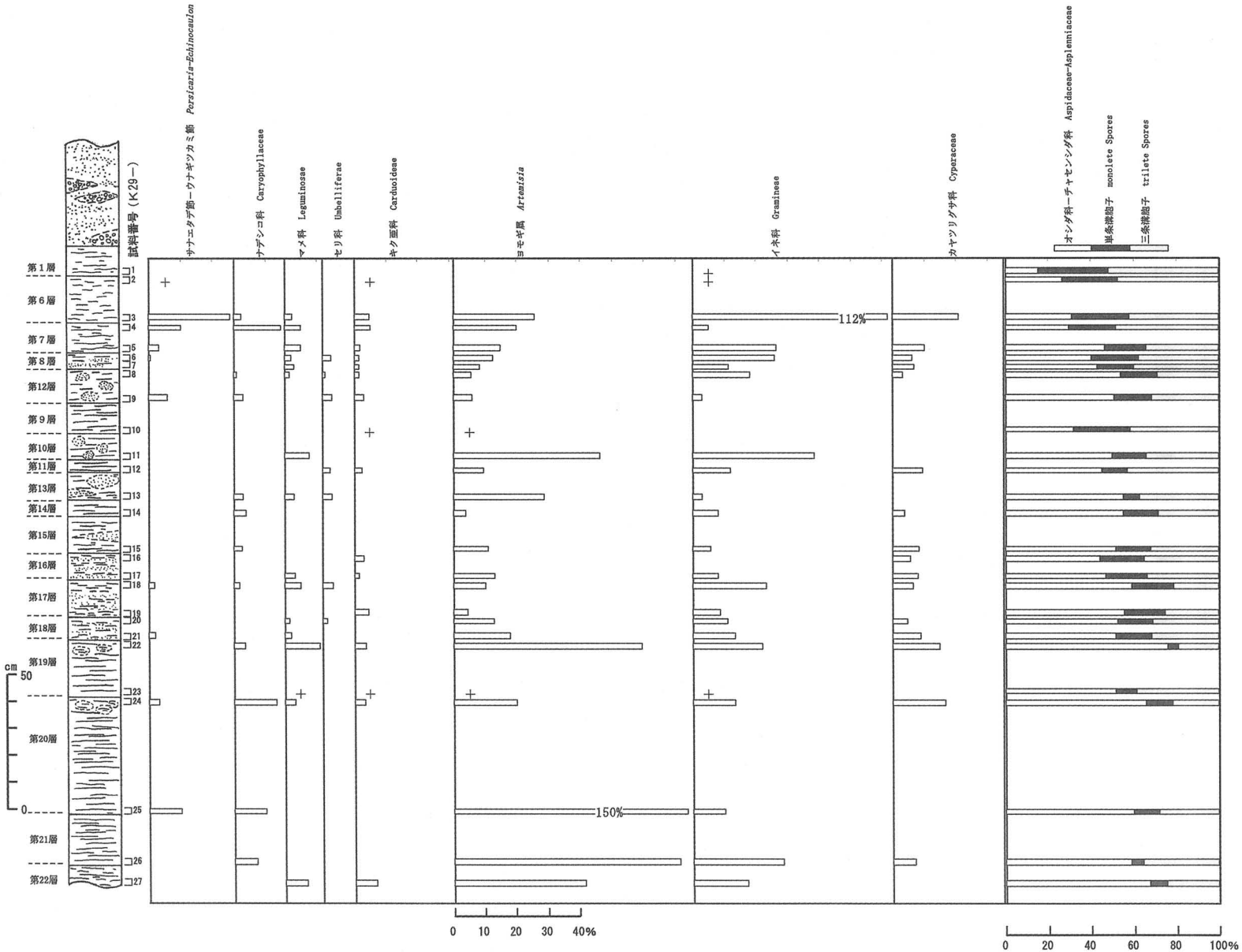
分析結果で述べたように、今回分析をした全試料における花粉化石群集の特徴は、アカガシ亜属が多いことである。花粉帯としては**アカガシ亜属帯**のひとつである。

花粉亜帯としては２つの亜帯に分けられる。ＫＨ99－29花粉ダイアグラムＩ（図－３）でみると１つの亜帯は、高率のアカガシ亜属にブナ属、コナラ亜属、クリ属、シイ属-マテバシイ属、ニレ属-ケヤキ属、エノキ属-ムクノキ属、カエデ属などの広葉樹と、コウヤマキ属やモミ属、二葉マツ類（同定結果では不明マツ属が大半であるが、二葉マツ類か五葉マツ類かが同定できるものはほぼ全てが二葉マツ類であることから、不明マツ属は二葉マツ類であると考えられる）などの針



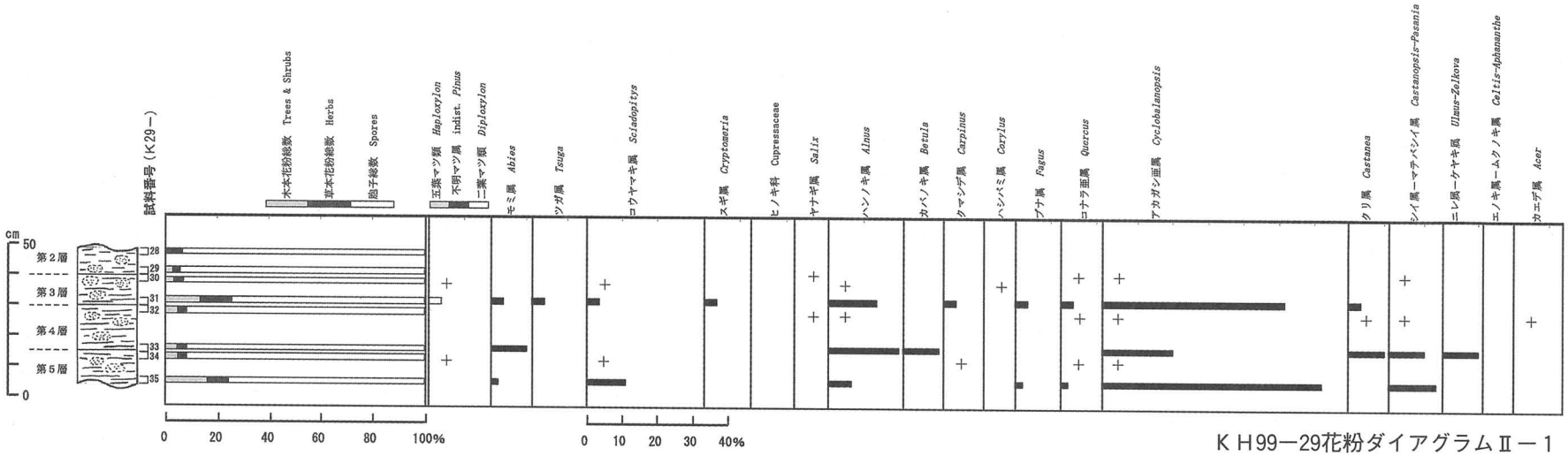
ＫＨ99－29花粉ダイアグラムＩ－１

図－３①



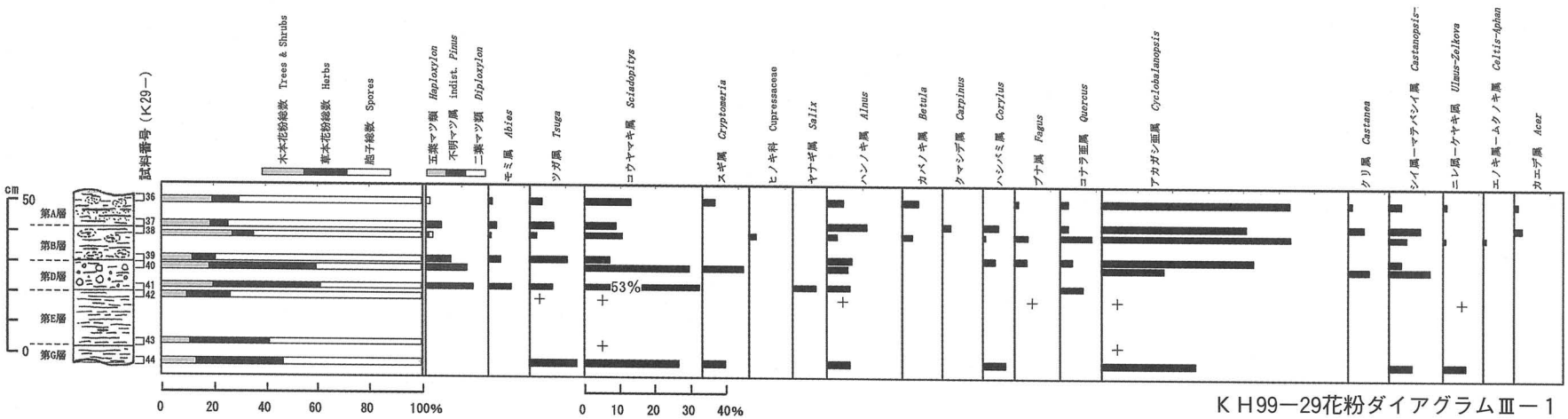
図—3②

KH99—29花粉ダイアグラムI—2



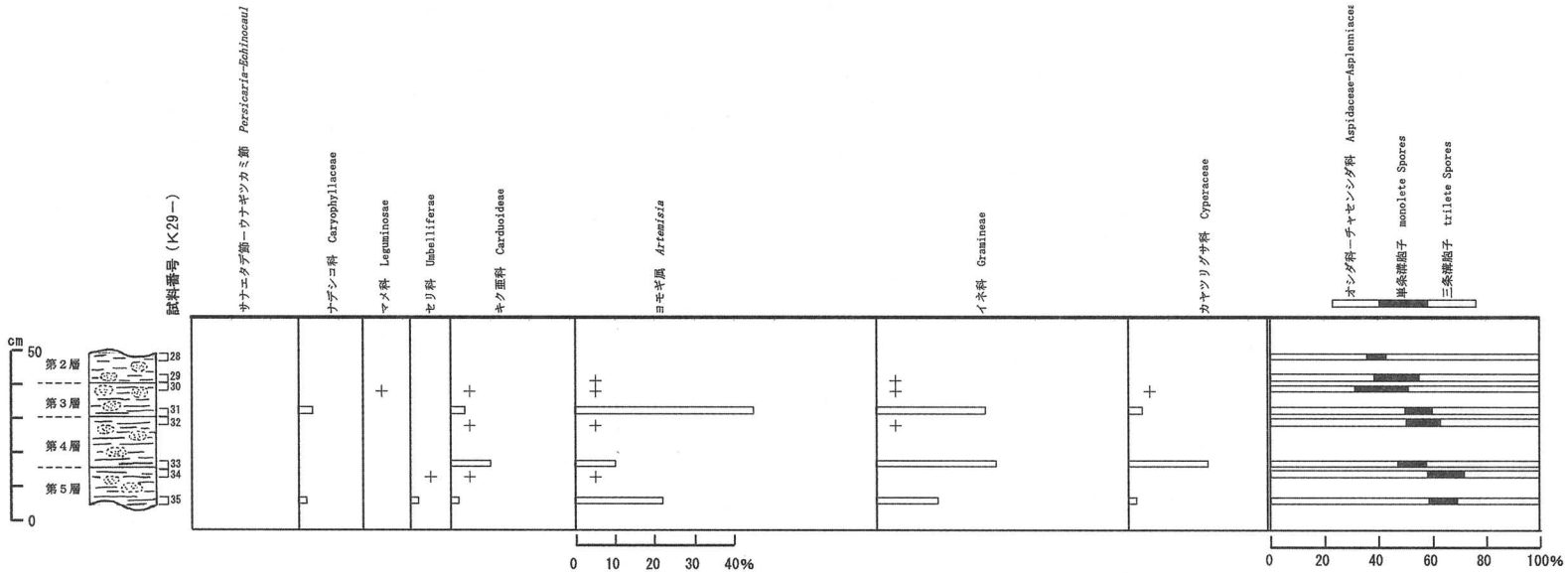
ＫＨ99－29花粉ダイアグラムⅡ－1

図－4①



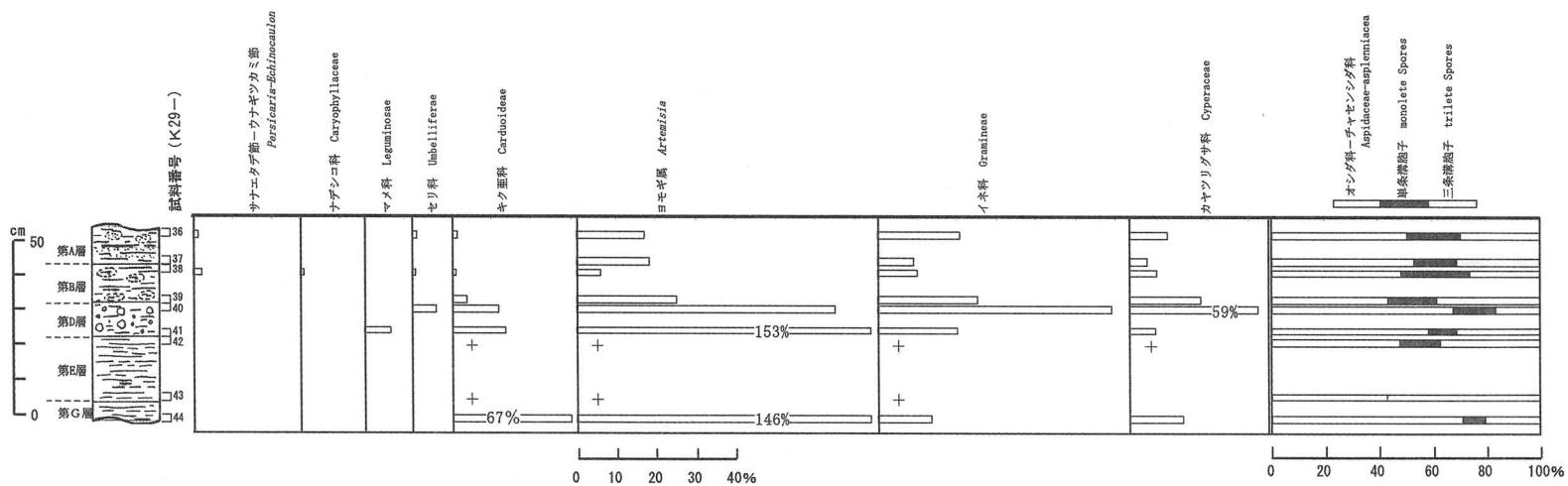
ＫＨ99－29花粉ダイアグラムⅢ－1

図－5①



図－4②

ＫＨ99－29花粉ダイアグラムⅡ－2



図－5②

ＫＨ99－29花粉ダイアグラムⅢ－2

表－2①　ＫＨ99－29　産出頻度が低かった花粉タクサ

Sample No. 試料番号	*Picea* トウヒ属	*Podocarps* マキ属	*Myrica* ヤマモモ属	*Juglans-Pterocarya* クルミ属－サワグルミ属	*Phellodendron* キハダ属	*Ilex* モチノキ属	*Aesculus* トチノキ属	*Tilia* シナノキ属	*Elaeagnus* グミ属	Ericaceae ツツジ科目	*Symplocos* ハイノキ属
K29-1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-4	—	—	—	5.0	—	—	—	—	5.0	—	—
K29-5	—	—	—	—	—	—	—	1.7	—	—	1.7
K29-6	—	—	—	0.7	—	0.7	—	—	—	—	1.4
K29-7	—	—	—	1.5	—	—	—	—	—	0.7	—
K29-8	—	—	—	—	—	—	2.9	—	—	—	—
K29-9	—	—	2.9	2.9	—	—	—	—	—	—	—
K29-10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-11	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7.7	—
K29-12	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.4
K29-13	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.9
K29-14	—	—	—	—	—	—	—	2.9	—	—	—
K29-15	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-17	—	—	—	—	1.6	—	1.6	—	—	—	—
K29-18	—	—	—	1.7	—	—	1.7	—	—	—	—
K29-19	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-20	—	—	1.6	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-21	2.2	—	—	2.2	—	—	—	—	—	—	—
K29-22	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-23	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-24	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-25	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-26	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-27	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-28	######	######	######	######	######	######	######	######	######	######	######
K29-29	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-30	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-31	—	3.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-32	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-33	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	10.0
K29-34	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-35	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-36	—	—	—	—	—	—	—	1.2	1.2	—	1.2
K29-37	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-38	1.0	—	1.0	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-39	—	—	3.6	3.6	—	—	—	—	—	—	—
K29-40	—	5.9	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-41	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-42	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-43	—	—	—	—	—	—	—	25.0	—	—	—
K29-44	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

######：木本花粉が産出しなかった試料

表－２②　ＫＨ99－29　産出頻度が低かった花粉タクサ

Sample No. 試料番号	*Ligustrum* イボタノキ属	*Fraxinus* トネリコ属	Chenopdiaceae アカザ科	*Thalictrum* カラマツソウ属	*Sanguisorba* ワレモコウ属	*Haloragis* アリノトウグサ属	Labiatae シソ科	Cichorioideae タンポポ亜科	*Typha* ガマ属	*Sagittaria* オモダカ属
K29-1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-3	—	—	—	—	—	—	2.3	4.7	—	—
K29-4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-6	—	0.7	—	—	—	—	—	1.4	—	—
K29-7	—	—	—	—	—	—	0.7	0.7	—	—
K29-8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-9	—	—	—	—	—	—	—	—	2.9	—
K29-10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-11	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-12	—	2.4	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-13	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.9
K29-14	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-15	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-17	—	—	1.6	—	1.6	—	—	—	—	—
K29-18	—	—	—	3.3	—	—	—	—	—	—
K29-19	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-20	—	—	1.6	—	—	—	—	3.2	—	—
K29-21	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-22	—	—	3.7	—	—	—	—	—	—	—
K29-23	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-24	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-25	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-26	—	—	7.1	—	—	—	—	7.1	—	7.1
K29-27	3.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-28	######	######	######	######	######	######	######	######	######	######
K29-29	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-30	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-31	—	—	—	—	—	—	3.4	—	3.4	—
K29-32	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-33	—	—	—	—	—	—	—	—	—	10.0
K29-34	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-35	—	—	2.2	—	—	2.2	—	—	—	—
K29-36	—	—	1.2	—	—	—	—	—	—	—
K29-37	—	—	2.3	—	—	2.3	—	—	—	—
K29-38	—	—	1.0	—	—	—	—	—	1.0	—
K29-39	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3.6
K29-40	—	—	17.6	—	—	—	—	5.9	—	—
K29-41	—	—	—	—	—	—	—	6.7	—	—
K29-42	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-43	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
K29-44	—	—	—	—	—	—	—	6.7	—	—

######：木本花粉が産出しなかった試料

花粉帯	花粉亜帯	花粉ダイアグラムⅠ	花粉ダイアグラムⅡ	花粉ダイアグラムⅢ
アカガシ亜属帯	ブナ属ークリ属亜帯	K29－1～21の試料	K29－28～35の試料	K29－36～39の試料
	コウヤマキ属亜帯	K29－22～27の試料		K29－40～44の試料

葉樹が伴われるK29-1～21試料の**ブナ属ークリ属亜帯**である。もう1つの亜帯は、高率のアカガシ亜属に広葉樹としてコナラ亜属やシイ属-マテバシイ属、クマシデ属などは伴われるがブナ属やニレ属-ケヤキ属、エノキ属-ムクノキ属、カエデ属などがほとんど産出せず、針葉樹ではコウヤマキ属が高率で二葉マツ類は伴われるがモミ属がほとんど産出しないK29-22～27試料の**コウヤマキ属亜帯**である。

ＫＨ99-29花粉ダイアグラムⅡ（図－４）ではK29-28～35試料が**ブナ属ークリ属亜帯**、ＫＨ99-29花粉ダイアグラムⅢ（図－５）ではK29-36～39試料が**ブナ属ークリ属亜帯**で、K29-40～44試料が**コウヤマキ属亜帯**である。

２）古植生・古気候

(1) 古植生

花粉化石群集にもとづき、各花粉帯・亜帯を設定した地層が堆積した時代の古植生と古気候を考える。

アカガシ亜属帯ブナ属ークリ属亜帯（K29-1～21・K29-28～35・K29-36～39）

アカガシ亜属の花粉が非常に高率に産出しクリ属やシイ属-マテバシイ属の花粉が伴われることから、遺跡周辺の植生はアカガシ亜属が優占しクリ属やシイ属-マテバシイ属などが混じる暖温帯常緑広葉樹林であったと考えられる。また、低率ながらニレ属-ケヤキ属やエノキ属-ムクノキ属そしてヤナギ属の花粉が産出することから近くに河畔林があり、ハンノキ属の花粉の産出から湿地にハンノキ属が生育していたと考えられる。高率なコウヤマキ属の花粉と高率ではないがモミ属やツガ属やスギ属、ブナ属、コナラ亜属、カエデ属の花粉も産出することから、後背地である生駒山地や金剛山地の高標部には中間温帯林や冷温帯南部の落葉広葉樹林があったと推定される。

この花粉亜帯は第１層～第18層と第Ａ層、第Ｂ層に設定されている。これらのうち第２層～第８層は、水田畦畔状の高まりに囲まれシルトあるいは細粒砂のブロックが混じることから、作土層と考えられている。花粉分析の結果では、イネ科の花粉が第６層から採取したK29-3試料で最も高率に産出し、他の作土層から採取した試料でもイネ科の花粉が比較的高率である。花粉分析の結果は、第２層～第８層を作土層と考えることに矛盾しない。また、第３層～第５層の分析結果で特徴的なこととして、各土層の上部と下部から採取した試料を比べると下部から採取した試料の方がより多くの花粉を含んでいる。これは、各土層の上部が下部に比べて紫外線を受けやすく、本来含まれていた花粉の膜が傷み化石として残らないためではないかと考えられる。このことも作土層であるということと関係している可能性がある。

コウヤマキ属亜帯（K29-22～27・K29-40～44）

この亜帯でもアカガシ亜属の花粉が非常に高率に産出することから、遺跡周辺の植生はアカガシ亜属を主体とする暖温帯常緑広葉樹林であったと考えられる。ただし、上位のブナ属－クリ属亜帯と比べると、クリ属やエノキ属-ムクノキ属、ニレ属-ケヤキ属、ブナ属、カエデ属、モミ属などの花粉がほとんど産出しない。また、後背地の高標部に生育していたと考えられるコウヤマキ属が、この亜帯では高率になっている。これらのことから、遺跡周辺から後背地までの植生が何らかの理由で多少破壊され単純なものになったと考えられる。

(2) 古気候

推定される暖温帯常緑広葉樹林の古植生から、気候による植生帯区分の暖温帯に属し現在の大阪平野と同じぐらいの暖かさであったと考えられる。

5．他の分析結果との比較

1）22次および25次調査結果との比較

22次および25次調査では、ともに弥生時代後期～古墳時代前期の地層が分析されている。今回調査における弥生時代後期～古墳時代前期の花粉化石群集の特徴、アカガシ亜属の花粉が非常に高率に産出しクリ属やシイ属-マテバシイ属の花粉が伴われることは、22次・25次調査の花粉分析結果と類似している。一方、ヤナギ属とともにニレ属-ケヤキ属やエノキ属-ムクノキ属の花粉が低率ながら連続して産出することは、今回調査花粉分析結果のみの特徴である。

2）他の遺跡との比較

久宝寺遺跡の周辺には亀井遺跡や加美遺跡、瓜生堂遺跡など多くの遺跡が点在している。これらのうち、今回分析をした弥生時代後期と古墳時代前期に堆積した地層があり、その地層の花粉分析を行っているいくつかの遺跡の分析結果と今回の分析結果を比較する。

亀井遺跡では、含貝海成層の直下から弥生時代そして古墳時代前期～中期の地層およびそれ以後の地層が分析されている（那須・坂本，1980）。那須・坂本（1980）では遺跡周辺の基本的な森林植生はカシ林を主とする暖温帯照葉樹林で、この森林植生は古墳時代まであまり極端な破壊を受けなかったと考えられている。また、亀井北遺跡では、パリノ・サーヴェイ(株)(1987a，b)の花粉分析結果がある。この遺跡では主に弥生時代後期から古墳時代の地層が分析され、カシ類を中心とした照葉樹林が広く分布していたと推定されている。

瓜生堂遺跡ではD地区、E地区、F地区、H地区、I地区、J地区において弥生時代から庄内式期、古墳時代の地層が分析されている（安田，1980，1981，1982など）。安田（1981）では、弥生時代後期から古墳時代の瓜生堂遺跡周辺にはカシやシイの照葉樹林が存在したと考えられている。そして、遺跡周辺で照葉樹林が切り開かれアカマツの二次林が拡大するのは歴史時代おそらく近世以降のことであると考えられている。

以上、久宝寺遺跡の周辺の遺跡でも弥生時代後期～古墳時代の遺跡周辺には暖温帯の常緑広葉樹林（照葉樹林）が広がっていたことがうかがえる。

花粉化石同定・計数結果(粒数)①

Sample No. 試料番号	Trees & Shrub 木本花粉総数	Herbs 草本花粉総数	Spores 胞子総数	総数	*Haploxlon* 五葉マツ類	*Indest. Pinus* 不明マツ属	*Diploxylon* 二葉マツ属	*Abies* モミ属	*Picea* トウヒ属	*Tsuga* ツガ属	*Podocarps* マキ属	*Sciadopitys* コウヤマキ属	*Crytomeria* スギ属	Cupressaceae ヒノキ科	*Salix* ヤナギ属
K29-1	1.0	1.0	91.0	93.0											
K29-2	6.0	5.0	148.0	159.0		1.0	1.0								
K29-3	43.0	86.0	117.0	246.0		3.0	4.0			2.0		3.0	1.0		1.0
K29-4	20.0	12.0	155.0	187.0	1.0	2.0				1.0		1.0			
K29-5	60.0	37.0	374.0	471.0		1.0				1.0		2.0	1.0		
K29-6	143.0	76.0	248.0	467.0		5.0	1.0	2.0		2.0		7.0	3.0	2.0	1.0
K29-7	134.0	43.0	65.0	242.0		4.0	2.0	1.0		6.0		5.0	5.0		
K29-8	126.0	40.0	145.0	311.0	1.0	5.0	1.0	1.0		2.0		5.0	9.0	4.0	2.0
K29-9	34.0	9.0	235.0	278.0		2.0				1.0		3.0	2.0		
K29-10	5.0	5.0	106.0	116.0											1.0
K29-11	13.0	12.0	164.0	189.0		1.0							1.0		1.0
K29-12	42.0	15.0	153.0	210.0		1.0				1.0		2.0	1.0	2.0	
K29-13	35.0	15.0	145.0	195.0								3.0	1.0	1.0	
K29-14	25.0	5.0	190.0	220.0								5.0			
K29-15	36.0	10.0	222.0	268.0						3.0		10.0		1.0	
K29-16	35.0	3.0	258.0	296.0			1.0			2.0		4.0			
K29-17	61.0	23.0	231.0	315.0		1.0		1.0		1.0		9.0	1.0	2.0	
K29-18	60.0	33.0	137.0	230.0		4.0	1.0	1.0		1.0		2.0	2.0	1.0	
K29-19	23.0	4.0	143.0	170.0		2.0						3.0			
K29-20	63.0	23.0	271.0	357.0		5.0	1.0	2.0		1.0		3.0	3.0	1.0	
K29-21	45.0	20.0	155.0	220.0		2.0	1.0	1.0	1.0	1.0					
K29-22	27.0	32.0	162.0	221.0		2.0	1.0			1.0		7.0	1.0		1.0
K29-23	7.0	12.0	91.0	110.0		1.0						3.0			
K29-24	30.0	22.0	233.0	285.0			1.0			1.0		6.0	1.0		1.0
K29-25	10.0	18.0	136.0	164.0						2.0		1.0			
K29-26	14.0	19.0	162.0	195.0			1.0					2.0		2.0	
K29-27	29.0	21.0	173.0	223.0			1.0	2.0				5.0	2.0		
K29-28	0.0	2.0	28.0	30.0											
K29-29	4.0	4.0	130.0	138.0											1.0
K29-30	5.0	6.0	152.0	163.0			1.0					1.0			
K29-31	29.0	26.0	158.0	213.0			1.0	1.0		1.0	1.0	1.0	1.0		
K29-32	8.0	5.0	147.0	160.0											1.0
K29-33	10.0	8.0	203.0	221.0				1.0							
K29-34	9.0	6.0	166.0	181.0		1.0						2.0			
K29-35	45.0	23.0	211.0	279.0				1.0				5.0			
K29-36	83.0	43.0	297.0	423.0			1.0	1.0		3.0		11.0	3.0		
K29-37	44.0	16.0	172.0	232.0		2.0		1.0		3.0		4.0			
K29-38	101.0	30.0	240.0	371.0		1.0	1.0	1.0	1.0	2.0		11.0		2.0	
K29-39	28.0	21.0	187.0	236.0		2.0		1.0		3.0		2.0			
K29-40	17.0	38.0	37.0	92.0		2.0					1.0	5.0	2.0		
K29-41	15.0	31.0	29.0	75.0		2.0		1.0		1.0		8.0			1.0
K29-42	9.0	15.0	67.0	91.0						1.0		1.0			
K29-43	4.0	11.0	21.0	36.0								1.0			
K29-44	15.0	37.0	59.0	111.0						2.0		4.0	1.0		

花粉化石同定・計数結果(粒数)②

Sample No. 試料番号	*Myrica* ヤマモモ属	*Juglans-Pterocarya* クルミ属ーサワグルミ属	*Alnus* ハンノキ属	*Betula* カバノキ属	*Carpinus* クマシデ属	*Corylus* ハシバミ属	*Fagus* ブナ属	*Quercus* コナラ亜属	*Cyxlobalanopsis* アカガシ亜属	*Castanea* クリ属	*Castanopsis-Pasania* シイ属ーマテバシイ属	*Ulmus-Zelkova* ニレ属ーケヤキ属	*Celtis-Aphananthe* エノキ属ームクノキ属	*Phellodendron* キハダ属	*Ilex* モチノキ属
K29-1									1.0						
K29-2			1.0						1.0	1.0	1.0				
K29-3			1.0	2.0		1.0		1.0	22.0	1.0					
K29-4		1.0	3.0	1.0			1.0		5.0	2.0					
K29-5			2.0	1.0			2.0	4.0	41.0	2.0					
K29-6		1.0	6.0	3.0	3.0	2.0	3.0	9.0	80.0		4.0	3.0			1.0
K29-7		2.0		1.0	3.0		1.0	3.0	92.0		4.0	3.0	1.0		
K29-8			5.0		1.0	4.0	2.0	3.0	75.0	1.0	5.0				
K29-9	1.0	1.0		2.0		1.0			17.0	2.0	1.0				
K29-10									3.0				1.0		
K29-11			1.0			1.0			5.0		1.0		1.0		
K29-12			4.0		2.0				21.0	1.0	2.0	1.0	2.0		
K29-13			2.0	1.0			4.0		17.0	3.0					
K29-14				1.0			1.0		16.0			2.0			
K29-15			3.0		2.0			1.0	14.0	1.0					
K29-16			4.0		1.0			2.0	19.0		2.0				
K29-17			4.0	2.0		3.0	1.0	4.0	28.0		1.0		1.0	1.0	
K29-18		1.0	1.0	1.0	1.0			4.0	34.0	2.0	2.0	1.0			
K29-19			1.0				1.0		14.0		2.0				
K29-20	1.0		2.0	1.0		1.0	6.0	1.0	24.0	2.0	5.0	2.0			
K29-21		1.0	1.0				2.0	1.0	30.0	1.0	1.0	1.0	1.0		
K29-22						1.0			10.0	1.0	2.0				
K29-23									2.0			1.0			
K29-24			2.0	1.0	1.0				15.0		1.0				
K29-25			1.0		1.0				5.0						
K29-26			1.0		1.0			1.0	4.0		2.0				
K29-27			1.0					3.0	13.0			1.0			
K29-28															
K29-29								1.0	1.0		1.0				
K29-30			2.0			1.0									
K29-31			4.0		1.0		1.0	1.0	15.0	1.0					
K29-32			2.0					1.0	1.0	1.0	1.0				
K29-33			2.0	1.0					2.0	1.0	1.0	1.0			
K29-34					1.0			1.0	4.0						
K29-35			3.0				1.0	1.0	28.0		6.0				
K29-36			4.0	4.0			1.0	2.0	44.0	1.0	3.0	1.0			
K29-37			5.0		1.0	2.0		1.0	18.0	2.0	4.0				
K29-38	1.0		3.0	3.0		1.0	4.0	9.0	54.0		5.0	1.0	1.0		
K29-39	1.0	1.0	2.0			1.0	1.0	1.0	12.0		1.0				
K29-40			1.0						3.0	1.0	2.0				
K29-41			1.0					1.0							
K29-42			2.0				2.0		2.0			1.0			
K29-43									2.0						
K29-44			1.0			1.0			4.0		1.0	1.0			

花粉化石同定・計数結果(粒数)③

Sample No. 試料番号	*Acer* カエデ属	*Aesculus* トチノキ属	*Tilia* シナノキ属	*Elaeagnus* グミ属	Ericaceae ツツジ科	*Symplecos* ハイノキ属	*Ligustrum* イボタノキ属	*Fraxinus* トネリコ属	*Persicaria-Echinocaulon* サナエタデ節－ウナギツカミ節	Chenopdiaceae アカザ科	Caryophtllaceae ナデシコ科	*Thalictrum* カラマツソウ属	*Sanguisorba* ワレモコウ属	Leguminosae マメ科	*Haloragis* アリノトウグサ属
K29-1															
K29-2									1.0						
K29-3	1.0								11.0		1.0			1.0	
K29-4	1.0			1.0					2.0		3.0			1.0	
K29-5	1.0		1.0			1.0			2.0					3.0	
K29-6	2.0					2.0		1.0	1.0					3.0	
K29-7					1.0									4.0	
K29-8											1.0			2.0	
K29-9		1.0							2.0		1.0				
K29-10															
K29-11					1.0									1.0	
K29-12						1.0		1.0							
K29-13	1.0		1.0			1.0					1.0			1.0	
K29-14											1.0				
K29-15	1.0										1.0				
K29-16															
K29-17										1.0			1.0	2.0	
K29-18		1.0							1.0		1.0	2.0		3.0	
K29-19		1.0													
K29-20	2.0									1.0				1.0	
K29-21									1.0					1.0	
K29-22										1.0	1.0			3.0	
K29-23														2.0	
K29-24									1.0		4.0			1.0	
K29-25									1.0		1.0				
K29-26										1.0	1.0				
K29-27							1.0							2.0	
K29-28															
K29-29															
K29-30														1.0	
K29-31											1.0				
K29-32	1.0														
K29-33															
K29-34						1.0									
K29-35										1.0	1.0				1.0
K29-36	1.0		1.0	1.0		1.0			1.0	1.0					
K29-37	1.0									1.0					1.0
K29-38									2.0	1.0	1.0				
K29-39															
K29-40										3.0					
K29-41														1.0	
K29-42															
K29-43			1.0												
K29-44															

花粉化石同定・計数結果(粒数)④

Sample No. 試料番号	Umbellifeerae セリ科	Labiatae シソ科	Cichorioideae タンポポ亜科	Carduoideae キク亜科	*Artemisia* ヨモギ属	*Typha* ガマ属	*Sagittaria* オモダカ属	Gramineae イネ科	Cyperaceae カヤツリグサ科	Aspidacea-Aspleniaceae オシダ科ーチャセンシダ科	Monolete Spores 単条溝胞子	Trilete Spores 三条溝胞子
K29-1								1.0		14.0	30.0	47.0
K29-2				2.0				2.0		39.0	39.0	70.0
K29-3		1.0	2.0	2.0	11.0			48.0	9.0	36.0	32.0	49.0
K29-4				1.0	4.0			1.0		46.0	34.0	75.0
K29-5				1.0	9.0			16.0	6.0	173.0	73.0	128.0
K29-6	4.0		2.0	2.0	18.0			37.0	9.0	100.0	55.0	93.0
K29-7		1.0	1.0	2.0	11.0			15.0	9.0	28.0	11.0	26.0
K29-8	1.0			2.0	7.0			23.0	4.0	78.0	25.0	42.0
K29-9	1.0			1.0	2.0	1.0		1.0		120.0	41.0	74.0
K29-10				3.0	2.0					34.0	28.0	44.0
K29-11					6.0			5.0		82.0	26.0	56.0
K29-12	1.0			1.0	4.0			5.0	4.0	69.0	18.0	66.0
K29-13	1.0				10.0		1.0	1.0		80.0	11.0	54.0
K29-14					1.0			2.0	1.0	105.0	31.0	54.0
K29-15					4.0			2.0	3.0	115.0	36.0	71.0
K29-16				1.0					2.0	114.0	54.0	90.0
K29-17				1.0	8.0			5.0	5.0	108.0	45.0	78.0
K29-18	2.0				6.0			14.0	4.0	81.0	27.0	29.0
K29-19				1.0	1.0			2.0		80.0	27.0	36.0
K29-20	1.0		2.0		8.0			7.0	3.0	143.0	44.0	84.0
K29-21					8.0			6.0	4.0	80.0	26.0	49.0
K29-22				1.0	16.0			6.0	4.0	123.0	8.0	31.0
K29-23				1.0	8.0			1.0		47.0	9.0	35.0
K29-24				1.0	6.0			4.0	5.0	154.0	28.0	51.0
K29-25					15.0			1.0		82.0	16.0	38.0
K29-26			1.0		10.0		1.0	4.0	1.0	95.0	10.0	57.0
K29-27				2.0	12.0			5.0		117.0	14.0	42.0
K29-28					2.0					10.0	2.0	16.0
K29-29					1.0			3.0		50.0	22.0	58.0
K29-30				1.0	2.0			1.0	1.0	48.0	30.0	74.0
K29-31		1.0		1.0	13.0	1.0		8.0	1.0	79.0	16.0	63.0
K29-32				2.0	2.0			1.0		74.0	19.0	54.0
K29-33				1.0	1.0		1.0	3.0	2.0	96.0	22.0	85.0
K29-34	1.0			1.0	4.0					97.0	23.0	46.0
K29-35	1.0			1.0	10.0			7.0	1.0	124.0	23.0	64.0
K29-36	1.0			1.0	14.0			17.0	8.0	150.0	59.0	88.0
K29-37					8.0			4.0	2.0	91.0	28.0	53.0
K29-38	1.0			1.0	6.0	1.0		10.0	7.0	116.0	61.0	63.0
K29-39				1.0	7.0		1.0	7.0	5.0	81.0	34.0	72.0
K29-40	1.0		1.0	2.0	11.0			10.0	10.0	25.0	6.0	6.0
K29-41			1.0	2.0	23.0			3.0	1.0	17.0	3.0	9.0
K29-42				4.0	6.0			3.0	2.0	32.0	10.0	25.0
K29-43				3.0	7.0			1.0		9.0		12.0
K29-44			1.0	10.0	22.0			2.0	2.0	42.0	5.0	12.0

6．まとめ

今回の花粉分析では、以下のことが明らかになった。

（1）花粉化石群集にもとづき下位よりアカガシ亜属帯のコウヤマキ属亜帯とブナ属-クリ属亜帯に分帯される。

（2）アカガシ亜属帯のコウヤマキ属亜帯とブナ属-クリ属亜帯の地層が堆積した時代の遺跡周辺の植生は、アカガシ亜属が優占する暖温帯の常緑広葉樹林で、現在の大阪平野と同じぐらいの暖かさであったと考えられる。

（3）ブナ属-クリ属亜帯に比べるとコウヤマキ属亜帯の時代は、遺跡周辺から後背地までの植生が何らかの理由で多少破壊され単純なものになったと考えられる。

（4）花粉分析結果は第２層～第８層を作土層と考えることと矛盾しない。

（5）今回調査の分析結果はこれまでの久宝寺における分析結果（22次および25次調査）や久宝寺周辺における同時代の遺跡の分析結果と類似する。

7．文献

那須孝悌・坂本清子，1980：花粉分析。亀井・城山　寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書－本文編－，P423-431．大阪文化財センター

安田喜憲，1980：瓜生堂遺跡の泥土の花粉分析（Ⅱ）。瓜生堂　近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書，P427-436．大阪文化財センター

安田喜憲，1981：瓜生堂遺跡の泥土の花粉分析（Ⅲ）。瓜生堂　近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書，P347-371．大阪文化財センター

安田喜憲，1982：瓜生堂・巨摩廃寺遺跡の泥土の花粉分析。巨摩・瓜生堂 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書，P321-360．大阪文化財センター

安田喜憲，1983：若江北遺跡Ａトレンチ北壁の花粉分析。若江北　近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書，P75-78．大阪文化財センター

パリノ・サーヴェイ（株），1987a：亀井北遺跡（その1）花粉・珪藻分析報告．亀井北　近畿自動車天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書その１～３－本文編－，P230-247．大阪文化財センター．

パリノ・サーヴェイ（株），1987b：亀井北遺跡（その3）花粉・珪藻分析報告．亀井北　近畿自動車天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書その１～３－本文編－，P付1-付17．大阪文化財センター．

アカガシ亜属

クマシデ属

ハシバミ属

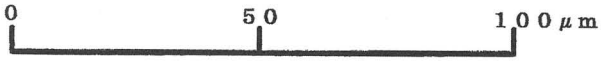
カバノキ属

ブナ属

クリ属

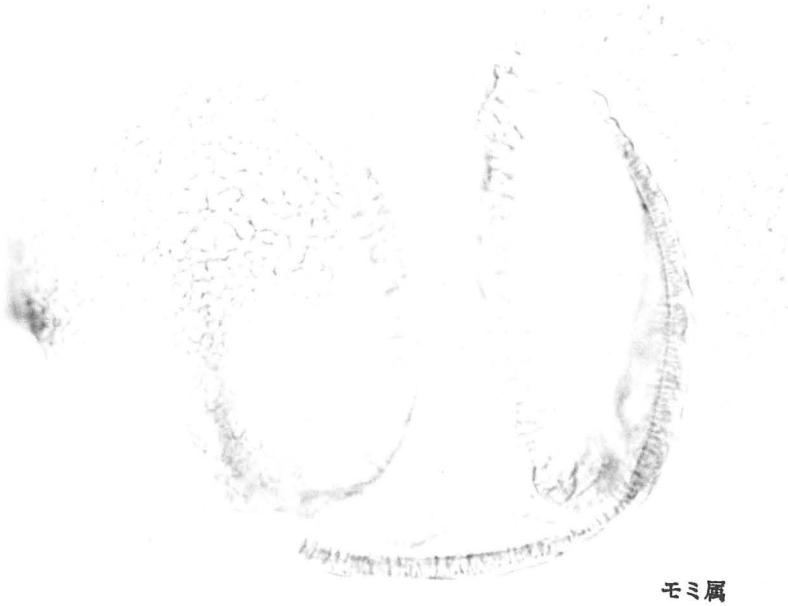
シイ属ーマテバシイ属

カエデ属



ハンノキ属

ニレ属ーケヤキ属

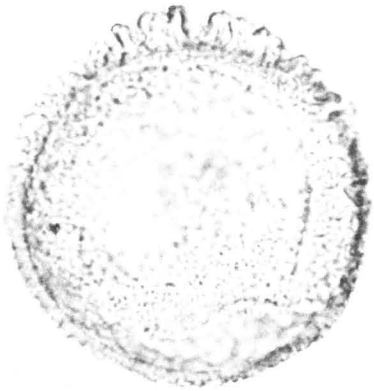


モミ属

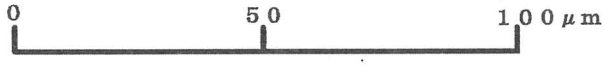
二葉マツ類

マキ属

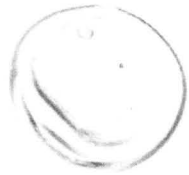
コウヤマキ属



ツガ属



スギ属



イネ科

カヤツリグサ科

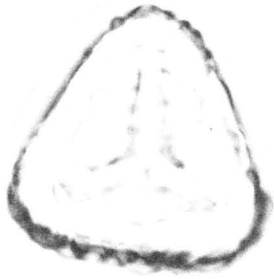
ヨモギ属

キク亜科

ガマ属

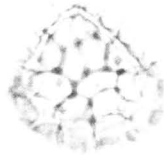
オモダカ属

オシダ科ーチャセンシダ科



三条溝胞子

三条溝胞子



三条溝胞子

第２節　久宝寺遺跡第29次調査２調査区検出の埋甕6001の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

１．はじめに

久宝寺遺跡29次（大阪府八尾市大字渋川所在）の発掘調査では、弥生時代中期後半の甕を埋めた遺構（埋甕6001）が確認されている。本遺構は、調査第５面で検出された人為的盛土からなる畦畔状遺構上に構築されており、ほぼ円形を呈する土坑と、その中に横倒しとなり潰れた状態の大形の甕形土器が出土している。本遺構の時代観は、出土した甕形土器から弥生時代中期後半に比定される。

今回の分析は、土坑から出土した甕形土器の機能・用途、特に人体等埋納の可能性について検証を目的とし、甕形土器の土壌を対象として、微細遺物分析、土壌理化学分析、脂肪酸分析を実施する。

２．試料

試料は、大形の甕形土器内の堆積物である。甕形土器内の堆積物は、横倒しの状態の土器をほぼ底部・胴部・頸～口縁部と概ね部位毎に３分割した状態で採取され、底部から口縁部に向かいそれぞれ試料番号１～３とされている（図１）。このうち、試料２・３は、約15cm程度の高さがあり試料の上・下関係が明らかである。これら採取された試料の土性は、いずれも7.5Y3/1オリーブ黒色の埴壌土（CL：粘土15～25％、シルト20～45％、砂3～65％）である。また、構造は認められず無層理であるが、口縁部側の試料３上部では植物根跡・管状酸化鉄の沈着が認められる。このことは埋没後に擾乱作用の影響が及んでいることを示唆するもので、本層準より弥生時代後期の土器が出土していることとも調和する。

分析試料は、以上のような甕形土器内の堆積物の状況を考慮して、試料１・試料２下部・試料３下部の計３層準を選択した。これら３点の試料については、微細遺物分析、土壌理化学分析、脂肪酸分析をそれぞれ実施する。なお、甕形土器内土壌の比較対照試料として、今回の発掘調査地点から100m離れた場所の弥生時代後期の水田土壌試料などが考えられたが、水田耕作土の場合、人為的影響が大きいと想定される点や盛土状遺構の土坑覆土との関連性が不明である点を考慮し、今回は土坑覆土の影響を最も強く受けていると考えられる試料３上部をまず比較対照試料とし、肪酸分析を合わせて行う。

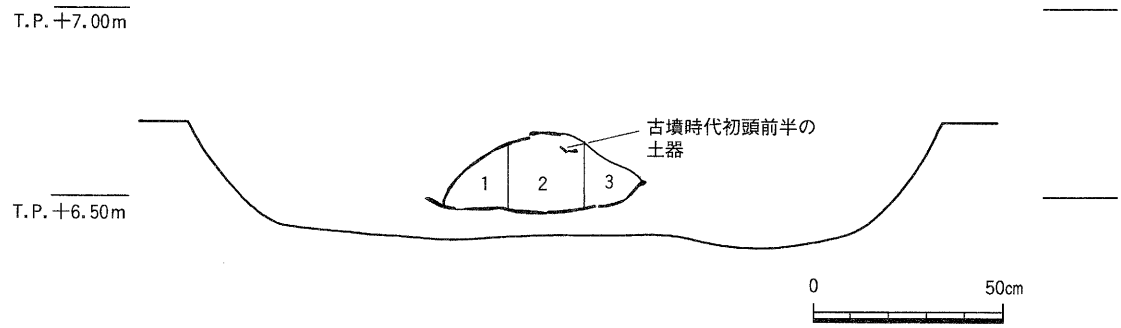


図１　土坑断面図および甕形土器内試料採取位置図
（土器内の数字が試料番号を示す。）

なお、土色はマンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967)、土性は土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編，1984）の野外土性にそれぞれ基づいている。

3．分析方法

（1）微細遺物分析

試料を秤量したあと、数％の水酸化ナトリウム水溶液に浸して放置し、試料を泥化させる。0.5㎜の篩に通して水洗し、残渣を集める。その中から骨片や炭化物等の微細遺物を抽出し、種実等に関しては種類の同定も実施する。

（2）土壌理化学分析

今回測定する成分は、特に動物の体組織や骨に多く含まれるリン酸とカルシウムの含量測定を行う。中でもリン酸は、土壌中に固定されやすい性質がある。そのため、遺体が埋葬されると土壌中にリン酸の富化が認められることから、遺体あるいは遺骨の痕跡を推定することができる。また、リン酸の供給源としては植物体もあげられる。植物由来のリン酸成分が供給された場合、リン酸含量よりも腐植含量が高くなる。よって、植物体の影響を調べるために腐植含量も測定した。

リン酸は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法、カルシウムは硝酸・過塩素酸分解－原子吸光光度法、腐植はチューリン法でそれぞれ行った（土壌養分測定法委員会，1981)。以下に各項目の具体的な操作工程を示す。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.00㎜の篩を通過させる（風乾細土試料)。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、５時間）により測定する。風乾細土試料の一部を粉砕し、0.5㎜ϕのふるいを全通させる（微粉砕試料)。リン酸およびカルシウムは、風乾細土試料2.00ｇをケルダール分解フラスコに秤量し、硝酸約５mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P_2O_5）濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P_2O_5mg/g）とカルシウム含量（CaOmg/g）を求める。

一方、腐植は、微粉砕試料0.100～0.500ｇを100ml三角フラスコに正確に秤りとり、0.4Ｎクロム酸・硫酸混液10mlを正確に加え、約200℃の砂浴上で正確に５分間煮沸する。冷却後、0.2％フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2Ｎ硫酸第１鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量（Org-C乾土％）を求める。これに1.724を乗じて腐植含量（％）を算出する。

（3）脂肪酸分析

分析は、坂井ほか（1995）に基づき、脂肪酸およびステロール成分の含量測定を行う。試料が浸るに十分なクロロホルム：メタノール（２：１）を入れ、超音波をかけながら脂質を抽出する。ロータリーエバポレーターにより、溶媒を除去し、抽出物を塩酸－メタノールでメチル化を行う。ヘキサンにより脂質を再抽出し、セップパックシリカを使用して脂肪酸メチルエステル、ステロ

ールを分離する。脂肪酸のメチルエステルの分離は、キャピラリーカラム（ULBON, HR-SS-10, 内径0.25㎜, 長さ30m）を装着したガスクロマトグラフィー（ＧＣ－14A, SHIMADZU）を使用した。注入口温度は250℃、検出器は水素炎イオン検出器を使用する。ステロールの分析は、キャピラリーカラム（Ｊ＆W　SCIENFIC, DB－１, 内径0.36㎜、長さ30m）を装着する。注入口温度は320℃、カラム温度は270℃恒温で分析を行う。キャリアガスは窒素を、検出器は水素炎イオン化検出器を使用する。

４．結果

（１）微細遺物分析

試料１は、土壌103.88ｇ分析したが、炭化材などの植物遺体、骨・貝片、遺物は全く検出されない。試料２下部は、土壌116.70ｇ分析し、微細な炭化材ならびに炭化物（材組織が認められない植物由来の木質炭化物）などが僅かに（0.1ｇ以下）検出された。試料３下部は、土壌181.38ｇ分析し、微細な炭化材などが僅かに検出された。いずれの試料からも微細な遺物や骨片、種類を特定できる種実遺体などを検出することはできなかった。

（２）土壌理化学分析

結果を表１に示す。各成分の測定値は、腐植含量が0.80～0.98％、リン酸が0.62～0.80P205mg/g、カルシウム含量が3.52～4.00CaOmg/gであった。

表１　土壌理化学分析結果

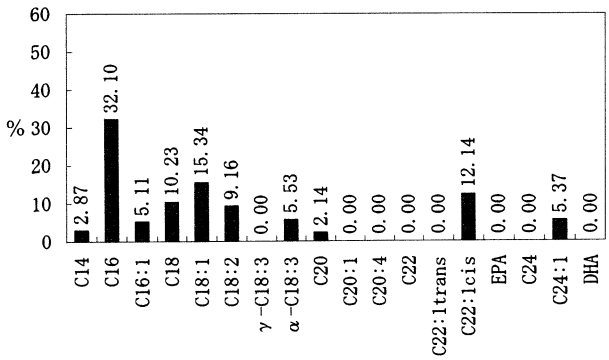
試　料　名	土性	土　　色	腐植含層(％)	P_2O_5(mg/g)	CaO(mg/g)
試料番号１	ＣＬ	7.5Y3/1　オリーブ黒	0.98	0.64	4.00
試料番号２　下部	ＣＬ	7.5Y3/1　オリーブ黒	0.98	0.62	3.92
試料番号３　下部	ＣＬ	7.5Y3/1　オリーブ黒	0.98	0.80	3.52

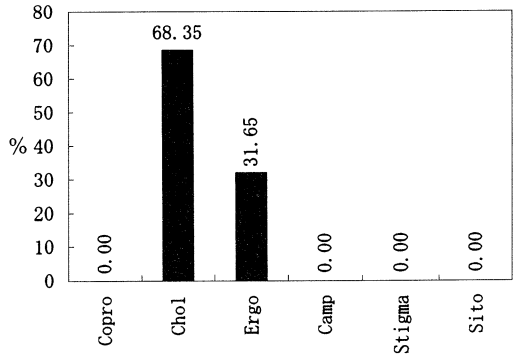
注１）土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修、1967）による。
注２）土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編、1984）の野外土性による。
　　CL…埴壌土（粘土15～35％、シルト20～45％、砂3～65％）

（３）脂肪酸分析

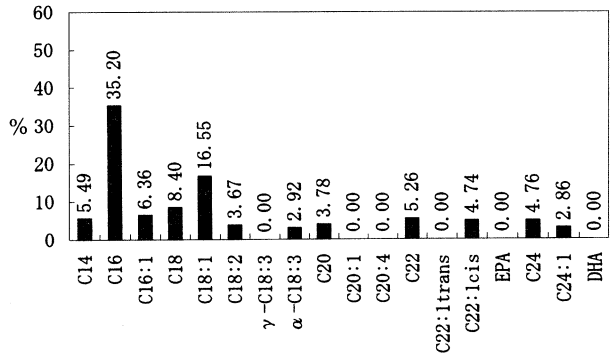
結果を図２に示す。脂肪酸組成は、試料１・試料２下部・試料３上・下部の４試料とも類似する。パルチミン酸（C16）が多いのが特徴で、これに次いでオレイン酸（C18:1）が多く、ミリスチン酸（C14）、パルミトレイン酸（C16:1）、ステアリン酸（C18）、リノール酸（C18:2）などが検出される。その他、アラキジン酸（C20）、ベヘン酸（C22）、リグノセリン酸（C24）が検出されるが、試料１と試料３上でほとんど見られず、その他の試料で若干多い傾向にある。また、試料１ではエルカ酸（C22:1cis）が他に比べて多くなっている。一方、ステロール組成も脂肪酸組成と同様に４試料ともに類似する。動物に由来するコレステロールと、菌類に由来するエルゴステロールのみからなり、いずれの試料もコレステロールの値がエルゴステロールの値を上回る。

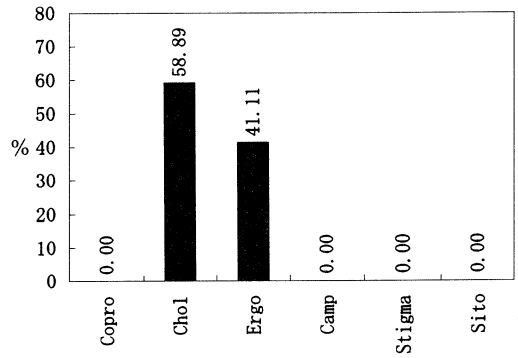
試料１



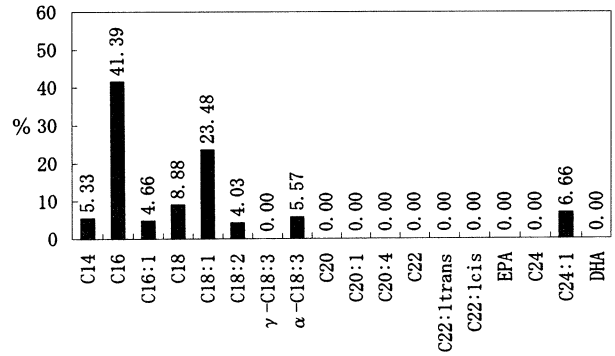


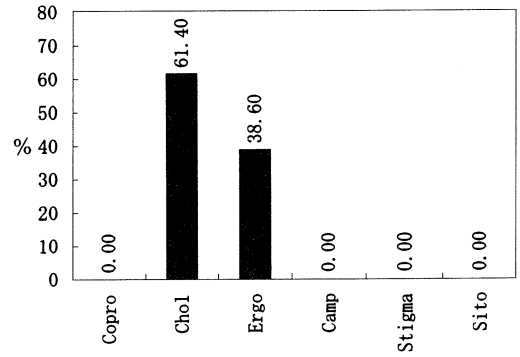
試料２下



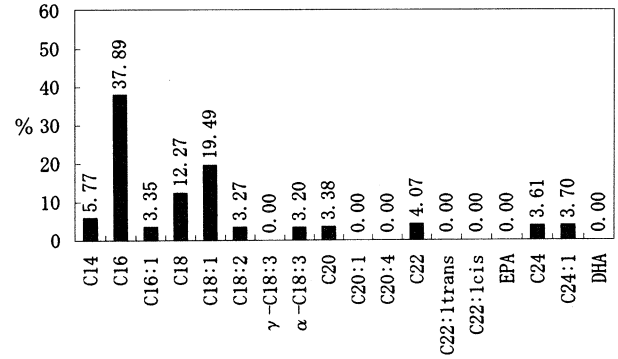


試料３上





試料３下



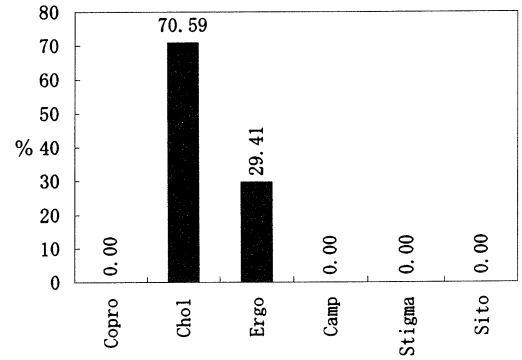


図２　脂肪酸・ステロール組成

5．考察

今回分析した結果、甕形土器内土壌のカルシウム含量は、3.52～4.00CaOmg/gであった。カルシウムは骨の主成分の一つであるが、土壌中に普通に含まれる量、すなわち天然賦存量は１～50CaOmg/gといわれており（藤貫，1979)、含量幅は大きい傾向にある。今回得られた測定値は、いずれの試料も天然賦存量の範囲内にある。一方、リン酸含量は、0.62～0.80P_2O_5mg/gであった。リン酸の天然賦存量については、いくつかの報告事例がある（Bowen，1983；Bolt & Bruggenwert，1980；川崎ほか，1991；天野ほか，1991)。これらの事例から推定される天然賦存量の上限は、約3.00P_2O_5mg/g程度と考えられる。化学肥料の施肥など人為的な影響を受けた黒ボク土の既耕地では5.50P_2O_5mg/gという報告例や（川崎ほか，1991)、骨片などの痕跡が認められる土壌の分析事例では6.00P_2O_5mg/gを越える場合が多い（パリノ・サーヴェイ株式会社，未公表）ことを確認している。これらの値を著しく越える土壌では、外的要因（おそらく人為的影響によるもの）によるリン酸成分の富化が想定されるが、今回得られた測定値は、いずれの試料も天然賦存量を下回る結果であった。なお、各調査例の記載単位が異なるため、ここではすべて単位をP_2O_5mg/gに統一し表記している。

脂肪酸組成では、ミリスチン酸(C14)・パルチミン酸(C16)・パルミトレイン酸(C16:1)・ステアリン酸（C18）・オレイン酸（C18:1）などがいずれの試料からも相対的に多く検出され、その組成も類似している。これら脂肪酸は、動物油や植物油ともに多く含まれる成分とされて（島薗，1988）いるため、これら組成から甕形土器内の内容物の種類の判別の推定は難しい。今回の分析結果では、分子量が小さく二重結合が０～１の脂肪酸の割合が高く、坂井・小林（1995）の指摘のように、経年変化により分解に強い脂肪酸の割合が相対的に高くなったことが想定され、これらの脂肪酸のみでは埋納の指標となりにくい。

少量ながら検出されたリノール酸（C18:2）やリノレン酸（C18:3）は、植物油に多く含まれる成分である（島薗，1988)。これら脂肪酸は全ての試料に含まれることから、土壌中に含まれる腐植などに由来する可能性が考えられる。

アラキジン酸（C20)、ベヘン酸（C22)、リグノセリン酸（C24）は、動物の脳や神経に多く含まれる脂肪酸とされている（中野，1993)。これらの脂肪酸は、試料３上部では全く見られず、試料１でも少ないが、試料２下部や試料３下部では試料１や試料３上部と相対的に比較して多く度含まれる結果が得られている。遺体などが埋納された場合、埋納の中心からの距離や位置等によって、土壌中の脂肪酸分布に偏在性が生じると考えられ、遺体の埋納を推定するための指標となる（小山，1995）とされている。試料２や試料３下部にみられる偏在性に着目すると動物に由来する内容物の存在も想定される、

エルカ酸（C22：icis）は、ナタネなどアブラナ科の種実を原料とする油に多く含まれているが、健康に害があるため品種改良が進み、最近のナタネ油にはほとんど含まれていないとされる(菅原ほか，1987)。この脂肪酸は、試料１で最も多く検出され、試料２下部からも検出されているが、試料３上・下部からは検出されない。試料内で検出にばらつきが見られることから、リノール酸（C18:2）やリノレン酸（C18:3）とは異なり、後天的な植物質油脂の付加といった影響が考えられる。

ステロール組成は、全ての試料においてコレステロールとエルゴステロールの２種類のみが検

出され、その組成も類似する。これは、土壌中に含まれる量が少なかったため検出感度が鈍く、微量の中でも相対的に多い成分が検出された結果であると考えられる。

以上の分析結果から、甕形土器内土壌の試料２下部や試料３下部などに見られたアラキジン酸(C20)、ベヘン酸（C22)、リグノセリン酸（C24）の偏在性に着目した場合、僅かではあるが動物質に由来する脂肪酸が検出されている。また、試料３上部からは、上記した脂肪酸のいずれも検出されておらず、これら検出状況が甕形土器内土壌の特徴であるならば埋納の可能性も想定される。しかし、１）甕形土器内の土壌観察では、後世の別個体の土器片の混入や植物根や酸化鉄の混入が確認されており、甕形土器が土坑内に埋設された当時の性質を失っている可能性考えられる。２）土壌理化学成分分析では、リン酸・カルシウム含量がともに天然賦存量を上回らず、脂肪酸分析ではステロールの検出が少ない。３）甕形土器内土壌の微細遺物洗出分析では、骨片や副葬品など、遺体埋納を裏付ける遺物は検出されていない、４）比較対照試料がないため、厳密な比較検討を行っていない、といった分析結果や試料の状態などを総合的に評価すると、当初想定されていた甕形土器が人体を埋納した甕棺墓である可能性についての判断は難しく、現状ではその可能性を積極的に示唆することはできない。

６．結び

今回は、甕形土器内土壌のみを対象とし分析を行い、僅かではあるが動物質脂質の存在を確認したものの、リン・カルシウム成分は天然賦存量を上回らず、またその範囲内であったため、人体埋納を示唆するには至らなかった。今後は、今回分析を実施できなかった土坑内覆土や基本層序などを試料として比較検討することが必要である。また、久宝寺遺跡を含め周辺地域の弥生時代中期後半に比定される遺跡における同様な遺構の分析調査の実施をはじめとして、同様な遺構に関する機能・用途推定の分析事例などを収集・蓄積し、今回の結果について再評価したいと考えている。

引用文献

天野洋司・太田　健・草場　敬・中井　信（1991）中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」，p.28-36.

Bowen,H.J.M.（1983）「環境無機化学　－元素の循環と生化学－」．浅見輝男・茅野充男訳，297p.，　博友社 [Bowen,H.J.M.（1979）Environmental Cemistry of Elements].

Bolt,G.H. & Bruggenwert,M.G.M.（1980）「土壌の化学」．岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽捷行訳，309p.，学会出版センター [Bolt,G.H. and Bruggenwert,M.G.M.（1976）SOIL CHEMISTRY]，　p.235-236.

土壌養分測定法委員会編（1981）「土壌養分分析法」．440p.，養賢堂.

藤貫　正（1979）カルシウム．地質調査所化学分析法，52，p.57-61，地質調査所.

川崎　弘・吉田　澪・井上恒久（1991）九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」，p.23-27.

小山陽造（1995）東北地方の脂肪酸分析結果．考古学ジャーナル,386，p.17-21

中野益男（1993）脂肪酸分析法.「第四紀試料研究法２　研究対象別分析法」，p.388-403，東京大学出版会.
農林省農林水産技術会議事務局監修（1967）新版標準土色帖.
ペドロジスト懇談会編（1984）「土壌調査ハンドブック」. 156p.，博友社.
坂井良輔・小林正史・藤田邦雄（1995）灯明皿の脂質分析. 富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第７集「梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）　第二分冊」，p.24-37，財団法人　富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所.
坂井良輔・小林正史（1995）脂肪酸分析の方法と問題点. 考古学ジャーナル,386，p.9-16
島薗順雄（1988）標準栄養化学・生化学. 205p.，医歯薬出版株式会社.
菅原龍幸・加藤隆夫・高宮和彦・三浦　洋・田所忠弘・國崎直道（1987）食品学各論. 270p.,建帛社.

第５章　遺構・遺物の検討

第１節　中・南河内地域における弥生時代後期後半～古墳時代初頭前半（庄内式古相）の土器の細分試案について

１．はじめに

４調査区の第６面で検出された土器集積（ＳＷ6001～ＳＷ6006）からは弥生時代後期（畿内第Ｖ様式）後半に比定される良好な土器類が多数出土しており、図示することが出来たものの総数は195点を数える。土器集積（ＳＷ6001～ＳＷ6006）については、前述したようにＳＤ6005の両岸の広範囲にわたって広がりが認められるもので、土器の分布状況から便宜上６箇所に区別しているが、その形成にあたっては全てのものが同時期に廃棄したとは断言できないものの、土器組成からみて比較的短期間に形成された土器集積であると推定される。ここでは、土器集積（ＳＷ6001～ＳＷ6006）出土の土器類を１型式に収まる同時性の高い土器群であるとの理解のうえで、中・南河内地域における弥生時代後期後半～古墳時代初頭（庄内式古相）の土器変遷過程を考えてみたい。

２．中・南河内地域における弥生時代後期（畿内第Ｖ様式）の研究小史

土器集積の（ＳＷ6001～ＳＷ6006）の編年的位置付けにあたって、中・南河内地域における弥生時代後期の既往編年案を整理しておく。

中・南河内地域における弥生後期の土器編年は1958年、小林行雄氏による『弥生土器集成資料編Ｉ』[註1]で、西ノ辻遺跡（東大阪市）の発掘調査地点の土器様相の違いから、西ノ辻Ｉ地点式・Ｅ地点式・Ｄ地点（上層）式の順に３型式の変遷過程が提示されたことを端緒とする。その後の研究指針は小林氏分類の発展細分化へと進み、1962年には、坪井清足氏により唐古第Ｖ様式第１亜式（唐古45号竪穴上層式）を西ノ辻Ｄ地点式の後出型式として４段階に細分された。更に、1968年、佐原真氏は唐古45号竪穴下層式資料を西ノ辻Ｅ地点式と西ノ辻Ｄ地点式の間に[註2]位置付けられるものとし、５段階に区別する編年案が提示されている。1970年代になると1960年代に提示された各地点の基準資料に加えて、特定器種の成形原理の変遷を加えた編年案を構築する試みが[註3]行われるようになる。先鞭をつけられたのは都出比呂志氏で、氏は1974年、『古墳出現前夜の集団関係－淀川水系を中心に－』の中で第Ｖ様式の持つ地域性を考慮に入れたうえで、Ｖ様式甕の成形原理を叩き技法、底部輪台技法[註4]、分割成形技法の三つとして捉え、中・南河内地域における土器編年案を提示されている。移行過程は、西ノ辻Ｉ式を(古)に、西ノ辻Ｅ〔Ｄ〕式・上六万寺式を(中)に、北鳥池下層式を(新)とされた。特に中～新にかけては土器成形技法の「連続ラセンタタキ手法」の変化から細分が可能とされた。更に、Ｖ様式に続く庄内式をより広義に捉えて上田町１・２式を含めて畿内第Ⅵ様式として弥生土器の範疇に含める考え方を示されている。これ以降は都出氏が目差した「小地域単位の編年を細かく進めつつ、地域編年相互の横の関係を把える」作業を実践し、近畿地方全域の併行関係を視野に入れた総括的な編年案が多く示されている。

1977年、森岡秀人氏は大師山遺跡(河内長野市)の報告で後期を前半・後半の２期に分け、更に後期前半を２小期、後期後半を３小期に峻別したうえで[註5]畿内５地域（摂津・河内・和泉・大和・

山城）の編年案を示されている。このなかで、中河内地域で基準とされたものは後期前半Ⅰ期（西ノ辻Ⅰ式）、後期前半Ⅱ期（西ノ辻Ｅ式）、後期後半Ⅰ期（上六万寺式）、後期後半Ⅱ期（該当なし）、後期後半Ⅲ期（北鳥池下層式）とされた。

1980年、寺沢薫氏は六条山遺跡（奈良市）の報告[註6]で大和地方の後期土器を６期（様式１～様式６）に区別したうえで他地域との併行関係を示されている。中・南河内地域での基準資料としては、様式２が（長原31工区ＳＢ－01、恩智遺跡ＮＥ20区ＳＤ－13、西ノ辻Ⅰ地点）、様式３が（鬼塚遺跡Ｈ01～04区第３層、天理教会第７層出土土器群、上小阪遺跡第５・６層の土器群、岩滝山第１・２号住居跡出土土器群）、様式４が（馬場川３次調査井戸１類、馬場川４次調査１トレンチ第４・５層出土土器群）、様式５が（大師山遺跡Ｃ・Ｄ・Ｆ地点土器群、上六万寺遺跡第２・３トレンチ土器群）、様式６が（船橋遺跡第９トレンチ土坑・北鳥池遺跡下層）とされた。ただ、後に様式６については弥生土器から除外して庄内様式に含める考えを示されている。[註7]

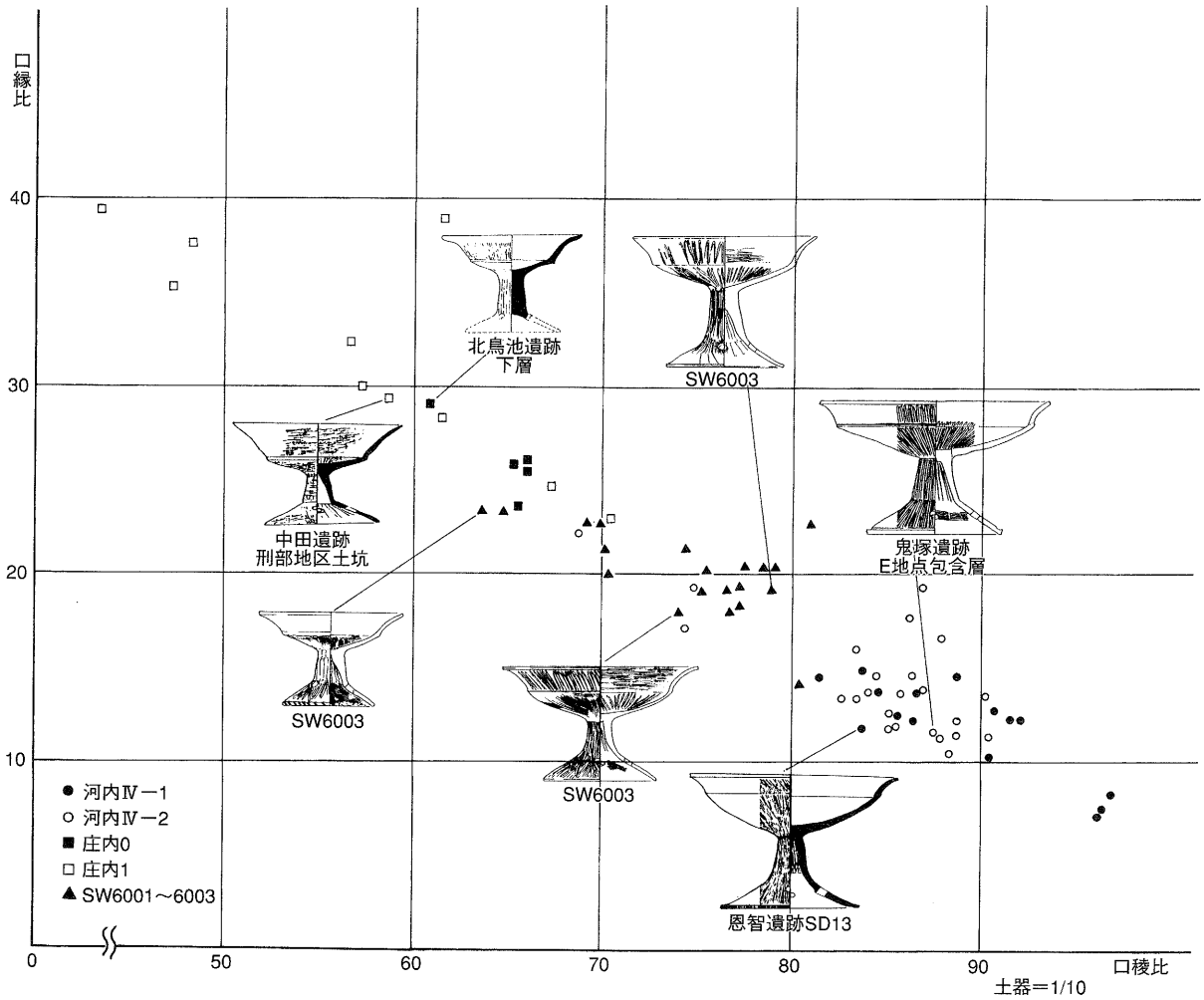
1986年、広瀬和雄氏は八尾市亀井遺跡出土資料に限定した弥生土器編年[註8]を提示しており、後期については後期１～後期３の３段階に細分されている。

1988年、一瀬和夫氏は「久宝寺・加美遺跡の古式土師器」[註9]で後期から古墳時代前半までを第Ⅰ段階～第Ⅳ段階の９段階に区別され、そのうちの第Ⅱ段階ａ迄が弥生時代後期の範疇とされた。

以上のように、1974年以降の中・南河内の後期土器編年は都出氏編年案を踏襲するかたちで発展しており、４ないしは５段階に区別され推移してきた。これら一連の編年案を総括するかたちで1989年に、寺沢薫・森井貞雄の両氏は『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅰ　河内地域』[註10]の中で、後期前半を４期（河内第Ⅴ－０様式～河内第Ⅴ－３様式）、後期後半を２期（河内第Ⅵ－１様式・河内第Ⅵ－２様式）に区別された。そのなかで、河内第Ⅴ様式の土器は、長頸壺とそのグループなどの新しい器種の出現の他、器種構成比率のなかで壺・甕が減少し、高杯・器台が増加する段階。河内第Ⅵ様式の土器は、長頸壺の衰退と広口壺の増加、二重口縁広口壺の成立、手焙形土器の出現にあるとされた。その後、新たな編年案の構築は認められないが、1999年、若林邦彦氏は「河内平野南遺跡群における弥生時代後期～古墳時代前期土器の変遷」[註11]で、近畿自動車道に伴う発掘調査のうち佐堂・久宝寺・亀井北・亀井・城山の５遺跡から出土した弥生時代後期～古墳時代前期前半（布留式古相）の土器編年案を示されている。編年区分においては、高杯と他器種の諸型式の共伴関係によって様相１～様相８の土器変遷案が示されおり、弥生後期については様相１～様相３の３区分に分類されている。2001年、杉本厚典氏は『河内における弥生時代中期末から古墳時代初頭にかけての土器の型式編年と様式』[註12]の中で、河内における弥生時代中期末～古墳時代前期前半（布留式古相）までを甕・高杯の型式分類を中心として26期に細分し、そのうち弥生後期として４期～18期の15期に分類された。

以上のように中・南河内地域における弥生後期土器編年は、1958年の小林行雄氏による西ノ辻遺跡の各地点の土器型式の違いによる３型式分類に始まり、1974年の都出比呂志氏によるⅤ様式甕の成形原理による編年案で骨格を固め、1989年の寺沢薫・森井貞雄両氏による『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅰ　河内地域』で一応の完成をみるのである。これ以降に発表された編年案は高杯・甕と他器種の共伴関係をはじめ一括資料が出土した遺構間の先後関係にも言及して構築された編年案で、1989年の寺沢・森井編年との検証・対比と更なる細分化の可能性が追及されている。

このように中・南河内地域出土の後期土器を対象とした編年案が提示されているが、現時点では1989年寺沢・森井編年案に対応した記載内容の調査報告書が多いのが現状である。しかしながら、1989年寺沢・森井編年案の中で後期末とされる河内Ⅵ－２様式から河内庄内０様式間の器種組成の変化が余りにも急激で既往資料との比較対応に齟齬をきたすものが数多く存在することが認められた。具体的には、後述する土器編年試案の編年基準の根幹とした有稜高杯の口稜比・口縁比の分布比率から導かれる有稜高杯の型式変化が第１図で示したように河内第Ⅵ－２様式と河内庄内第０様式間に隔たりがあること。更に、この中間的な様相として本調査検出のＳW6001～ＳW6006出土の有稜高杯類（有稜高杯B_2・C_2・D_1）が位置付けられ、それらの高杯に共伴する土器組成においてもこの両様式間に１型式の土器様式が介在する蓋然性が高いと考えられるのである。以上から本稿では、既往編年案との比較を試みるため、有稜高杯の指数変化に連動した形式に導かれる土器組成の変化に着目して、中・南河内地域の弥生後期後半（従来の編年基準の上六万寺式以降）から古墳時代初頭前半（庄内式古相）の土器編年案を新たに構築してみたい。



第１図　寺沢・森井編年(1989)による河内Ⅳ－１様式～河内庄内Ｏ様式(寺沢一矢部遺跡編年　1986)および久宝寺遺跡第29次調査(ＳW6001～ＳW6006)出土の有稜高杯の指数分布

3．弥生時代後期後半～古墳時代初頭（庄内式古相）の土器分類

ここでは、中・南河内地域で概ね弥生時代後期後半から古墳時代初頭前半（庄内式古相）に存在が認められる土器類を分類対象とした。器種分類では、壺・甕・高杯・鉢・器台の基本形式の他、手焙・蓋を対象としている。なお、壺類においては個々の持つ形態の特徴から広口壺・長頸壺・二重口縁壺のように分離した。個々の器種については、個々の器形の特徴からA・Bのように分類し、さらに中分類より細分が可能なものについてはアルファベットの後に数字を付してA$_1$のように表記した。また、甕AとしたV様式甕（V様式系甕を含む）に付いては、器高・体部最大径・口縁端部・底部裏面について個々の分類を行っている。但し、例外的に有稜高杯A$_0$のように当該期より古いものであるが、有稜高杯A$_1$の前代型式として掲載したものや、甕Bのように形態的な要素よりはハケを施す甕の総称として捉えた器種が含まれている。対象とした土器類は在来系土器はもとより外来系土器である搬入品についても時空的な併行関係、土器形式の出自における形態・技法の模倣等の摂取に代表される影響や共鳴関係を知るうえで重要であるため出土量が微量であっても分類対象としている。

・壺形土器類

広口壺A　口頸部が外反する小・中形の壺。

A$_1$　口頸部が小さく外反するもの。体部は球形と扁球形がある。

A$_2$　頸部が斜上方に伸びた後、口縁部が小さく外反するもの。

A$_3$　口頸部が大きく外反するもの。

広口壺B　頸部が直上方に短く伸びた後、外折する口縁部を持つもの。

B$_1$　頸部が直上方に短く伸びた後、口縁部が小さく外折するもの。

B$_2$　頸部の立ち上がりが長めで外折する口縁端部が垂下し面を持つもの。

広口壺C　口頸部が斜上方に長く伸びる大形の壺。

広口壺D　大きく外反する口縁部に垂下する端部が付くもので、端面に装飾を行うものが多い。

D$_1$　細めの頸部から大きく外反する口頸部が付くもの。

D$_2$　D$_1$に比して頸部が太いもの。大形品が多い

D$_3$　口縁端部が上下に肥厚するもの。

広口長頸壺　太めの体部上半から口頸部が緩やかに外反して上方に伸び、大きく開く口縁部に至る壺。

広口短頸壺　半球形の体部から頸部が短く伸びた後、二重口縁形を呈する中形の壺。

広口直口壺　半球形の体部に斜上方に直線的に伸びる口頸部が付く中形の壺。

無頸壺　球形の体部で頸部を持たないものと、小さく立ち上がる口頸部が付くものがある。

細頸壺　球形ないしは算盤玉状の体部から細長い筒状の頸部が直線ないしはラッパ状に長く伸びる壺。

細頸直口壺　扁球形の体部から口頸部が斜上方に直線的に伸びる壺。

長頸壺A　半球形の体部に口頸部が長く伸びる壺。

A$_1$　口頸部が大きく伸びるもの。

A$_2$　長頸壺A$_1$に比して口頸部長が半分程度のもの。

A_3　長頸壺の小形品の全般。

短頸直口壺　球形の体部に直上ないしは斜上方に短い口頸部が伸びる小・中形壺。

A　口頸部が斜上方に短く伸びるもの。中形品が多い。

B　口頸部が直上方近くに短く伸びるもの。小形品が多い。

二重口縁壺　2段に屈曲する口縁部を持つ壺。B類は加飾されたもの。

A_1　頸部が外反した後、二重口縁形態を呈するもの。

A_2　頸部が短く伸びた後、二重口縁形態を呈するもの。

B　拡張された口縁部外面に装飾を加えたもの。

台付壺　小形の壺に脚部が付くもの。

A　球形の体部に「く」の字に屈曲する口縁部を持つ小形壺が付くもの。

B_1　短頸直口壺形態の小形壺が付くもの。

B_2　細頸で直口の小形壺が付くもの。

・甕形土器類

甕A　畿内第V様式甕およびその系譜を引くV様式系甕（庄内式成立以降）。器高数値、体部最大径を持つ位置、口縁端部、底部裏面の形態により区別される。

・器高による分類

Ⅰ　器高が16cm未満のもの。（小形）

Ⅱ　器高が16cm以上22cm未満のもの。（中形）

Ⅲ　器高が22cm以上27cm未満のもの。（大形）

Ⅳ　器高が27cm以上のもの。（超大形）

・体部最大径を持つ位置による分類。

A_1　体部最大径が上部にあるもの。

A_2　体部最大径が中位にあるもの。

A_3　体部最大径が中位にあるもので、A_2より球形化が進行したもの。

・口縁端部の形態差による分類

a　丸く終わる。

b_1　外傾する平坦面を持つ。

b_2　外傾する平坦面を持つもので口縁下部が拡張されたもの。

b_3　外傾する面の中央部分に沈線が巡るもの。

c_1　摘み上げられた口縁端部が外傾するもの。

c_2　口縁端部が上方に摘み上げられるもの。

c_3　大きく摘み上げられた口縁端部が外反するもの。

d　平坦面を持つ口縁端部が垂直ないしはやや外傾するもの。

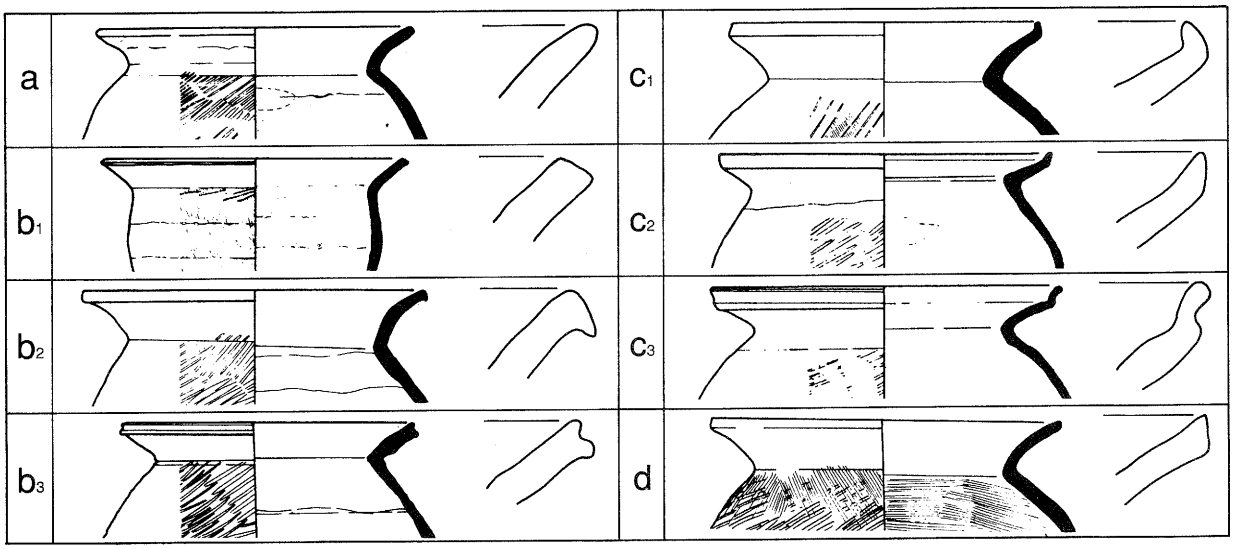
・底部裏面の形態分類（壺・甕・鉢に共通）

イ　底面が平坦面を持つ。（平底）

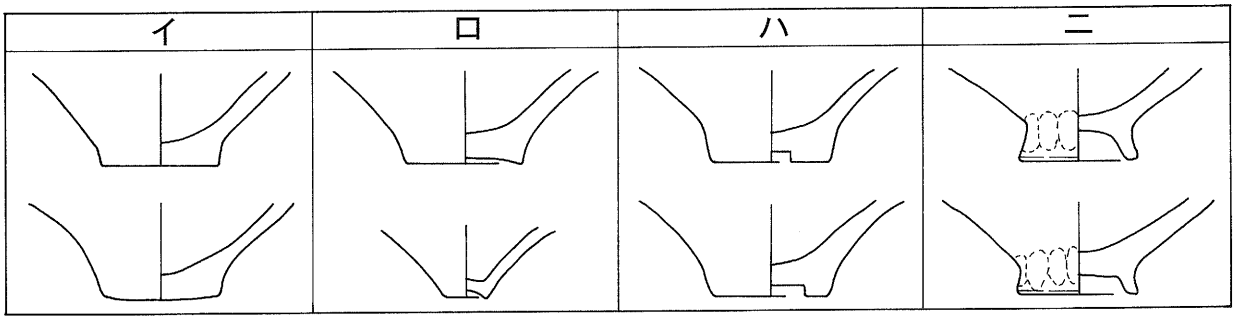
ロ　底面がわずかに窪むもの。（窪み底）

ハ　底部の中央部がドーナツ状に窪むもの。（ドーナツ底）

ニ　底部周辺を外下方に拡張させ上げ底状にしたもの。（上げ底）



第２図　甕口縁端部の形態分類



第３図　底部裏面の形態分類

甕Ｂ　体部外面にタテハケ調整を施す甕の総称。

Ｂ$_1$　弥生後期に存在するもの。

Ｂ$_2$　庄内様式成立時に出現するもの。搬入品が大半を占める。

甕Ｃ　河内型庄内式甕の最古形態の総称。

体部は最大径が上位にある倒卵形で底部は小さな平底ないしは尖り底である。口縁部は屈曲外反し、端部は上方に摘み上げられるものが多い。体部外面のタタキ調整は畿内第Ｖ様式甕と変わることなく１㎝あたり３～４本で、三分割成形に沿って行われておりタタキ調整の後、タテハケが粗く施されている。体部内面はヘラケズリが屈曲部まで施されている。胎土には、角閃石を含む生駒西麓産と角閃石を含まない在地産がある。

・**高杯形土器類**

有稜高杯Ａ　大形の杯部に円錐状の脚部が付く。口縁高が体部高に比して小さい。脚部は中空で円板充填手法のものが多い。

Ａ$_0$　口縁部が小さく外反する。

Ａ$_1$　Ａ$_0$に比してやや深めの体部が付く。口縁部は強く外反するもので、端面は内傾し面

を形成する。

A_2　A_1に比してやや小形化したもので、口縁部の外反は弱い。

有稜高杯B　杯体部が斜上方に直線的に伸びる。脚部は屈折して開くもので、中空・中実があり挿入手法をとるものが多い。

B_0　体部高と口縁高がほぼ等しい。口縁部の外反は弱い。

B_1　口縁高と体部高がほぼ等しく口縁部の外反は大きい。

B_2　B_1に比して小形のもので、口縁高が体部高を凌駕している。

有稜高杯C　B類に比して口稜比数値が下がるもので、口縁部は大きく外反する。脚部は屈折して開くもので、中空・中実で接合ないしは挿入手法のものである。

C_1　体部高が口縁高を凌駕したもので、口縁部は大きく外反する。

C_2　口縁高が体部高を凌駕したもので、口縁部は大きく外反する。

有稜高杯D　小形の高杯で口縁高が体部高を大きく凌駕している。口縁部の外反はゆるやかである。脚部は屈折して開くもので、屈曲部が鋭く明瞭なものが多い。中空・中実があり挿入手法をとるものが多い。

D_1　口縁高が体部高を凌駕している。口縁部は外反する。

D_2　D_1に比して口縁高の占める比率が高い。脚部は鋭く屈折して開く。柱状部はほぼ垂直方向に伸びる形状で、中実範囲が屈曲部に及ぶものがある。北鳥池遺跡下層式資料を指標とする。

有稜高杯E　口縁高が体部高を大きく凌駕するもので、口縁部が斜上方に外反気味ないしは直線的に伸びる庄内式系の高杯。内外面の調整において縦および横方向のヘラミガキを多用するものが多い。杯部内外面にヘラミガキを行うものについては、精製品が多く、杯部内面を放射状にヘラミガキを施文するものが通有である。

E_1　口縁高が体部高を大きく凌駕する。口縁部が斜上方に外反気味ないしは直線的に伸びる。

E_2　E_1に比して杯体部内面の水平化と精製化を果たしたもの。

有稜高杯F　小形で口縁部が外反しない杯部を持つもので、脚部径に比して口径が小さい。

有稜高杯G　短い脚部に斜上方に伸びる口縁部が付く吉備系の高杯。

有稜高杯H　２段に屈曲する杯部を有するもので、装飾を施したもの。

椀形高杯A　浅い椀形の杯部に屈曲して開く脚部が付く高杯。

A_1　脚部が中空のもの。

A_2　脚部が中実のもの。

椀形高杯B　A類に比して口径が小さくやや深めの杯部を有するもの。

B_1　脚部が中空のもので、「ハ」の字に開く脚部が付く。

B_2　脚裾部が大きく開くもの。

椀形高杯C　椀形で深めの体部に大きく開く脚部が付く。庄内式期のものは精製品で、体部内面に放射状ヘラミガキが認められる。

・器台形土器類

大形器台A　筒状で長めの体部に大きく広がる口縁部と裾部を持つ大形器台。

A_1　口縁部と裾部の形状がほぼ等しい。

A_2　口縁端部に垂下する面を形成するもので、端面に加飾されたものが多い。

A_3　体部にくびれを持つもの。

大形器台B　口縁部に比して脚裾部が大きく開く中空の器台。小形器台Bの祖形。

大形器台C　2段に屈曲する口縁部を有する大形器台。搬入品で出土例は少ない。

小形器台A　小さな椀形の受部に「ハ」の字状に開く小さな脚台が付く中実の器台。

小形器台B　皿状の受部を持つもので、受部と脚部が貫通する器台。

装飾器台　口縁部および脚部が2段に屈曲するもので、口縁部を中心として装飾が施されている中形の器台。

・**鉢形土器類**

小形鉢A　摺鉢状の体部に小さく外反する口縁部が付くもの。体部外面はタタキ調整およびナデ調整がある。

A_1　体部が大きく開くもの。

A_2　A_1型式に上げ底の脚部が付くもの。

小形鉢B　口縁部が外反せず直口のもの。

B_1　平底を呈するもの。

B_2　底部が上げ底のもの。

小形鉢C　平底の底部から体部が内湾して伸びる鉢。

小形鉢D　底部が尖り底を呈する鉢。

小形鉢E　椀形の体部に内傾して伸びる口縁部が付く鉢。吉備地方からの搬入品。

小形鉢F　尖り底を持つ体部に小さく外折する口縁部が付く鉢。

小形鉢G　体部の作りが手焙り形土器と同じもの。

中形鉢A　小形鉢A_1を大きくした形状の中形鉢。

中形鉢B　口縁部が2段に屈曲するもの。

中形鉢C　小形鉢B_1を大きくしたもの。

大形鉢A　中形鉢Aを大きくしたもの。

大形鉢B　中形鉢Bを大きくしたもの。

大形鉢C　すり鉢状を呈する体部から外反する口縁部が付くもの。

大形鉢D　半球形の体部に大きく外折する口縁部を持つもの。

台付鉢A　小・中形鉢Aに脚部が付くもの。

台杯鉢B　大形鉢Bに脚部が付くもの。

有孔鉢A　底部が平底を呈するもの。

有孔鉢B　底部が尖り底のもの。

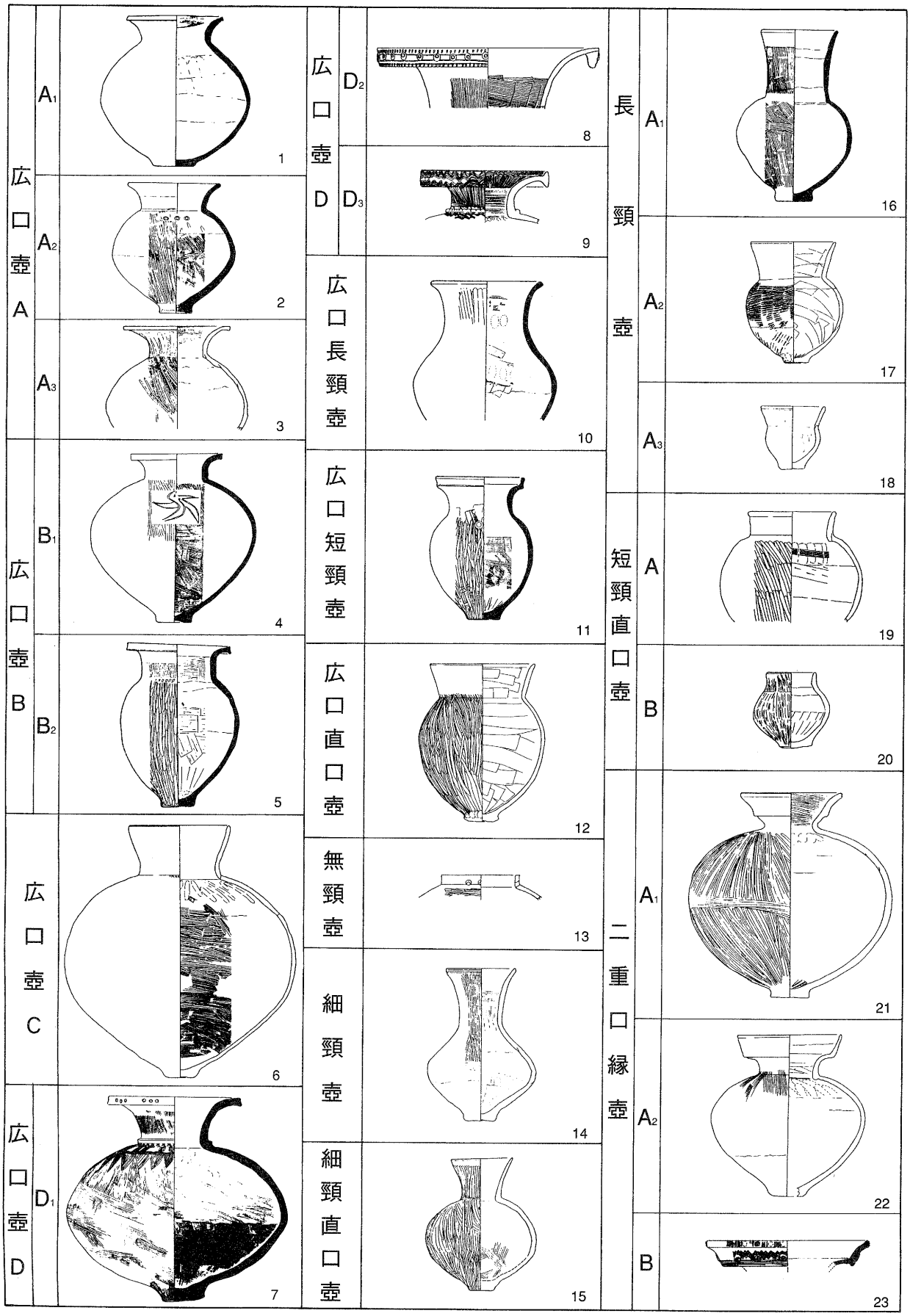
・**その他の土器類**

手焙形土器A　覆部と体部の境に補強粘土を貼り付けて突帯とするもの。

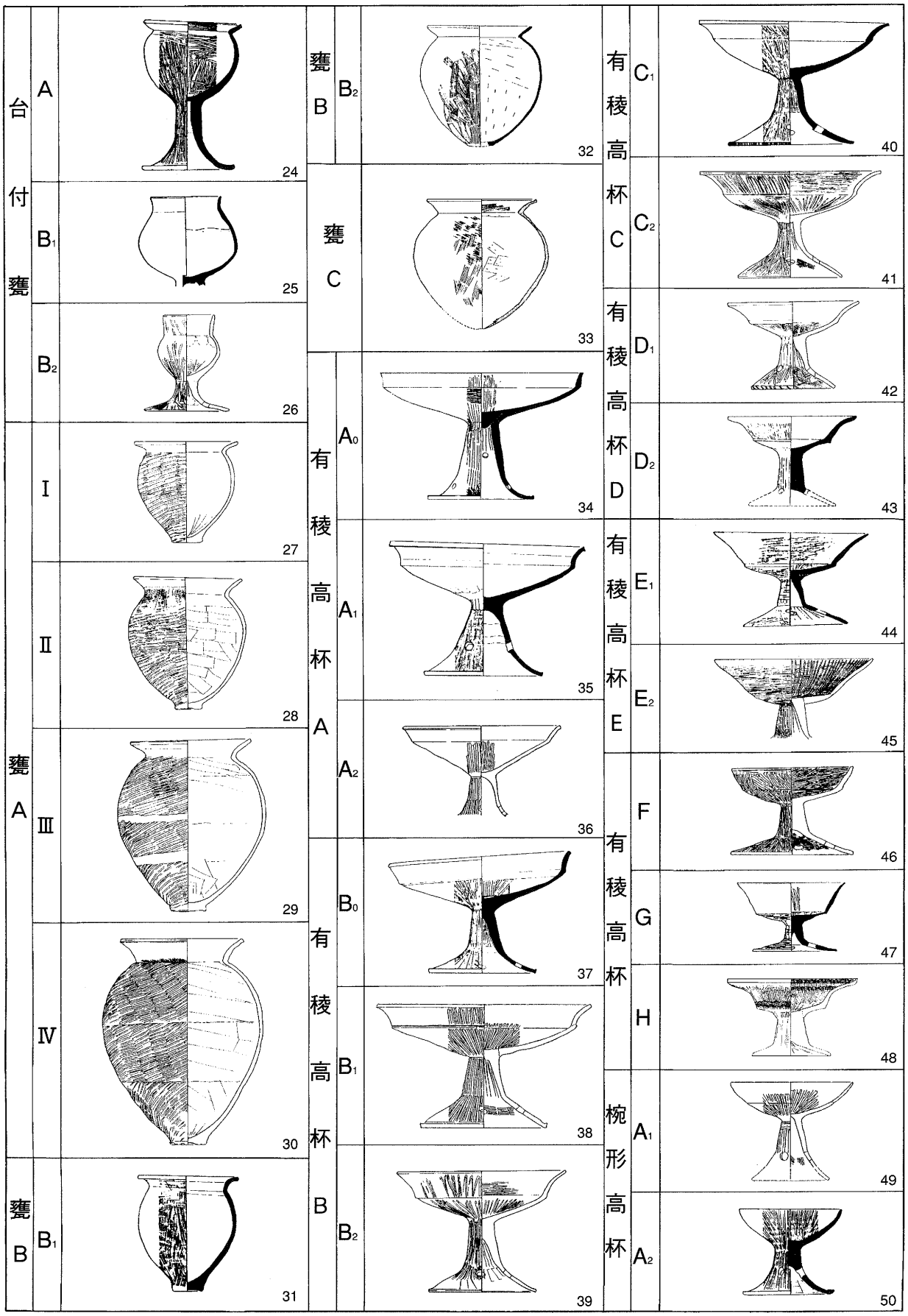
手焙形土器B　覆部と体部が一体化したもの。

蓋A　傘形を呈するもので、つまみ部分は平坦なものと窪むものがある。

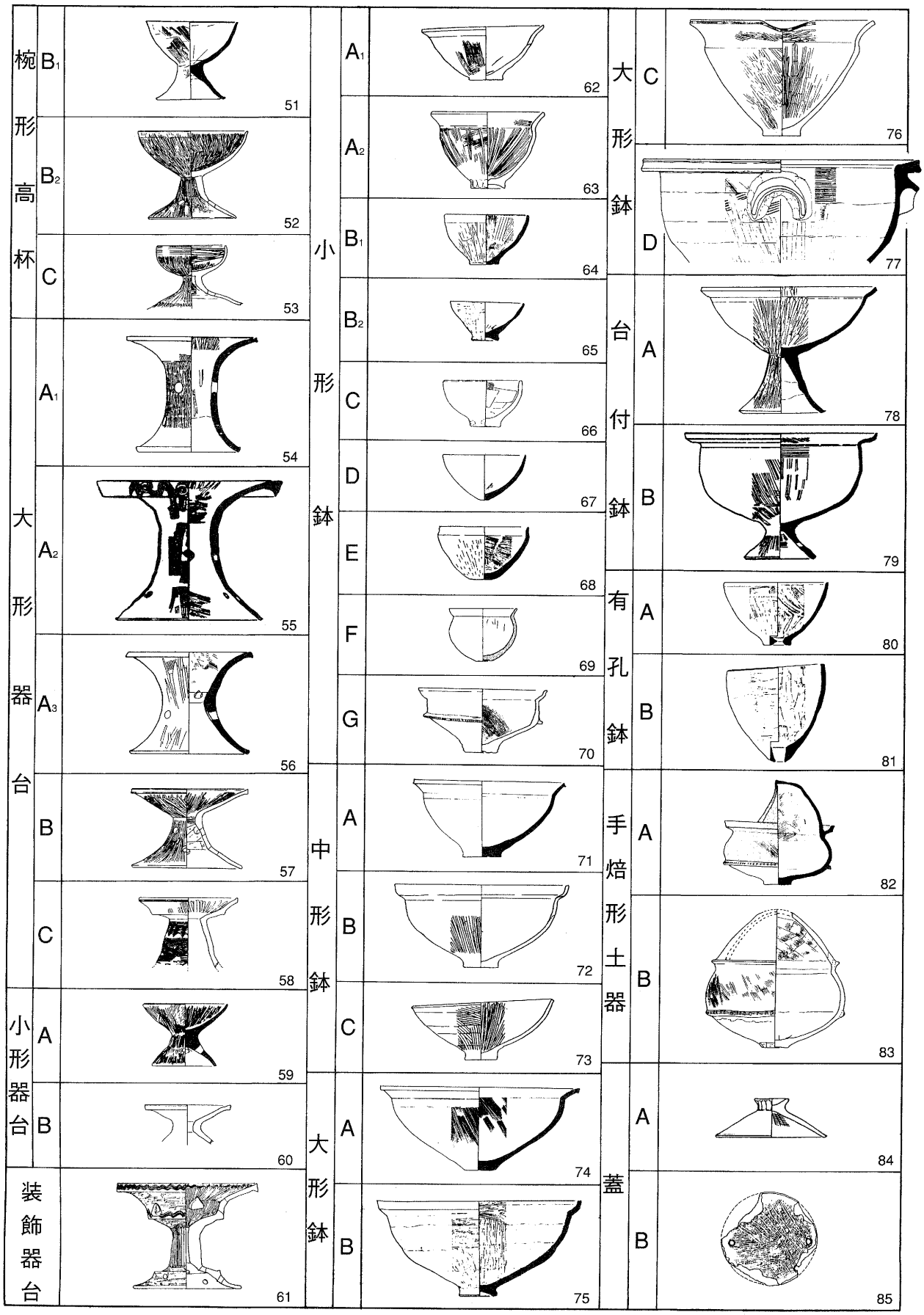
蓋B　薄い円板状で相対する位置に二個を一対とする紐孔が穿たれている。無頸壺の蓋の可能性が高い。


広口壺A
A1
1
A2
2
A3
3
広口壺B
B1
4
B2
5
広口壺C
6
広口壺D
D1
7
広口壺D
D2
8
D3
9
広口長頸壺
10
広口短頸壺
11
広口直口壺
12
無頸壺
13
細頸壺
14
細頸直口壺
15
長頸壺
A1
16
A2
17
A3
18
短頸直口壺
A
19
B
20
二重口縁壺
A1
21
A2
22
B
23

第4図　土器分類図1


台付甕
A
24
B1
25
B2
26
甕A
Ⅰ
27
Ⅱ
28
Ⅲ
29
Ⅳ
30
甕B
B1
31
甕B
B2
32
甕C
33
有稜高杯A
A0
34
A1
35
A2
36
有稜高杯B
B0
37
B1
38
B2
39
有稜高杯C
C1
40
C2
41
有稜高杯D
D1
42
D2
43
有稜高杯E
E1
44
E2
45
有稜高杯
F
46
G
47
H
48
椀形高杯
A1
49
A2
50

第5図　土器分類図2


椀形高杯
B1
51
B2
52
C
53
大形器台
A1
54
A2
55
A3
56
B
57
C
58
小形器台
A
59
B
60
装飾器台
61
小形鉢
A1
62
A2
63
B1
64
B2
65
C
66
D
67
E
68
F
69
G
70
中形鉢
A
71
B
72
C
73
大形鉢
A
74
B
75
大形鉢
C
76
D
77
台付鉢
A
78
B
79
有孔鉢
A
80
B
81
手焙形土器
A
82
B
83
蓋
A
84
B
85

第6図　土器分類図3

・土器分類図１～3に使用した土器の出土遺構一覧（文献番号はｐ283～286を参照）

恩智遺跡ＳＤ13（１・４・５・10・11・16・24・25・31・35・37・40・50・54・64・65・71・75・77・78・80・81・82）

〃　ＳＰ03（２・51・56・74）［註26］

亀井（その１）Ｂトレンチ ＳＤ3067（３・70）［註29］

神山遺跡溝3001（６・17・20・46・52）［註47］

久宝寺遺跡周溝墓３－１（７・23）［註37］

鬼塚遺跡Ｅ地区包含層（８・13・19・36・38・49・72・73・84）［註33］

久宝寺南（その２）Ｈトレンチ ＳＤ70（９・15・21・63）［註38］

久宝寺遺跡29次ＳＷ6001～ＳＷ6006（12・22・26・27・28・29・30・39・41・42・53・57・83）［本書掲載］

亀井（その１）Ｂトレンチ ＳＤ3056（14）［註29］

亀井（その２）23トレンチ ＳＫ2301（18）［註29］

中田遺跡刑部地区土坑（32・44・47）［註61］

長原遺跡31工区ＳＢ－１（34）［参１］

北鳥池遺跡下層（43）［註18］

八尾南遺跡井戸１（60）［註63］

馬場川遺跡１・２号井戸Ⅱ類（45・48・61）［註56］

亀井遺跡Ｃトレンチ ＮＲ3001（55・79）［註28］

大竹遺跡第10地点溝遺構第３・４層（58）［註25］

東郷遺跡第９次ＳＥ－１（59）［註59］

鬼塚遺跡Ｅ地点竪穴住居（62）［註33］

郡川遺跡（1999－627）第４面溝（66）［註40］

瓜生堂遺跡古墳時代前期下層（67・68）［註23］

美園遺跡ＤＳＤ304（33・69）［註58］

久宝寺南（その２）Ｈトレンチ ＳＸ46（76）［註38］

亀井（その３）28・29トレンチ ＮＲ3001（85）［註29］

4．有稜高杯の法量分布からみた変遷

近年、有稜高杯の型式変化を機軸とする編年案を構築する方法が盛んに行われており、型式学的な変遷過程の追求精度を高めている。なかでも、杯部の各部位を数値化してその法量分布から読み取れる形態的相似関係から変遷過程を推定する試みが多く見られるようになってきた。

中河内地域では、1988年、一瀬和夫氏が「久宝寺・加美遺跡の古式土師器」で、有稜高杯の杯部外傾指数と上下長指数に着目して、弥生時代後期～古墳時代前期までの有稜[註13]高杯の変化を第Ⅰ段階～第Ⅳ段階に大別されている。一方、1996年、西村歩氏は『下田遺跡』の報文で、和歌山県下の有稜高杯の杯部法量を指数化し、弥生時代中期末～古墳時代初頭[註14]までをＡ～Ｉの９型式に細分された前田敬彦氏の指数化の有効性[註15]に着目して、和泉地方の弥生時代後期後半～古墳時代前期前半（布留式古相）までを様相１～様相９に区別されている。

有稜高杯の指数化の方法としては、有稜高杯の口径・杯部径（稜径）・口縁部の長さ（口縁長）の数値から導かれる口稜比[註16]（稜径÷口径×100）、口縁比（口縁長÷口径×100）数値の分布密度の偏在化から型式変化を推定するものである。すなわち、口縁長の増加に伴って稜径の縮小化が進行する相関関係を数値の違いから読み取るもので、器形の大小による違いがあっても対応が可能である。ただ、体部高と口縁高の比率の相関関係が示せないため、同じ数値であっても杯体部の形状を異にする場合があることから、口稜比・口稜比の数値分布で導かれる様相と数値変化で表出できない細部形状の差異や脚部形状から、有稜高杯の型式細分を行った。本稿では、このような方法を使用して弥生時代後期後半～古墳時代初頭前半（庄内式古相）の有稜高杯を７類15種に区別しているが、その中でも数量的に安定しており器形の変遷推移が明確に追えるＡ類～Ｅ類の５類12種に限定して数値分布（ここでは、第４表・第５表で示した資料出土のものに限定）の変化を通して、当該期の有稜高杯の変遷を考えていきたい。なお、基準とした資料出土の有稜高杯の法量および分類については第２表・第３表に示している。

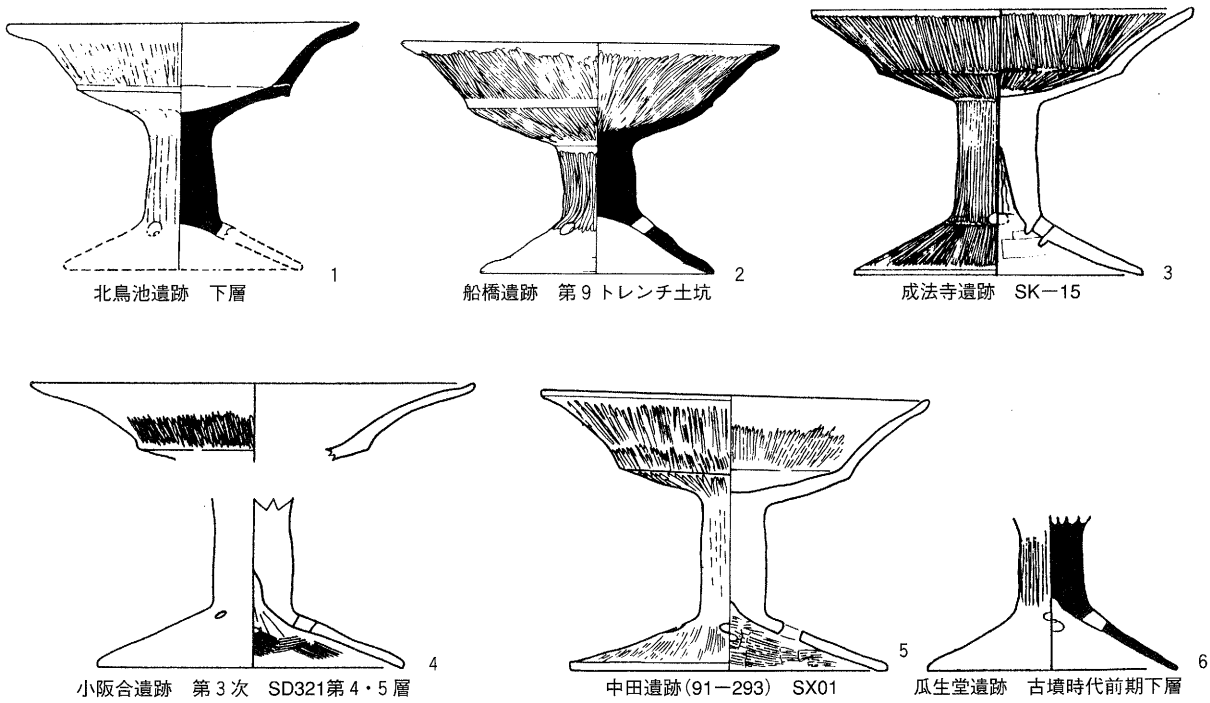
有稜高杯Ａ類のうちA_0は口縁高が体部高に比して小さい大形の杯部を持つもので、脚部は円錐状で円板充填手法が行われている。中・南河内地域では中期後半に成立し、後期前半末まで有稜高杯の主流を成した型式で、有稜高杯A_1の前型式にあたる。有稜高杯A_1は有稜高杯A_0に比して体部が深く口縁部の外反が強くなる。資料点数は３点で、口稜比88.8～90.8（平均値88.63）、口縁比12.8～18.1（平均値15.17）を示す。有稜高杯A_2は有稜高杯A_1が小形化したもので、体部高が口縁高をはるかに凌駕する。Ａ類の最終型式を示すものであるが出土例は少ない。資料点数は鬼塚遺跡Ｅ地区包含層出土の１点のみで、口稜比88.9、口縁比11.5を示す。

Ｂ類としたものは、脚部形状が屈折して開く形状を持つもので、後期前半末に成立し後期後半以降、Ａ類に代わって有稜高杯の主流を占める。有稜高杯B_0は口縁部の外反が弱いものである。資料点数は２点で、口稜比88.1～92.2（平均値90.15）、口縁比12.1～12.6（平均値12.35）を示す。杯体部が直線的に伸びる特徴を持つ一群である。有稜高杯B_1はやや大きめの杯部を有するもので、体部高と口縁高がほぼ等しい。従来、上六万寺式併行期の標準資料とされたものがこの型式にあたる。資料点数は19点で、口稜比72.4～90.8（平均値85.19）、口縁比[註17]11.4～18.1（平均値13.26）を示し、グラフ上での分布のまとまりが比較的集中している。有稜高杯B_2は有稜高杯B_1に比して小形で口縁高が体部高を凌駕する。資料点数は59点で口稜比69.3～83.6（平均値75.36）、口縁比14.8～22.7（平均値19.23）を示し、数値分布では有稜高杯C_2とオーバーラップ

し計測値での峻別はできない。

C類はB類に比して杯体部が直線的でなく杯体部末端近くで小さく内湾する形態をとるものである。有稜高杯C_1は杯体部に丸味を持ち、体部高が口縁高を凌駕するもので後期後半に成立をみる。資料総数は16点で、口稜比80.0～92.8（平均値85.93）、口縁比8.5～16.7（平均値12.39）を示し、有稜高杯B_1とグラフ上での分布域が重なるものの、有稜高杯B_1に比して分布範囲の拡散が認められる。有稜高杯C_2は体部高と口縁高がほぼ等しいか、口縁高が体部高を凌駕した杯部を持つものである。資料点数は21点で、口稜比70.9～82.8（平均値77.20）、口縁比15.1～23.6（平均値18.40）を示す。

有稜高杯D類は有稜高杯B_2の系譜を引くもので、後期後半期に顕在化する器種の小形化傾向の趨勢の中で成立した小形の有稜高杯である。有稜高杯D_1は有稜高杯C_2に比して口稜比数値の低下が著しい。脚部は脚柱部と脚裾部の屈曲部が明瞭で中空のものが多い。資料点数は27点で、口稜比60.5～71.8（平均値66.59）、口縁比18.8～29.0（平均値23.84）を示す。有稜高杯D_2は有稜高杯D_1に比して口稜比の数値低下が進行するもので、口縁部は緩やかに外反する。脚部は脚柱部下半が僅かに開く程度のものからほぼ垂直方向に直線的に伸びるものが大半で脚裾部との屈曲が鋭いほか、脚柱部の中実範囲が脚裾部におよぶ等が有稜高杯D_2型式の最も大きな特徴の一つである。資料点数は6点で、口稜比52.2～65.6（平均値58.23）、口縁比23.6～30.0（平均値28.11）を示す。有稜高杯D_2は有稜高杯D_1の亜種的な形態に想定されるが、出土例には第7図で示したように北鳥池遺跡下層をはじめ船橋遺跡第9トレンチ土坑、成法寺遺跡SK15、小阪合遺跡第3次SD321第4・5層[註18]、中田遺跡（91－293）SX01[註19]、瓜生堂遺跡古墳時代前期下層[註20]等に見られ、一型式としての認識が可能と考えられる。中でも北鳥池遺跡下層式[註22]の資料が古くから知られており[註23]、以下の本文中では本型式を「北鳥池遺跡下層型有稜高杯」と呼称する。

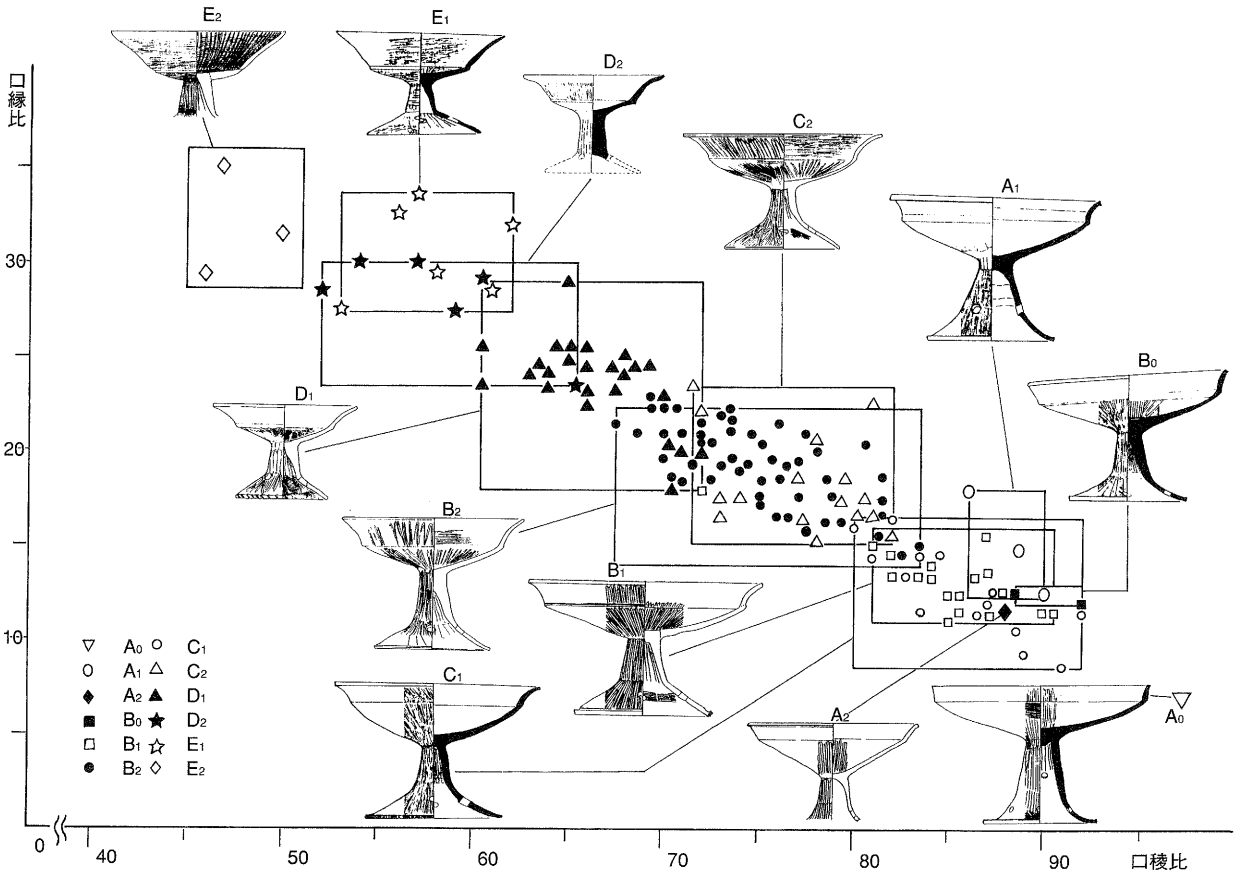


第7図　北鳥池遺跡下層型有稜高杯(有稜高杯D_2)の類例

有稜高杯Ｅ類は、「北鳥池遺跡下層型有稜高杯」に見られた小形化や脚柱部の中実範囲の拡大傾向が本型式に継続していない。型式的には、口縁長の増加に反比例して体部高の低下が進行する有稜高杯E_1と、更に、杯部内底面の水平化が計られている有稜高杯E_2に区別される。口縁部は共に斜上方に外反気味ないしは直線的に長く伸びる。脚柱部と脚裾部の屈曲は明瞭で中空・中実の２種がある。内外面のヘラミガキ調整は、Ａ類～Ｄ類に見られた縦方向を基調とするものが一掃され、吉備地方の当該期の有稜高杯に通有にみられるような横方向を基調とする密なヘラミガキ調整に斉一化される他、有稜高杯E_2のように杯部内面の放射状ヘラミガキに表出されるように、庄内様式に通有な精製化と装飾化をいち早く達成している。有稜高杯E_1の資料点数が６点で口稜比53.8～62.1（平均値58.37）、口縁比27.1～32.4（平均値30.48）で、口縁部の増長傾向に符合した口縁比数値の増加がグラフ上で読み取るここができる。有稜高杯E_2の資料点数は３点で、口

第１表　有稜高杯の法量表

	平均値		口稜比	口縁比	母数
	口稜比	口縁比	最小～最大	最小～最大	
A1	88.63	15.17	88.3～90.8	12.8～18.1	3
A2	88.90	11.50			1
B0	90.15	12.35	88.1～92.2	12.1～12.6	2
B1	85.19	13.26	72.4～90.8	11.4～18.1	19
B2	75.36	19.23	69.3～83.6	14.8～22.7	59
C1	85.93	12.39	80.8～92.8	8.5～16.7	16
C2	77.20	18.40	70.9～82.8	15.1～23.6	21
D1	66.59	23.84	60.5～71.8	18.8～29.0	27
D2	58.23	28.11	52.2～65.6	23.6～30.0	6
E1	58.37	30.48	53.8～62.1	27.1～32.4	6
E2	48.07	31.93	47.4～50.2	29.1～35.1	3



第８図　有稜高杯の法量分布

稜比47.4～50.2（平均値48.07）、口縁比29.1～35.1（平均値31.93）を示し、グラフ上では稜径の縮小傾向に連動した口稜比数値の低下が顕著に表れている。

以上のように、数値分布の変化から有稜高杯の変遷を考えてみた結果、口稜比の低下に連動した口縁比の増加という相関関係にもとづく型式的な変遷を証明するうえで有効性を発揮することが明らかにされた。ただ、１型式の器種認定が決定されたとしても少数のみの出土例を除けば、同時期ないしは時期差のある複数型式の有稜高杯が共存して出土することが大半であり、現実的にはこれらの有稜高杯の共存例と一括資料から導かれる他器種との組成変化から型式的な変遷と時空的な要因を検証し整合性を探る作業が不可欠である。本稿では５種12類に分類した有稜高杯の共存関係を機軸とし、他器種との組成変化の推移を一括資料で検証した結果、当該期においては２型式ないしは３型式の有稜高杯の共存例が普遍的であることが明らかとなった。

ここでは、これらの有稜高杯の共伴例から導かれる土器組成の複合体を「様相」として捉え、第４表・第５表で提示した資料を中心として、中・南河内地域における弥生時代後期後半～古墳時代初頭前半（庄内式古相）の土器変遷を様相１～様相４の４段階に区別した。なお、時期的な位置付けとしては様相１を弥生時代後期後半古相、様相２を弥生時代後期後半中相、様相３を弥生時代後期後半新相、様相４を古墳時代初頭前半（庄内式古相）としている。各様相の土器変遷については器種毎に第９図～第20図で表示している。

第２表　有稜高杯の口稜比・口縁比数値一覧表１

時期	遺跡名	報告書番号	報文内番号	口稜比	口縁比	高杯型式
様相1	恩智遺跡ＳＤ13	註26	88	92.2	12.1	B0
			89	83.8	11.8	C1
			90	83.8	14.9	C1
			91	85.7	12.5	B1
			93	88.3	14.6	A1
			96	90.8	12.8	A1
	恩智遺跡ＳＰ03	註26	84	84.6	14.6	C1
			85	87.5	12.2	C1
			86	88.5	10.3	C1
			87	82.7	13.4	B1
			88	85.2	11.9	C1
			90	87.9	11.3	C1
	大竹遺跡第10地点溝状遺構第４層	註25	5	89.0	9.2	C1
			11	87.2	8.5	C1
			14	84.0	14.0	B1
	太田川遺跡南東トレンチＳＤ－１	註27	16	72.4	18.1	B1
			17	85.1	12.6	B1
	亀井Ｃトレンチ ＮＲ3001	註28		86.3	18.1	A1
				87.9	15.5	B1
	亀井（その１） Ｂトレンチ ＳＤ3056	註29	2	87.1	12.0	C1
			3	84.9	13.3	B1
	亀井（その１） Ｂトレンチ ＳＫ3128	註29	5	82.1	14.3	B1
			7	80.0	16.0	C1
	亀井（その２） 23トレンチ ＳＫ2301	註29	5	87.6	13.8	B1
	萱振遺跡Ａ区 ＳＫ－3022	註31	117	86.7	13.3	B1
			119	90.8	11.4	B1
	鬼塚遺跡H01～04 第Ⅲ層	註32	66	91.0	8.9	C1
			70	92.8	11.9	C1
			71	85.3	11.4	B1
	鬼塚遺跡Ｅ地区竪穴	註33	11	85.5	11.9	B1
	鬼塚遺跡Ｅ地区包含層	註33	116	87.8	11.4	B1
			117	88.9	11.5	A2
			122	83.3	13.3	C1
			123	90.8	11.4	B1
	上六万寺遺跡 第３トレンチ	註24	67	83.7	13.8	B1
			68	88.3	11.3	B1
	馬場川遺跡４次 １ＴＲ４・５層	註35	24	88.1	12.6	B0
			25	83.6	13.6	B1
様相2	久宝寺遺跡29次 ＳＷ6001～ ＳＷ6006	本書	262	78.6	20.0	C2
			263	82.8	15.9	C2
			291	78.2	20.0	B2
			292	69.3	22.5	B2
			293	79.3	17.7	C2
			294	74.7	21.2	B2
			295	70.5	19.9	B2
			336	75.6	19.9	B2
			337	70.1	22.5	B2
			338	78.9	18.9	B2
			339	675	232	D1
様相2	久宝寺遺跡第29次 ＳＷ6001～ ＳＷ6006	本書	340	66.1	23.2	D1
			341	74.	17.9	C2
			354	81.0	22.6	C2
			355	76.8	18.9	B2
			410	77.1	17.9	B2
			411	70.2	21.1	B2
			412	77.6	18.9	C2
			413	77.4	19.2	B2
	久宝寺遺跡第８次 ＳＤ301	註36	36	82.0	16.7	C1
			37	73.1	19.3	B2
	久宝寺遺跡 周溝墓３－１	註37	71	81.3	16.7	C2
			72	74.5	19.2	B2
			75	78.2	15.3	C2
			77	67.7	21.8	B2
	久宝寺南（その２）Ｆトレンチ ＳＤ52	註29	124-31	77.4	17.1	B2
			124-33	70.5	18.8	D1
			124-34	70.8	20.5	D1
			124-35	64.7	23.5	D1
			124-36	60.5	23.7	D1
			125-1	65.0	29.0	D1
			125-2	72.0	22.2	C2
			125-3	64.4	25.5	D1
	久宝寺南（その２）Ｈトレンチ ＳＸ46	註29	18	76.4	21.8	B2
			19	70.4	22.3	B2
	成法寺遺跡ＳＷ３	註39	9	77.4	19.8	B2
			10	71.4	21.1	B2
			11	81.9	15.0	B1
	郡川遺跡（1999－627）第４面溝	註40	23	72.0	20.8	B2
			24	75.1	20.5	B2
			25	72.9	18.6	B2
	弓削遺跡（90－553） 第５調査区	註41	41	66.1	22.2	D1
			42	73.5	16.8	C2
	弓削遺跡（94－613） 第１調査区	註42	32	81.0	16.5	B2
			33	69.3	24.4	D1
			34	67.7	24.3	D1
			35	65.9	24.4	D1
			36	74.1	19.4	B2
	亀井（その１） Ｂトレンチ ＳＤ3067	註29	13	81.3	14.8	C1
			14	71.4	20.8	B2
			15	77.6	16.3	B2
			16	80.9	16.9	B2
	亀井（その３） 19・29ＴＲ土器溜り 亀井（その３）	註29	6	72.2	22.1	B2
			7	73.3	21.8	B2
			8	77.2	16.3	C2
	28・29トレンチ ＮＲ3001	註29	392-1	80.7	20.2	B2
			392-2	77.9	16.0	B2
			392-3	75.6	19.4	B2
			392-4	75.1	17.8	B2
			392-5	83.6	14.6	B2

第３表　有稜高杯の口稜比・口縁比数値一覧表２

時期	遺跡名	報告書番号	報文内番号	口稜比	口縁比	高杯型式
様相2	亀井（その３）28・29トレンチ ＮＲ3001	註29	392-6	81.7	17.5	Ｂ2
			392-7	81.9	15.5	Ｂ2
			392-8	82.9	14.8	Ｂ2
			392-9	81.1	15.1	Ｃ2
			392-10	76.2	19.1	Ｂ2
			393-1	78.2	16.1	Ｂ2
			393-3	71.6	19.4	Ｂ2
			393-4	81.3	18.9	Ｂ2
			393-5	79.4	16.1	Ｂ2
	亀井遺跡（亀井４丁目41－１）落ち込み状遺構	註46	111	70.9	18.6	Ｃ2
			115	73.5	22.0	Ｃ2
			124	76.4	16.4	Ｂ2
			125	71.0	20.0	Ｄ1
			126	74.3	17.8	Ｃ2
	神山遺跡溝3001	註47	63	79.3	17.8	Ｂ2
			64	73.1	19.8	Ｂ2
			65	63.8	24.7	Ｄ1
			66	77.4	18.4	Ｂ2
			67	64.0	24.0	Ｄ1
			68	76.9	16.8	Ｂ2
			69	77.8	21.3	Ｂ2
			70	69.7	22.7	Ｂ2
			71	80.8	16.6	Ｃ2
			72	80.4	17.4	Ｃ2
			73	70.8	20.8	Ｂ2
			74	71.8	23.6	Ｃ2
			75	76.5	16.4	Ｂ2
			76	73.7	21.1	Ｂ2
			77	73.3	17.9	Ｃ2
			78	70.8	18.8	Ｂ2
			79	72.7	20.5	Ｂ2
			80	75.0	17.5	Ｂ2
			81	73.9	22.2	Ｂ2
			82	70.7	20.2	Ｂ2
			83	75.0	18.5	Ｂ2
			92	78.4	18.9	Ｃ2
			93	79.7	18.1	Ｃ2
様相3	北鳥池遺跡下層	註18	50	66.0	25.4	Ｄ1
			51	60.7	29.0	Ｄ2
	船橋遺跡９トレンチ土坑	註19	133	65.6	23.6	Ｄ2
			134	65.2	25.9	Ｄ1
			135	65.9	25.9	Ｄ1
	中田遺跡（91－293）ＳＸ－01	註50	2	59.0	27.8	Ｄ2
			13	72.4	21.9	Ｂ2
	成法寺遺跡ＳＫ15	註51	2	65.0	25.4	Ｄ1
	小阪合遺跡ＳＤ321 ４・５層	註21	96	52.2	28.3	Ｄ2
	亀井Ⅱ落ち込み	註53	13	54.8	30.0	Ｄ2
様相3	跡部遺跡（96－580）ＳＷ－96580	註54	40	67.4	22.9	Ｄ1
	久宝寺南（その２）Ｈトレンチ ＳＤ70	註29	1	71.8	20.4	Ｄ1
			2	60.7	25.7	Ｄ1
			3	63.8	24.1	Ｄ1
			42	68.2	25.0	Ｄ1
様相4	馬場川遺跡１・２号井戸Ⅱ類	註56	31	47.4	35.1	Ｅ2
			32	50.2	31.6	Ｅ2
	瓜生堂遺跡古墳時代前期下層	註23	881	62.1	32.0	Ｅ1
	美園遺跡ＤＳＤ304	註58	Ｄ230	46.6	29.1	Ｅ2
	東郷遺跡19次 ＳＸ－１	註60	139	68.0	24.2	Ｄ1
			140	53.8	27.1	Ｅ1
	中田遺跡刑部地区土坑	註61	55	70.3	22.9	Ｄ1
			56	67.3	24.5	Ｄ1
			57	58.7	29.4	Ｅ1
			58	56.6	32.4	Ｅ1
	木の本遺跡（木の本１丁目83）	註62	7	61.5	28.2	Ｅ1
			8	57.1	30.0	Ｄ2
	八尾南遺跡井戸１	註63	13	57.5	33.8	Ｅ1

5．各様相と土器組成の変遷

様相１（弥生時代後期後半ー古相）

様相１は有稜高杯のうち量的に確立している有稜高杯B_1の単独ないしはB_1・C_1が共存した８遺跡の14資料から導かれる土器組成を中心に設定している。

高杯形土器のうち、有稜高杯Ａ類ではA_1・A_2、Ｂ類ではB_0・B_1、Ｃ類ではC_1がある。有稜高杯Ａ類ではこの様相の古段階で有稜高杯A_1・A_2が消長を遂げている。有稜高杯Ｂ類では有稜高杯B_0が本小様式を最後に消長を遂げる一方で口縁部が強く外反する有稜高杯B_1型式に形態変化しており出現から盛行へと急速に進行したことが出土例の増加から窺える。Ｃ類では有稜高杯B_0からの系譜を引く有稜高杯C_1が出現しており有稜高杯B_1と共に当該様相の有稜高杯の主流を占める。その他小形の杯部を有する有稜高杯Ｆが微量ながら存在する。椀形高杯ではＡ類の椀形高杯A_1・A_2が存続する。椀形高杯Ｂ類は椀形高杯B_1が存続するが量的には少ない。

壺形土器のうち広口壺はバリエーションに富むもので、広口壺Ａ類では広口壺A_1・A_2・A_3、広口壺Ｂ類では広口壺B_1・B_2、広口壺Ｃ、広口壺Ｄ類では広口壺D_1・D_2がある。広口壺類の推移としては、広口壺Ｃ類が出現するほか、広口壺A_1・A_2・A_3、B_1、D_1・D_2の盛行、広口壺B_2の減少が見られる。口縁部が短く直線的に伸びる広口直口壺は本様相に長頸壺A_2の型式から分化し成立するものであるが量的には確立しない。広口長頸壺は存続するものの量的には広口直口壺と同様少ない。広口短頸壺は広口直口壺の口縁部を二重口縁化したもので前代からの系譜上に乗るものでなく、本様相のみに存在する型式である。無頸壺は減少から消長へと推移している。長頸壺では、長頸壺A_1が減少から消長へと推移するが、長頸壺A_2は量的に安定し盛行している。小形品の長頸壺A_3は一定量の存在を認める。細頸壺は前代から継続するが減少傾向が顕著である。短頸直口壺は中形のＡと小形のＢが本様相に出現しているが、量的には微量で土器組成としては不安定である。台付壺は台付壺Ａ・B_1がある。台付壺Ａは量的に微量で類例に乏しい。台付壺B_1は無頸壺の系譜上にある型式と推定される。共に量的には微量で本様相中に消長を遂げる。

甕形土器では外面にタタキ調整を行なう甕Ａが大半で、ハケ調整を行なう甕B_1は微量存在する程度である。甕Ａでは、体部形態で区別した甕A_1・A_2がある。大小の比率別の出土量はⅡ・Ⅲの占める比率が高くⅠ・Ⅳは少ない。口縁端部の形態では、ａ類・ｂ類・ｃ類とバリエーションに富むが、量的にはｂ類・ｃ類が大半を占める。中でも、河内地域の弥生時代後期土器編年の基準とされた上六万寺遺跡第２・３トレンチ土器群出土甕に代表されるｃ類（c_2・c_3）形態の口縁端部を持つ甕の増加が特徴である。[註24] 体部外面タタキ調整は小形のものを除けば三分割が一般的で、タタキ調整後、タタキメをハケメで一部消す行為をとるものが本様相には確立しており、庄内様式の成立期である様相４段階まで継続する。また、稀に格子状タタキを施すものがある他、内面にヘラケズリ調整を行なうものがこの様相段階まで残る。甕Ｂ類は散見されるものの器形の大小や口縁端部形態の共通性は認められない。

鉢形土器は小形品では鉢Ａ類・Ｂ類が主流を占め、鉢Ｃは少ない。中形鉢ではＡ～Ｃがあるが主流は中形鉢Ａである。大形鉢はＡ～Ｄがあるが、全体に出土数は少ない。把手を伴う大形鉢Ｄはこの期に消長する器種である。有孔鉢は有孔鉢Ａ・Ｂが共存しており比較的安定した出土量がある。台付鉢は台付鉢Ａ・Ｂが共存しているが出土量は微量である。

器台形土器は、大形器台A_1・A_2・A_3、Cが共存しているが、量的には大形器台A_1が主流を成す。なお、大形器台Cとしたものは大竹遺跡第10地点溝状遺構第３層・第４層[註25]から出土した搬入品で、兵庫県淡路島を中心に分布が認められる「淡路型器台」と称されるもである。河内地域においては類例に乏しい。手焙形土器は覆部と体部の境に補強粘土を貼り付けて突帯とする手焙Aが本様相に出現しており、弥生時代後期後半の前半期を特徴付ける器種の一つである。蓋形土器については、提示した資料では傘形の蓋Aに限られているが、蓋Bが無頸壺に伴う可能性が高いことから本様相に存在していた蓋然性が高い。

当該期のものとしては、古くから中・南河内地域の後期後半期の指標とされてきた恩智遺跡ＳＤ13・ＳＰ03[註26]、大竹遺跡第10地点溝状遺構第３・４層、太田川遺跡南東トレンチＳＤ－１、亀井遺跡[註27]Ｃトレンチ ＮＲ3001、亀井遺跡（その１）Ｂトレンチ ＳＫ3128・ＳＤ3056、亀井（その２）23トレンチ ＳＫ2301[註28]、萱振遺跡Ａ区ＳＫ3022[註29]（以上八尾市）、鬼塚遺跡Ｈ01～Ｈ04第Ⅲ層[註30]、鬼塚遺跡Ｅ地区竪穴住居[註31]・Ｅ地区包含層[註32]、上六万寺遺跡第３トレンチ出土遺物[註33]、馬場川遺跡第１トレンチ第４・５層[註34]（以上東大阪市）がある。[註35]

様相２（弥生時代後期後半ー中相）

様相２としたものは有稜高杯B_2・C_2・D_1が共存した７遺跡の14資料の土器組成を中心に構築している。高杯形土器のうち有稜高杯はＡ類が消滅し、Ｂ類では有稜高杯B_2、Ｃ類では有稜高杯C_2への移行と有稜高杯B_2からさらに小形化し成立した有稜高杯D_1型式がある。その他、杯部が小形で口縁部が外反しない有稜高杯Ｆが前代から継続するが量的には微量のまま推移している。椀形高杯はＡ類ではA_1が存在するもののA_2は激減している。椀形高杯Ｂ類ではB_1が存在する他、椀形高杯B_1の杯部に長めの脚柱部が付く椀形高杯Ｃが出現している。椀形高杯Ｃは椀形の杯部に短く伸びる脚柱部から大きく開く脚裾部を持つもので、庄内式の全般に盛行する椀形高杯の祖形となる。壺形土器のうち広口壺類はバリエーションに富むもので型式も豊富である。広口壺はＡ類では広口壺A_1・A_2・A_3が継続する。広口壺Ｂ類では広口壺B_1・B_2が継続するが広口壺B_2は減少傾向にある。やや長めの体部に口頸部が斜上方に長く伸びる広口壺Ｃが量的な増加傾向を示している。広口壺Ｄ類はD_1・D_2が減少から消長を遂げている。広口直口壺は継続し量的な増加を果たす。広口長頸壺は存在するものの形態的に不安定で、量的な増加を果たさないままで本様相中に消長している。無頸壺は消長を遂げる。細頸壺は存続するものの細頸壺の系譜を持ち口頸部が短めとなった細頸直口壺に形態変化を遂げている。長頸壺については、長頸壺A_2・A_3が存続するが、小形の長頸壺A_3を除いて長頸壺A_2は減少傾向である。短頸直口壺には短頸直口壺Ａ・Ｂが存続しており短頸直口壺Ａは増加する傾向にある。二重口縁壺は新たに二重口縁壺A_1と拡張した口縁部端面に装飾を加えるＢが出現しており、様相２を特徴付ける器種の一つと言えよう。短頸直口壺Ｂないしは、細頸直口壺の形態に脚台が付く台付壺B_2が新たな器種として出現している。

甕形土器は甕Ａ・Ｂがある。甕Ａのうち体部形態ではA_2形態の急激な増加と球形体部を持つA_3形態の増加傾向が見られる。口縁端部の形態ではａ、c_1・c_2が増加する他、ｄの出現をみる。鉢形土器は小形品ではＡ類の小形鉢A_1・A_2、Ｂ類の小形鉢B_1・B_2が存続するが、Ａ類は前代と同様推移するもののＢ類は増加傾向が顕著で小形鉢の主体を占めている。小形鉢Ｃは前代と同様

少なく、形式的な存続を維持する程度に推移している。この様相に出現する小形鉢としては、手焙形土器の覆部分を取った形状の小形鉢Gが本様相のみに存在する。中形鉢はA・B・Cが存続するが、Bは本様相に消長を遂げている。大形鉢では大形鉢A・B・C・Dの4型式が存続している。有孔鉢は前様相と同様A・Bの2種が存続している。台付鉢は台付鉢A・Bが存続するが共に本様相内で消長を遂げている。大形器台は、A_1・A_2・A_3が存続する他、Bが出現しているが減少傾向が著しいもので、本様相を最後にA類は土器組成から姿を消す。大形器台Bは庄内期に盛行する中空の小形器台へ派生する祖形的な形態を呈しているが、管見で知る限りにおいては類例が極めて少なく中・南河内地域において普遍的な器種であったとは言いがたい。手焙形土器は手焙Bに変化して存続するものの量的には微量なまま推移している。蓋はA・Bが存続するものの量的には微量である。

本様相の該当資料としては、本書報告の久宝寺遺跡第29次4調査区のSW6001～SW6006がこの様相に位置付けられる他、久宝寺遺跡第8次SD301、久宝寺遺跡周溝墓3－1、久宝寺南（その2）FトレンチSD52・HトレンチSX46、成法寺遺跡[註36]SW3、郡川遺跡（1999－627）[註37]第4面溝、弓削遺跡（90－553）第5調査区出土遺物[註38]、弓削遺跡（94－613）[註39]第1調査区出土遺物、亀井（その1）[註40]BトレンチSD3067、亀井（その3）[註41]28・29トレンチNR3001、亀井（その3）[註42]19・29トレンチ黒色粘土層土器溜り、亀井遺跡[註43]（南亀井町4丁目41－1）落ち込み状遺構[註44]（以上八尾市）のほか、南河内地域の河南町の神山遺跡溝3001[註45]があり、比較的資料は豊富である。[註46]

様相3（弥生時代後期後半ー新相）

本様相は有稜高杯D_1・D_2の供存関係に導かれる8遺跡の8資料の土器組成を中心に構築している。[註47]

高杯形土器のうち有稜高杯においては、有稜高杯B_2からの系譜を引き小形化を果たした有稜高杯D_1とD_1と同様の杯部を持ち、垂直方向に伸びる脚柱部の中実範囲を拡大させた形状で本文で「北鳥池遺跡下層型有稜高杯」とした有稜高杯D_2が有稜高杯の中核を成している。様相2段階に有稜高杯の主流を成した有稜高杯B_2は掲載資料中に僅か1点のみ確認される程度であり、本様相には存続しなかったものと推定される。有稜高杯Fは存続するものの微量で型式的な統一性を欠く。椀形高杯ではA類が消長している。椀形高杯B類ではB_2が存続するものの微量である。様相2に出現をした椀形高杯Cが増加しており、椀形高杯の主流を成す他、杯部内面に放射状ヘラミガキを施す精製品が増加している。

壺形土器のうち、広口壺ではA_1・A_3、B_1、Cが存続する他、広口壺A_2が消長を遂げている。広口壺D_3は本様相のみに認められるものの量的な確立をみない。広口壺類では、量的には広口壺A_1・A_3・B_1が主流を成すものの前様相に比して広口壺全体量の減少傾向は顕著である。長頸壺では長頸壺A_2が一掃され小形の長頸壺A_3のみが存続する。細頸壺は全容を知り得る良好な資料を欠くが本様相に存続を認める。細頸直口壺は存続するが量的には確立せず、口縁部の直線化や北鳥池遺跡下層式出土例にみられるような扁球形の体部形態を持つものが多くなる。短頸直口壺はA・B型式が存続するがAは減少から消長へと推移している。二重口縁壺の組成は二重口縁壺A_1・Bで二重口縁壺A_2が消長を遂げている。

甕形土器は甕A・Bがある。甕Aの器高数値で分類した超大形の甕Ⅳは主要器種の小形化傾向

に符合して消滅している。体部の形態では様相２以降、北鳥池遺跡下層資料に代表される球体化が進行した甕A_3形態に変化を遂げているものの、量的には少なく急激な増加を果たしていない。口縁端部の形態では、ａ、ｄが主流で、ｂ類の消長とｃ類ではｃ$_2$のみが存続する。また、突出しない底部形態を持つものがこの様相段階に出現している。

鉢形土器のうち小形品は豊富で前様相から継続する小形鉢A_1・A_2、B_1・B_2、Ｃのほか、新たに吉備地方からの搬入品である小形鉢Ｄが加わる。中形鉢の形態は中形鉢Ａが存続するものの量的には少ない。大形鉢はＤのみが存続する他、Ｂについては掲載資料には無いものの様相４に存在を認めるため本様相に存在した可能性が高い。有孔鉢にはＡ・Ｂがあり前様相と組成に変化はない。

器台形土器は大形のＡ類が消長を遂げている。なお、現時点では類例が無いものの、様相２に出現した大形器台Ｂの系譜を引く器台が存続する可能性がある。

手焙形土器は手焙Ｂが存続するものの量的には前代と同程度で推移している。蓋類は消長を遂げている。

当該期の資料は古い段階に指標とされてきた東大阪市の北鳥池遺跡下層および柏原市の船橋遺跡第９トレンチ土坑をはじめ、中田遺跡（91－293）ＳＸ01、成法寺遺跡[註48]ＳＫ15、小阪合遺跡第３次ＳＤ321第４[註49]・５層、亀井遺跡Ⅱ落ち込み３、跡部遺跡[註50]（96－580）ＳＷ－９[註51]6580、久宝寺南[註54]（その２）Ｈトレンチ[註52]ＳＤ70[註53]（以上八尾市）があるが前様相に比して資料数は少ない。[註55]

様相４　古墳時代初頭前半（庄内式古相）

様相４は有稜高杯E_1・E_2が共存した７遺跡の８資料の土器組成を中心としている。本様相は庄内式甕の出現と言った大きな画期にあたり、加飾化志向と連動した精製土器への変換が壺・高杯・小形器台等の土器形式の一部に表れている。

高杯形土器のうち有稜高杯類では、有稜高杯D_1・D_2、E_1・E_2、Ｇ、Ｆ、Ｈがあり前代に比して型式が豊富である。そのうち、本様相の有稜高杯の主流を成すものは有稜高杯E_1・E_2である。本様相まで継続した有稜高杯D_1・D_2は、様相２から顕在化した有稜高杯の小形化傾向の中で成立し継続したものであるが、本様相に出現した有稜高杯Ｅ類により小形化志向の停止が計られている。なお、有稜高杯Ｅ類の杯部外面にみられるヘラミガキ調整については、縦方向のものと横方向のものが共存しており、前者については在地系、後者については中部・瀬戸内地域からの外的要素により成立したものと考えられる。その他、中部・瀬戸内地域からの搬入ないしはその影響下で成立した有稜高杯Ｇや庄内様式の特徴である加飾された有稜高杯Ｈが出現しているが共に量は微量である。椀形高杯では、椀形高杯B_2が消長を遂げ、精製品である椀形高杯Ｃの一型式のみになる。

壺形土器のうち広口壺では広口壺A_1、B_1、Ｃ、D_1型式が存続する他、Ａ類では広口壺A_3、Ｄ類ではD_3が消長するように様相３以降顕在化する広口壺類の器種の減少傾向が本様相に継続している。広口壺Ａ類では、広口壺A_1型式に集約される。広口壺B_1は小形化への移行と共に、体部の扁球化や底部の小形化を急速に推し量っている。広口壺Ｃは口頸部の立ち上がりの直線化が図られており、庄内Ⅱ以降に盛行する大形直口壺の祖形を成す器種と推定される。広口壺D_1は加飾を加える広口壺類としては唯一のもので量的にも微量である。長頸壺A_3は存続するものの

微量で形態的には丸底化が進行している。細頸直口壺は存続するものの少なく、体部の張りが小さく庄内Ⅱ以降に盛行する直口壺の祖形的な形態に変化している。短頸直口壺はBが存続しており丸底化を遂げている。二重口縁壺には加飾を行う精製品の二重口縁壺Bがあり、庄内様式を特徴付ける器種の一つである。

甕形土器は甕Cとした河内型庄内式甕の出現に符合して、甕Aの減少傾向が顕著である。甕Aは体部形態ではA_1・A_2・A_3形態があるが、A_2・A_3形態が大半で底部の小形化・丸底化が進行している。口縁端部の形態ではa、dに限定され、本様相に共伴する河内型庄内式甕（甕C）と共通している。甕Bは量的な増加を見るが、その大半が吉備地方からの搬入品ないしはその影響下で成立したものと推定される。本様相に出現を果たす甕Cとした河内型庄内式甕は、尖り底で体部最大径がやや上位にある体部に「く」の字に鋭く屈曲する口縁部が付くものである。体部外面のタタキ調整は3分割で、体部内面は底部から屈曲部にかけてヘラケズリ調整が行なわれている。甕Cは、体部外面のタタキ調整が3分割される点で甕Aからの系譜を持つが、甕Cの体部形態は甕Aで分類した体部形態のA_1に近いものであり、甕Aの体部形態の主流がA_2・A_3型式である本様相から勘案すれば、単純に甕A類から甕Cの発生を考えることはできない。

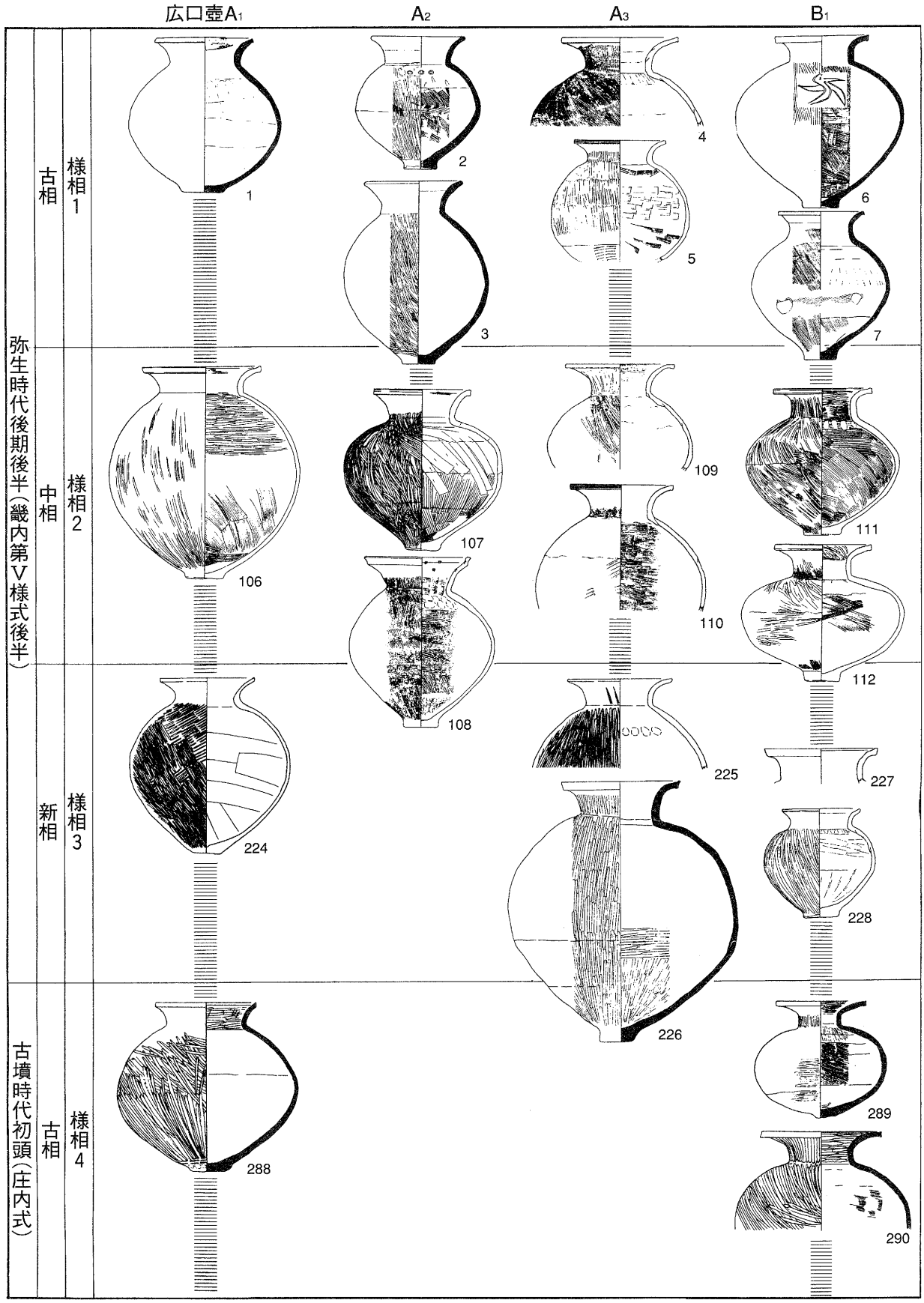
鉢形土器のうち小形鉢A類では、小形鉢A_1・A_2が存続し小形鉢A_1の一部にミニチュア化したものが増加している。小形鉢B類では、小形鉢B_1が一定量あり前様相に主流を占めた椀形の体部から逆台形の形態に変化している他、小形鉢B_2が減少から消長へと移行している。小形鉢C・D型式は小形鉢Cが微量のまま推移するが小形鉢Dは増加傾向にある。小形鉢のなかで新たに出現するものとしては、吉備地方からの搬入品である小形鉢Eと小さく外反する口縁部を持ち底部が尖り底の小形鉢Fがある。中形鉢では中形鉢A・C、大形鉢では大形鉢B・Dが存続するが量的には微量である。有孔鉢はA、Bが存続するが微量である。

器台形土器では、加飾化傾向の中で成立した装飾器台の他、小形器台A・Bの両型式が出現しているが小形器台の両型式共に斉一化されたものは少なく個々の器形に形態差が認められる。

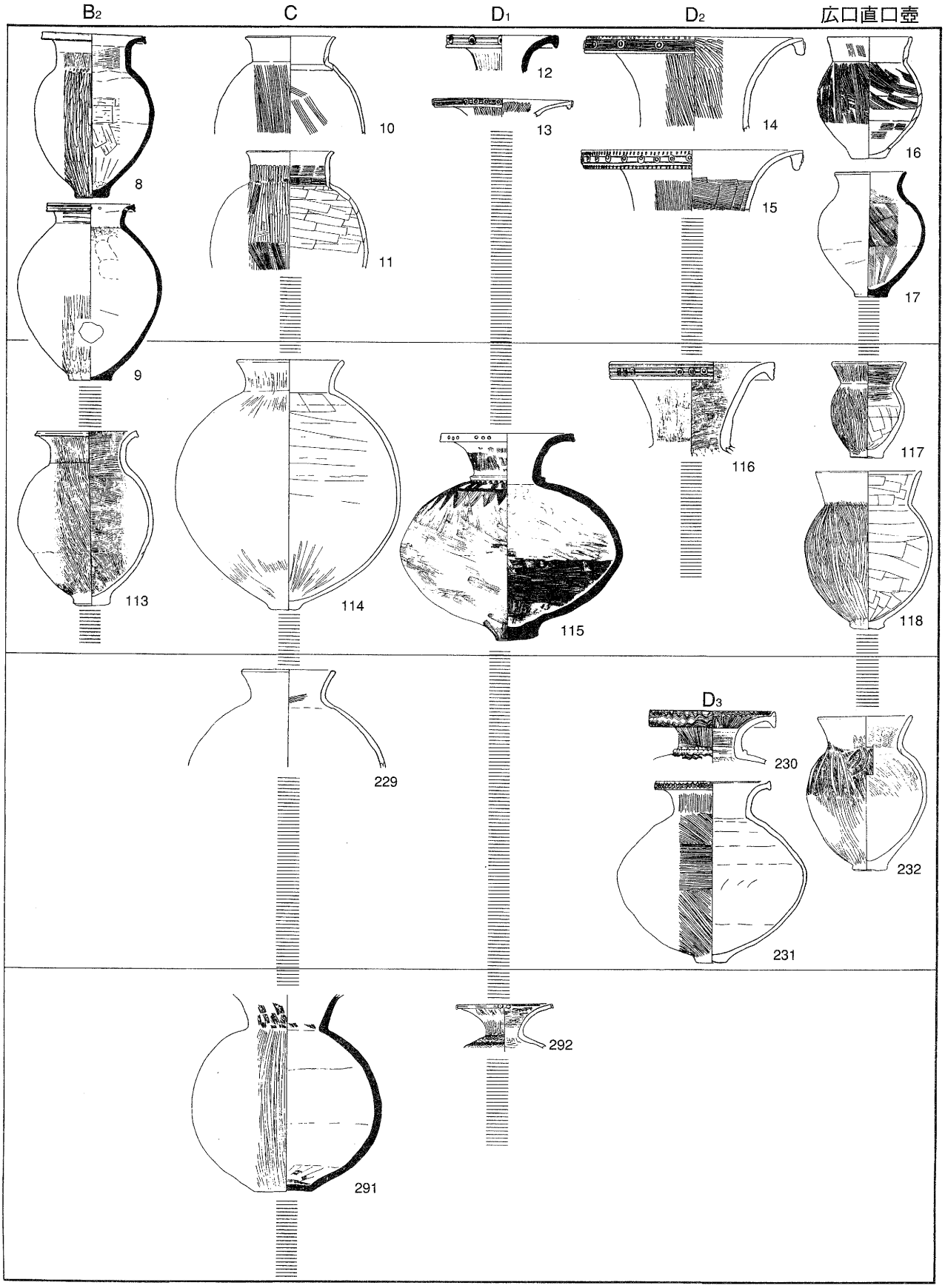
当該期の資料は、近年における爆発的な調査例の増加にも拘わらず前様相と同様出土例は少なく、河内地域における庄内様式成立期の在り方を巡る諸論争を想起させる一因となっている。基本的には、有稜高杯E_1・E_2に河内型庄内式甕である甕Cとの共存を中心に考えているが、甕Cを含まない場合であっても遺跡間における甕Cの受容時期差と捉えて本様相資料としたものがある。

当該資料としては、東大阪市では馬場川遺跡1・2号井戸Ⅱ類、瓜生堂遺跡古墳時代前期下層[註57]、八尾市では美園遺跡DSD304[註58]、東郷遺跡第9次SE－1[註59]・第19次SX1[註60]、中田遺跡刑部地区土坑[註61]、木の本遺跡木の本1丁目83出土資料[註62]、八尾南遺跡井戸1[註63]がある。

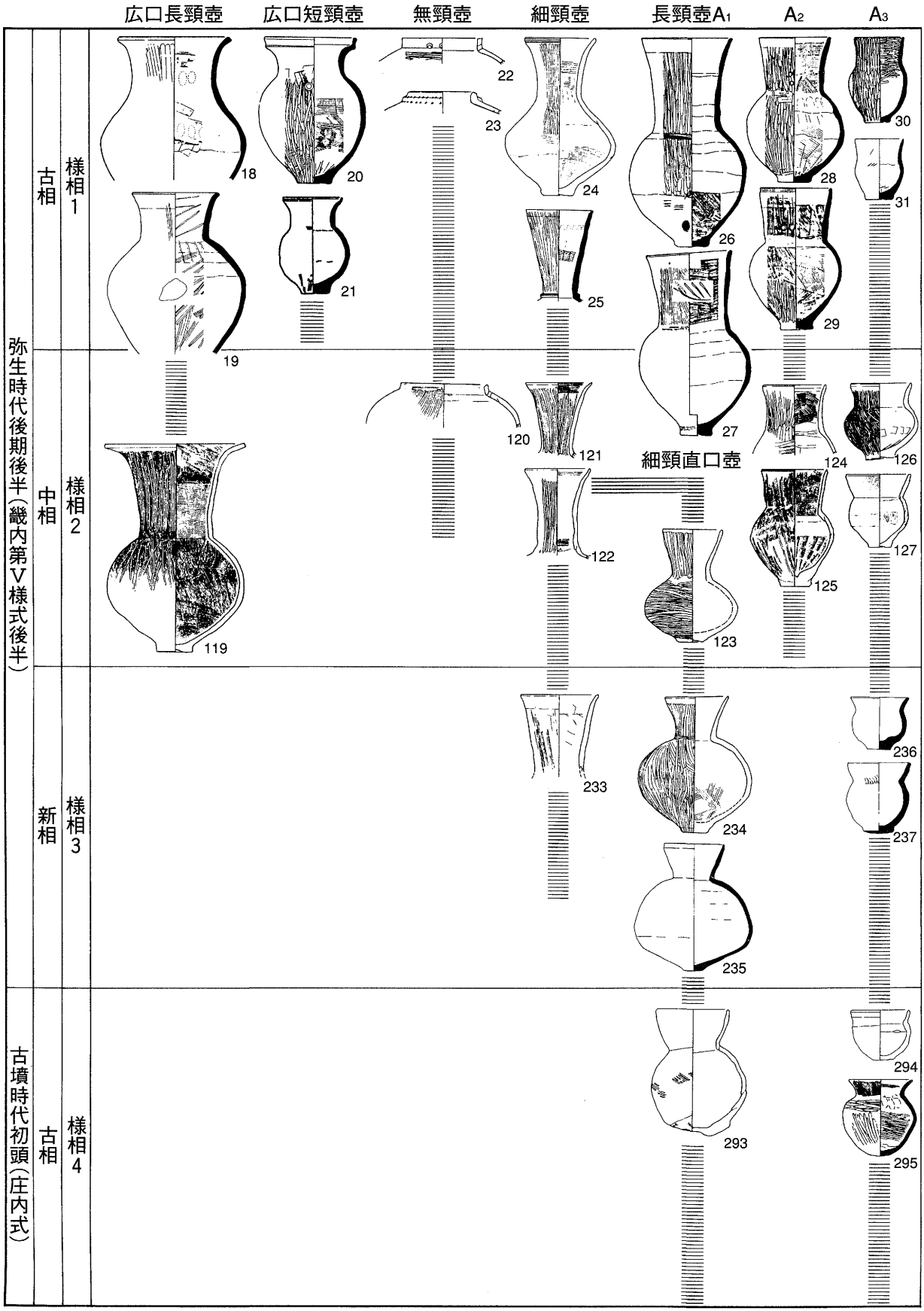
<追記>脱稿後に菅原章太、岩間俊之、槇原美智子2002『段上遺跡第12次発掘調査概要報告』東大阪市教育委員会で報告された溝100から弥生時代後期後半の土器類が多量に出土していることを知った。完形・破片を含めて2292点におよぶ良好な資料である。本編年案との比較では、様相1（弥生時代後期後半－古相）に対応するもので、今後、中・南河内地域における当該期の基準資料の一つになろう。但し、報文では時期を西ノ辻Ⅰ式併行期と想定されているが、筆者はそれより後出の資料と考えている。



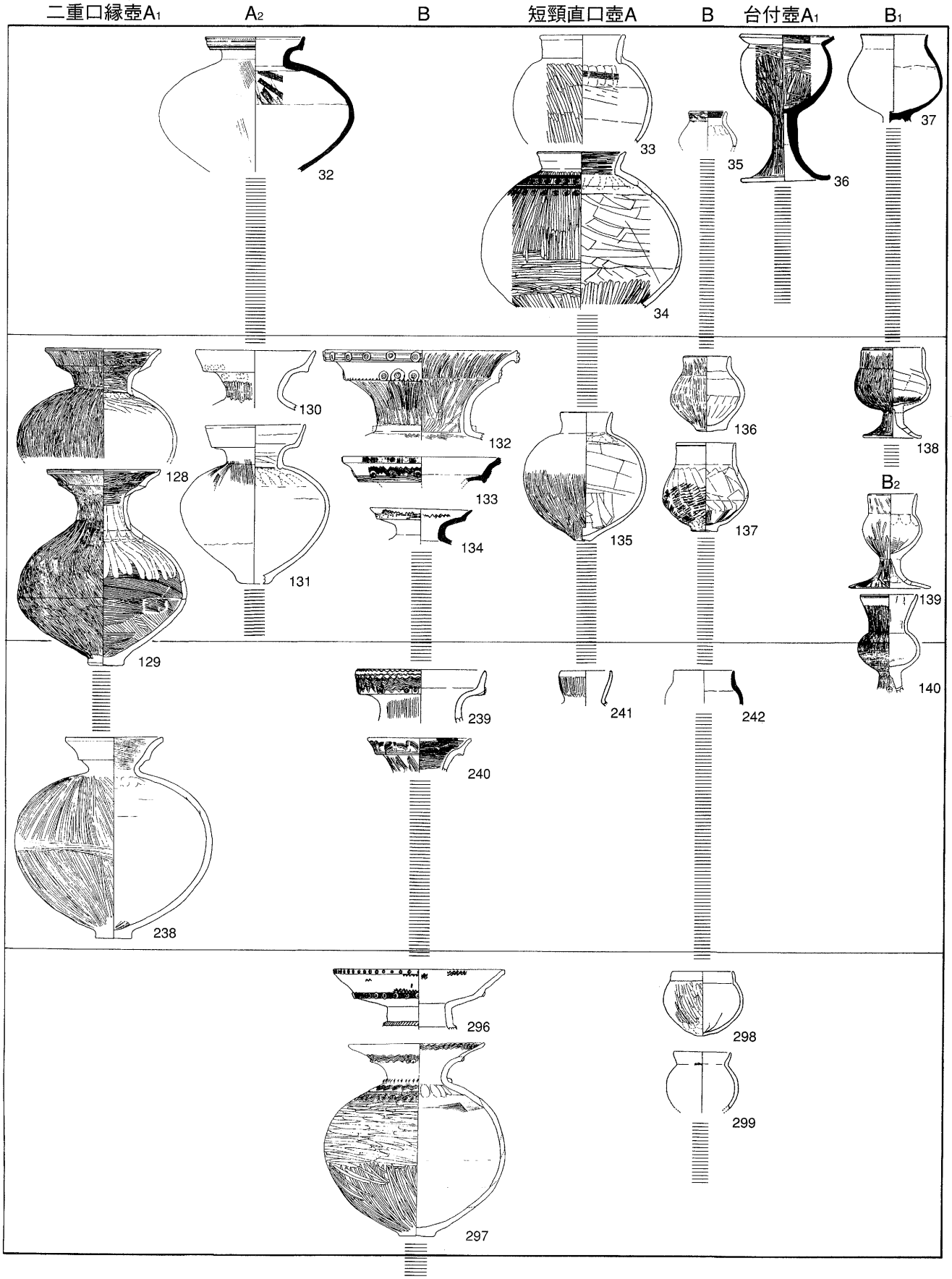
第９図　中・南河内地域における弥生時代後期後半～古墳時代初頭前半(庄内式古相)の土器の変遷(１)　S＝1/8



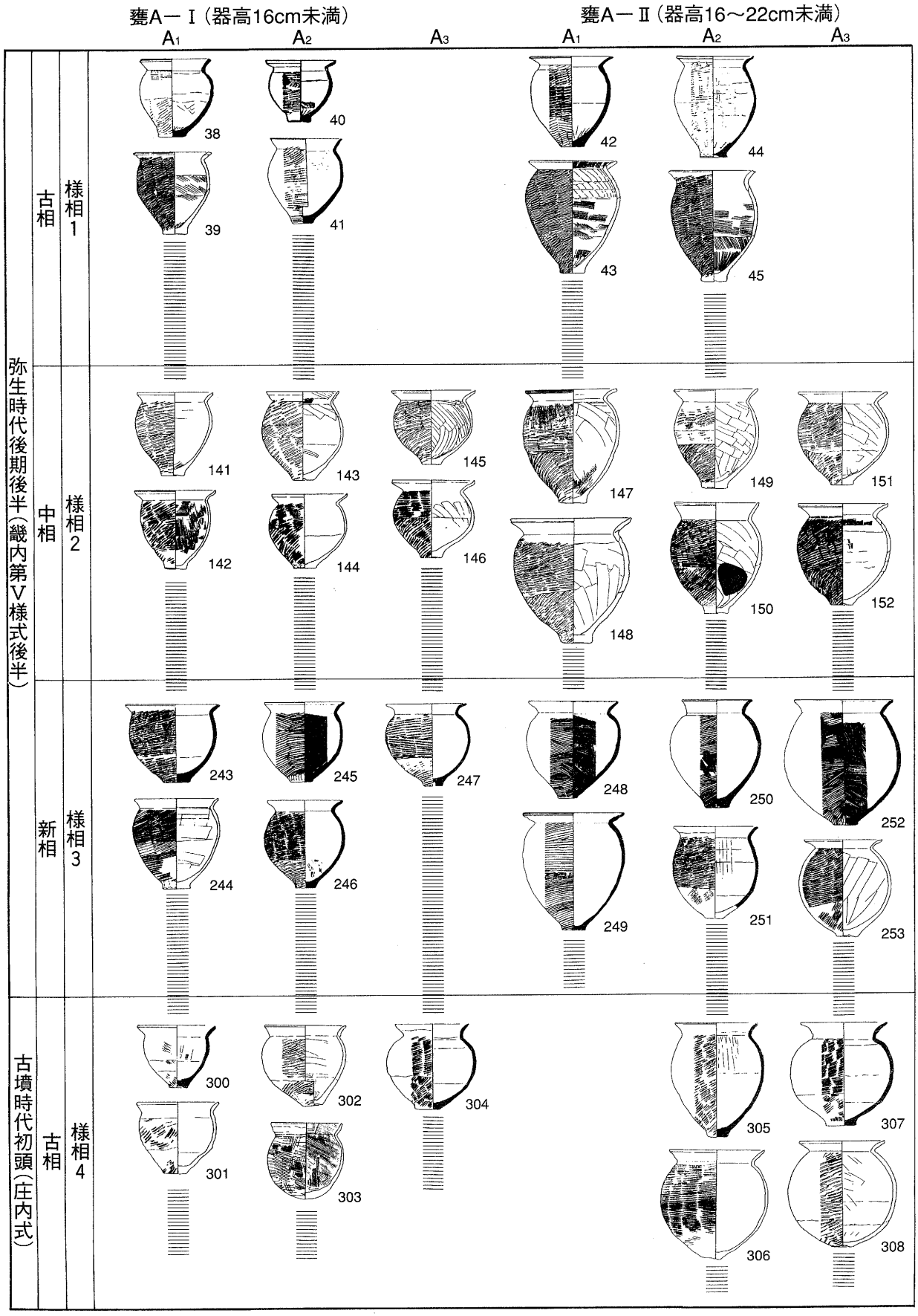
第10図　中・南河内地域における弥生時代後期後半～古墳時代初頭前半(庄内式古相)の土器の変遷(2)　S＝1/8



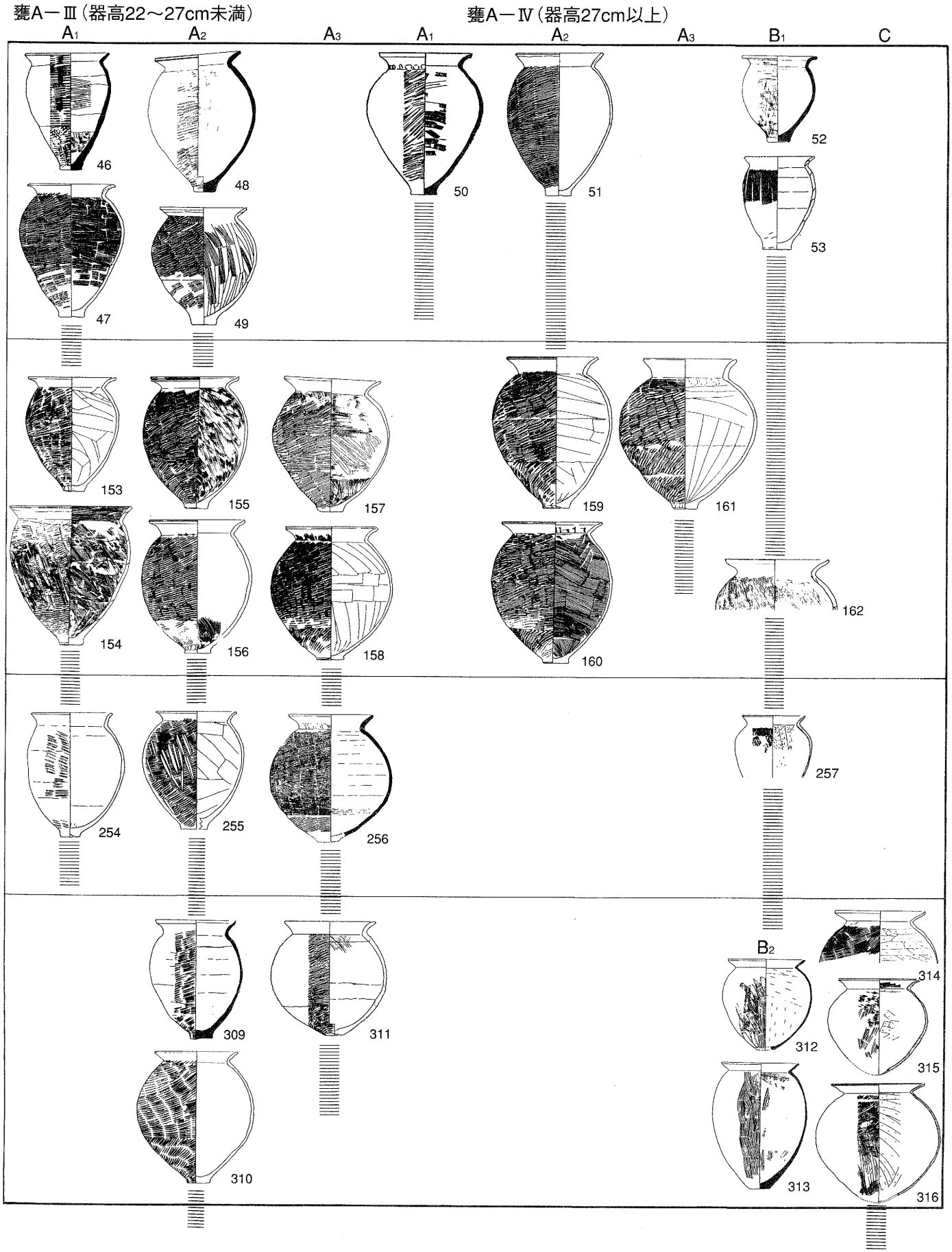
第11図　中・南河内地域における弥生時代後期後半～古墳時代初頭前半(庄内式古相)の土器の変遷(3)　S＝1/8



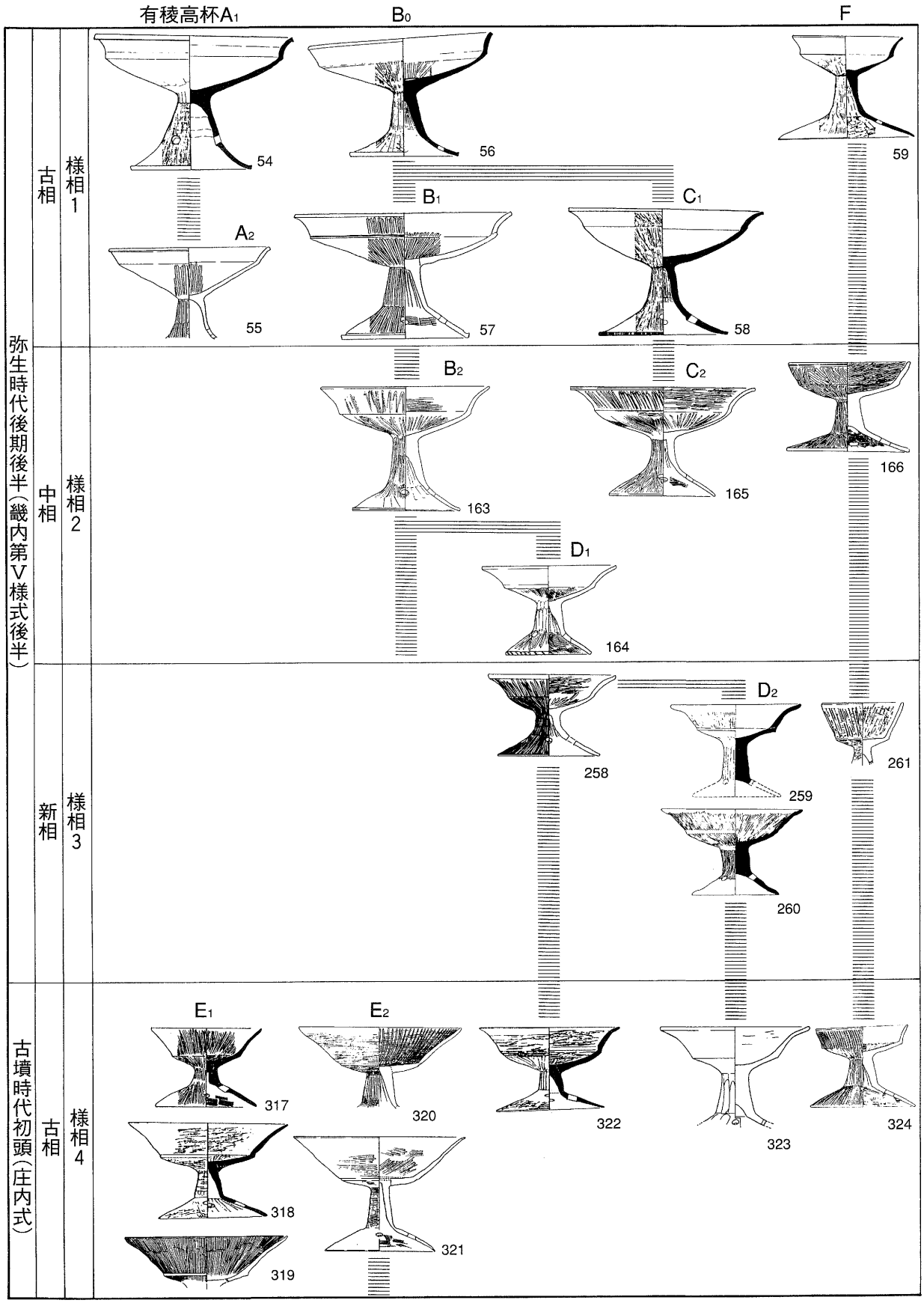
第12図　中・南河内地域における弥生時代後期後半～古墳時代初頭前半(庄内式古相)の土器の変遷(4)　S＝1/8



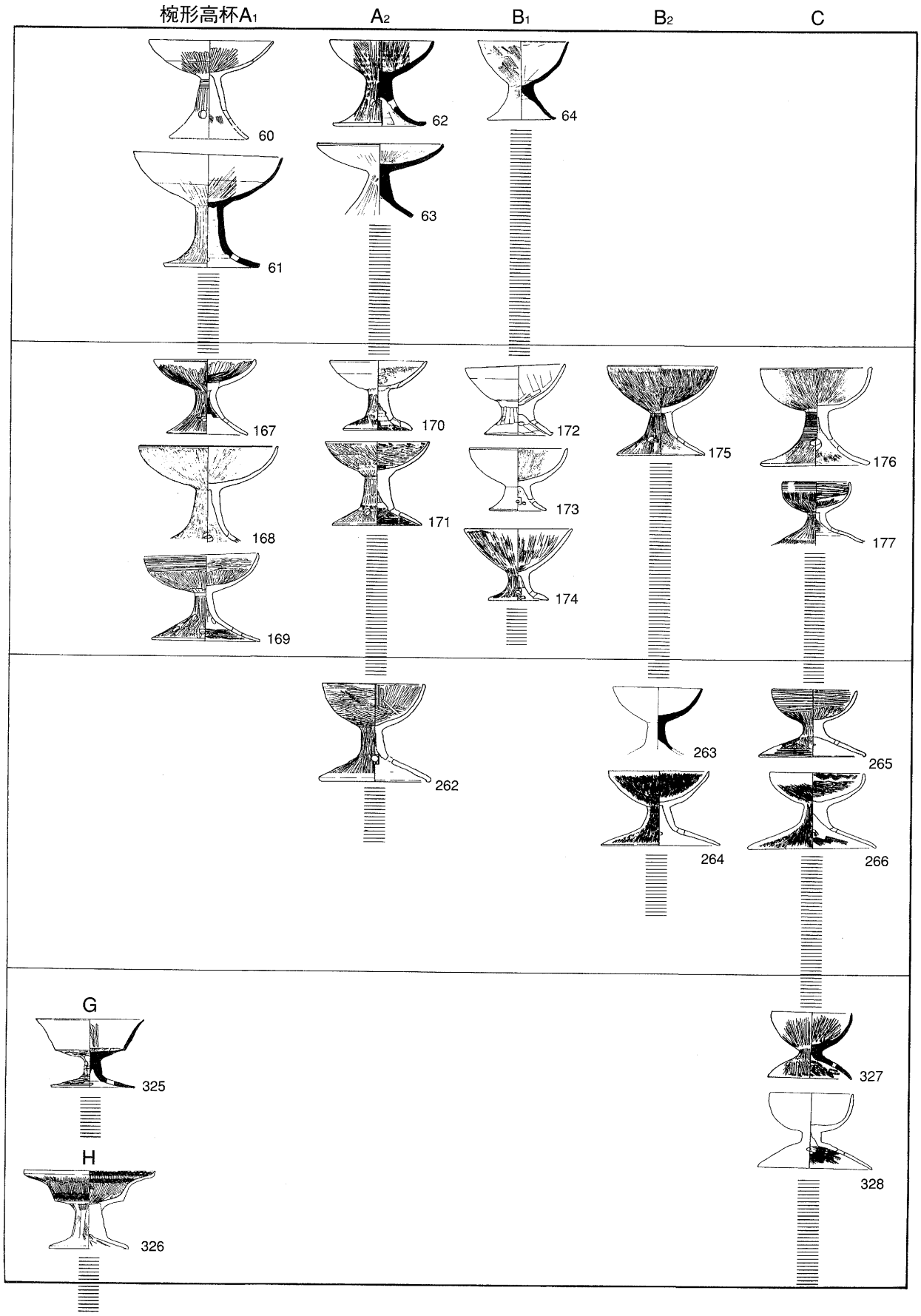
第13図　中・南河内地域における弥生時代後期後半～古墳時代初頭前半（庄内式古相）の土器の変遷（5）　S＝1/8



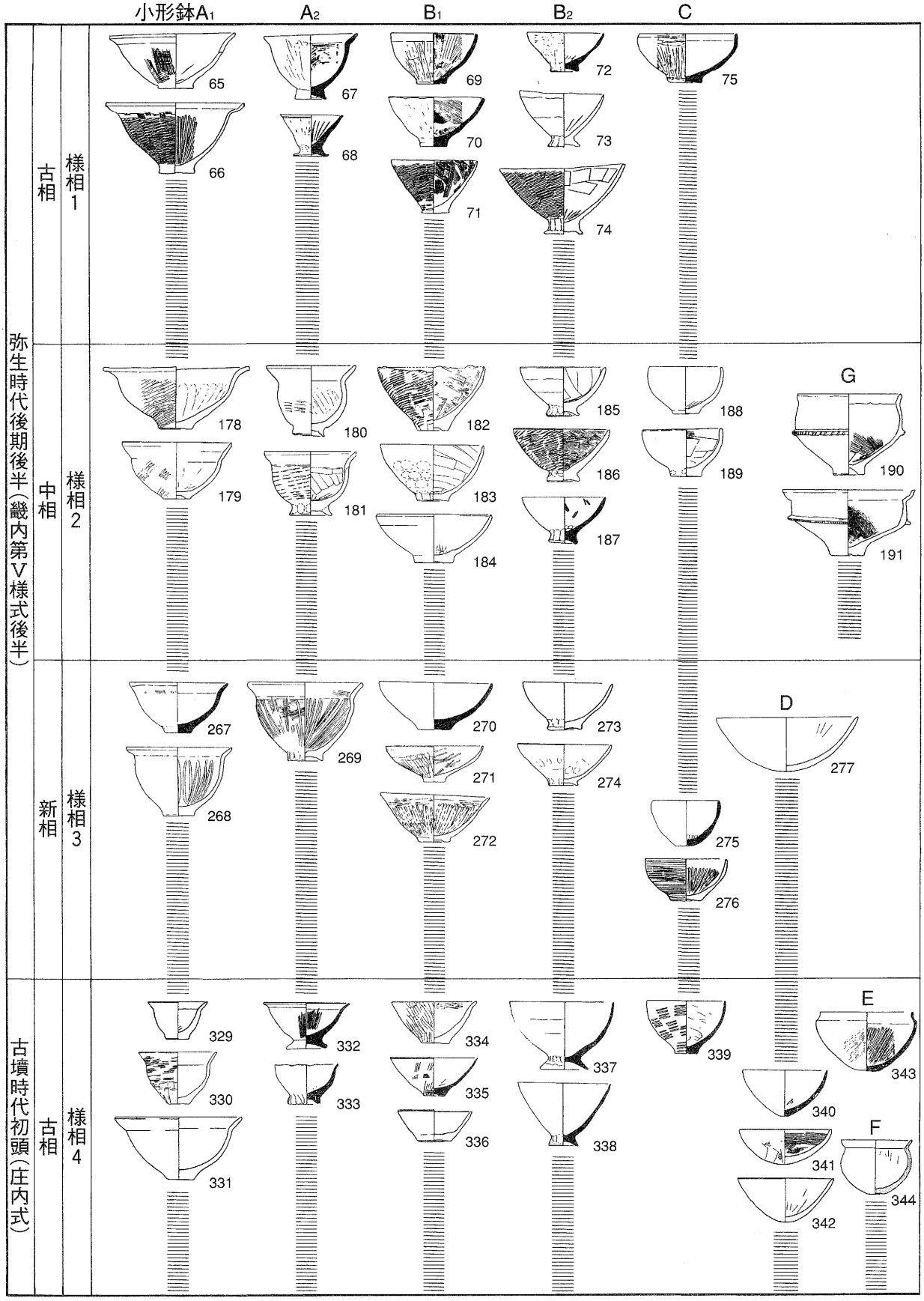
第14図　中・南河内地域における弥生時代後期後半～古墳時代初頭前半（庄内式古相）の土器の変遷（６）　S＝1/8



第15図　中・南河内地域における弥生時代後期後半～古墳時代初頭前半(庄内式古相)の土器の変遷(7)　S＝1/8

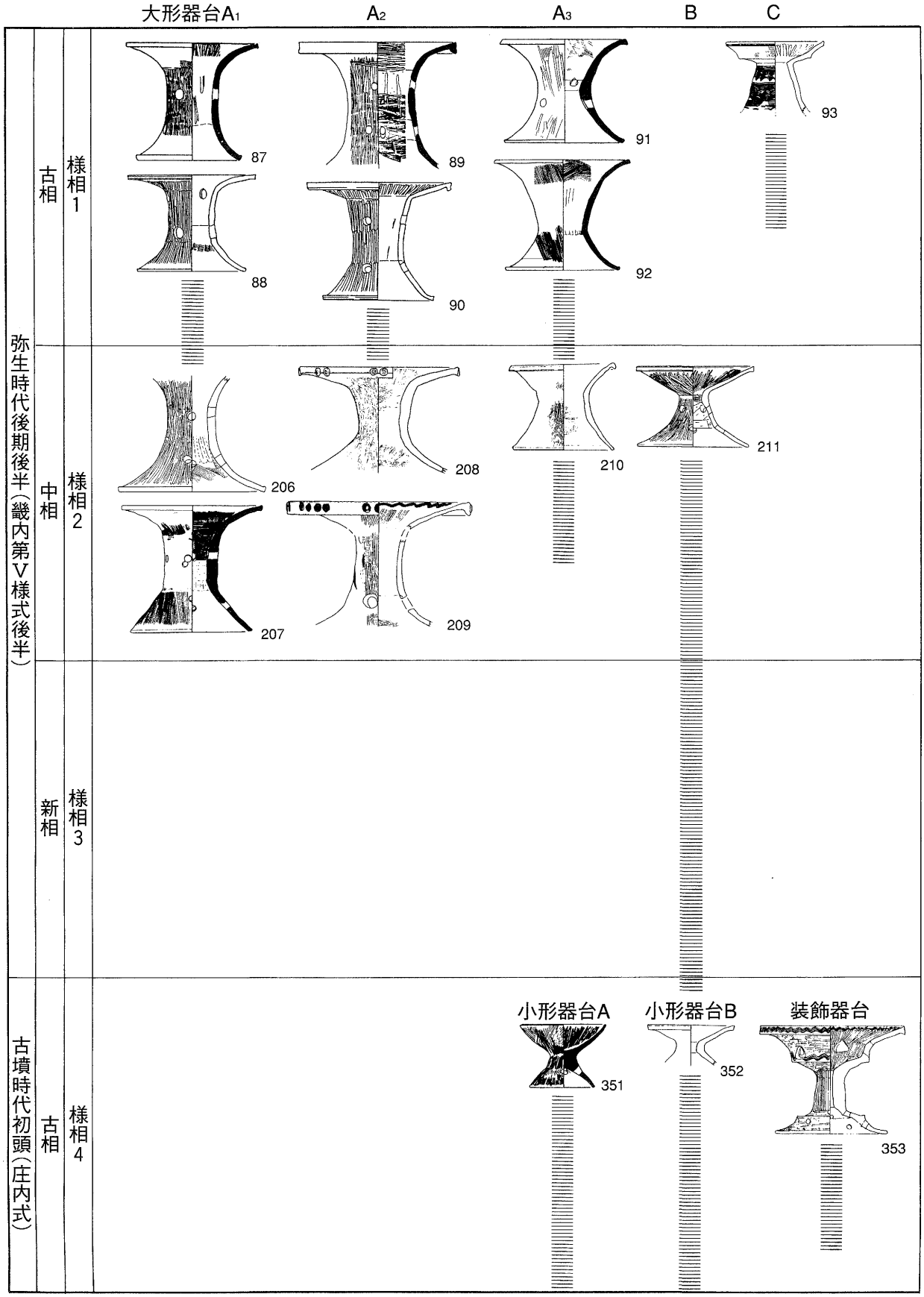


第16図　中・南河内地域における弥生時代後期後半～古墳時代初頭前半(庄内式古相)の土器の変遷(8)　S＝1/8

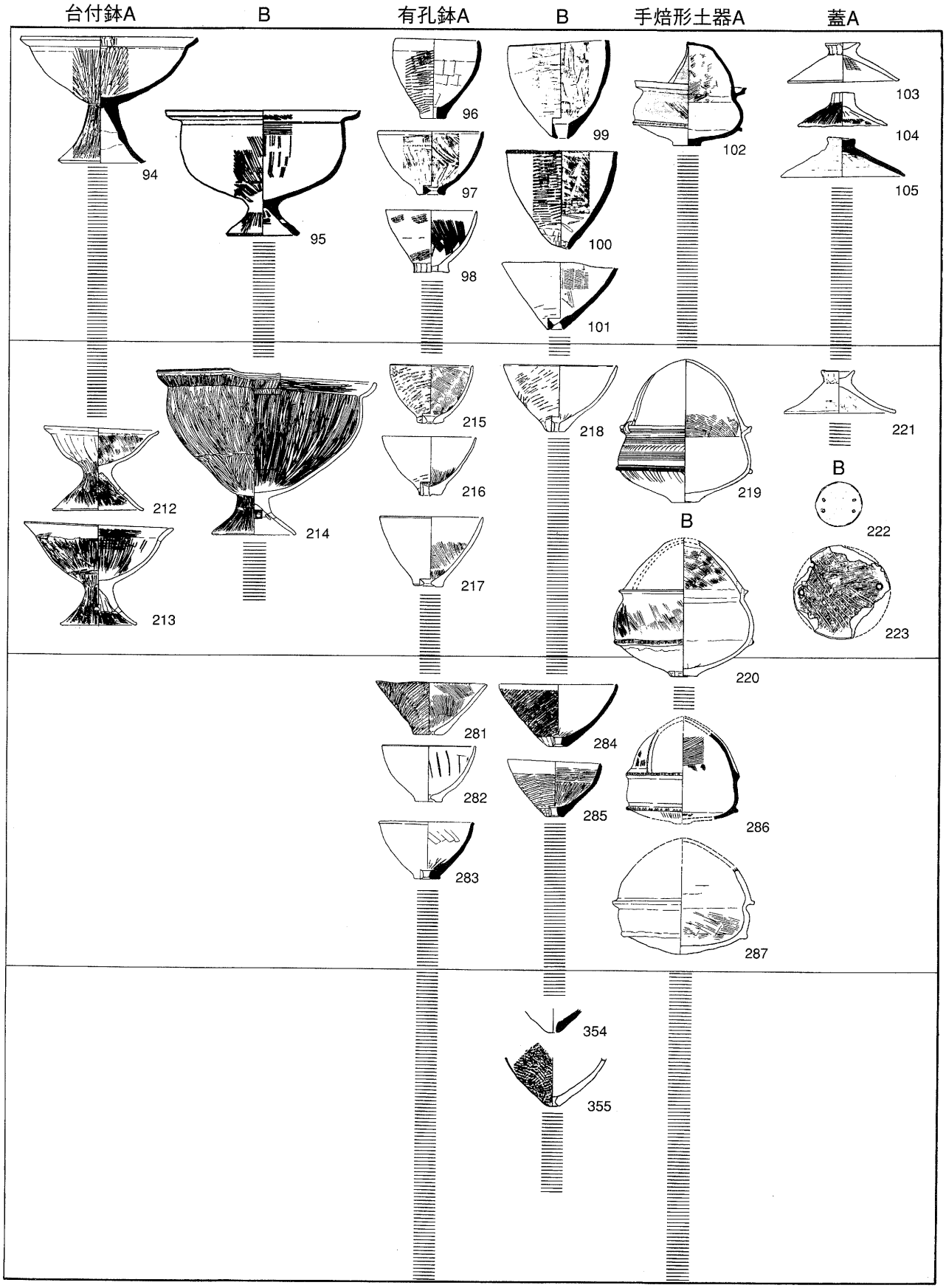


第17図　中・南河内地域における弥生時代後期後半～古墳時代初頭前半(庄内式古相)の土器の変遷(9)　S＝1/8

第18図　中・南河内地域における弥生時代後期後半～古墳時代初頭前半(庄内式古相)の土器の変遷(10)　S＝1/8



第19図　中・南河内地域における弥生時代後期後半～古墳時代初頭前半(庄内式古相)の土器の変遷(11)　S＝1/8



第20図　中・南河内地域における弥生時代後期後半～古墳時代初頭前半(庄内式古相)の土器の変遷(12)　S＝1/8

第９図～第20図掲載遺物一覧（文献番号はｐ283～286を参照）

・様相１

恩智遺跡ＳＤ13（１・３・６・８・９・18～20・26～30・36～38・41・42・44・46・48・52・54・56・58・59・62・67・69・72・75・76・78・85～87・89・94・96・97・99・100～102・105）［註26］

〃　ＳＰ03（２・７・12・17・25・31・32・61・63・64・68・70・77・82・83・91・92）［註26］

大竹遺跡第10地点溝状遺構第３・４層（５・35・93）［註25］

太田川遺跡南東トレンチＳＤ－１（34）［註27］

亀井遺跡Ｃトレンチ ＮＲ3001（21・40・50・95）［註28］

〃　（その１）Ｂトレンチ ＳＤ3056（４・24）［註29］

鬼塚遺跡Ｈ01～04第Ⅲ層（23）［註32］

〃　Ｅ地区竪穴住居（11・39・43・45・49・51・65）［註33］

〃　Ｅ地区包含層（10・13～16・22・33・47・53・55・57・60・66・71・73・74・79・81・88・90・98・103・104）

上六万寺遺跡第２・３トレンチ土器群（80・84）［註24］

・様相２

久宝寺遺跡29次ＳＷ6001～ＳＷ6006（106・107・111・112・114・118・124・126・131・132・135・139・141・143・145・147・149・151・153・155・157・159・161・163・164・165・167・170・172・177・180・182・183・185・188・192・199・205・206・211・212・214・216・218・220）［本書掲載］

〃　第８次ＳＤ301（174・187・190・213）［註36］

〃　周溝墓３－１（115・133・134・201・207・222）［註37］

久宝寺南（その２）Ｆトレンチ ＳＤ52（171・179・184）［註38］

〃　Ｈトレンチ ＳＸ46（200・203）

郡川遺跡（1999－627）第４面溝（189・204）［註40］

弓削遺跡（90－553）第５調査区（130・144・146）［註41］

亀井（その１）Ｂトレンチ ＳＤ3067（109・120～122・162・191・195・209・210・221）［註29］

亀井（その３）19・29ＴＲ　黒色粘土層土器溜り（110・123・176・178・181・194）［註29］

〃　28・29ＴＲ　ＮＲ3001（108・113・116・119・125・127・140・168・173・197・198・202・208・223）

亀井遺跡（南亀井町４丁目41－１）落ち込み状遺構（196）［註46］

神山遺跡　溝3001（117・128・129・136～138・142・148・150・152・154・156・158・160・166・169・175・186・193・215・217・219）［註47］

・様相３

北鳥池遺跡下層（226・235・242・243・246・247・251・256・259・267・270・283～286）［註18］

船橋遺跡第９トレンチ土坑（236・237・245・248～250・252・260・263・275）［註19］

中田遺跡（91－293）ＳＸ01（272）［註22］

成法寺遺跡ＳＫ15（244）［註20］

小阪合遺跡第３次ＳＤ321第４・５層（224・225・253・255・264・266・277）［註21］

亀井遺跡Ⅱ落ち込み３（229・231・239・241・254・257・265・273・276）［註53］

跡部遺跡（96－580）ＳＷ－96580（258）［註54］

久宝寺南（その２）Ｈトレンチ ＳＤ70（226・227・229・231・232・233・237・239・261・262・268・269・271・274・278～282・287）［註29］

・様相４

馬場川遺跡１・２号井戸Ⅱ類（297・320・324・326・353）［註56］

瓜生堂遺跡古墳時代前期下層（289・291・300・304・305・307・309・317・327・333・337・340・343）［註23］

美園遺跡ＤＳＤ304（292・298・302・308・311・315・316・321・334・344・346）［註58］

東郷遺跡第９次ＳＥ－１（288・290・295・332・335・339・345・351・354）［註59］

〃　第19次ＳＸ－１（296・329・336・341・342・355）［註60］

中田遺跡刑部地区土坑（312・313・318・322・325・338・347～350）［註61］

木の本遺跡（299・323・331）［註62］

八尾南遺跡井戸１（293・294・301・303・306・310・314・319・328・330・352）［註63］